HIRATAHONGŌ

松本市平田本郷遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1994. 3

長野県松本市教育委員会

序

松本市南部に位置する芳川地区では小屋地籍の小原遺跡をはじめ、いくつかの遺跡の存在が知られていました。

このたび隣接する平田地籍に県営ほ場整備事業が及ぶことになりました。その中には周知の平田本郷遺跡も含まれており、文化財の保護を図るため、松本市が松本地方事務所より委託を受け、松本市教育委員会が事業に先立って緊急発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行なうこととなりました。

発掘調査は市教育委員会の委託を受けた㈶松本市教育文化振興財団によって組織された調査団により、平成４年11月から翌５年３月にかけて行なわれました。冬期の作業は厳寒と積雪、軟弱な足場などに悩まされましたが、参加者の皆様の御尽力により無事終了することができました。その結果、奈良・平安時代の竪穴住居址94軒のほか、掘立柱建物址６棟、また同時期の遺物を多数得ました。特に鉄鉢や埋設された２基の大甕は注目すべき発見です。これらは今後地域の歴史解明に大変役立つ資料となることと思います。

しかしながら開発事業に先立って行なわれる発掘調査は記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発とそれによって失われる歴史遺産という矛盾のなかで、文化財保護に携わる者の苦悩は絶えません。本書を通して、文化財保護へのご理解を深めて頂ければ、この上なく幸いに存じます。

最後になりましたが、苛酷な状況のなか発掘作業に御協力頂いた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大な御理解を頂いた芳川土地改良区の方々、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成６年３月

松本市教育委員会　教育長　守　屋　立　秋

例　言

1．本書は平成４年11月９日から平成５年３月24日にわたり実施された松本市芳川平田に所在する平田本郷遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．本調査は平成４年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査であり、芳川土地改良区より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が実施した。

3．本調査および本書の作成は松本市より委託を受けた(財)松本市教育文化振興財団が行った。

4．本書の執筆・作成は第１章：事務局、第２章第１節・第３章第３節５木下守、２節太田守夫、第３章第２節３百瀬忠幸、４・５三村竜一、３節１竹内靖長、２・３関澤聡、４三村竜一、５木下守、第３章第１節・２節１・２・第４章高桑俊雄、写真図版市川温が行った。

5．本書作成にあたっての作業分担は次の通りである。

遺物洗浄：内澤紀代子、竹平悦子、洞沢文江

遺物復元：内田和子、倉科祥恵、堤加代子、村松恵美子、矢崎寛子

遺物実測：赤羽包子、石合英子、林和子、平出貴史、MIN AUNG THWE、吉沢克彦

遺物トレース：開嶋八重子、竹原久子、松尾明恵、村田昇司

遺構図整理：小松正子、丸山惠子

遺構図トレース：上條尚美、村山牧枝

図版作成：大谷千晴、渡辺よしこ

遺物写真撮影：宮嶋洋一

6．現場調査・遺物整理において次の方々より御教示を頂いた。

大竹憲昭、桐原健、直井雅尚、樋口昇一

7．本書の中で使用した遺構名の省略語は次の通りである。

竪穴住居址→住、掘立柱建物址→建、土坑→土、ピット→P

8．本調査に関する出土遺物及び測量・実測図類は松本市教育委員会が保管している。

遺物への注記は芳川平田本郷の頭文字Y・H・Hを略号として用いた。

目　次

序
例　言
目　次
第1章　調査の経過
　第1節　事業の経緯と文書記録 …… 2
　第2節　調査体制 …… 3
第2章　遺跡の環境
　第1節　周辺遺跡 …… 5
　第2節　地形と地質 …… 7
第3章　調査結果
　第1節　調査の概要 …… 9
　第2節　遺　構
　　1．竪穴住居址 …… 12
　　2．竪穴状遺構 …… 27
　　3．掘立柱建物址 …… 31
　　4．土坑・ピット …… 32
　　5．溝 …… 32
　第3節　遺　物
　　1．土器・陶磁器 …… 36
　　2．石　器 …… 41
　　3．土製品 …… 41
　　4．瓦　塔 …… 41
　　5．鉄製品 …… 44
第4章　調査のまとめ …… 47

第１章　調査の経過

第１節　事業の経緯と文書記録

平成３年９月19日　埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。

10月２日　平成４年度補助事業計画書提出。

平成４年５月１日　平成４年度県営ほ場整備事業野溝平田地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約締結。

６月８日　平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）内定。

６月27日　平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。

７月９日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）内示。

７月17日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。

９月７日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

９月11日　平成４年度文化財保護事業計画変更承認申請書提出。

９月17日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。

９月22日　平成５年度補助事業計画書提出。

９月24日　平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。

９月28日　埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。

９月30日　平田本郷遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。

12月10日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）計画変更承認申請書提出。
平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）計画変更承認申請書提出。

平成５年２月26日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。
平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）変更交付決定通知。

３月12日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。

３月31日　平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）確定通知
平成４年度文化財保護事業補助金（県費）確定通知

４月６日　平田本郷遺跡埋蔵文化財発掘調査終了届け（通知）提出。

４月22日　平田本郷遺跡拾得届け及び保管証提出。

４月30日　平成５年度県営ほ場整備事業野溝平田地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約締結。

５月10日　平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）内定。

５月20日　平成５年度文化財保護事業補助金（県費）内定。

５月21日　平成５年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。

５月24日　平成５年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。

９月27日　平成５年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
平成５年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

第2節　調査体制

調査団長　松村好雄（～H4．6）、守屋立秋（H4．7～）　（松本市教育長）

調査担当者　高桑俊雄、市川温（考古博物館）

調　査　員　太田守夫、島田哲男、松尾明恵、三村肇

協　力　者　青木雅志、浅井信興、浅輪敬二、荒木龍、飯ヶ浜典男、飯田三男、石合英子、乾愛策、臼井秀明、内田和子、小穴仁美、大角けさ子、大谷成嘉、大谷房夫、大月みや子、大月八十喜、岡部登喜子、小野光信、開嶋八重子、上條尚美、神田栄次、倉科祥恵、小岩井美代子、奥喜義、小松正子、坂口ふみ代、鷲見昇司、高山一恵、田口吉重、竹平悦子、田多井亘、田中雅子、玉井あづさ、土橋幸子、堤加代子、中村朝香、林和子、平出貴史、洞沢文江、松田秀子、丸山恵子、三村康子、MIN AUNG THWE、村松恵美子、村山牧枝、百瀬享子、百瀬二三子、百瀬義友、森井柳三郎、矢崎寛子、矢満田伸子、横山真理、米山禎興

事務局

市教育委員会：島村昌代（社会教育課長）、田口勝（～H4.3）、木下雅文（課長補佐）、窪田雅之（主任）

㈶松本市教育文化振興財団

事　務　局：深澤豊（～H5．3）、大池光（事務局長）、牟禮弘（局次長）、青木孝文（次長補佐）

考古博物館：神澤昌二郎（～H5．3）、熊谷康治（館長）、直井雅尚（～H5．3）、松澤憲一（主任）、木下守、久保田剛（主事）、遠藤守（H5．4～）（事務員）、藤原美智子

第1図　調査範囲

第２章　遺跡の環境

第１節　周辺遺跡

平田本郷遺跡は奈良井川と田川の間に広がる扇状地の末端部に位置する。周辺は西は奈良井川を、東は田川を越え広範に遺跡が分布する。特に奈良井川左岸には笹賀地区から島内地区にかけて奈良・平安時代の遺跡が密集している。また、本遺跡北側の出川地区周辺には古墳時代を中心とする遺跡が大規模に展開する。以下、古代の遺跡を中心に周辺について概略を記す。

奈良井川と田川に挟まれた地域では、田川と牛伏川の合流点の左岸地域において弥生時代末から出川西遺跡を中心に集落が形成され始めている。弥生時代末の集落は日穀製粉工場内から西側に展開し、古墳時代前期には松本倉庫敷地西側から国道19号線の間に集落が展開していく。古墳時代中期の遺跡は芳川地区の平田北遺跡、キッセイ薬品工業敷地内に７軒の竪穴住居址、出川南遺跡で３基の古墳を確認している。また、出川南遺跡では後期の大集落を確認している。

本遺跡より南に目を転じると、JR村井駅北側に奈良・平安時代の小原遺跡がある。平成元・４年の調査で90軒を越える住居址を確認しており、平安時代後期の遺構から鉄鈴・鉄鐸など祭祀に関する遺物の出土を見ている。小原遺跡の西側では高畑遺跡で同時期の竪穴住居址を確認している。さらに南方の塩尻市吉田川西遺跡でも昭和59・60年の長野県埋蔵文化財センターの調査により、竪穴住居址266軒が確認されている。吉田川西遺跡は鉄器の出土が際だっており、鍛冶遺構の存在など本遺跡との共通点が見られる。また、この２遺跡は10世紀中頃に一時集落が衰退するが、11世紀中頃から再び支配者階級の存在を窺わせる特徴ある集落として発展を見せる。田川の対岸南寄りには昭和59年の塩尻市教育委員会による調査などで、90軒を越える竪穴住居址を確認した吉田向井遺跡があり、この遺跡も吉田川西遺跡との共通点が多い。これらの遺跡は筑摩郡６郷のうちのひとつである『良田郷』の中心地をなしていた地域と考えられ、近在に東山道覚志駅の存在が想定される。

一方、田川右岸の寿・内田地区の丘陵地帯には塩沢川右岸に小池遺跡、一ツ家遺跡が展開する。小池遺跡は平成２年に奈良・平安時代の住居址79軒を確認しており、その後舟沢川沿いまで遺跡がが広がることが判明した。舟沢川の東の丘陵地帯には一ツ家遺跡が広がるが、本来小池遺跡とは一体の大集落と考えられる。これらの遺跡は時期的に本遺跡と重なるが、立地環境から、同じ『良田郷』において前述の田川流域の遺跡群とは別の集団として発展した集落と考えられる。

奈良井川左岸の奈良・平安時代の遺跡は、前述したとおり昭和55年から61年にかけて長野県埋蔵文化財センターにより、神戸・上二子・下二子・下神遺跡の調査で多大な成果がおさめられ、さらに北の島立・島内地区での成果も大きい。特に松本市教育委員会による昭和58年の下神遺跡の調査では、奈良三彩の小壺や佐波理椀が出土するなど集落の特殊性が指摘されている。

以上、述べてきた遺跡の最盛期は、松本平の古代においても最も発展を見た時期である。

南栗遺跡
出川西遺跡
出川南遺跡
平田北遺跡
神遺跡
平田本郷遺跡
中二子遺跡
小原遺跡
上二子遺跡
高畑遺跡
神戸遺跡
小池遺跡
吉田川西遺跡
……遺跡範囲
……古　墳
……経　塚
……城 館 跡

第2図　周辺遺跡

第2節　地形と地質

1．位置と地形

本調査地は松本市大字芳川平田本郷の集落の西に隣接した水田地域（標高608m前後）にある。地形上は北流する西方の奈良井川のはん濫原に属し、その扇状地性沖積堆積物で構成されている。砂礫は古生層系統の砂岩・硬砂岩を主とし、粘板岩・チャート・花こう岩・輝緑ぎょう灰岩を混じえている。東方の田川と近接しているが、両河川の接触点は、本調査地のさらに東へ寄っている。調査地と奈良井川及び田川の現河床・現はん濫原・はん濫口までの距離はそれぞれつぎのとおりである。奈良井川－1,000m・750m・1,400m・（南西）、田川－750m・500m・750m（南東）で、多分に田川寄りであるが、前者の影響の方が大きい。地形面は平たんで、北北東へ緩るく（平均傾斜10/1,000約0.6度）傾いている。

広い奈良井川や田川の複合扇伏の扇央に当たるため、地下水位は10mを超える。このため現在も、（遺跡の）当時も、用水は専らせぎに頼っている。

2．遺跡の堆積層と流れ

遺跡地内は調査のため、A，その西隣をB，その北をC，及びDの4地区に分けている。発掘により現れた推積層の厚さ（深さ）は110～130cmである。第A図は各地区の地層の断面を表したものである。この図でも見られるように、堆積層はおよそ上層（地下60cmまで）と下層とに分けられ、堆積状況に違いが現れている。すなわち、上層は表土（耕土、厚さ、地表から深さ30cm前後）とこれに続く灰黒色粘土からなる。表土は灰黒色の壌土で、土中の砂礫は、用水せぎや導水路とせぎ沿いに見るだけで、すでに水田耕地として一様化されている。この下層には鉄分の沈澱層や斑鉄が見られる。耕土の下、深さ40cm前後では灰黒色土が黄褐色土に変わり、50～60cmになると再び灰黒色粘土に戻る。この深さまでの堆積は、A地区の南東隅や、B地区の南側の見られる。砂、細礫を含む一部の層を除き、全般に土層が卓越下状況にある。

下層は発掘により検出された遺跡面を上面とした層に当たり、前途の土層と一変し堆積が複雑になっている。各地区に違いが現れ、微地形的に変化の多い、はん濫原の末端に近い堆積の様相が窺える。砂礫は、粗砂、細、中礫に大礫を混じえ、層状あるいは面状に広がり、土層は黒褐色土に細、中礫を含むようになる。

次に各地区の状態と特徴を述べる。

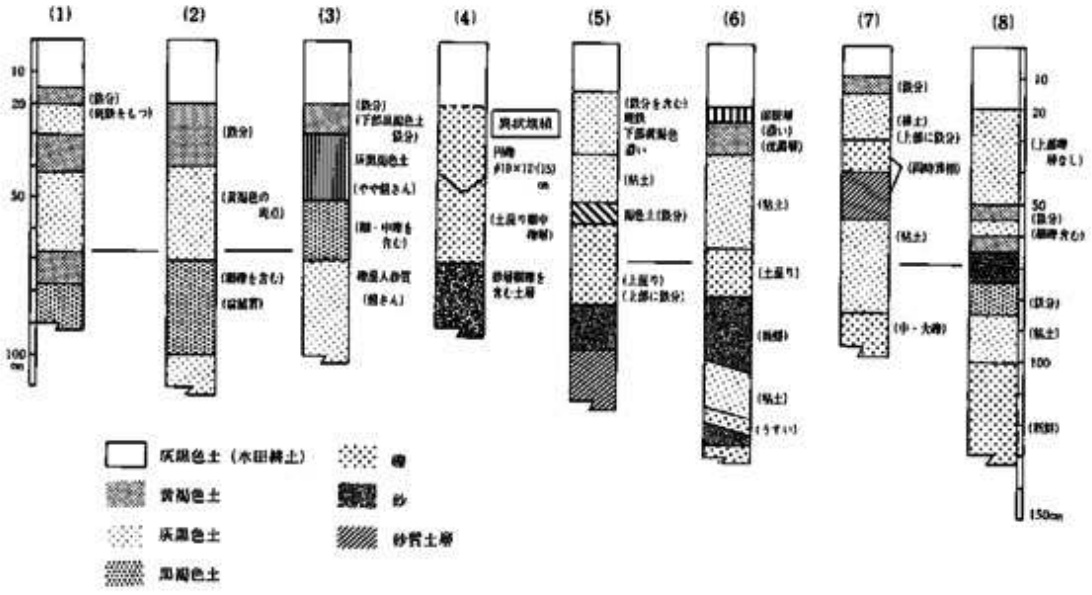
A地区―他地区に比べ最も土層の発達が良く、上層の灰黒色土と下層の黒褐色土の間の不整合面もはっきりしないほどである。なかでも北側から北東隅にかけて特に発達がよく、上下層を合せ1mを超えている。砂礫は南東隅やB地区との境で、下層の黒褐色土中に細礫を含むようになる程度で

ある。遺跡面の深さは、70cm前後と見られ、住居跡はこの黒褐色土中に集中している。

また遺跡面上には、ほぼ等間隔に３条の浅い溝状地形が見られる。流れの方向はおよそＮＥ０°、10°、20°、南北性を示すが、住居跡や遺構により中断されるなど複雑な状態である。溝幅は20～70cm、深さは10～50cmで、うち２条は内部に河床礫をもっている。一つは砂岩・チャートの細礫、一つは細・中礫の中礫の中に大礫（20×10cm）および割り石を堆積し、流れを示す細礫群が見られる。なおＡ区内にはカマド石として持ち込まれた、直径30cm大の花こう岩25個ほどと、多くの花こう岩の風化物が見られる。

Ｂ・Ｃ区―この下層には砂礫の堆積が広がり、Ａ地区と比べ一変する。地層断面には深さ60cmに、土混ざりの細・中礫（大礫を含む）が見られ、さらに下部の砂・礫・砂質土の層へ続く。一方表面（遺跡面）にも、厚さ40cmを超える土砂混りの礫層が広がり、鉄分の汚染を受けた細・中礫からなっている。住居跡や遺構は、この砂礫上層を掘込んで立地している。砂礫の分布には南北性が見られ、流れの方向を示すものと思われる。

またＡ・Ｂ地区の境付近も砂礫が厚く、その中に流れと見られる２条と、上層にまで及ぶものとがある。前者は下層（遺跡面）に属し、砂礫を広げ蛇行（ＮＥ20°、80°、60°、20°）し、末端で東側の１条を合わせ、北北東流している。土砂礫とも鉄分に汚染されている。後者は前者の西側に広がる土混りの砂礫層で、上層から下層にわたっているのが目立つ。地層断面図（４）はその北側の壁の露出面で観察できた状態で、上下層の間は不整合関係をもつ。砂層・細礫を含む土層（20cm⊕）の上に、土混り細中礫層（20～30cm露出面での幅４ｍ）、をさらになべ底状に異状堆積と思われる円礫を不整合に載せている。この堆積は環境からみて、異状堆積を除き、検出面にある流れ



挿図　各地点土層図

や砂礫より新しく、現在の北前せぎのように、かって存在した北東流と考えられる。異状堆積はこの流れの堆積上に、その終末後、人工的に投入されたものと思われる。その先端はB地区内で先細い形で終わっている。現在、堆積の意味は分かっていない。

D地区―ここには北東N48°Eを示す流れと砂礫帯が東西にあり、B・C地区と同様発掘面積の大部分を占めている。幅は東側約11.4m、西側約4.8m、いずれも多数の細・中礫の中に大礫を含むが、後者の各礫とも径が大きい。流れはやや蛇行性を示し、砂礫帯は溢流によるものであろう。北東隅や西北隅には厚い土層の堆積があり、砂礫とは同時異相である。

3．地形の形状と遺跡の立地

扇状地層堆積から始まり、下層（土層・砂礫・流れ）が生れたがこの地形面に住居（奈良～平安後期）が作られた。再び流れと砂礫に埋められ、やがて水田の造成となった。

第3章　調査結果

第1節　調査の概要

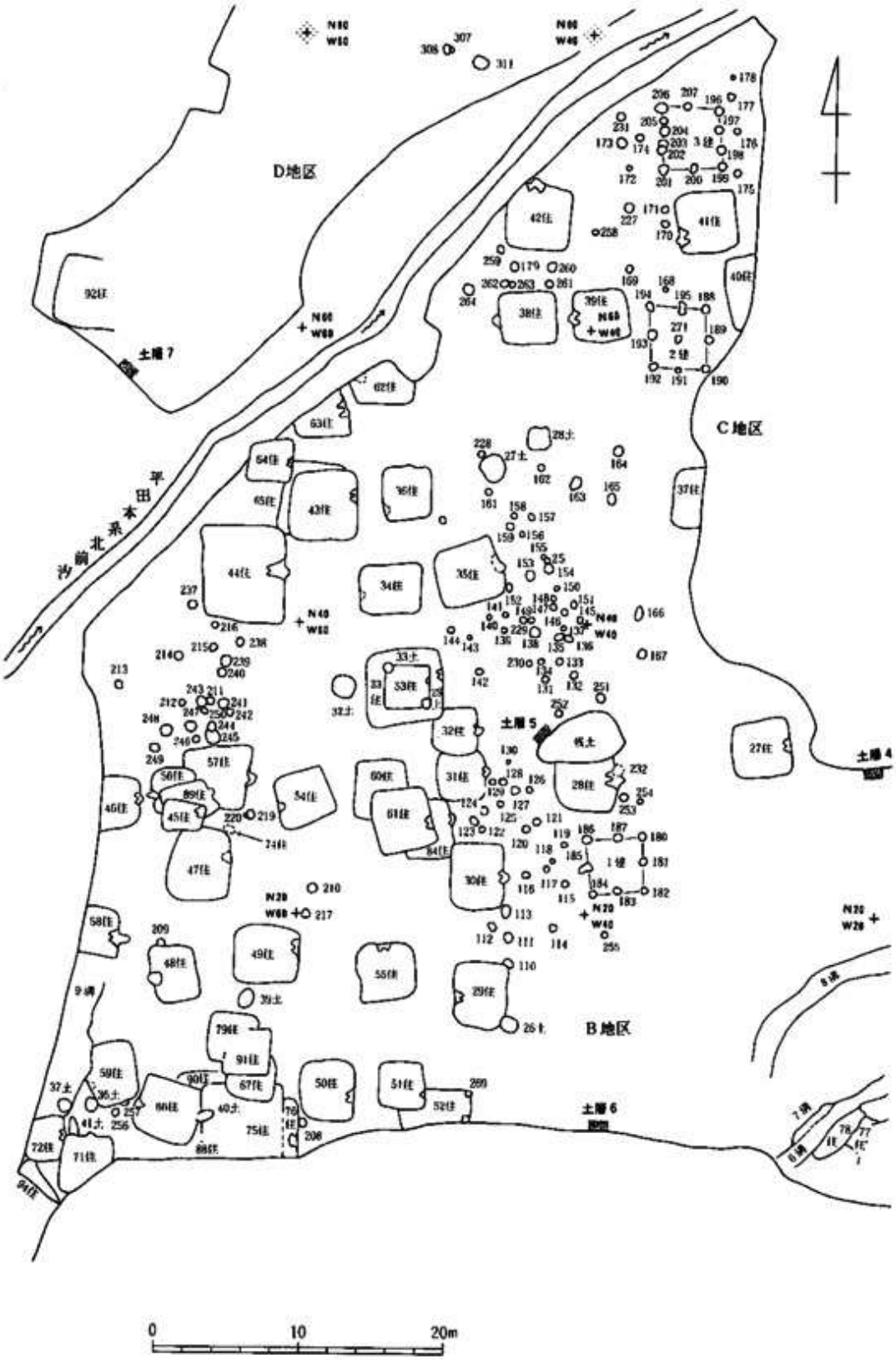
調査期間は平成5年11月初旬から翌年3月下旬まで4ヶ月に亘る。調査地は予め試掘調査を行い遺構を確認しておいた所を含め平田神社（若宮）の西から南側にL字状に設定した。地形上は、北流する西方の奈良井川のはん濫原に属し、その扇状地性沖積堆積物で構成されている。ここは奈良井川から野溝・平田地区へ引いた水路である二区堰のうちの平田本系の北前堰が南西から北東へ流れて調査区を二分している。

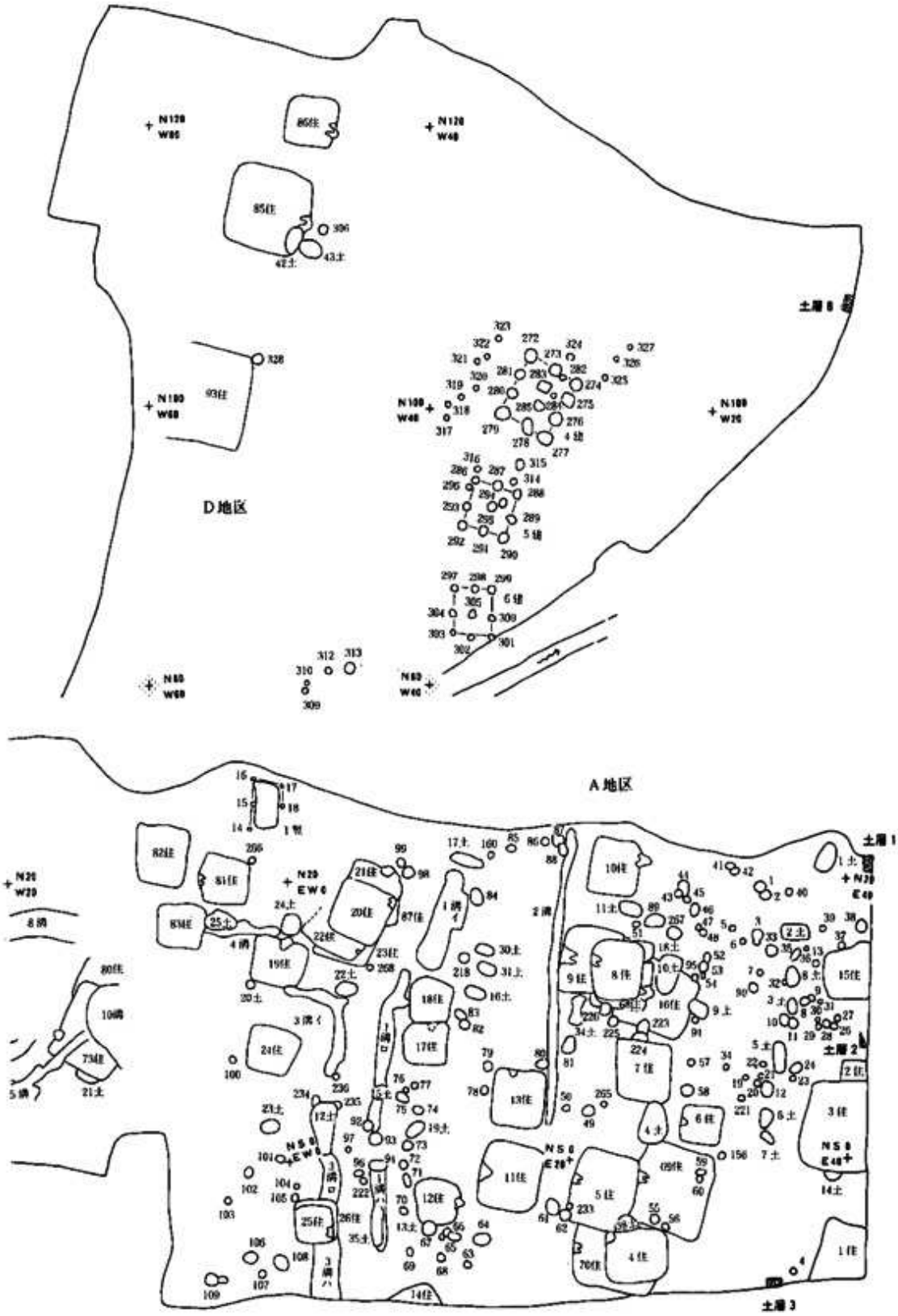
調査はこの水路の南側をA～C、北側をD・E区としてA区（東部）より開始した。これらの総面積は約6,500m²となる。地表から検出面までは東端部で80cm、西端で60cmである。これは近隣の小原遺跡（平成2・5年調査）の30～40cmに比べかなり深い。この深さまでの堆積はA地区の南東隅や、B地区の南側の見られる砂・砂礫を含む、一部の層を除き、全般に土層が卓越した状況にあった。この結果調査した遺構と出土した遺物類は以下の通りである。

竪穴住居址94軒、竪穴状遺構1基、掘立柱建物址6棟、土坑43基、ピット328基、溝10条

土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・白磁などの土器・陶磁器類、各種の鉄器類、砥石、鞴の羽口・紡錘車・土錘・瓦塔などの土製品類

土器類は平安時代前期中頃から中期後半のものが主体であり、特に共通した文字の墨書土器の多いこと、鉄器の量、種類の豊富なこと、又、特殊なものとして「美濃国」の刻印の須恵器杯、類例の少ない鉄鉢、そして瓦塔の出土などがある。


D地区
C地区
B地区
土層7
土層5
土層6
土層4
平田本系北前沙
0
10
20m



第3図　遺構配置

第2節　遺　構

1．竪穴住居址（第4～36図）

第1号住居址

用地南東隅に位置し、東、南側は用地外となる。検出面は灰色砂層で、覆土はこれより土質で黒っぽい。付近の遺構は概ね、この様相を示す。床面は淡灰色土で壁際を除き堅く良好である。ピットは柱穴らしきP_2（58×52×12cm）の他P_1（44×34×12cm）P_3（38×36×11cm）P_4（50×32×10cm）などがある。

遺物は比較的量多く、土器では杯、皿、椀などの黒色土器を中心に、灰釉陶器の椀、蓋等。又、鉄器として火打金具、刀子等がある。これらの土器は平安時代前期後半、7期の所産である。

第2号住居址

本址より新しい3住が南にあり、更に東側が調査区外の為、検出部分は狭少部分にとどまる。覆土は砂質灰色土で3住と酷似。床面も軟弱で特定難であった。

遺物は量少ないが、土師器の杯、椀等の土器があり、7～8期の様相を示す。

第3号住居址

東は不詳であるが、南北6.6m、大形の住居址である。床面はやや堅い、粘質土が部分的に残る。壁は西側を中心に中層以下で自然礫となる。ピットは、P_1（46×38×9cm）P_2（58×56×11cm）P_3（40×34×16cm）P_4（42×35×8cm）がありいずれも浅いが位置から柱穴と考える。

遺物は割合多く、覆土上層から下層まで拳大以上の石と共に出土する。土器には須恵器杯Aの他、土師器、灰釉陶器の椀などがあり、今回唯一の白磁片は床面上から得られた。又、鉄器に刀子があり鉄滓も少量出土し、砥石もある。土器は2住同様7～8期のものである。

第4号住居址

今回2軒調査した隅にカマドをもつうちの一軒である。床面は灰色土塊を混入した土で僅かに堅い程度。カマドは石組で残存状態が非常に良い。

遺物は覆土上層から床面まで多く、特に西半分に見えている土器は須恵器杯を中心に、土師器杯、灰釉陶器の椀、皿、小瓶等がある。又、鉄器には紡錘車の軸部、刀子2点、釘、鉄滓等がある。7～8期の様相を示している。

第5号住居址

ようやくプランを検出した。床面は炭化物粒混入の粘質灰色土で中央部付近が堅く良好。

遺物は覆土下層～床面より出土する。量的にも割合多く、遺存状態が良い物がある。土器は須恵器杯、長頸壺、土師器、黒色土器の椀など、他に灰釉陶器の椀、皿も見える。土器からして時期は7～8期である。

第6号住居址

小形の住居址である。覆土は他の住居址のように小礫の混入が全くなく、灰色土一層である。床面は堅くなくカマドの焼土と少量の遺物で判断した。カマドの周囲には20個程の自然礫があり、これらの中と、壁直下より遺物を得ている。

土器は少なく黒色土器、土師器の杯、須恵器の甕等である。これらは8期に属する。

第7号住居址

6住同様の覆土である。プラン検出は容易であるが、カマド、ピット等は見られない。僅少遺物と、散見する石の下部をとらえ床面と考えた。

土器には黒色土器、灰釉陶器の椀があり、7～9期の時期と考える。

第8号住居址

覆土中全体より拳大から馬頭大までの石が出土する。床面は自然礫直上である。石を用いたカマド内部には焼土は見当たらない。

遺物は多く、広い範囲から出土する。土器には黒色土器、土師器、灰釉陶器があり各種のものが見える。特に灰釉陶器の花文のある耳皿は特殊な遺物である。他には鉄釘がある。覆土層中に多量の小鉄片が狭い範囲で見られた。尚混入遺物ではあるが須恵器の甕もここから出土した。遺物から本址は今回特に新しい11～12期に属する。

第9号住居址

覆土は8住より灰色味が強い。床面は8住同様だが3～5cm程こちらが高い。ピットは1個(42×40×13cm)を検出した。石組カマドは大形で袖石も深く埋設されている。

遺物は土器が非常に多く、主にカマドの南側の西、南壁際に残存状態の良品が見える。これらは黒色土器の杯、椀を中心に土師器、須恵器の杯、灰釉陶器の椀、皿等であり、特に同一文字の墨書土器20点は最多である。土器の他には鉄滓、鞴の羽口片なども見えている。8期に属する。

第10号住居址

周囲は灰色砂層、土中の重金属が沈澱した為、覆土は茶褐色土塊を含みプランは明瞭に把えられる。床面はやや黄褐色で部分的に堅さがある。P_1(52×50×19cm) P_2(36×32×15cm) P_3(32×26×11cm) P_4(48×44×17cm) P_5(23×22×8cm)の5個のピットが主柱穴と考えられる。壁を掘込み石組カマドがある。

遺物は割に多い。土器として土師器杯、椀の他、灰釉陶器、黒色土器の椀等があり緑釉陶器も1点出土した。これらの遺物は9期に該当する。

第11号住居址

小礫混入灰褐色土を覆土とし、大きな石も多く含む。床面は礫層直上に粘質灰色土が薄く載り、やや堅さもある。P_1（40×36×17cm）P_2（42×38×11cm）P_3（48×40×20cm）の3個のピットは柱穴と考える。カマドは焼土とその中央に窪みが残るのみである。

遺物は割合多く、土器に黒色土器、須恵器の杯・皿、土師器甕など。鉄器には鏃、刀子など、鞴の羽口片も見える。土器からすると7期に属する。

第12号住居址

プランは明瞭。床面は粘質明灰色土、やや堅さもある。ピットは南東隅に1個(44×36×11.5cm)がある。石組カマドには焼土は見られない。

遺物は、量多くはないが、残存状態良好な土器がある。これらは、カマド前部の北側、及び住居址南東隅にあり、須恵器、黒色土器、土師器等の杯、灰釉陶器椀などである。時期的には、8期に該当する。又、南西隅には須恵器大甕を埋設した13土坑が壁を壊して位置する。

第13号住居址

11住と同様の覆土である。床面は堅さが見られず、礫直上を想定した。P_1(47×40×10cm) P_2(48×46×12cm) P_3（48×48×10cm）P_4（50×42×10cm）の4個はいずれも浅いが位置的に見て主柱穴として妥当であろう。カマド施設は見当たらず、焼土のみが遺存する。

遺物はこの焼土面の西覆土下層から床面上に土器が集中する。これらは、黒色土器、須恵器、土師器の杯、灰釉陶器、黒色土器の椀などである。正位のものが多く、重なっているものも見られた。8期の土器類である。土器以外には刀子も1点見える。

第14号住居址

南の大部分が用地外となり、北東隅四半部程が調査できた。検出面から床面までは52cmとかなり深い。土器は須恵器、黒色土器の杯などがある。少ない遺物であるが、7期に属する。

第15号住居址

東側が用地外となる為、全容は調査できなかった。東側の土層を観察したが遺構は浅い掘込みの為、壁はほとんど見当たらない。床面は、マンガン分が沈澱し、非常に堅緻である。起状があり中央部は周囲より少し窪む。本址内にピットは4個あるが当住居址のものかどうかは分からない。

遺物は少なく、灰釉陶器椀・皿、土師器の杯・盤などの土器である。8期の所産である。

第16号住居址

覆土は周囲より僅かに黒い程度で検出は難かしかった。床面は粘質褐色土で堅く良好である。西にある68住や周りの土坑、ピットは皆、本址より新しい。

遺物は土器に黒色土器、須恵器の杯、灰釉陶器の長頸壺等7期の土器様相である。他にはほぼ完形の鎌が出た。鉄滓の量も非常に多く総量で3kgあった。

第17号住居址

北側が18住と重複する。覆土は砂質灰色土で本址が少し明るい土色である。床面は自然礫直上にあろうと思われるが堅くはない。カマドは北壁際に狭い範囲で焼土が遺存するが施設は見当たらない。

遺物は覆土中層～床面近くまであり、土器の量はかなり多い。それらは、焼土周囲と壁近くに多く、遺存状態の良いものが目立つ。黒色土器、須恵器、土師器の杯を中心に椀、甕などで、15点の墨書土器は９住に次いで多い。他には少量の鉄滓と鞴の羽口片も出土した。土器は８期のものである。

第18号住居址

覆土中に拳大以上の石を多く含む。床面は18住より５cm程低（深）い所にある。焼土等、カマド施設に関わる痕跡は見当たらない。遺物は土器の量多いが、個々の残存状態は悪い。黒色土器、須恵器の杯、灰釉陶器の皿、耳皿、小瓶等があり、墨書土器も５点ある。これらは７期の土器類である。他にはフイゴの羽口、木質部が付着した苧引鉄らしき遺物も出ている。

第19号住居址

プランは比較的明瞭、覆土中に石は含まれない。床面は部分的に粘質灰色土が見える。北にある石組カマドは原形をとどめ遺存状態が非常に良い。

遺物量は少ないが、墨書土器の杯を中心に、須恵器杯、灰釉土器皿・椀の他、緑釉片もある。７期に属する。

第20号住居址

ここに５軒が重複するもののうち一番新しい住居址である。床面は不明瞭ではあるが土層断面と、カマド前部の炭化物等により、つかむ事ができた。カマドは４住同様隅に位置する。焼土は少ない。

遺物は土器に黒色土器、須恵器の杯、土師器、灰釉陶器の椀、などがあり、墨書土器は３種６点が見える。他に鉄器で剣と思われる一部が出土した。土器は８期の様相を示している。

第21号住居址

覆土は20住と近似する。南北トレンチを入れ、20住と７cm程の床面差を生ずる本址を捉えた。床面は粘質白灰色土で部分的に堅さがある。北壁の一部が方形に張り出し、石組カマドが設けられる。

遺物はカマド内、あるいはその周辺にあり、土器に黒色土器、須恵器の杯、土師器甕、灰釉陶器の椀等がある。これらは、８期に属する。

第22号住居址

検出面から床面までは14cmとかなり浅い。覆土は20住とよく似る。床面は粘質土があり部分的に堅い。ピットは南西隅に1個（50×44×11cm）ある。カマドは大きな1個の石と狭い範囲の焼土により、その位置を示している。

遺物は土器に黒色土器、須恵器の杯などがあり、7期の土器類である。

第23号住居址

覆土は少し土質の砂礫質土で均一な砂礫層直上が床面となる。軟弱で堅さはない。北西部は不明瞭で検出できなかった。

遺物は量少なく、13、4期の混入遺物を除けば黒色土器の杯を本址のものと考える。7期に該当する。他にはフイゴの羽口2点、鉄滓1点が出土する。

第24号住居址

2箇所の焼土と少しゆがんだプラン、覆土では分からなかったが2軒同時に調査してしまった。つまり、北東隅にカマドをもつもの（旧）と石組カマド（新）である。焼土でみると旧住居址が20cm程床面が高い。新住居址床面は一部が粘質褐色土で大部分は軟らかな砂層となる。

遺物は覆土上層にあり、須恵器、黒色土器の杯、土師器甕などの土器がある。これらは時期差なく、7期で本址は建て直しの住居址と考える。尚、墨書土器が4点あり『東寺』が見えている。他に鉄釘3点出土する。

第25号住居址

26住内に検出された今回最も小形の住居址である。覆土中には26住より小さな礫を混入する。床面はわずかに堅い所もある。石組みカマドは遺存状態良好である。

遺物は少なく、灰釉陶器、土師器、黒色土器等がある。これらは、12期という今回特に新しいものである。

第26号住居址

25住の為、調査できたのは僅かの範囲である。床面は25住と比高差なく軟弱、カマドは見当たらない。

遺物もごく少なく、北壁際床面上より8期と思われる黒色土器の椀、他を得たにとどまる。

第27号住居址

住居址周囲には遺構のない空間が広がる。床面は自然礫上にあり黄褐色土、鉄分沈澱した為堅く良好である。ピットは西半部に2個P_1（36×24×12cm）P_2（38×36×13cm）がある。カマド内には焼土が全く見当たらない。

遺物には、土師器杯・椀、灰釉陶器の椀などある。これらは8～9期のものである。又、鉄器に刀子が1点見える。

第28号住居址

北側は調査後の耕作予定の為、調査することができなかった。周囲は灰色砂層で、小中礫混入砂質灰色土を覆土とする。カマドは小ぶりな石15個程を芯に粘質褐色土で袖を設けている。

遺物は少なく、土師器の甕、須恵器杯等がある。今回の調査では、かなり古い時期2～3期に当たる。

第29号住居址

カマド前面床面上まで狭い範囲で中礫が転入する。床面は粘質褐色土が認められるが、堅さはない。カマドは袖部が明瞭で遺存状態は良いが、焼土は焚口に僅かしか見えない。

遺物はカマド周辺を中心に土器類が出土するが量は多くない。それらは、黒色土器、須恵器の杯、灰釉陶器椀・皿、土師器甕・耳皿等多様な器種が揃っている。7期のまとまった資料である。

第30号住居址

覆土中には、小中礫が多量に混入する。床面はやや粘質土がある。P_1（40×36×10cm）P_2（62×62×10cm）P_3（34×28×6cm）P_4（60×48×8cm）P_5（46×36×7cm）P_6（34×26×4cm）があるが、柱穴は特定できない。カマドは両袖部、燃焼室上部の石等がそのまま残る。

遺物はカマド両脇、壁際に多く、土器に土師器の杯・椀・甕、灰釉陶器に椀・壺・耳皿等がある。比較的新しい9～10期の土器群である。

第31号住居址

覆土上層～中層に狭い範囲で拳大以上の礫が集中する。床面は60cmと、今回検出面からは一番深い砂層直上にあり、やや粘質の土が乗る。堅さはない、カマドは小形の石組ははっきりと分かるが、袖の様子は分からない。又、この内外に炭化物はあるものの焼土は全く見られない。

遺物は主に床面上より出土。土器に黒色土器、須恵器の杯、土師器甕等。鋤頭、鎌の鉄器もあった。土器の所属時期は7期である。

第32号住居址

床面は砂層直上にあり、粘質黄灰色で、南に先行した31住より明瞭に現れる。ピットはP_1（34×28×9cm）P_2（30×30×12cm）の2個あるが、柱穴としては考え難い。カマドは張り出した壁中に両袖石が入り、そこには断面で煙道も見える。

遺物には、土器として黒色土器、土師器、須恵器などの杯、灰釉陶器の椀など、鉄器に紡錘車、刀子などが見える。土器は8期の様相を示している。

第33号住居址

床面は、壁際が粘質の黄灰色土であるが、中央に本址より古い53住がある為、全体に堅さがなく、且つ判然としない。

遺物は土器に黒色土器、土師器、須恵器の杯、灰釉陶器の椀、土師器甕等あるが、個々の残存状況は悪い。他には鎌、刀子、釘等の鉄器もある。8期に属する。

第34号住居址

床面は粘質灰色土となる。堅くはないが明瞭である。ピットはP_1（66×36×8cm）P_2（46×46×5cm）の2個がある。カマドは西壁際に炭化物と焼土が残るのみで施設は見当たらない。

遺物は多くはないが、土器に須恵器、黒色土器、土師器の杯、灰釉陶器の段皿等がある。8期の遺物である。

第35号住居址

覆土は小、中礫を多量に混入する。床面は砂層上に粘質黄灰色土が広がり堅い。カマドは東壁に粘質土が高く残り、焼土が床面まで大きく広がる。南側に袖石があり、北側は袖部の石の抜き取り跡も認められる。

遺物はごく少なく、このうち須恵器杯には古い時期3～4期の様相を見る。

第36号住居址

この辺の検出面は、砂層覆土には礫が多量に入る為、容易に検出できる。床面は砂層上で堅くはない。ピットはP_1（65×54×19cm）P_2（50×46×15cm）P_3（34×28×11cm）P_4（34×28×11cm）がありこのうちP_1～P_3が柱穴と考える。カマドは痕跡のみで、焼土、炭化物が西壁際に残る。

遺物は少なく、土器に黒色土器・土師器・灰釉陶器の椀、灰釉陶器の長頸壺なども見える。9～10期に該当する。

第37号住居址

東側は用地外となる。更に北部は検出時に若干削りすぎている。南側の床面には粘質土があり部分的に堅い。

床面まで浅い為、得られた遺物は少ない。土師器、黒色土器の杯、椀等で、8期の土器類である。他には鉄滓が僅かにある。

第38号住居址

床面は粘質褐色土でほぼ全面に堅さが残る。カマドは西壁を幅狭く突出させ、更に石を配置する。つまり燃焼室は壁直下部分である。

遺物は少なく、土師器・須恵器の杯、黒色土器の杯、灰釉陶器の椀などで、これらは8期に属する。

第39号住居址

この辺の遺構は皆容易に検出できた。床面は自然礫上にあり、やや粘質の土が広がる。カマドは石と粘質土によりつくられ、遺存状態は良好である。南西隅には床面上に30×20cmの大きな石を含め8個の石が配置される。

遺物は土器でカマド内部及び南壁寄りに多い。黒色土器・土師器の杯、灰釉陶器・黒色土器の椀、土師器の甕等であり、これらは8期の遺物である。又、他に砥石1点もある。

第40号住居址

東側が用地外となる。覆土中には小、中礫が多量に混入し、又全面に鉄分が薄く沈下していた。床面は自然礫上、土層では分かるが面としてはつかめない。

遺物は土器として須恵器・黒色土器の杯、土師器の甕などがあり、今回でも古い4期のものである。

第41号住居址

床面は礫を混じえた褐色土で部分的に堅さを認める。カマドは西壁南寄りにある。袖とした粘質土が南側へ崩れて、その中に芯材に用いた大礫も見える。

遺物はこのカマド内部に土師器の甕、南壁際は須恵器杯、甕、甑、壺類などあるが個々の遺存状態は悪い。これらの土器は2期という今回一番古い時期のものである。

第42号住居址

覆土中には多量の小、中礫を混入する。特にカマド上部と住居址中央部には拳大の礫が多い。床面は自然礫上にあり、砂質褐色土で堅さもない。壁面は他の住居址よりも緩やか傾斜である。カマドは北壁にある。大小の礫と粘土を使用している。

遺物は割合少なく、須恵器、黒色土器、土師器、灰釉陶器など見えるが、遺存状態は良くない。8期の様相を見せる。

第43号住居址

床面は粘質明褐色土で壁際を除き堅い。ピットはP_1（24×20×8cm）P_2（56×44×7cm）P_3（46×36×5cm）の3個がある。いずれも浅い。カマドは東壁中央に位置する。石芯粘土カマドで石を抜き取ったあともある。焼土はカマド前面にあるが、量は少ない。

遺物は土器と鉄器とがあり、比較的床面近くに多い。まず土器には黒色土器・土師器の杯、椀等、朱墨の付着する灰釉陶器の椀、転用硯とした皿もある。他に須恵器の四耳壺、杯などがあり、これらは8期の良好な資料となる。又鉄器に鉢、紡錘車、鏃、刀子等がある。このうち北東隅床面上より逆位で出土した鉢はあまり類似のないものである。

第44号住居址

大形の住居である。床面近くには小児頭大の石が散存する。カマドは東壁中央にあり、幅110cm、奥行200cmは今回最大の規模となる。

遺物は黒色土器の杯・椀、灰釉陶器の椀等が多く、他に土師器の耳皿、灰釉陶器の段皿、長頸壺等もある。これらは覆土下層ないし床面上からの出土がほとんどである。又、鉄器に鎌、刀子、釘等もある。土器は8期の一群である。

第45号住居址

ここに６軒が重複する中では一番新しい時期である。約7.7㎡の掘り方の面積は25住と共に最小の住居址である。覆土中には全体に石が多く、大ぶりの石から中、小礫までぎっしりと入っている。床面は不明瞭で、カマドと自然礫の出現から想定した。

遺物は、５～６期の土器混入もあり、遺存状態は悪い。その中で黒色土器、土師器、須恵器の杯、椀類など８期のものを本址に近いものとして把えた。

第46号住居址

西半部は用地外となる。砂層を掘込みつくられている。中央部は覆土上層から床面まで拳大～小児頭大の石が多量に入る。床面は粘質土などない。カマドは東壁に小さな突出部を設け、左右に大石を立てた石組みカマドである。

遺物はカマド内周辺より出土した。黒色土器椀、須恵器、土師器の杯などで８期に属する。

第47号住居址

床面まで58cmという、31住に次いで深い住居址である。床面は粘質灰色土で堅い。東壁際に炭化物を混入した焼土が広がるのみでカマド施設は残存しない。

遺物は土器と鉄器がある。ほとんどが覆土からのもので、床面からは僅かで残存状況も悪い。須恵器、黒色土器の杯、土師器の甕等は今回でも少し古い５～６期のものである。又鉄器に刀子、鎹がある。尚やや時期は異なるが、『美濃国』が印刻された須恵器の杯の底部が出土した。非常に貴重な資料である。

第48号住居址

床面は自然礫上にあり、粘質灰色土が広がる。カマドは袖部不明瞭であるが、石と粘土とで設けられているようだ。南西隅、カマド南側の床は他よりも10cm程高くベット状となる。

遺物は覆土中～下層にかけて散存し、拳大以上の礫と共に出土する。土器は黒色土器の杯・椀、土師器の甕等があり、７～８期の所産である。又、刀子も１点見られた。

第49号住居址

覆土上層から床面まで拳大～小児頭大の石が散存する。床面は粘質黄灰色土で明瞭であるが堅くはない。中間に緩やかな段をなし、その西半部は東半部より８cm程高い。又土層図、遺物出土状況から見ると南西隅で60cm程狭めて建て直した可能性がある。

主たる遺物は床面に多く、黒色土器の杯・椀、土師器の杯・甕などがあり、８期の土器である。

第50号住居址

床面は粘質黄色土で明瞭だが軟弱である。カマドは石芯粘土カマドで、その前面、覆土中に床面まで拳大の礫がある。

遺物は土器に灰釉陶器皿、椀が多く、黒色土器、土師器の杯も見える。これらは主に床面からのもので他には鞴の羽口２点が床面近くより出土した。土器は８期のものである。

第51号住居址

プランは明瞭に検出できた。床面は粘質灰色土である。堅さはなく、掘りすぎた為土層にて復元した。カマドは割に残りの良い石組みカマドであるが、焼土は全く見られない。

遺物は少なく、個々の遺存状態も悪い。土器は黒色土器が多く、土師器の甕はカマド内より出土、他には灰釉陶器もある。これらは7期に所属する。

第52号住居址

南半部は用地外である。床面は自然礫直上、褐色砂層であるが粘質黄灰色土があり、とらえることができた。カマドは東壁に半分程が見える。石組であろうか。

遺物は殊に少ない。北東隅床面上より出土した土師器の甕は3～4期という古い時期のものである。

第53号住居址

33住内、床面下部に検出した。南東隅には土器を多量に出土する本址より新しい29土坑がある。カマドは東壁際にあったらしく、焼土のみが認められる。床面は粘質土があり、中央部ほど堅く良好である。

遺物は少なく、焼土付近に僅かに遺存する。黒色土器、須恵器などの杯、土師器の甕、羽釜がある。これらは7期に所属する。

第54号住居址

覆土中には拳大以上の石が壁際を除き床面上まで多量に入っている。床面は砂層上で粘質褐色土となる。堅さはない。カマドは石組カマドで遺存状態も良い。

遺物は残りの良いものが多い。それらはカマド内、その北側、壁際の床面上に多く見られる。黒色土器、須恵器の杯を中心に土師器の椀、甕等がある。これらの土器類は7～8期の物である。

第55号住居址

床面はやや粘質の黄灰色土であるが堅くはない。カマドは東側に石が並ぶが、西側にはない。粘土と石によるものと思われる。焼土もごく僅かではあるが見られる。

遺物は少なく、土師器甕がカマド内より、黒色土器杯が覆土中より出土した。7期末までの土器である。

第56号住居址

南側は本址より新しい45住があり、東側には古い57住、更に89住と重複する。覆土中には小、中礫を多量に混入し、床面は自然礫が多出する。この様子は89住も同様で両者の新旧関係は後に遺物により判断している。カマドは西壁中央部に袖と思われる粘質土と焼土ブロックを認めた。

遺物は須恵器蓋、壺の他、灰釉陶器、黒色土器、軟質須恵器、土師器等があるが、残存状況は非常に悪い、これらの遺物は7～8期の様子が見られる。

第57号住居址

覆土はまわりの住居址より褐色がつよく、検出は難航した。小中礫の混入土は大きい。床面は判然とせず土層断面を観察し、プランと共に判定した。カマドは東に大きく突出し、3個の石と焼土があるのみである。

遺物は遺存状態悪く、土師器の甕、須恵器、黒色土器の杯程度が主な物である。5～6期で今回ではやや古い時期に属する。

第58号住居址

プランは明瞭、掘込層は46住と同様である。住居址中央部分、覆土中には床面上まで小児頭大の石が混入する。床面にはやや堅い所がある。カマドは70cm程の長い煙道をもち、石と粘質土によりしっかりとした袖部分が残っている。

遺物は少ない。カマド内には土師器の甕があり、他に、黒色土器の杯、須恵器の甕などでこれらの土器には5～7期の特色が見える。

第59号住居址

西側に9溝がある。床面は砂礫層直上をとらえた。中央部は緩やかに窪み堅さは見られない。西壁際に、狭く焼土が残るがカマド施設は見当たらない。

遺物は特に少ない。須恵器の杯と土師器の鉢は2～4期というかなり古い時期のものである。

第60号住居址

南側に本址より新しい61住がある。床面上まで小、中礫が多量に混在する。床面は僅か粘質土であるが堅くない。カマドは現状では焼土等全く残っていない。ピットはP_1(36×30×11cm) P_2(44×42×13cm) がある。

遺物は土器に黒色土器、土師器の杯、灰釉陶器の椀等がある。8期の遺物である。

第61号住居址

混入した石は、覆土中から床面まで多い。床面は礫（西側）あるいは砂層上にありやや粘質土となる。石組みカマドは内側へ上部が崩れ込む。

遺物は量多く、カマドの左右と前面、北壁際中央部のあたり、覆土下層から床面に多く見られる。各器種があり、そのうち特に黒色土器、須恵器の杯の数が目立っている。他には皿、椀、甕等があり、このうち灰釉陶器の段皿には墨書を認める。又、刀子も出土した。43住と並び8期の良好な資料である。

第62号住居址

北側は用地外となり、半分程が調査できた。床面は鉄分が沈澱し、堅くなっている。西壁側、床面上に焼土が広がり、この北側の未調査部がカマドとなるらしい。

遺物は少なく、個々の残存状況も悪い。土器には黒色土器の鉢、須恵器の杯・蓋、土師器の甕等が見え、5～6期のものである。

第63号住居址

北西側が用地外となる。床面は自然礫上にあり、中央部は転入した小児頭大の石と炭化物粒が覆っている。カマドは左右２個づつの小ぶりな石があり、石組み、あるいは石芯粘土の施設と思われる。焼土も僅か残っている。

遺物は少ないが、土師器の杯、灰釉陶器の皿などがカマド南際、床面上より出土した。これらの土器は９～10期というやや新しい時期のものである。

第64号住居址

小形の住居址である。大ぶりの石が中央部床面上まで混入する。覆土にはこの辺ではもっとも灰色味が強い。床面は鉄分が沈澱し、褐色を呈する。堅くて良好。

遺物は少ない、土器は黒色土器の椀、土師器の杯、甕などで、隣接する63住と同時期、９～10期のものである。

第65号住居址

43住に大きく破壊されている。北、西壁際のみの調査である。覆土中に厚い鉄分沈澱層が見られる。床面は認められず、土層より判断した。

遺物は土器がごく僅かで、細片のみである。43、44、64住より古いという重複関係より８期以前の物であろう。

第66号住居址

覆土中に石をほとんど含まない。90住、40土坑との新旧関係は分からない。床面は判然とせず土層断面とカマドにより想定した。カマドは西壁際に粘質灰色土の袖部と大石、僅かな焼土が遺存している。

遺物はごく僅かで須恵器の杯、壺、蓋、瓦、甕等が見える。41住同様、今回もっとも古い時期２期の土器類である。

第67号住居址

ここには６軒の住居址が重複する。いずれの覆土も石を含まず砂質土である。幾本もトレンチを入れ調査した。本址は北半部を91住に壊され、南半は75住覆土中にある。床面は砂礫層直上にあるが堅くはない。カマド、焼土などは見当たらない。

遺物には、須恵器、杯、甕、蓋、黒色土器の杯などがあるが、個々の残存状況は悪い。６～７期の土器である。

第68号住居址

16住覆土中にあり、西側を大きく８、９住に破壊された為、南と東側の壁際部分の調査である。床面はやや粘質の土、カマドは東壁の一部を方形に拡げそこに、焼土が残り、まわりに小ぶりな石が散乱する。

遺物は黒色土器の杯、椀、皿、須恵器の甕などの土器があり、７～８期の様相を示す。

第69号住居址

大型住居址である。覆土は砂質灰色土、この辺の遺構は周囲の検出面とは砂礫の混入程度が僅か異なるのみで分かりにくく検出には時間を費やした。床面は粘質土で中央部は広く堅さが残る。ピットP_1（33×45×13cm）P_2（36×46×11cm）がある。カマドは西壁部分にあり5住に破壊されている。粘質袖の一部と焼土が遺存する。

遺物は覆土中に比較的多く、床面上ではカマド周辺に集中する。器種は多く、須恵器の杯、蓋、高盤、黒色土器、土師器の甕、盤などである。7期に相当する。

第70号住居址

東と北側をそれぞれ4、5住に破壊される。西壁にある粘土カマドは奥壁に石1個を置き、焼土も遺存する。その前面の床面には堅さもある。

遺物は西壁際床面上にあるものが遺存状態が良い。これらは須恵器杯、土師器甕などの土器で4期に属する。尚、他には刀子も1点見える。

第71号住居址

調査区南西端に位置する。西に接する72住は本址より新しい。又、南側は用地外となる。床面は自然礫上にあるが堅さはない。焼土、ピット等は検出できない。

遺物は須恵器杯、黒色土器椀、土師器の甕などが西、東の壁際より出土した。土器は7～8期のものである。

第72号住居址

西側は僅か用地外となるがプランは不整の方形となろう。中央部に小児頭大の石が30個程あり、その直下が床面となる。カマドは石組カマドで燃焼室を囲み袖部が全周する。焼土は僅か認められる。

遺物は少なく、須恵器、黒色土器の杯、椀がある。71住同様、7～8期の様相をしめす。

第73号住居址

本址北半部に80住と10溝（共に未調査）が重複する。南半部を調査するが、ここには21土坑（本址より旧）5溝（同新）がある。床面は部分的に堅い。カマドは西壁に小さな突出部と数個の石、狭い範囲に焼土が存在する。

遺物は主にカマド前の焼土上にあり、土器は黒色土器、須恵器、土師器の杯類と、土師器の甕、他には緑釉陶器片もあった。8期に含まれる。

第74号住居址

56住他5軒が重複するうちで最も古い時期である。47、50住の間に5個の石と焼土を検出し、本址のカマドとしたが、床面も検出し難く遺構の輪郭も全く分からない。

遺物はこの焼土上とその周囲に須恵器、黒色土器の杯、土師器の甕がある。4～5期の土器類である。

第75号住居址

南側は用地外であるが、大形の住居址になろう。近くの5軒の住居址と重複する。まず北西部にある66住東の76住は時期的に本址に先行する。又床下にも88住がある。床面は東部が砂礫、他は粘質褐色土で非常に堅い。カマド、ピットは不明である。

遺物は須恵器、黒色土器の杯、土師器甕等であるが、遺存状態は悪い。これらの土器は5～6期のものである。

第76号住居址

75住に大きく破壊され、東壁際のみの調査である。床面は75住より3～5cm高く位置する。床北東部に堅さを残す。カマドがあり、粘土袖と焼土、奥壁部の石も残存する。

遺物は土器が僅か、須恵器、黒色土器の杯程度であり、75住同様5～6期と考える。

第77・78号住居址

A区の西隅73住の南側に検出した。ここは後に南西から5溝、6溝などが入りこれらと重複していた。73住と同様の覆土で住居址としてとらえはしたが、時間の関係で未掘のまま調査に着手しなかった。

第79号住居址

91住と重複する。両者の覆土は微妙で現場では新旧関係が判然としなかった。床面は自然堆積の砂礫土となる。カマド、ピット等は見られない。

遺物は土器が僅かあり、須恵器杯、土師器甕等でこれらの時期は5～6期のものである。

第80号住居址

南に8期の遺物を出土する73住と、未調査の10溝があり、本址はこれらより早い時期である。時間の都合で全容を検出するまでに至らず、調査は行わなかった。

第81号住居址

覆土には拳大以上の石を含んでいる。床面は砂礫層となる。カマドには燃焼室に焼土も僅か遺存する。

遺物は割合多く、土器に黒色土器、土師器、須恵器の杯、灰釉陶器の椀等があり、他には苧引鉄、金遺鉋などの鉄器や少量の鉄滓も見える。土器は8期の様相を見せている。

第82号住居址

不整形の輪郭、粘質灰色土の覆土、拳大に割られた角礫が多量に転入、これらの様子は他の住居址とは全く異なる。床面は鉄分の沈澱した茶褐色を呈し、非常に堅い。焼土、ピットは見られない。

遺物はごく少なく、角礫に混入して須恵器の叩き甕片が出土する程度である。時期は分からない。

第83号住居址

やや小形の住居址である。東側で25土坑、4溝と重複する。覆土は礫や砂を含みその様相が場所により大きく違っている。床面も不明瞭ながら自然礫、砂層上にあろう。カマドらしきものは見当たらない。

遺物は比較的多く、土器に須恵器、黒色土器の杯、土師器の甕、盤等、刀子らしき鉄器もある。これらは、7期のものである。

第84号住居址

60・61住と重複する。このうち一番古いのが本址である。又南東にも30住と僅か重複する。床面は61住より約20cm程低い所に位置する。堅さはない。カマドは東壁中央にあり、壁を外側へ突出させ、床面上に狭い範囲で焼土のみが残る。

遺物は僅か、須恵器、黒色土器の杯が主たるもので7～8期に該当する。

第85号住居址

北前堰の北側、調査区北端に位置する。大きな住居址である。南東隅に42・43土坑がある。床面は黄灰色ないし、黄茶褐色粘質土で中央部が堅い。カマドは東壁にあり、こぶりの石を黄灰色粘質土で固めている。焼土は多く、奥壁部から床面上にまで広がる。又西壁にも床面まで170×90cmの範囲で焼土が遺存する。

遺物はカマド内部とその周辺に多く、土器は杯、壷、甕、鉢などの須恵器を中心に、土師器甕なども見える。これらには、4期という古い時期を充てる。

第86号住居址

85住の北に位置する。床面は砂礫層上であろうが不明瞭。カマドは石と粘土による南側袖とぐるりと巡る低い北側の粘土袖があり、内部には焼土多量に遺存する。

遺物はカマド内部から土師器の甕があり、他に須恵器の杯、蓋等がある。又鉄滓も出土した。4～5期の土器類である。

第87号住居址

ここは5軒が重複する。本址は20・21住などの床下にある。住居址は小形で、床面は砂層上にある。堅くはない。北壁中央床面上に焼土を認める。カマドの残痕であろう。

遺物は土器に黒色土器、須恵器の杯、灰釉陶器の皿、土師器の甕等があり、7期に属する。

第88号住居址

75住床面精査中に3～5cm下部に非常に堅い床面と貼床を施したピットを見つけた。この床面は東西3m以上、南は用地外へ続いている。時間の制約上これ以上調査することはできなかったものの若干の遺物を得た。

遺物は須恵器の杯、蓋、壷類を中心に土師器杯、甕などで4期という古い時期のものである。

第89号住居址

東に57住を破壊し、西側は45・56住に壊される。覆土は56住と同色である。カマドは石芯粘土かと思われる。焼土も僅か残る。床面は砂礫層。堅くはない。

遺物は須恵器杯、土師器甕等の土器があり7期のものである。他に特殊なものとして非常に製練度の高い鉄塊が1点出土している。

第90号住居址

75住等8軒が重複する所である。僅か狭い範囲が調査できた。カマド・ピット等は検出できなかった。

遺物は土師器杯、灰釉陶器皿などがあり、これらは7～8期となる。この結果、本址は66・67・75・91住などよりは新しいものとなり、鉄製の鈹具は本址からの遺物である。

第91号住居址

南に67住を破壊し、更に79住と重複する。東、南側の壁際の調査である。土の堆積状況が微妙で、この新旧関係は現場では判然としなかった。床面は砂礫層となり、焼土、ピット等は見当たらない。

遺物は土器が僅かでこれに時期を求めるのは無理である。ただ67住と79住との遺物の時期で推測すると、本址は79住より新しいものと思われる。

第92・93・94号住居址

これらは結果的に未調査となった住居址である。北前堰の北側地区には92・93住の一部を検出した。この両者は検出時に得た須恵器杯の様子から6期以前の可能性がある。

又、調査地南西隅にある94住は72住と僅か重複する。遺物は得られなかったが、72住より旧（7～8期以前）の住居址であろう。

2．竪穴状遺構（第40図）

A区北西部に位置する。長方形の竪穴と周囲のピットから成る。竪穴規模は東西175×南北330cmで、深さ19cmを測る。覆土は粘質灰色土の単層で、床面上まで全面に小児頭大～人頭大の石約60個程が転入している。床面は平坦だが堅くはない。この竪穴のまわりに南東部を除き、5個のピットが並ぶ。これらはいずれも円形で、最大のP14（35×30×11cm）から最小のP17（22×23×9cm）までのもので覆土は竪穴と全く同じである。竪穴と5個組のピットの長軸方向も同一でN－30°－Eを指し、施設の上屋の為の柱穴であろう。

遺物は竪穴部から須恵器の甕、杯が数片、北西部のP16内より鞴の羽口小片1点がある。尚、この南西5mにある82住も本址と同様の覆土で、この両者のみが他の住居址などとは明らかに異なる覆土であり、時間的にも重なるものであろうが、残念なことにこの82住も遺物が僅少の為、時期については言及できない。

第1表　住居址一覧表

住居No.	平面形	規模 長×短×深（cm）	主軸方向	カマド 種別	カマド 位置	新旧関係	時期
1	方形	？×？×30		不明＝検出した範囲には見当たらない			7
2	〃	？×？×38		不明		3住より旧	7～8
3	隅丸方形	664×？×48		不明		2件、14土坑より新	7～8
4	(隅丸)方形	446×406×42	N－90°－W	石組	北西隅	5、70住、38土坑より新	7～8
5	方形	530×460×43	N－75°－W	石組	西壁	69、70住より新、38土坑、P62、233より旧	7～8
6	不整方形	312×290×32	N－80°－W	石組	西壁		8
7	方形	418×391×12		不詳＝全容を調査したが見当たらない		P224より新	7～9
8	胴張方形	448×386×42	N－84°－W	石組	西壁北寄	9、68住より新、18土坑とは不詳	11～12
9	方形	488×？×38	N－86°－W	石組	西壁	8住より旧、2溝より新	8
10	不整方形	380×362×24	N－100°－E	石組（壁掘込）	東壁北寄		9
11	不整方形	504×450×42	N－83°－W	（粘土）	西壁		7
12	隅丸方形	334×235×34	N－91°－E	石組（壁掘込）	東壁	13土坑との切合不詳	8
13	方形	420×382×24	N－11°－E	粘土か	北壁		8
14	胴張方形？	？×？×52		不明			7
15	不整形	438×？×12		不明			8
16	方形	473×？×26		不明		68住、9、10土坑、P223、225より旧	7
17	方形	354×336×36	N－11°－E	焼土のみ	北壁際	18住より新	8
18	隅丸方形	？×300×42		不詳		17住より旧	7
19	方形	375×320×29	N－12°－E	石組（壁掘込）	北壁東寄	3溝より旧	7
20	方形	400×382×24	N－122°－E	石組	北東隅	21、22、23、87住より新	8
21	方形	414×？×31	N－29°－E	石組（壁掘込）	北壁	20住より旧、87住より新	7
22	方形	(456)×？×14	N－120°－E	石芯粘土	東壁南寄	20住より旧、23住より新	7
23	方形	(426)×？×34		不明		20、22住より旧	7
24	方形	321×287×38 (320×320×　)	N－74°－W (N－106°－E)	石組 焼土のみ	西壁 (東壁北寄)	建て直しか	7
25	方形	260×235×26	N－90°－E	石芯粘土	東壁南寄	26住、3溝より新	12
26	隅丸方形	320×286×23		不詳		25住より旧、3溝より新	8
27	胴張方形	432×416×32	N－84°－E	石組	東壁		8～9
28	方形	(440)×？×35	N－91°－E	石芯粘土	東壁	P232との切合不明	2～3
29	隅丸方形	456×386×32	N－84°－W	石芯粘土	西壁	26土坑より旧	7
30	方形	446×392×38	N－92°－E	石組（壁掘込）	東壁	84住より新	9～10
31	方形	340×323×60	N－81°－E	石組（壁掘込）	東壁	32住より旧	7

住居No.	平面形	規模 長×短×深（cm）	主軸方向	カマド		新旧関係	時期
				種別	位置		
32	方形	326×324×42	N－84°－E	石組（壁掘込）	東壁	31住より新、33住より旧	8
33	隅丸方形	534×515×48	N－87°－E	石組	東壁	29、33土坑より新	8
34	不整方形	428×342×40	N－93°－W	焼土のみ	東壁際		8
35	方形	444×420×46	N－71°－E	石芯粘土か（壁掘込）	東壁	建て直しか	3～4
36	不整方形	376×364×28	N－91°－W	焼土のみ	西壁南寄		9～10
37	胴張方形	(422)×？×10		不明			8
38	(隅丸)方形	402×376×50	N－94°－W	石組粘土（壁掘込）	西壁		8
39	胴張方形	371×369×38	N－91°－W	石組粘土（壁掘込）	西壁		8
40	方形	454×？×24		不明			4
41	方形	430×416×28	N－102°－W	石芯粘土（壁掘込）	西壁南寄		2
42	胴張方形	480×458×36	N－1°－E	石組粘土（壁掘込）	北壁		8
43	隅丸方形	505×468×44	N－87°－E	石芯粘土	東壁	65住より新	8
44	方形	638×583×43	N－93°－E	石組粘土	東壁		8
45	長方形	308×226×28	N－97°－E	石組	北東隅	47住より新	5～6
46	方形	366×？×35	N－83°－E	石組（壁掘込）	東壁		8
47	胴張方形	484×456×58	N－85°－E	焼土のみ	東壁北寄	45住より旧、74住より新か	5～6
48	胴張方形	408×350×27	N－92°－W	石組粘土（壁掘込）	西壁		7～8
49	隅丸方形	494×406×40	N－88°－E	石芯粘土	東壁北寄		8
50	不整方形	415×388×40	N－89°－E	石芯粘土	東壁		8
51	不整方形	350×348×20	N－92°－E	石組	東壁	52住より新	7
52	方形	495×？×20	(N－91°－E)	石組か	東壁	51住より旧	3～4
53	不整方形	353×345×3（18）	N－90°－E	石芯粘土か	東壁	33住より旧、29土坑より新	7
54	方形	364×362×38	N－111°－W	石組粘土	西壁		7～8
55	不整方形	404×397×45	N－6°－W	石組	北壁		～7
56	方形	(310)×（300）×27	N－99°－W	粘土か	西壁	57住より新	7～8
57	方形	433×429×20	N－90°－E	焼土あり（壁掘込）	東壁	56、89住より旧	5～6
58	方形	332×？×14（64）	N－97°－E	石芯粘土	東壁		5～7
59	長方形	398×349×18	N－111°－W	焼土のみ	西壁	9溝、P257より旧	2～4
60	方形	414×380×45		不詳		61住より旧	8
61	胴張方形	442×410×38	N－77°－E	石組	東壁南寄	60、84住より新	8
62	不整方形	(440)×？×46	(N－99°－W)	不明	西壁		5～6
63	不整方形	(382)×？×45	N－86°－E	石芯粘土か（壁掘込）	東壁		9～10
64	方形	300×284×30	N－88°－E	石組	東壁南寄	65住より新	9～10
65	方形	(490)×（378）×42		不明		43、44、64住より旧	

住居No.	平面形	規模 長×短×深（cm）	主軸方向	カマド 種別	カマド 位置	新旧関係	時期
66	方形	427×426×32	N－70°－W	石芯粘土（壁掘込）	西壁	75、90住より旧	2
67	不整方形	345×？×48		不明		75住より新、91住より旧	6～7
68	方形	？×？×34	N－95°－E	石芯粘土か（壁掘込）	東壁	8住、P226より旧、16住より新	7～8
69	不整方形	592×（572）×36	N－70°－W	石芯粘土か	西壁	5住、4土坑、P55、P59、60より旧	7
70	方形	？×？×26	N－86°－W	粘土	西壁	4、5住より旧	4
71	方形	（382）×？×31		不明		72住より旧、41土坑より新	7～8
72	不整方形	302×（305）×18	N－90°－E	石組	西壁	71、94住、9溝より新	7～8
73	方形	（246）×480×28	（N－62°－W）	石芯粘土か（壁掘込）	西壁南寄	80住、21土坑より新、5溝、10溝より旧	8
74	不明	カマドのみを検出		焼土のみ		45、47住より旧	4～5
75	方形？	？×？×28		不明		66住より新、67、90住より旧	5～6
76	方形？	？×？×21	（N－88°－E）	粘土	東壁	75住より旧	5～6
77	方形？	未調査				78住、5溝より旧	
78	方形？	〃				77住より新、6溝より旧	
79	方形	360×353×26		不詳		91住より旧か	5～6
80	不詳	未調査				73住、10溝より旧	
81	方形	356×340×30	N－83°－W	石組（壁掘込）	西壁南寄		8
82	不整方形	428×334×22		不詳			
83	不整方形	336×302×26		不詳		25土坑より旧、4溝より新	7
84	方形	386×332×50	N－84°－E	壁掘込	東壁	30、61住より旧	7～8
85	隅丸方形	611×592×46	N－112°－E	石芯粘土（壁掘込）	東壁	42土坑より旧	4
86	方形	371×347×34	N－101°－E	石芯粘土（壁掘込）	東壁		4～5
87	方形	345×300×17	N－5°－E	焼土のみ	北壁	20、21住より旧	7
88	不明	？×？×（32）		不明		75住より旧	4
89	台形	349×（336）×18	N－60°－E	石芯粘土？（壁掘込）	東壁	56住より新	7
90	不明	（一部を調査）				66、75、91住より新	7～8
91	方形	348×317×40				90住より旧、67、79住より新	
92	（方形）	未調査					
93	（方形）	未調査					
94	方形？	未調査				72住より旧	

3．掘立柱建物址（第37～39図）

今回の調査で検出された掘立柱建物址は6棟を数えるのみである。同時に検出された竪穴住居址が94軒を越える奈良～平安時代の大規模集落の調査であることを考えるならば、この6棟のみという掘立柱建物址の対住居址比率は極めて低いものである。以下各址の概要を述べていきたい。

1号は調査区の南西部にあり、他の掘立柱建物址とは離れて位置する。2間×2間の側柱建物で、ほぼ方形の平面形を呈す。柱間寸法は柱穴の心芯距離で174～198cmとばらつきがあるが、平均すれば概ね190cmとなり、380×380cm程の建物規模と考える。柱穴掘り方は直径45～60cm前後を測る円形ないし楕円形を呈する。柱痕はまったく検出されなかったものの、P182の下部からは、柱の下端を取り囲んでいたとみられる石込めが検出された。

2号は調査区の西側ほぼ中央に位置する。2間×2間の総柱建物で、ほぼ方形の平面形を呈す。柱間寸法は164～224cmとかなりばらつきがある。平面規模はおおよそ、400×360cmと考えられる。柱穴は直径40～60cm前後の円形掘り方を主とする。柱痕は検出されなかった。

3号は調査区の西側やや北寄り、4住をはさんで2号の北に位置する。3間×2間の側柱建物であり、方形の平面形を呈す。柱間寸法は概ね梁間200cm、桁間130cmを測り、建物の平面規模はおおよそ、410×400cm程である。又、西側軸線上には2ヶの柱穴が掘られている。柱穴掘り方は直径50～60cm前後と大きく、四隅の柱穴ほど深く掘られる傾向が認められる。P202から柱痕状の堆積が確認されたが、土層から明瞭には捉えがたい。

4号は調査区の北西隅に位置し、本址の南西には約4m離れて5建が残存する。3間×2間の総柱建物であり、方形の平面形を呈する。柱間寸法は梁間180～196cm、桁間138～166cmを測る。平面規模は、梁行380cm、桁行460cm程と考えられる。柱穴掘り方は平面形が円形、楕円形、不整円形を呈し、直径70～110cm以上と他址の掘り方に比べひときわ大きい。P278・285の底部には柱の建てられていた跡を示すとみられる浅い窪みが認められた。

5号は調査区の北西隅に位置し、4建と6建にはさまれる。2間×2間の総柱建物で、南北方向にやや長い方形の平面形を呈す。柱間寸法は概ね梁間160cm及び145cm、桁間180cm及び140cmと推定され、平面規模は320～350cm程となろう。柱穴掘り方は、平面形が楕円形ないし円形を呈す。直径40～70cm前後を測る。

6号は調査区の北西寄りに位置し、5建の南に3m程離れて接する。2間×2間の総柱建物であり、南北に長軸をもつ長方形の平面形態を呈す。柱間寸法は、梁間、桁間ともに一定しないが、方形規格の建物とした場合、270～330cm程の規模をもつものと考えられる。柱穴掘り方は平面形が円形もしくは楕円形を呈し、直径45～60cm前後のものが多い。

各建物址の時期については出土遺物からみて3・4建は奈良時代に位置付けられよう。このうち4建は主軸方向を他と異にし、形態及び構造上においても大きな柱穴をもつ点が注目される。他址の時期については出土遺物がなく、不明である。

4．土坑・ピット（第40～44図）

(1)概要

今回の調査では竪穴住居址に伴わない穴で、便宜上長径が100cm以上のものを土坑、それ未満のものをピットとして扱った。総数は土坑43基、ピット328基を数える。なお、平田本系北前堰より北地区では充分な検出作業が行えず、未検出の土坑・ピットがある。規模は最小22cm（P17）、最大362cm（第12号土坑）を測り、深さ50～100cmの穴が多い。平面形態は、土坑・ピットいずれも楕円形に類する穴が最も多く、円形類が次ぐ。方形・長方形類は第5・28・32号土坑（以下○号と略）の3基のみである。断面形態は、半円形と台形が多い。分布をみると、①調査地南東部、②2溝の東、③1溝の周囲、④35住の東、⑤1建の西、⑥44・57住の間、⑦42住周辺に集中がみられる。これらはピット群として捉えられ、竪穴住居址の周囲に多くありながら、それとの重複関係が少ない点が注目される。このうち①～③は土坑の占める比率が高い。

(2)特徴的な土坑・ピット

13号は須恵器大甕の埋設遺構である。A区中央南側に位置する。重機よる表土削除の際に大甕の口縁部が確認された。12住の南東隅の壁を壊した形で検出したが、その位置から12住に付属する施設の可能性も残される。掘り方は平面円形を呈し、南北105×東西100cmの規模を測る。断面形は甕の器形にあわせて三角形を呈し、埋土は砂質灰色土を用いる。大甕の覆土は茶褐色土塊混入の灰色土が堆積し、下層には数個の拳大の礫・灰釉陶器の椀が大甕の破片とともに認められた。時期については遺物より見て8～9期に属すると考えられる。

12号はA区中央やや西側に位置する。平面形はやや不整な楕円形を呈し、長軸方向はN－0°をとる。今回の調査では最も大きな土坑で、南北362×184cmの規模を測る。底面は平坦でなく北から南に傾斜し、壁は緩やかに掘り込まれる。覆土は礫を少量混入する砂質の暗灰色土で北側には拳大の礫とともに土器片がみられた。土坑の性格については平面形・長軸方向等からして墓址と考えたい。時期については遺物より見て8期に属すると考えられる。

P52はA区北東部に位置する。平面形は直径88×68cmの規模を測る不整な楕円形を呈し、断面形は半円形を呈する。覆土には砂質暗灰色土が堆積しており、底面には礫が数個見られた。遺物には土師器・鞴の羽口等が出土しており、製鉄に伴う遺構と考えたい。所属時期は不明である。

5．溝（第44図）

今回の調査では第1～9号溝（以下○溝と略）の9条が確認された。方向は南北に伸びるものに1～4・9溝、東西方向には5～8溝があり、3溝は北端でほぼ直角に折れる。1・3溝は途切れる部分があるが、表土削除の際に掘り込みの浅い部分が底面下迄削平されたもので、本来は続いていたと考えられる。覆土は他の遺構と類似した砂質灰色土もしくは暗褐色土が堆積し、水を伴っていた様子は認められない。出土遺物から時期の推定されるものは少ないが1～3溝は7期に属する。

第２表　掘立柱建物址一覧表

No.	平面形 柱配り	主軸方向 面積（㎡）	規模（m）	柱間寸法(m)	柱穴規模（cm） No.	長径	短径	深さ	柱穴平面形	柱穴備考
1	方形 側柱	N-87°-E 13.6㎡	2間×2間 3.7×3.6	桁1.7～2.0 梁1.8～2.0	180	58	54	45	円形	
					181	45	40	24	円形	
					182	48	42	33	円形	栗石充塡
					183	58	56	32	円形	
					184	48	36	40	楕円形	
					185	55	50	50	不整円形	
					186	55	50	36	円形	
					187	48	43	42	不整円形	
2	方形 総柱	N-2°-W 14.9㎡	2間×2間 4.0×3.6	桁1.8～2.3 梁1.7～2.2	188	48	44	20	円形	
					189	48	43	22	円形	
					190	38	34	12	円形	
					191	36	34	13	円形	
					192	48	42	20	楕円形	
					193	60	52	22	不整円形	
					194	60	54	20	楕円形	
					195	38	38	15	円形	P270より新
					270	46	42	26	円形	
					271	48	42	?	円形	（未掘）
3	方形 側柱	N-4°-W 15.7㎡	3間×2間 4.1×4.0	桁1.2～1.4 梁1.9～2.1	196	62	57	26	円形	
					197	50	48	28	円形	
					198	48	46	30	円形	
					199	51	48	26	円形	
					200	55	50	23	円形	
					201	69	64	25	円形	
					202	50	43	29	円形	
					203	60	59	19	円形	P202より新
					204	52	50	26	円形	
					205	52	47	22	円形	
					206	57	55	29	円形	
					207	50	48	22	円形	
4	方形 総柱	N-28°-E 16.8㎡	3間×2間 4.6×3.8	桁1.4～1.7 梁1.8～2.0	272	85	70	48	楕円形	
					273	86	82	49	不整円形	柱痕跡有り
					274	80	68	50	楕円形	柱痕跡有り
					275	78	76	54	円形	柱痕跡有り
					276	90	80	42	不整円形	
					277	94	92	43	不整円形	
					278	73	56	28	楕円形	2段底となる
					279	111	83	39	楕円形	
					280	72	67	43	円形	
					281	75	70	37	円形	
					283	82	77	35	円形	
					285	76	53	30	楕円形	2段底となる
5	方形（長） 総柱	N-17°-E 10.5㎡	2間×2間 3.5×3.15	桁1.4～1.8 梁1.5～1.7	286	43	42	38	円形	
					287	56	40	46	楕円形	
					288	74	55	42	楕円形	
					289	46	36	44	楕円形	柱痕跡有り
					290	56	53	47	円形	柱痕跡有り
					291	60	44	40	楕円形	柱痕跡有り
					292	54	40	41	楕円形	柱痕跡有り
					293	46	34	47	楕円形	柱痕跡有り
					295	70	62	30	楕円形	
6	長方形 総柱	N-2°-E 8.6㎡	2間×2間 3.3×2.7	桁1.5～1.8 梁1.2～1.4	297	50	48	26	円形	
					298	48	44	40	楕円形	
					299	73	50	25	楕円形	
					300	64	45	36	楕円形	柱痕跡有り
					301	66	56	25	円形	
					302	48	43	24	円形	

No.	平面形 柱配り	主軸方向 面積(m²)	規模 (m)	柱間寸法(m)	柱穴規模 (cm)				柱穴平面形	柱穴備考
					No.	長径	短径	深さ		
					303	46	45	29	円形	
					304	46	43	32	不整円形	
					305	58	45	?	楕円形	(未堀)

第3表　溝一覧表

遺構 No.	規模			新旧関係	備考	
	長さ(m)	幅 (cm)	深さ(cm)		主要遺物	時期その他
1 (イ)	7.40	130～240	21～29	――――	土器多量・釘	7
1 (ロ)	11.55	43～113	24～40	15土坑、P92より旧		
1 (ハ)	(5.90)	95～117	19～26	P94、35土坑より旧		
2	14.28	33～85	10～31	P88、9住より旧	土器 (墨書)	7
3 (イ)	10.05	58～118	19～37	19住より新	土器多量・(墨	7
3 (ロ・ハ)	(8.78)	73～195	21～46	25、26住、12土坑より旧	書多)、鏃、鈹具	
4	(5.65)	43～80	8～10	25土坑より旧		――
5	(8.60)	50～215	――	73、77住より新		未調査
6	(9.70)	87～126	――	78住、7溝より新		未調査
7	(4.40)	――	――	6溝より旧		未調査
8	(15.00)	120～198	――	――――		未調査
9	(9.60)	――	――	72住より旧、59住、37土坑より新		未調査
10	不詳			73、80住より新		未調査

第4表　主要ピット一覧表

(番号) は図未掲載

番号	規模 (cm)				新旧関係	備考	
	平面形	長径×短径(cm)	断面形	深さ(cm)		主要遺物	時期その他
2	楕円	98×74	半円形?	14		鉄滓	7～8
8	楕円	(68)×55	台形	14	P9より新	土器多量	6～7
9	楕円	(57)×47	三角形	28	P8より旧	土器	
10	楕円	(82)×51	不明	6	P11より旧	土器多量	
11	楕円	76×63	不明	5	P10より新		
(16)	円	26×25	台形	15	竪穴状遺構に付属する	フイゴの羽口片	
32	円	35×34	台形	25		フイゴの羽口片	
37	円	55×47	半円形	28		土器	
43	円	62×50	半円形	30	P44より新	土器割に多い	
44	楕円	114×(83)	半円形	40	P43より旧		
49	円	73×75	半円形	37		鉄滓多量	
50	円	44×42	台形	28		土器	
52	不整楕円	88×68	半円形	21	P53より新	フイゴの羽口3点以上	
53	不整楕円	(98)×73	台形	13	P54より新、P52より旧	鉄滓、鉄器	
54	不整楕円	(62)×40	不明	4	P53より旧		
55	不整円	72×64	台形	23	69住より新	鉄滓	
(64)	楕円	127×77	台形	23		土器	
75	不整楕円	91×66	台形	28		土器	
(99)	楕円	86×52	台形	15		土器	
(163)	不整楕円	78×56	台形	29		土器	
(231)	不整円	50×49	台形	18		土器	
237	円	54×51	台形	18		フイゴの羽口、鉄滓	
247	円	65×60	台形	20		鉄滓	

第5表　土坑一覧表

（番号）は図未掲載

番号	規模 (cm)				新旧関係	備考	
	平面形	長径×短径(cm)	断面形	深さ(cm)		主要遺物	時期その他
1	不整楕円	232×139	台形	20		土器多量	8
2	不整楕円	202×115	不明	10			7～8
3	楕円	130×72	不明	6			
4	不整楕円	324×200	方形？	13	7・69住より新	土器	8～
5	長方形	186×80	台形	23			
6	楕円	158×86	台形	25		刀子	
7	楕円	125×63	台形	18			
(8)	楕円	140×103	不明	8			
9	楕円	156×103	台形	22	16住より新		
10	不整楕円	296×155	台形	18	16住より新	土器多量、フイゴ羽口？、鉄滓	8
11	不整楕円	158×98	半円形	33			9～10
12	不整楕円	362×184	半円形？	30	3溝(ロ)、P234、235より新	土器多量、フイゴ羽口、鉄滓多、鉄滓	8
13	円	105×100	三角形	60	12住より新	土器	8～9
(14)	不整円	(115)×(40)	台形	22	3住より旧		
15	楕円	118×90	台形	41	1溝より新		
16	楕円	118×96	台形	27		鉄滓多量	
17	楕円	230×85	台形	21			
(18)	楕円？	？	台形	17	8・9・68住と新旧不明		
19	楕円	130×100	半円形	32			
20	円	102×90	半円形	27		土器	8
(21)	楕円	(195)×(63)	未掘		73住より旧		
22	不整円	150×133	台形	19			
23	楕円	104×80	半円形	30		土器「東寺」、フイゴ羽口？、鉄滓	
(24)	楕円	136×111	半円形	18			
25	不整楕円	225×131	半円形	17	4溝・83住より新	土器多量（墨書）、鏃、鍔	7
26	楕円	149×119	二段底	46	29住より新		
27	円	172×168	台形	40		土器（墨書）	9～10
28	不整円	149×140	台形	12			
29	不整円	126×113	方形	28	53住より新、33住より旧	土器（刻書）	8
30	不整楕円	138×82	半円形	8			
31	楕円	121×84	半円形	31			
32	不整円	142×128	半円形	16			
(33)	不整円	(120)×97	台形	21	53住より新、33住より旧		
(34)	不整楕円	220×92	台形	17			
35	不整楕円	279×96	半円形	25	1溝(ハ)より旧		7～8
36	楕円	112×87	半円形	33			
(37)	不整円	88×71	半円形	15	9溝より新		9溝より新
38	不明	190×(100)	台形	18	5住より新、4住より旧	土器多量、釘	7～8
39	不整円	126×110	三角形	40			
(40)	不整楕円	(121)×(83)	不明	29	66・75住より新か？		
41	不整楕円	(132)×58	方形？	27	71住より旧		
42	楕円	229×(98)	三角形	32	85住より新、43土坑より旧	鉄滓	
43	楕円	(193)×140	半円形	20	42土坑より新		

第3節　遺　物

1．土器・陶磁器（第45～76図）

平田本郷遺跡では、竪穴住居址・掘立柱建物址・溝・土坑などの遺構や、遺構外の包含層などから膨大な量の土器・陶磁器が出土している。これらは、ごく一部が古墳時代に属するが、ほとんどが奈良～平安時代の所産である。本報告書では、実測可能な701点を図化している。なお、本文内で使用する器種・器形の名称・分類、土器群の編年観は文献1によった。また、各土器の器種については、図中の通し番号の横に略号を表記した。（須恵器：S、軟質須恵器：NS、土師器：H、黒色土器A：KA、黒色土器B：KB、灰釉陶器：K、緑釉陶器：R）

(1)種別・器種

出土した土器の種別は、土師器・黒色土器A（内黒土師器）・黒色土器B・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・白磁に限られる。器種別にみると食器が多く、煮炊具の割合が他の該期の集落に比べて非常に少ない。以下、種別ごとに器種を記述する。

①古墳時代の土器

検出面から古墳時代中期のものと考えられる高杯・壷が出土しているが、小片で図化・提示できない。また、今回の調査では該期に比定される遺構は発見されていない。

②奈良・平安時代の土器

ア．土師器

食器類は杯・椀・耳皿・盤、煮炊き具に甕・小型甕・羽釜がみられる。杯・椀は、すべてロクロ調整・底部糸切りである。581・619・692は甲斐型土器の杯である。煮炊具は、全体的に出土量が少ない。424は、甕の底部である。体部下側表面の一部が剝離しており、成形・調整の過程が観察できる。まず、粘土積み上げ成形した後にタタキ調整され、さらにその表面を覆うように外側に粘土を貼付けて刷毛目調整している。本来須恵器にみられるタタキ調整が施されている特殊品である。

イ．黒色土器

内面のみ黒色処理される黒色土器A、内外面黒色処理される黒色土器B（314・698・699）が出土している。器種は、杯・皿・耳皿・椀・鉢がみられる。また、明らかに須恵器杯Bを模倣したもの（170）もみられる。杯・椀・皿ともにロクロ調整・底部糸切りであるが、杯のうち161・238・447は、腰部手持ちヘラ削りされている。216は、内面ミガキ調整して黒色処理した特殊な小型甕である。

ウ．須恵器

器種は、食器類に杯A（無台）・杯B（有台）・蓋・皿・鉢・盤、貯蔵具に長頸壷・四耳壷・甕・

瓶・浄瓶（もしくは多口壺）がみられる。杯は、底部ヘラ切り（448・489・517・537）・ヘラ切りのち手持ちヘラ削り（270・339・559）・ヘラ切りのち工具ナデ（336・516）の杯A、底部回転ヘラ削りの杯B、糸切りの杯A・B、灰白色で軟質焼成の軟質須恵器杯Aがみられる。これらの種類は時期差に起因する。皿・鉢・瓶・長頸壺・浄瓶（あるいは多口壺）・盤は、全形がわかるものがなく、破片から推定した。688は、浄瓶か多口壺の注口部の破片である。注口頸部外面には竹管文が施されている。492は、盤あるいは器台等の脚部と考えられる特殊品である。脚部中位には、焼成後に外面から穿たれたと考えられる透かしが2孔みられる。甕は、13土（606）・38土（624）から大型品が出土している。347の四耳壺は、器面タタキ調整でなくカキ目調整を施す特殊品である。

エ．灰釉陶器

器種は、食器類に椀・皿・段皿・耳皿、貯蔵具に長頸壺・短頸壺・小瓶がみられる。時期は、7～8期（センター編年）が主体で、9期以降のものは少量である。7～8期には、器壁がやや厚手で刷毛塗り施釉、断面四角形の高台を貼付けるものと、器壁が薄く緻密で灰白色の胎土で断面三角形の高台を付け、刷毛塗り施釉、重ね焼き焼成のものが共伴している。前者は黒笹14号様式、後者は光ヶ丘1号様式と考えられる。出土量は光ヶ丘1号窯式が大部分を占め、黒笹14号窯式は極少量である（74・478）。74は、内面見込み部に花文が施されている耳皿である。9～10期以降は、漬け掛け施釉のものもみられる（光ヶ丘1号窯式～大原2号窯式）。

オ．緑釉陶器

10住から2点、19住から1点、73住から1点、12土から1点、遺構外検出面から1点の合計7点出土しているが、図化できたのは4点（117・206・700・701）のみである。117・700は、椀の口縁部である。体部内外面をヘラ磨き調整しており、胎土は硬質で灰白色を呈する。釉は、淡緑黄色。東海産のものか。206・701の2点は、椀の底部と考えられる。ともに高台は円盤状の切高台で、胎土は軟質で黄灰白色を呈する。釉は、淡黄緑色を呈し、底面を含めて全面に施釉されるが、胎土が軟質のため剥落が激しい。京都産系のものと考えられる。

カ．白磁

3住から1点（26）出土している。小片のため器形等は不明である。器壁は薄く丁寧に仕上げている。胎土は白色であるが、黒色の粒子が多量に含まれている。

(2)土器の様相

平田本郷遺跡では、県センター編年の古代2～12期の各期の様相がみられる。本遺跡にみられる土器群は、遺構の重複が甚だしいため厳密な意味での一括性が窺えるものはあまりみられない。また大部分の遺構が7～8期に該当しており、それ以外の時期の資料は比較的希薄で良好な土器群に恵まれない。以下、各期の土器様相の概要を述べる。

2期：28住・41住・66住にみられるが、各土器群の一括性には不安がある。出土した土器は、須恵器杯A・瓶の破片・長頸壺・甕の破片、土師器甕A・Bのみである。食器は須恵器のみで杯Aは底部回転ヘラ切り未調整される。また、遺構内外から美濃須衛窯産とみられる破片が出土しているが、一括性が低いため土器群として捉えられる資料に乏しい。

3～4期：この時期も遺構が少なく、安定した土器様相を示す遺構に恵まれない。食器では、須恵器杯A・B、黒色土器A杯A、貯蔵具では須恵器長頸壺・甕の破片、煮炊き具では土師器甕Bがみられる。須恵器杯Aは、底部回転ヘラ切りと回転糸切り調整の両者がみられる。

5～6期：該期の土器群は、どれも資料の一括性に不安があり良好な資料に恵まれない。食器は、須恵器杯A・B、黒色土器A杯Aがある。須恵器杯Aはすべて底部回転糸切り調整され、体部の開きの弱い形態である。煮炊き具は、土師器甕B・Cが少量ある。

7期：この時期には、遺構数が増加し良好な土器群がみられる。食器に大きな変化がみられ、椀・皿が登場する。椀は、黒色土器A・灰釉陶器・緑釉陶器、皿は黒色土器A・灰釉陶器・須恵器にみられる。また、食器の主体は須恵器から黒色土器A・軟質須恵器に移行する。須恵器杯Aは、体部が大きく開き、器壁が薄くロクロ目が目立つものとなる。また軟質須恵器杯Aは、形態が須恵器杯Aでありながら、焼成が軟質で内外面に黒斑がみられる。煮炊き具は、土師器甕B・小型甕Dが主体である。本遺跡の該期に搬入された灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式が主体で、黒笹14号窯式はほとんど伴わない。また緑釉陶器は、京都産と考えられる。該期の土器様相を示す土器群としては、1住・11住・18住・29住などがあげられる。

8期：食器は、土師器・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器で構成される。器種は、土師器杯A・椀・盤A、黒色土器A杯A・椀・皿、鉢A、軟質須恵器杯A、灰釉陶器椀・皿がある。椀・皿への指向がさらに強まり、同一器形の食器が異なった器種で作られている。煮炊き具は、土師器甕B・小型甕Dが主体となる。貯蔵具は須恵器甕類が主体であるが、長頸壺・短頸壺・小瓶などに灰釉陶器がみられる。該期には光ヶ丘1号窯式の灰釉陶器が伴う。この期の土器様相を示すものとしては9住・43住・61住・10土があげられる。

9～10期：本遺跡においては、9期以降の遺構が少なく土器様相も不明な点が多い。8～9期への段階は、食器における黒色土器Aが激減して土師器が増加する。黒色土器Aは、杯がみられなくなり、椀のみみられる。貯蔵具・煮炊き具は、出土量が少なく不明である。灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式・大原2号窯式が伴う。10住の資料が比較的まとまっている。

11～12期：食器は土師器と灰釉陶器が主体となり、黒色土器Aは椀のみみられる。煮炊き具は出土量が非常に少なく、小型甕Dがわずかにみられるのみである。灰釉陶器は、虎渓山1号窯式が主体である。該期では、8住土器群があげられる。

(3)文字関係資料

本遺跡で出土した文字関係資料には、墨書土器・刻書土器・刻印須恵器・転用硯などがある。以下、各概要を述べる。

①墨書土器

墨書土器は、総計118点出土しており質、量ともに豊富にみられる。出土した遺構の内訳は、竪穴住居址93点、溝13点、土坑７点、ピット１点、遺構外・検出面４点で竪穴住居址から出土する割合が高い。出土量が多い遺構は９住22点、17住15点などがあげられる。文字の種類では圧倒的に『几』が多く、57点（48.3%）が出土している。この文字は10軒の住居址から出土しており、同一墨書文字を共有する集団が存在したことが窺える。また、特記される墨書としては、『東寺』(238・616)・『寺』(440) など寺院との関連を示唆するものもみられる（註）。

墨書される器種は、黒色土器Ａ杯Ａが29点で最も多く全体の24.6%を占める。以下、軟質須恵器杯Ａ13点（11.0%）、土師器杯Ａ11点（9.3%）、黒色土器Ａ椀８点（6.8%）・灰釉陶器椀８点（6.8%）、須恵器杯Ａ７点（5.9%）、灰釉陶器皿２点（1.7%）、黒色土器ＡⅢＢ２点（1.7%）と続く。なお、黒色土器Ａと土師器は、杯と椀の判別が不可能なものが多く、実数はさらに増加するものと考えられる。

墨書される部位は、体部外面正位69点(58.5%)・体部外面逆位30点(25.5%)・底裏11点(9.3%)・体部右横・左横３点（2.5%）・不明２点（1.7%）で体部外面正位が突出して多い。器種別にみると、黒色土器Ａ・土師器・須恵器・軟質須恵器は、体部外面に記される傾向にあるのに対し、灰釉陶器は、底裏になされる傾向にある。時期別に量的な推移をみると、７期：39点・８期：63点・９期：２点で８期が最も多い(時期が判別したもののみ)。９期は激減し、10期以降は全くみられなくなる。

②刻書土器

ここでいう刻書土器は、焼成後に鋭利な工具で線刻したものを指し、焼成時につけられたヘラ記号とは区別する。総計３点（32・368・659）出土している。32・368は、いずれも「×」の記号的なものであるが、659は「大」の文字が記される。

③「美濃国」刻印須恵器

387の須恵器杯Ｂ内面見込み部には、「美濃国」の刻印がみられる。破片資料のため全容は不明であるが、上に「美」、右下に「濃」、左下に「国」を置く配置と考えられる。これは、『老洞古窯址群発掘調査報告書』（文献３）のＡ-Ⅱ-５類に分類される。松本市内では、南栗遺跡（文献２）ＳＢ626・北部Ｄ区遺構外出土品に続き３例目の出土で、これらの文字配列はすべて同類（Ａ-Ⅱ-５類）である。「美濃国」刻印須恵器は、岐阜市老洞１号窯・朝倉窯で生産されたことが知られており、その操業は８世紀第１四半期とされている。

④転用硯

2点出土した。いずれも使用痕は確認されず、墨・朱の付着をもって転用硯とした。361は、灰釉陶器椀を転用している。底裏高台内側には墨痕、内面見込み部には朱墨が付着しており、墨と朱墨を使いわけていた可能性がある。360は、灰釉陶器皿の底部外面高台内側に墨痕が確認できた。これらの他に墨痕との判定が難しいものがあり、実数はさらに増えるものとみられる。

註：松本平における寺院との関連が窺える墨書は、本遺跡以外でも出土している。大村廃寺出土「如来堂」（文献4）、丘中学校遺跡出土「□色寺」（文献5）、吉田川西遺跡出土「西寺」・「文□寺」（文献6）、中二子遺跡出土「寺」（文献7）、三の宮遺跡出土「寺」（文献8）、田川端遺跡出土「寺」・「小□□寺」（文献9）、小原遺跡出土「卍」（文献10）

〈参考文献〉

1：長野県埋蔵文化財センター　1990　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘報告書4 松本市内その1総論編』
2：長野県埋蔵文化財センター　1990　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘報告書7 松本市内その4南栗遺跡』
3：岐阜市教育委員会　1981　『老洞古窯址群発掘調査報告書』
4：本郷村誌編集会　1983　『本郷村誌』
5：塩尻市教育委員会　1983　『丘中学校遺跡』
6：長野県埋蔵文化財センター　1989　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘報告書その3　吉田川西遺跡』
7：長野県埋蔵文化財センター　1989　『中央自動車道長野線埋蔵文化財報告書 松本市内その5中二子遺跡』
8：長野県埋蔵文化財センター　1990　『中央自動車道長野線埋蔵文化財報告書 松本市内その9三の宮遺跡』
9：塩尻市教育委員会　1987　『田川端遺跡』
10：松本市教育委員会　1993　『松本市小原遺跡II』

第6表　墨書土器構成表

種別＼墨書部位	体部正位	体部逆位	体部右横	体部左横	体部不明	底部	小計	種類別合計
土師器杯	8	1	1			1	11	土師器　20
土師器杯か椀	7	1	1				9	
黒色土器A杯	22	5	1		1		29	黒色土器A　68
黒色土器A椀	6	1				1	8	
黒色土器A杯か椀	13	15			1		29	
黒色土器A皿B	1	1					2	
須恵器杯	1	5		1			7	須恵器　7
軟質須恵器	10	1		2			13	軟質須恵器　13
灰釉陶器椀						8	8	灰釉陶器　10
灰釉陶器皿	1					1	2	
計	69	30	3	3	2	11	118	計　118

2．石器（第77図）

住居址内から砥石が2点出土している。住居軒数や鉄製品・鞴の羽口の点数と比較して、非常に少ない。

1は3住から出土している。端部を僅かに欠くだけのほぼ完形品で、全長4.02cm、最大幅3.65cm、厚さ0.89cm、残存重量18.14gを測る。石材は凝灰岩製で、偏平な直方体の全面に砥面が認められる。このうち、右側面は一度破損した面を再度砥面としたもので、凹凸があるため研ぎが及ばない部分がある。

2は39住から出土している。片側を破損しているが、残存長5.71cm、幅4.81cm、厚さ4.11cm、現存重量182.98gを測る。石材は砂岩製で、先細りする直方体の長側4面に砥面が認められる。このうち、左側面には、鉄製品の刃部でつけた幅3mm、深さ2mmの線条痕が認められる。

3．土製品（第77・78図）

紡錘車・土錘・鞴の羽口が出土している。図化提示した土製品については、出土地点・寸法・重量等について一覧表を作成しているので参照されたい。文中の遺物を説明する数字は図番号である。

紡錘車（1）　土師質の紡錘車が1点出土している。器面はナデ調整が施されている。なお、直径が大きい方の上面は下・側面と比較して平滑になっており、使用痕の可能性が考えられる。

土錘（2・3）　土師質の土錘が2点出土している。いずれも片端が破損している。器面調整は3でナデが観察できるだけである。紐ずれ痕等の使用痕は認められない。

鞴の羽口（4～15）　住居址とピットを中心に97点（小破片を除く）、総重量5566gが出土している。このうち実測可能な12点を掲載している。なお、実測図では熔滓付着部分をスクリーントーン、その下の器面が灰色に変色している部分を破線（……）で表現している。

出土した羽口は完形品は1点もなく、全形を窺えるものは僅かに10だけである。形態的には直径8cm代の寸胴な器形をもつ10・11と、比較的細い胴をもつ4・7・15等がある。器面調整は指頭圧痕とナデ調整が観察されるものが大半であるが、6・10については板状工具を使って縦方向にナデを施している。また、11は幅約3cmの板状工具を使って器面を面取りしているため、横断面が部分的に多角形を呈している。なお、4は両端に熔滓の付着部分と灰色に変色した部分が観察される。他の羽口では片側にしか熔滓が付着していない点で特異である。

この他については、別表で遺構別の出土点数・重量を掲載している。このうち6基の遺構と検出面からは表面が摩耗した羽口が出土している。いずれも2次的な混入品と考えられるものである。

4．瓦塔（第79図）

今回の調査では14点の瓦塔片が出土しており、このうち1～7を図化し得た。内訳は軸部7点、屋蓋部5点、不明2点の破片であり、基壇部・相輪部は認められない。色調はいずれも橙褐色を呈

第7表　土製品一覧表

（　）：現存値、［　］：復原値

No	出土地点	種　類	長さ(cm)	幅 直径(cm)	厚さ 短径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備　　考
1	排土	紡錘車	3.4	(5.1)	3.9	0.9	(94.6)	上縁1/5欠
2	76住No1	土　錘	(5.1)	2.8	2.7	0.8	(34.4)	片端欠（ほぼ完形）
3	検出面	土　錘	(3.5)	2.1	2.0	0.4	(12.8)	片端欠（ほぼ完形）
4	50住No11	鞴の羽口	(13.9)	7.7	7.3	2.4	(535)	片側欠
5	85住NE	鞴の羽口	(6.2)	[6.3]	—	[2.6]	(95)	片側欠（基部1/2残）
6	85住	鞴の羽口	(9.7)	[6.5]	—	[1.7]	(190)	両側欠（胴部1/2残）
7	85住	鞴の羽口	(11.6)	[6.4]	—	[1.9]	(200)	片側欠（上部2/5残）
8	12土	鞴の羽口	(9.0)	[8.4]	—	[2.5]	(300)	片側欠（上部1/2残）
9	12土	鞴の羽口	(8.5)	[9.2]	—	[2.3]	(195)	片側欠（上部1/5残）
10	23土No1,5	鞴の羽口	12.7	8.6	8.6	2.4	(760)	胴部1/3欠
11	23土No1,5	鞴の羽口	(9.6)	8.8	8.6	2.7	(530)	上半欠
12	P52No1	鞴の羽口	(8.8)	7.7	—	[2.4]	(215)	片側欠（基部2/3残）
13	P52	鞴の羽口	(7.5)	[6.5]	—	[3.0]	(95)	両側欠（胴部2/5残）
14	P52	鞴の羽口	(5.2)	—	—	—	(65)	底部1/4残
15	P237No5	鞴の羽口	(9.9)	[7.2]	—	[1.9]	(160)	片側欠（頭部2/5残）

第8表　鞴の羽口の出土状況

（重量：g）

出土地点	個体数	破片	重量	備　　考	出土地点	個体数	破片	重量	備　　考
4住		4	34	器面摩耗1	23土	>3	3	770	小破片多数
9住		2	44	器面摩耗1	P16		1	12	器面摩耗1
11住		1	41	器面摩耗1	P32		1	23	
17住		1	13	器面摩耗1	P52	>3	21	700	
18住	>1	3	136		P53		4	69	
50住	1	2	1290		P237	>2	9	480	小破片多数
85住	>3	11	615		1溝		1	14	器面摩耗1
10土	2	8	455		検出面		11	228	器面摩耗2
12土	>2	4	555		排土		10	87	

しており、焼成は還元焔による。胎土は緻密で、白色・茶褐色土粒を含む。成形は粘土板成形でヘラ状工具を用い、調整はヘラ状工具によるケズリ・ナデと指ナデによる。出土遺構は19・20・22・81・83・87住と1・3溝で比較的多い。20住は4点を数えるがまとまった出土状況ではない。この他検出面からも若干認められた。出土遺構は多いが、焼成・胎土・調整技法等から同一個体と考えたい。尚、僅か14点の破片で復元模式図を載せているが、全くの想像で作成したものである。

1～4は軸部の破片である。1は19住と検出面からの出土。方形の一辺三間の構成で、壁体は中央部でかなり膨らむ。壁体の厚さは均一でなく、0.6～1.3cmを測る。幅は台輪が付く部分で約15cmと推定され、2に比べ斗栱表現が簡略なことから、二層以上の軸部破片と考えたい。斗栱は貼り付けた突帯をヘラ状工具を用いて逆凸形に切り出し、壁付の三斗を表現する。大斗表現は省略され見られない。隅の斗栱は45°の方向から逸れてつく。破損のため明らかではないが、持ち送りは棒状工具を押しつけて三手先を表現しているものと思われる。2は壁体の厚さ0.7cm程を測る。22住と87住の覆土中からの出土品が接合した。1と同じ手法で壁付の三斗を表現しているが、逆凸形の突帯が2重になり、持ち送りを貼り付けている。尾垂木と手先の三斗は表現されない。3は検出面より得た。台輪が幅1.6cm程の突帯で表現され、その上に持ち送りを貼り付けている。4は22住より出土した。壁体の厚さ0.5～0.7cmを測る。隅には45°の方向に高さ1.5cm、幅1.0cm程の断面台形の突帯がつく。円柱の側柱が表現されているとおもわれ、おそらく初層の破片であろう。

5～7は屋蓋部の破片である。5は83住より出土した。半截竹管状工具による押し引きにより、幅0.8cm、高さ0.4cmの丸瓦が隙間なくあり、平瓦は表現されない。継目は軒先から1cmと3.5cmの位置に認められる。裏面の地垂木は幅 2.0cm、高さ 0.4cmを測る。突帯を貼り付けた後にヘラ状工具を用いて断面三角形に仕上げている。地垂木の間隔は小破片の為に知り得ない。雑な作りと破損の為はっきりしないが飛檐垂木は表現されていないと思われる。屋蓋の反りは軒先近く僅かに認められる。6・7は天井部の破片と考えたい。6は3溝から出土し、厚さ1.3～1.8cm、7は20住より出土し、厚さ0.9～1.1cmを測る。通常は軸受けの部分に心柱貫通の円孔が穿ってあるが、6・7は円形ではなく方形を呈するものと考えられ、特徴的である。

瓦塔の所属時期については、検討する資料が乏しく断定には至らないものの、雑な成形・調整、斗栱表現から、9世紀なかば頃に属すると考えたい。

〈参考文献〉

1：石村喜英　1971　「瓦塔と泥塔」『新版　考古学講座　8　特論（上）』
2：林　和男　1985　「信濃の瓦塔」『信濃』37-4
3：高橋光司　1989　「瓦塔小考」『考古学雑誌』74-3

5．鉄製品（第80～83図）

鉄製品は総計128点、鉄滓は833点総重量にして30kgを越える量が出土している。これだけまとまった鉄製品が出土した遺跡は松本市内でははじめてで、近隣でも本遺跡の上流域で田川の左岸に位置する塩尻市の吉田川西遺跡が知られているにすぎない。吉田川西遺跡は古代遺構から349点にのぼる鉄製品と鍛冶関係資料を出土しており、本遺跡もよく似た様相を呈している。今回出土した資料のうち器種が断定できたものは77点で、不明のものが51点と約４割を占める。不明品のうち５点は亀の子状のひび割れが走る鋳鉄片である。個々の遺物については観察表と実測図を参照していただき、本文では不明品について若干の考察を記述しておく。なお、紙数の都合により実測図は89点、観察表には110点しか掲載できなかったことをあらかじめお断りしておく。

まず、81住出土の83である。下端部の合わせ目など鐸の様相を呈している。小原遺跡、吉田川西遺跡など周辺遺跡からも鉄鐸の出土を見るが、いずれも11世紀後半から12世紀の遺構からの出土で、最大径も３cmを越えない小型品である。また、形状も上端と下端の径が大差ない円筒型である。欠損状況も不自然であり、本品を鉄鐸と断定することは避けた。

２点目は44住出土の図版番号87である。欠損の認められない角棒状の鍛鉄で、錆による膨脹はあるが、径は最大値26×20mm、最小値16×15mmを測り、全長は108mm、重量は140ｇを測る。国内において鉄器の生産が盛んになるのは古墳時代になってからであるが、古墳時代前期においては鉄素材は鉄鋌という形で主に朝鮮半島からもたらされていたと考えられている。これは製鉄と鍛冶が分化していたことを示しており、わが国には鍛冶技術がまず輸入されたという証左である。こうした発展段階を地方にあてはめれば、鍛冶関連の資料は出土しているが製鉄遺跡が発見されていない段階において、鉄素材を先進他地域に求めたことは想像に難くない。本品はその一形態であり、44住は69の鍛鉄片や他の鉄製品の出土状況から鍛冶に関係する遺構と考えたい。このことについては鉄滓の出土状況からも考察を加える必要がある。周辺の鉄滓出土遺構を見ると、44住の西側に近接するＰ237から小振りながら黒色を呈し僅かに木片をかみこむ椀状鉄滓が出土している。Ｐ237は土器を伴出しないため時期が不明であるが、44住あるいは43住をも含め関連を考える必要がある。こうした関係にある遺構グループは他にも81住または83住と25土坑、26住と12土坑がある。また、16住は黒色を呈し木片や炭化物を多量にかみこむ大形の椀状鉄滓をはじめ多量の鉄滓を出土している。鍛冶遺構と見て差し支えなかろう。若干時期差があるが10土坑との関係も合わせて指摘しておきたい。このほか16土坑、23土坑、42土坑、Ｐ２、Ｐ49、Ｐ55、Ｐ247など良質な鍛冶滓を出土する遺構があり、今後鞴などの資料と合わせて検討する必要がある。

〈参考文献〉

1：長野県埋蔵文化財センター　1990　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書-塩尻市内その2-吉田川西遺跡』

2：雄山閣出版　1991　『古墳時代の研究 第５巻 生産と流通Ⅱ』

3：ニューサイエンス社　1983　『考古学ライブラリー15 製鉄遺跡』　窪田蔵郎

第9表　鉄製品・鉄滓観察表

出土遺構	図版番号	器種名	特　　徴
1住	86	火打金具	ほぼ完形、山形で裾部が緩やかに立上がる
	5	刀子？	両端欠
3住	18	刀子	身部のみで先端を欠き、棟が厚い
		不明	L字形を呈す
4住	66	紡錘車	紡軸のみ、両端欠
	60	不明	片端をつぶしまるめている
	57	釘	尖端欠
	20	刀子	両端を欠く、両関をもち棟は厚く関も明瞭
	74	不明	両端欠、鎌か
		紡錘車	紡軸の一部
	44	釘	両端欠
5住	70	不明	厚い長方形の鋳鉄
8住	45	釘	尖端欠、頭部はつぶれる
	59	釘	尖端欠、頭部は大きく長方形に折曲がる
		不明	断面円形の太い棒状
10住	58	釘	頭部を僅かに欠く
		不明	
11住	27	鎌	端茎で僅かに逆刺のつく片丸造の三角形、茎部先端欠鋲による膨張著しい
	13	刀子	僅かな両関をもつ細長身形両端欠
13住	17	刀子	僅かな両関をもつ細長身形身部を1/2程度欠く
16住	73	鎌	基部から刃部に向け徐々に減幅して行く、左鎌で全体に厚い、ほぼ完形
18住	35	平引鉄	脚部のみ、木質付着
		不明	断面方形の棒状、片端つぶれる、鉋か
19住	61	紡錘車	軸部両端を欠く
20住	25	刀子	大型で茎部の大部分と身部の先端を欠く、茎部裏に木質付着
	31	不明	鎌の茎か
23住	79	鎌	基部と刃部の境で急激に湾曲する、身部厚は非常に薄く着柄部に木質が付着する
24住	49	釘	頭部を欠く
	48	釘	尖端が曲る
	56	釘	尖端僅かに欠、遺存状況良
	55	釘	僅かに曲る
27住	23	刀子	身部は剃刀状に薄い、棟側に木質付着、鞘の痕跡か、両端を欠く
		不明	断面方形の棒状
29住		不明	断面方形の棒状、工具か

出土遺構	図版番号	器種名	特　　徴
29住	21	刀子	細長形で棟関をもつ、刃部研ぎ減り著しく先端を欠く茎部先端に木質付着
30住	53	釘	頭部のみ
	41	不明	断面方形の棒状、曲る
31住	80	鋤先	端部は丸く、袋部は浅い
	76	鎌	基部から刃部に向け徐々に減する、先端欠
32住	67	紡錘車	紡軸の一部
	16	刀子	茎の一部
33住	72	鎌	身幅の割合に小型か、刃部の大半欠、左鎌
		釘	膨張著しく尖端欠
	4	刀子	茎のみ、木質付着
		不明	断面円形の棒状、紡軸か
36住	42	釘	頭部欠
43住	89	鉢	縁辺3/5を欠く、底部に突起があった痕跡から鋳鉄製と推測する
	62	紡錘車	紡輪
	29	鎌	逆刺の小さい両丸造の長三角形式、茎被は膨張著しい茎部先端を僅かに欠く
	14	刀子	完形、小型で茎部が長い、不明瞭な両関をもつ
		不明	棒状
44住	75	鎌	基部のみ、薄い
	50	釘	先端欠、頭部大きく折曲る
		釘	頭部欠、膨張著しい
	6	刀子	茎部僅か、木質付着
	7	刀子	刃部から茎部僅か、両関で棟側は明瞭
	69	不明	鋳鉄、方形の板状、縁辺欠
	87	不明	半製品の鉄棒か、140g
47住	40	不明	長方形の断面を持つし字型鉄か、両端欠
		不明	棒状で断面丸からつぶされ楕円に変わる
		不明	断面方形の棒状、鎌の茎か
48住	11	刀子	刃部から茎部、両関
54住	33	不明	尖端をもつ断面方形の棒状上部が偏平になる、鎌の茎
55住	34	不明	紡軸？一部に棒が残る
	65	紡錘車	棒軸の一部
61住	19	刀子	細長形で両関をもつ、棟厚く刃部研ぎ減り著しい
63住	3	刀子	茎の一部
70住	22	刀子	細長形で両関をもつ、鞘い

出土遺構	図版番号	器種名	特　　徴
70住	32	鏃	長茎の片刃箭式で関をもつ茎部の大半を欠く
	24	刀子	身部は刺刀状に薄い、棟側に木質付着、鞘の痕跡か
71住	37	雲引鉄	大型で刃は鋭さに欠ける、一方の脚部先端を欠く
73住	28	鏃	両丸の長三角形式、篦被部は膨張し茎部を欠く
81住	36	雲引鉄	中間部分を欠く、刃は鋭利で一方の脚部に木質付着
	71	鑿鉋	茎の刃側で大きく曲る、刃は鍛造と推測するが膨張により定かではない、茎部先端を僅かに欠く
	83	不明	鉄板を円錐に近い円筒状に巻き上部を欠いている
83住	9	刀子	棟の厚い細長形と推測する身の一部のみ
	10	刀子	刃部から茎部僅か、両関で棟関は明瞭
	85	不明	三角形の板状
90住	84	鉸具	全長75mm、最大幅53mmを測る大型品、枠部はホタテ貝形を呈しT字型刺金をもつ
1土坑		不明	断面方形、尖端をもつ
6土坑	12	刀子	両端欠、無関の小型品
12土坑	82	楔	細身の短冠型
		不明	断面方形の棒状
		不明	膨張著しい、鑿あるいは雲鉋など工具の身部か
	2	刀子	身部から茎部、両関をもつ膨張著しい
		不明	雲引鉄の一部か
	1	刀子	厚い棟側が減幅する、棟関膨張著しく茎部を欠く
25土坑	39	鎹	1/2程度
	77	鎌	基部は直線に僅かに増幅しながら部に向う、全体的に薄く基部端から70mm程度の直線部分から刃が形成される、大型のほぼ完形品
	78	鎌	77と同規格、折返し部の先を僅かに欠く
38土坑		不明	長楕円の断面をもつ棒状、両端を欠き曲る
2P		不明	棒状、磁性弱い
53P	88	不明	断面円形の棒状、残存する端部に木質付着、工具の茎
		不明	断面方形の尖端をもつ棒状
1溝	54	釘	膨張著しい
3溝	81	鉸具	枠の一部

出土遺構	図版番号	器種名	特　　徴
A区	53 54	紡錘車	紡輪、軸部の痕跡を残す、他に紡軸の2片
	43	釘	頭部欠
	26	刀子	茎部のみ、目釘穴あり
	5	刀子	刃部のみ、棟厚く刃側が減幅し尖端を形成
	30	不明	棒状で片端がつぶれる、先端を欠く
	47	釘	尖端欠
		不明	断面方形の棒状、中央が最も太く1端が尖り他端欠
B区	8	刀子	刃部のみ、棟厚い
	51	釘	頭部大きく折れ曲る、端欠
		釘	膨張著しく先端を欠く
検出面		不明	断面方形の棒状、両端欠
	38	鎹	完形、脚部が長い
	46	釘	先端曲る
	68	不明	先端で何かを挟む形状

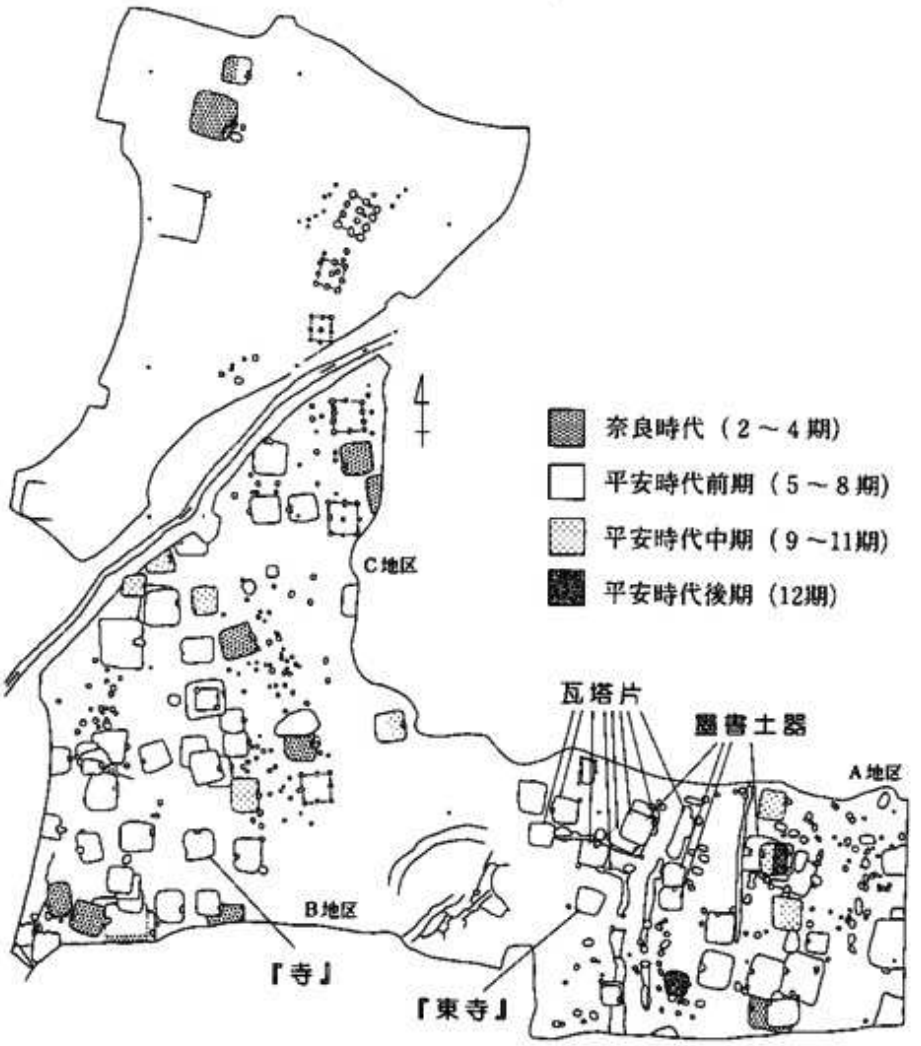
出土遺構	総重量g	特　　徴
3住	780	小型の椀状鉄滓2点と塊状鉄滓2点ずつ塊状鉄滓のうち1点は磁性あり
4住	611	椀状鉄滓の中型と小型のもの1点ずつ椀状鉄滓は黒色で炭化物を含む
5住	380	磁性のある小型塊状鉄滓2点ほか
9住	580	中型の椀状鉄滓1点のみ
10住	474	中型の椀状鉄滓1点ほか
16住	3192	大型の椀状鉄滓3点ほか
17住	931	小型の椀状鉄滓2点ほか
47住	855	黒色で炭化物が付着する椀状鉄滓片3点を含む
85住	1414	小型の椀状鉄滓2点と偏平なもの1点
89住	170	鉄塊
10土坑	676	小さな塊状鉄滓115点
12土坑	215	椀状鉄滓片2点を含む
16土坑	2845	中型の椀状鉄滓と塊状鉄滓3点ずつ、ほかに小さい塊52点
23土坑	1550	中型の椀状鉄滓2点ほか
42土坑	1245	検出時点から厚い焼土を確認、塊状鉄滓が小さいものも含め18点
P2	1445	椀状鉄滓3点を含み48点
P49	3780	椀状鉄滓大型のものから小型のものまで11点、黒色で気泡を多く含み裏側に炭化物が付着する
P53	530	小さい塊状鉄滓48点
P237	1580	気泡を多く含む椀状鉄滓4点ほか
A区北部	1035	裏側に粘土が付着する気泡の少ない椀状鉄滓

第4章　調査のまとめ

本遺跡名は「平田本郷」としたが厳密には「本郷」は神社の東側で現在の集落地区に当たる。調査地は北前堰の南側が「若宮」、北側が「西浦」に該当する。

未調査の6軒を除く88軒を遺物により時期別に分けると、奈良時代（2～4期）11、平安時代前期（5～8期）65.8、同中期（9～11期）6.6、同後期（12期）1.5、不明3軒となり、75%を占める平安時代前期が圧倒的に多く、後期は極端に少ない。

さて住居址の施設を概観すると、カマドは60軒に見ることができる。石組、あるいは石芯粘土が



主となり、粘土カマドは4軒程である。カマドは隅部が3軒、北側が6軒で、他は西あるいは東に位置する。住居址内にピットをもつものは17軒あり、このうちピットが柱穴と認められるものは6軒、うち1軒のみ4本柱が揃っている。が、いずれの掘り方もかなり浅いことが目立っている。

掘立柱建物址は6棟で、総柱4、側柱2である。このうち5棟が堰を挟み、南北50m内に並ぶ。少ない遺物ながら3・4建が2～4期の土器を出す。これは時期別住居址の比率を反映させるかは疑問であり、又、住居址の数に比べこの6棟という数は貧弱である。ピット・土坑の占地の様子は前項で述べたように粗密対照的である。又、特に触れなかったが、P8・P10・P11からは黒色土器杯のみが多量に出土し、食器類のうちの特定なもののみが小穴に投棄される様子が見られた。A・B地区の間は遺構が検出できなかった所である。ここには検出面上部に南西～北西へ最大厚40cmの大量の礫層があり、この為に遺構が流失してしまったとも考えられる。すぐ脇にも小幅ながら6～8溝が同方向に流れ、自然流路があったことを示している。

遺物はもっとも古いもので土師器高杯など5世紀中頃のものがごく僅かある。新しいものとしては平安時代後期（12、3期）の灰釉陶器椀、土師器椀などで、中世の遺物は皆無であった。遺構の重複と異時期の遺物混入が多いなか43・46住は8期の良好な資料を出土する。両者とも単層の覆土で床面上全体に広く遺物が多く、その点で一括性が高いと言える。

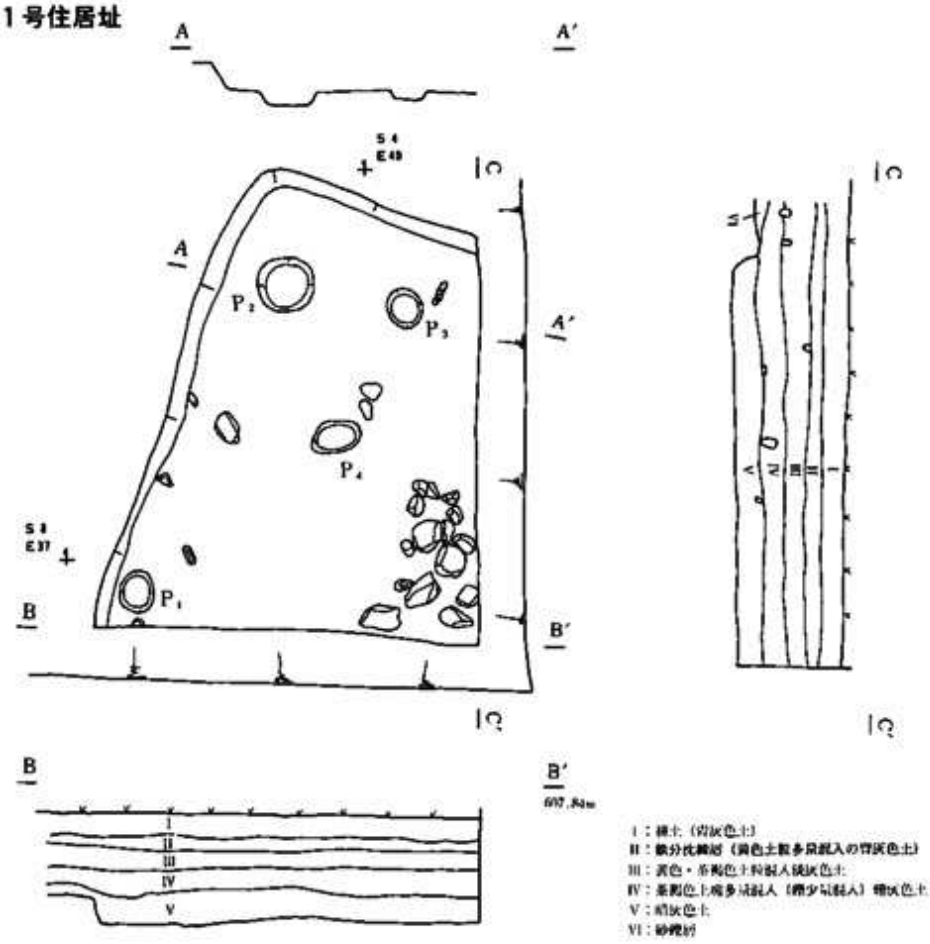
やや特殊なものとして瓦塔がある。7期の遺物に多く含まれ、同一片らしい。これらは6軒の住居址と2条の溝から得られた。位置的にはA地区の北西に集中する。ここは南からの1溝、それに平行した3溝、更に西から4溝が集っている。墨書土器も多く、9・17・18・20の上位4軒からのもので計47点、これは全118点のうちの40%に当たる。又、2軒の住居から『寺』・『東寺』という墨書を得た。こららの時期も7期で瓦塔に一致する。

鉄器の鉢は43住床面から逆位で出土した。製作上では底部外面に突起がありここを鋳口としている。鉄鍋でなく、鉢の器形に注目したい。県内では箕輪町を含め数例あるらしいが、もっとも残りの良いものとなろう。仏教的祭りに使用されたのであろうか。この鉄器を含め、鉄製品は128点と多く、鞴の羽口も総点数17個体以上、鉄滓等は800点以上もあり、これらから当然小鍛冶の存在を考えなければならない。

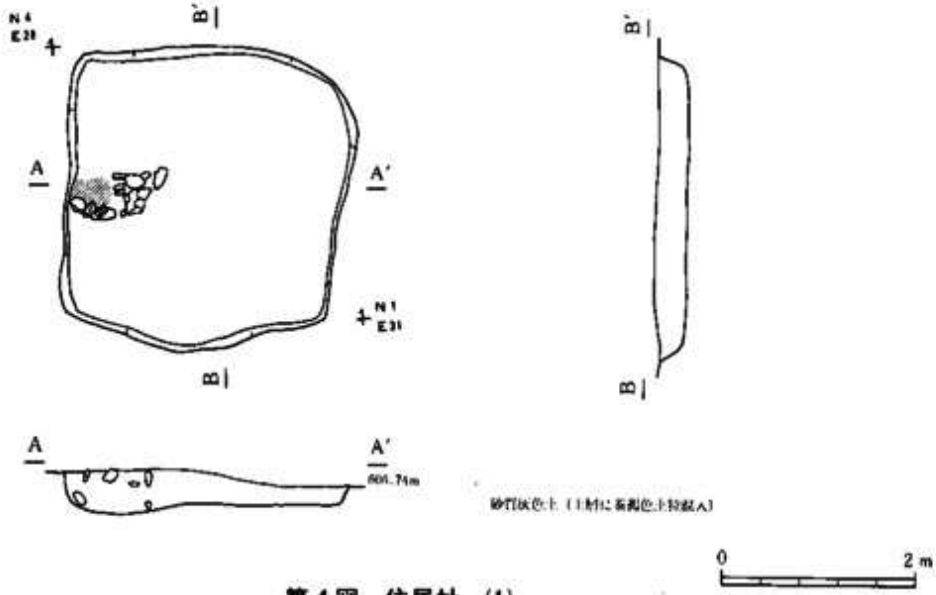
以上のことからこの集落を推考するに、平安時代前期前半から人家が増え始め、後半になると鉄器なども生産しながら集落は全盛を迎える。人々は寺を建立しなくともその代わりとして信仰の対象に溝で区画した場所に瓦塔を祀った。後半になると急激に人口が減り、集落は途絶える。その原因は集落に入ってきた奈良井川の洪水かもしれない……。

平田地区においての発掘は今回がはじめてであり、予想した以上の成果を得られた。しかし反面、堰北側のD地区まで細かな調査を行う時間的余裕がなく、中途のまま終了せざるを得なかった。真冬という調査時期を含め今後の検討課題としなくてはならない。

第１号住居址

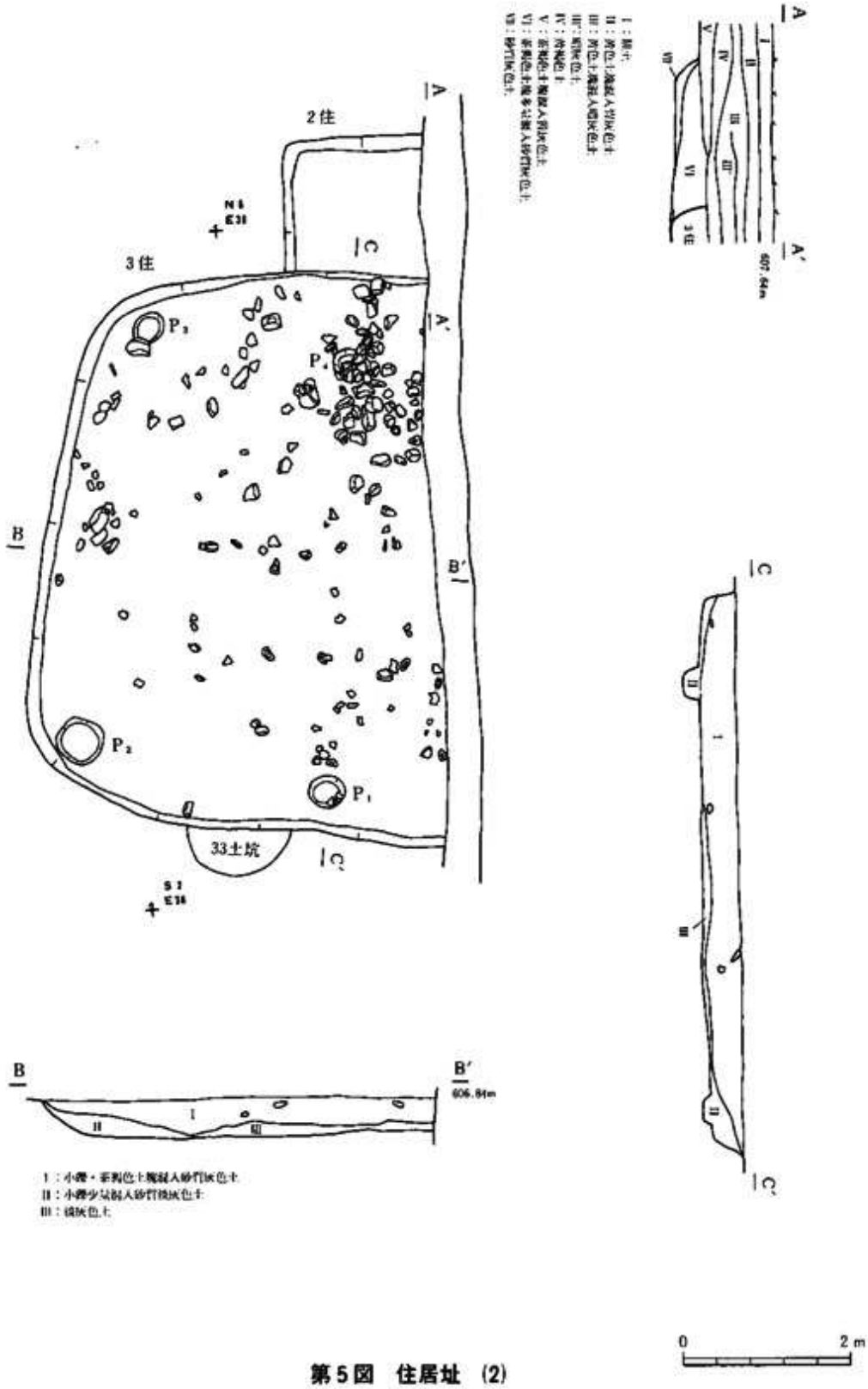


第６号住居址



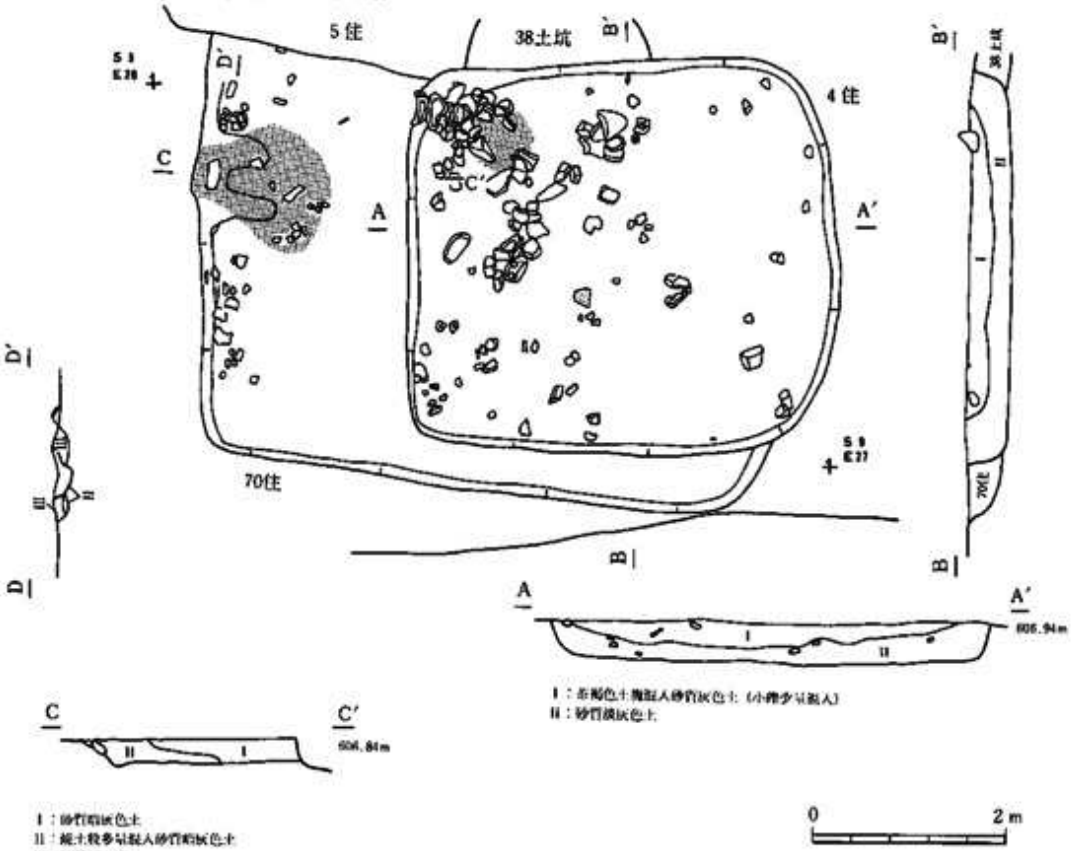
第４図　住居址（1）

第２・３号住居址（遺物出土状況）

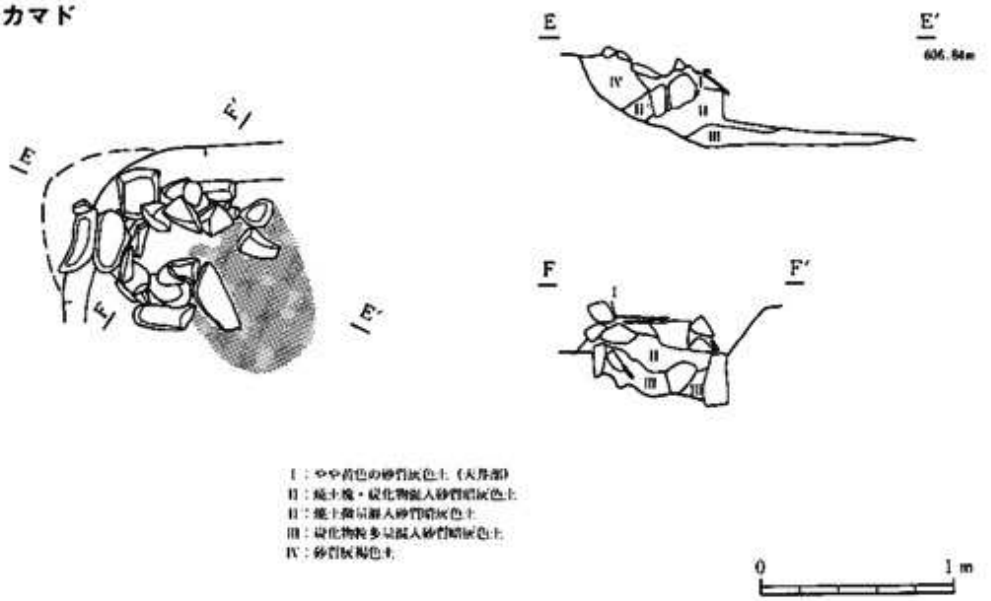


第５図　住居址（2）

第4・70号住居址（遺物出土状況）

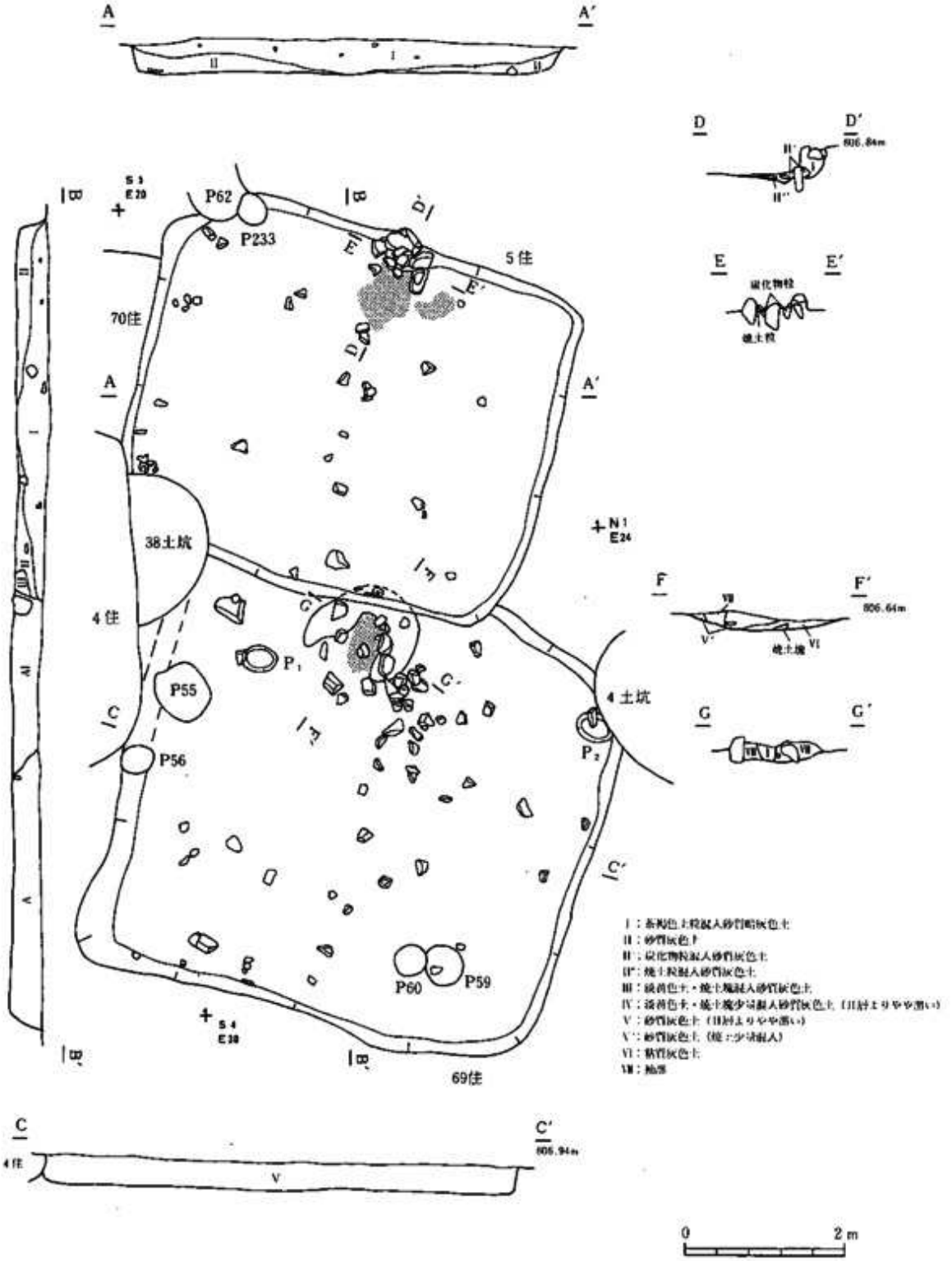


4住カマド



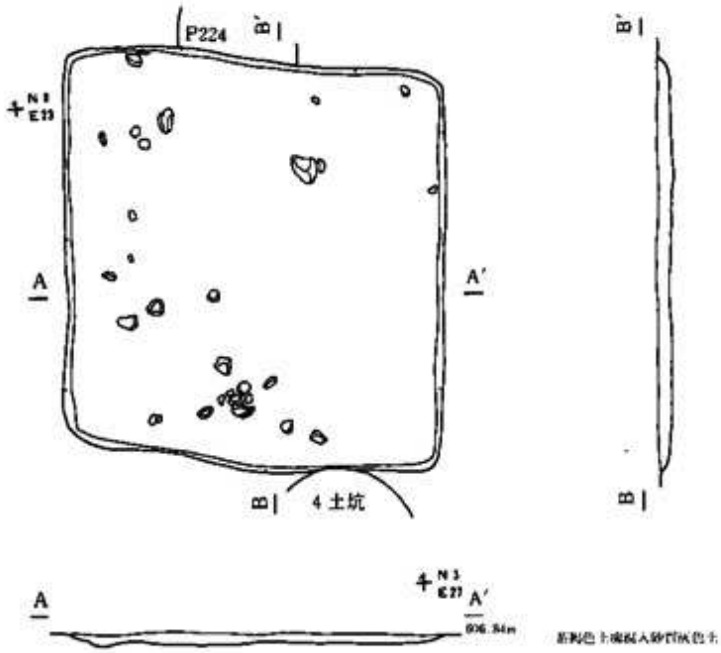
第6図　住居址（3）

第5・69号住居址（遺物出土状況）

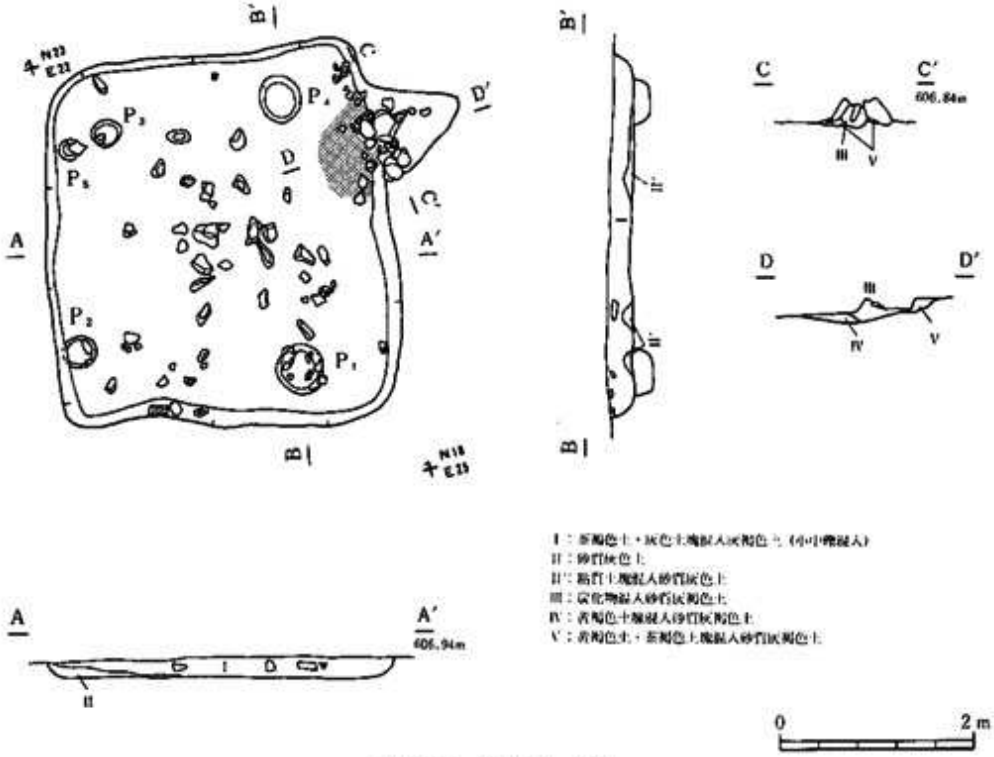


第7図　住居址（4）

第７号住居址

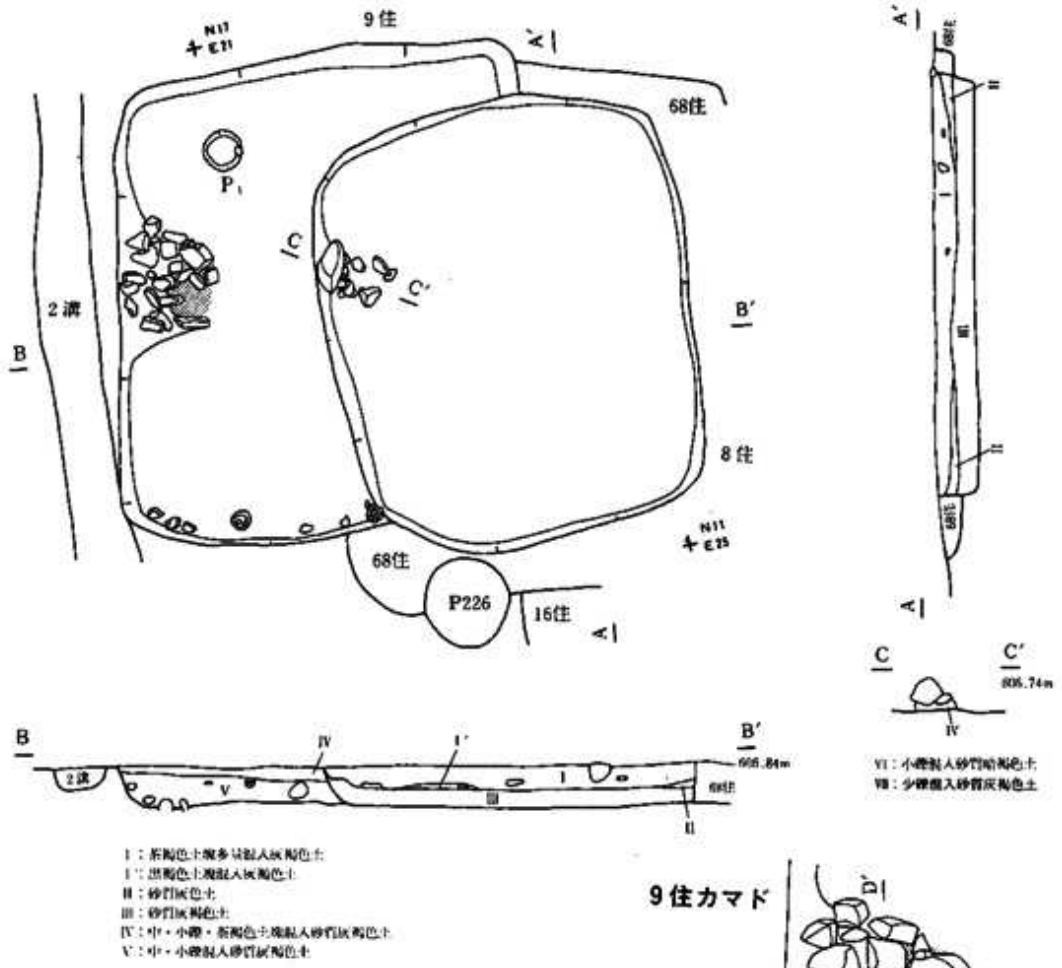


第10号住居址（遺物出土状況）

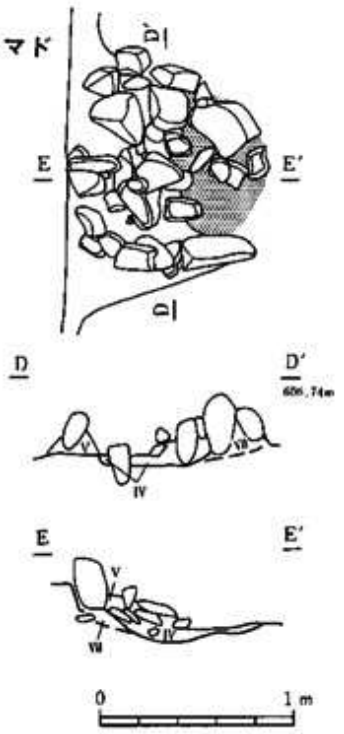


第８図　住居址（5）

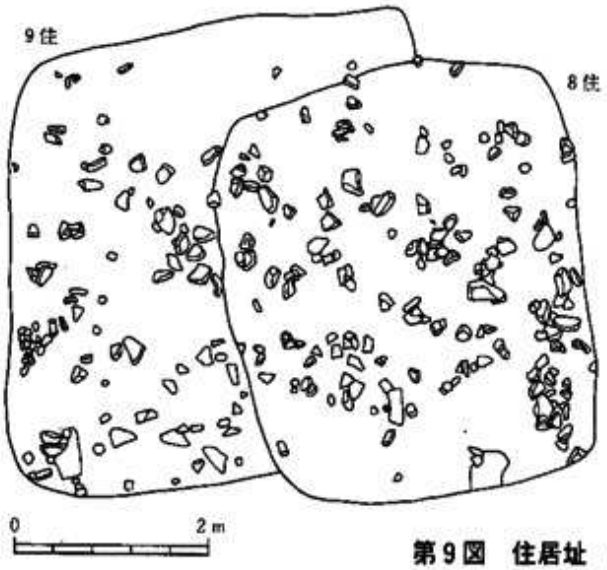
第8・9号住居址



9住カマド

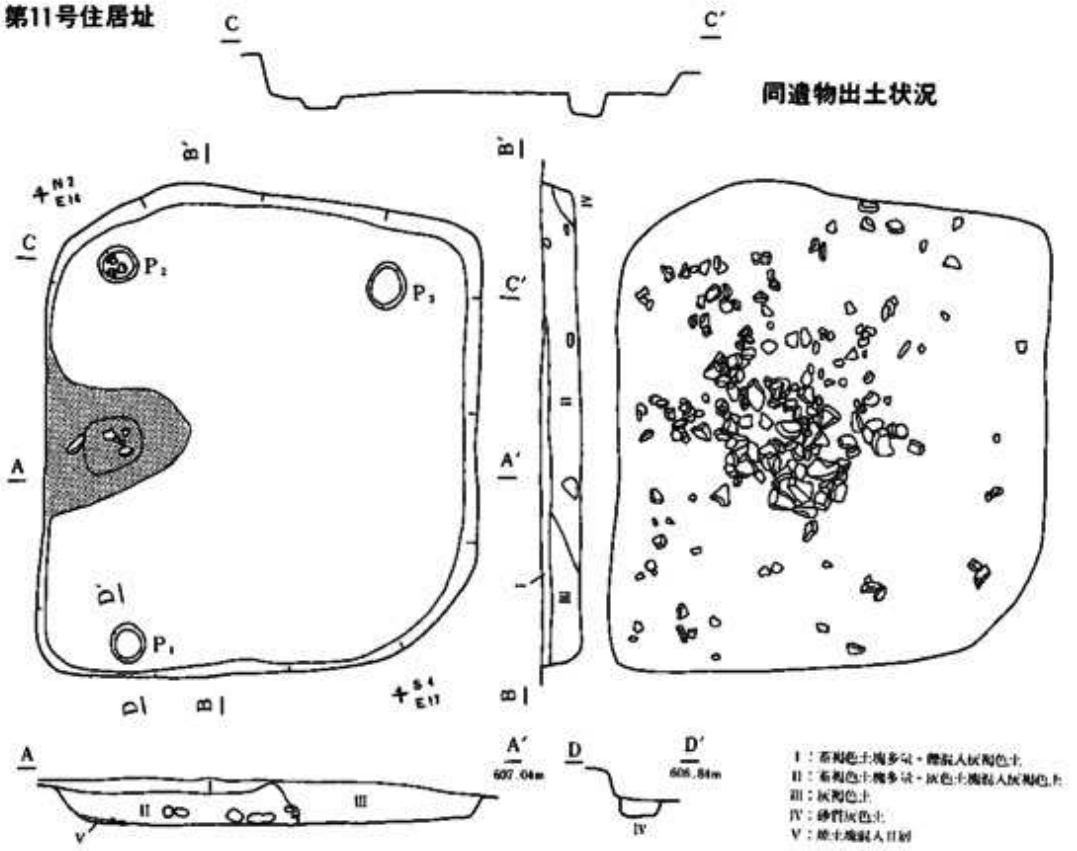


同遺物出土状況

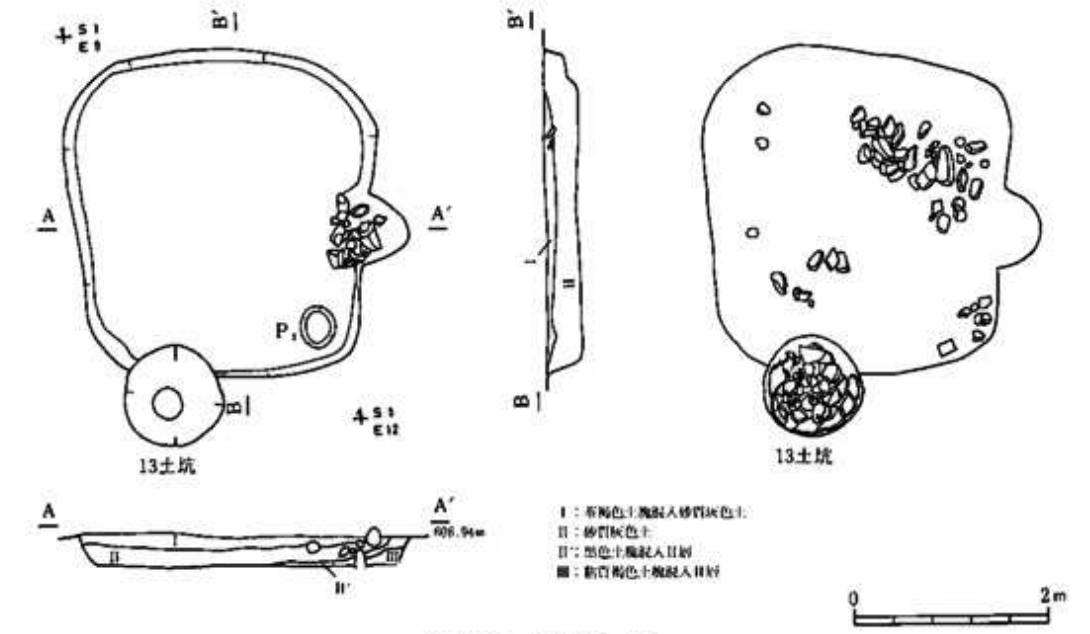


第9図　住居址 (6)

第11号住居址

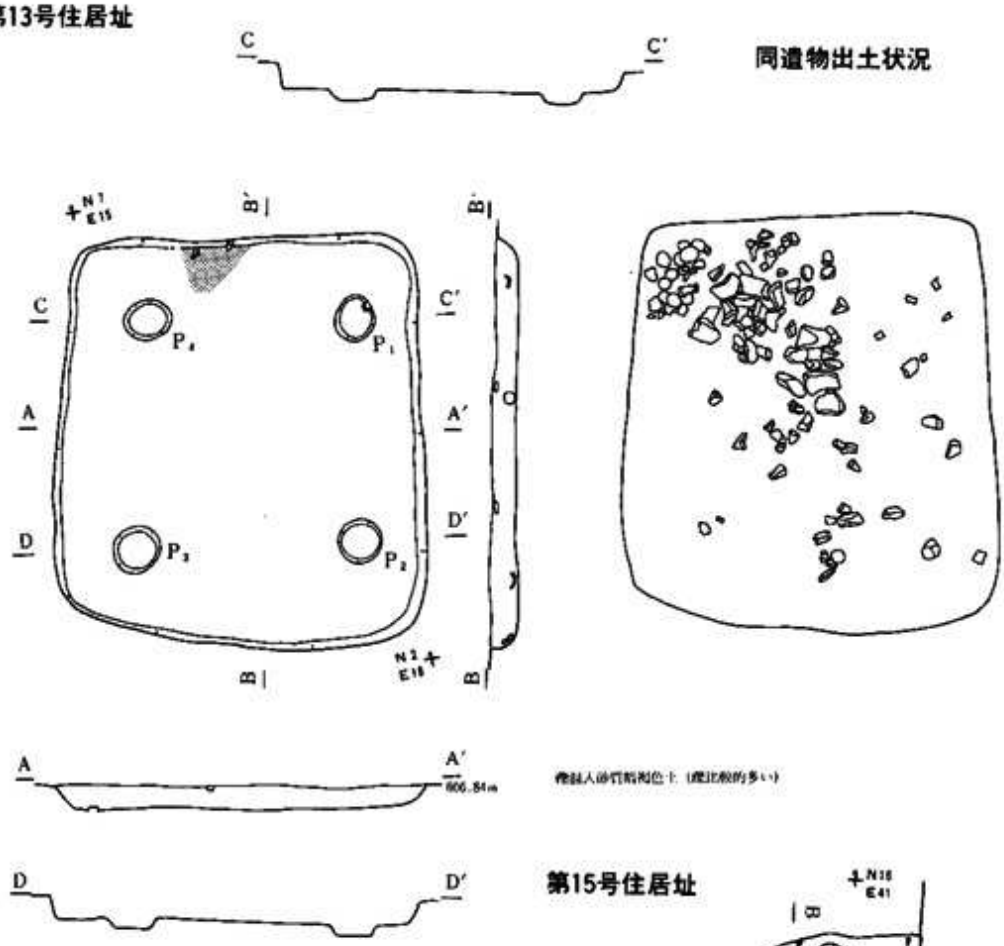


第12号住居址

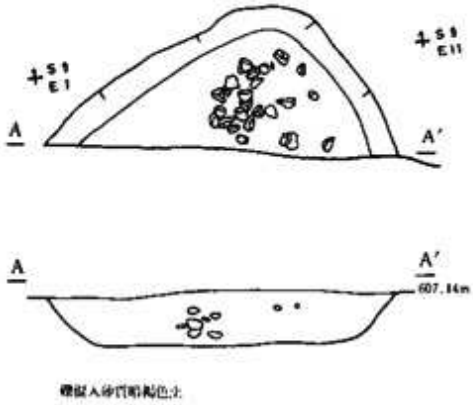


第10図　住居址 (7)

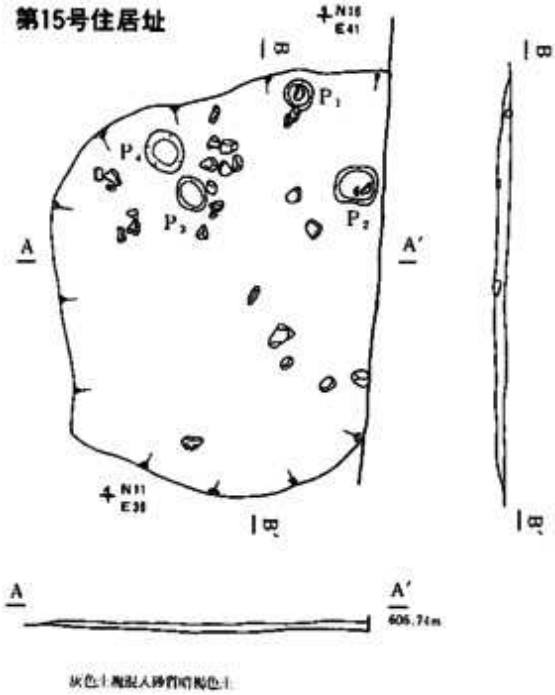
第13号住居址



第14号住居址

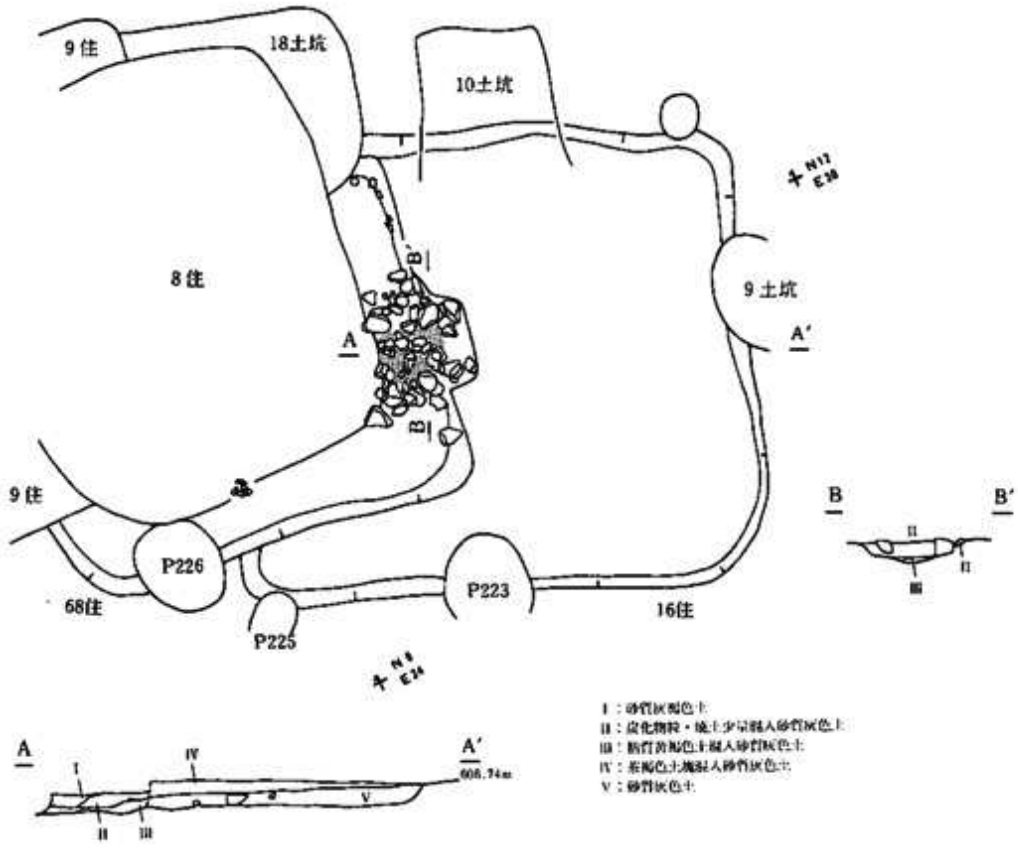


第15号住居址

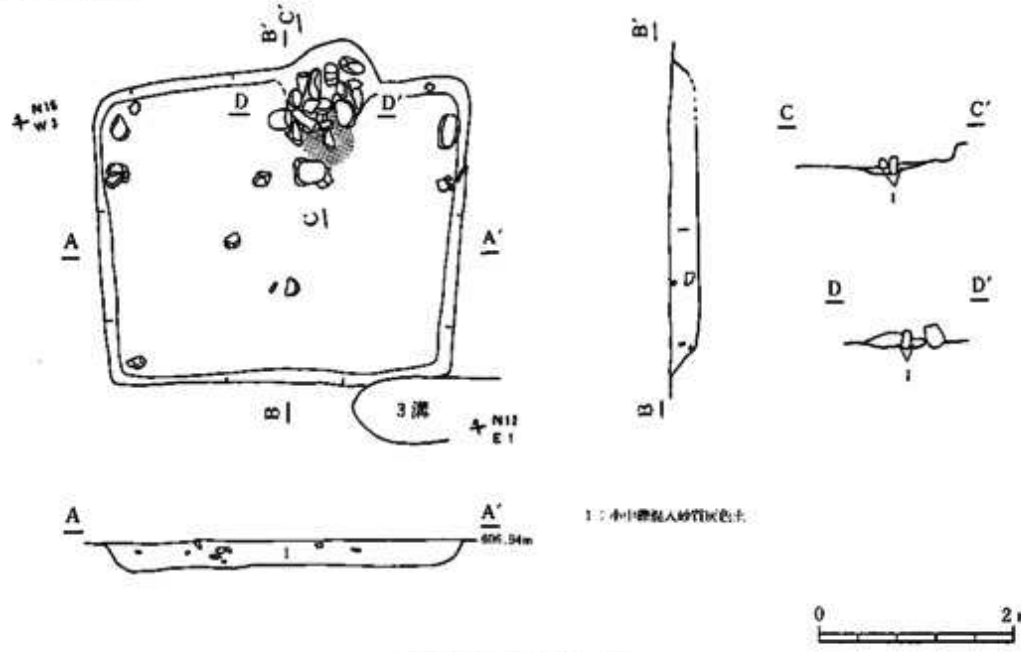


第11図　住居址 (8)

第16・68号住居址（遺物出土状況）

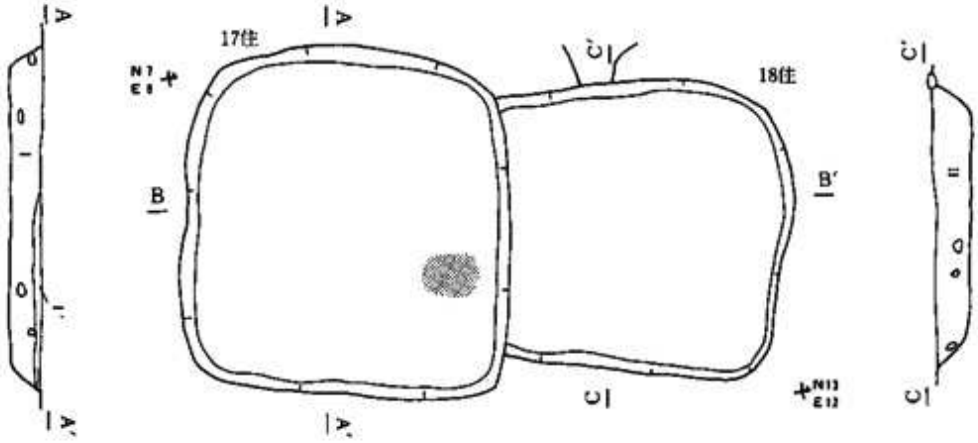


第19号住居址



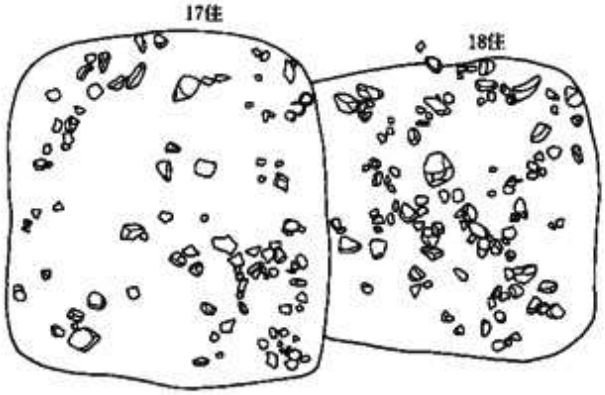
第12図　住居址（9）

第17・18号住居址



I：砂質ローム色土
I'：茶褐色土(焼土入砂質ローム色土)
II：茶褐色土(焼多量入粘質ローム褐色土)

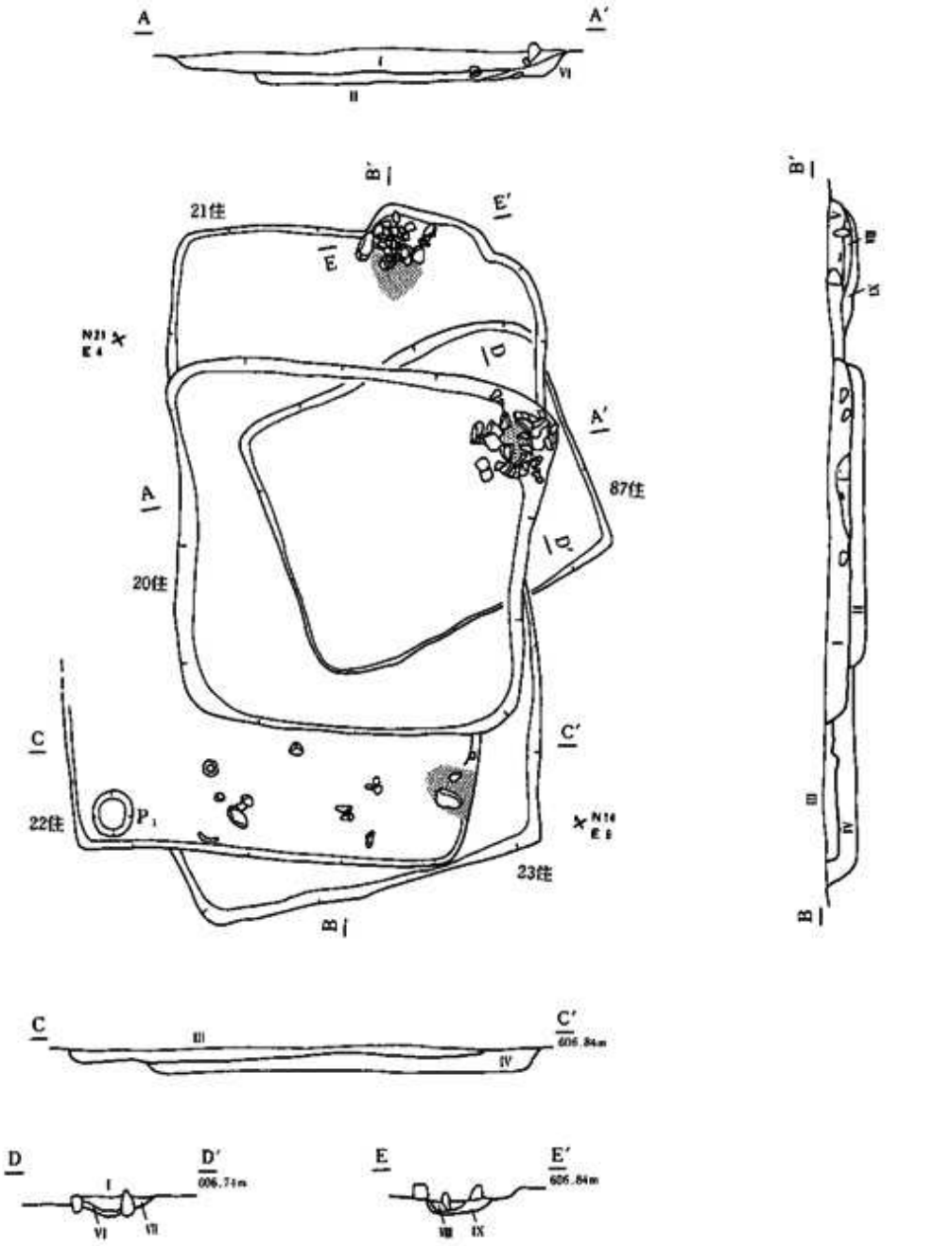
同遺物出土状況



0　2 m

第13図　住居址 (10)

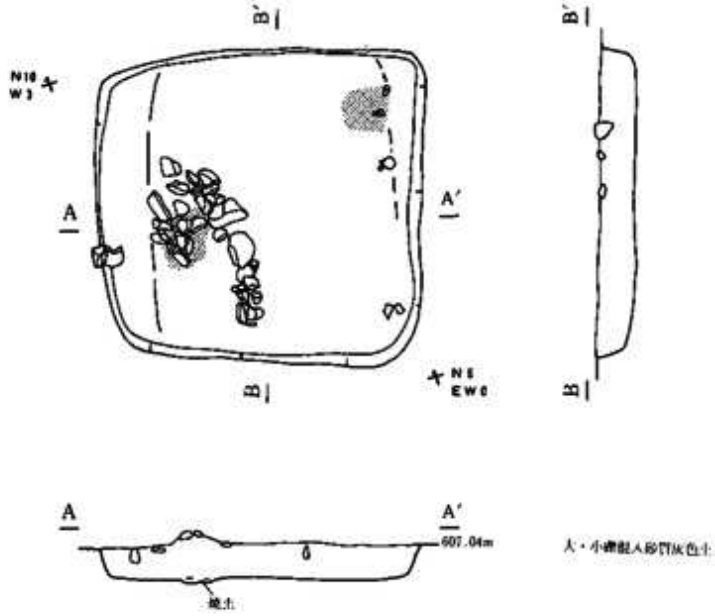
第20・21・22・23・87号住居址



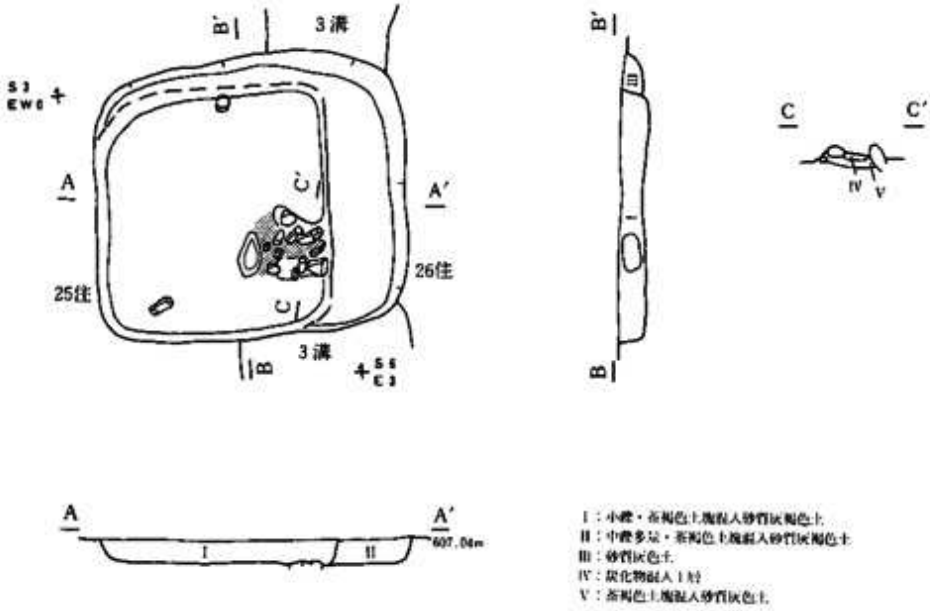
Ⅰ：礫（φ3～10cm）少量混入砂質灰色土
Ⅱ：炭化物粒混入Ⅰ層
Ⅲ：小礫多量混入砂質暗灰色土
Ⅳ：小・中礫混入砂質灰色土（部分的に粘質灰色土）
Ⅴ：砂礫質層（一部砂質灰色土）
Ⅵ：褐色土塊・炭化物粒混入砂質灰色土
Ⅶ：炭化物混入砂質灰色土（焼土ボロ混入）
Ⅷ：灰色砂層
Ⅸ：焼土塊・炭化物粒混入砂質灰色土
Ⅹ：炭化物混入砂質灰色土

第14図　住居址（11）

第24号住居址

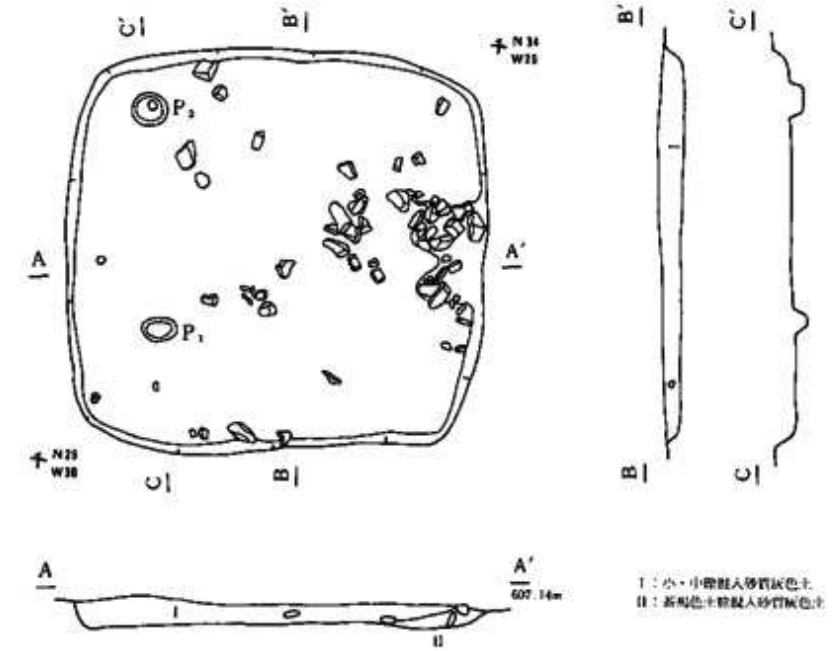


第25・26号住居址

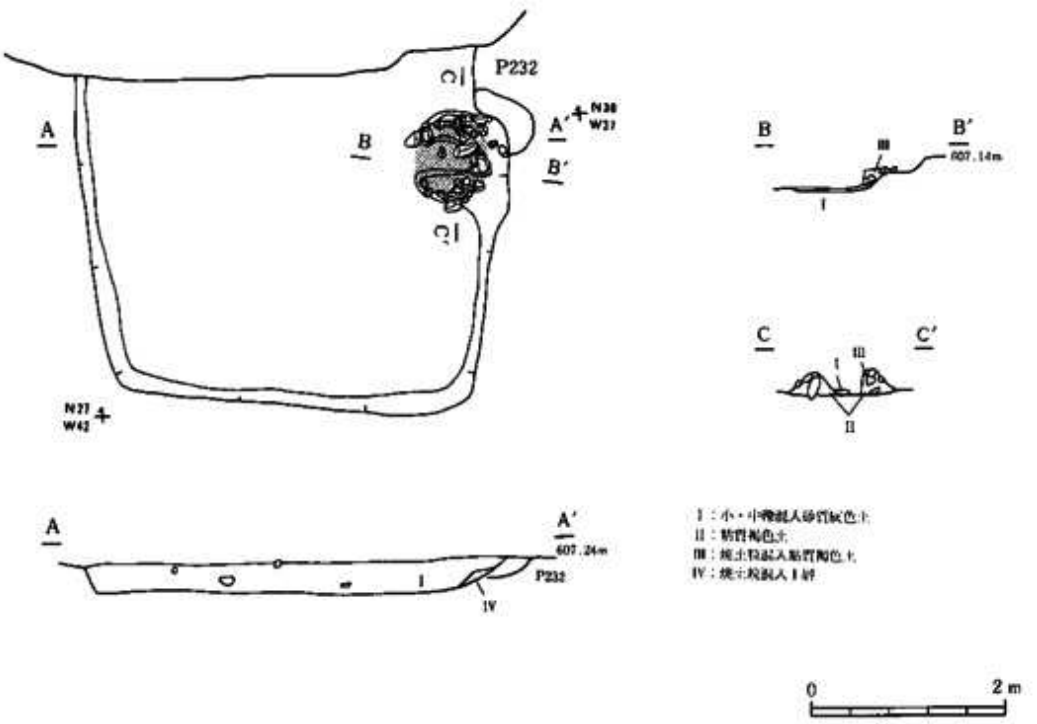


第15図　住居址 (12)

第27号住居址（遺物出土状況）

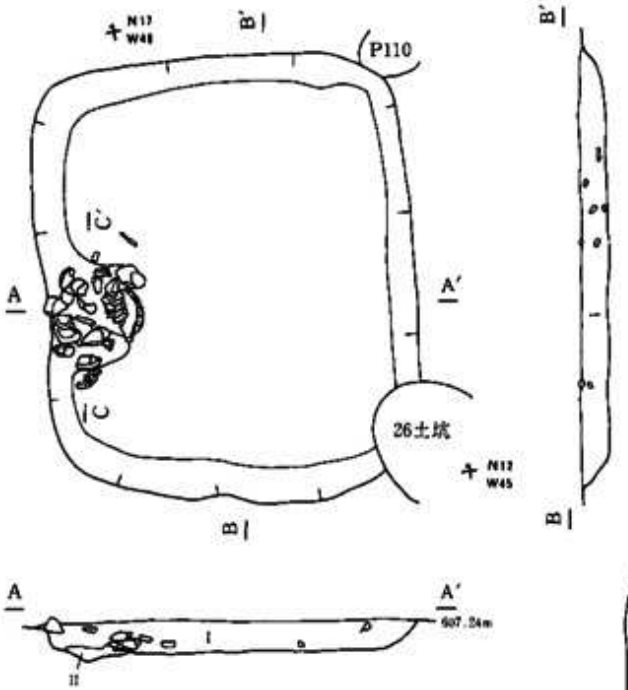


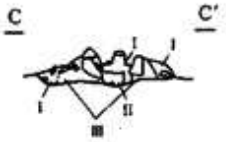
第28号住居址



第16図　住居址（13）

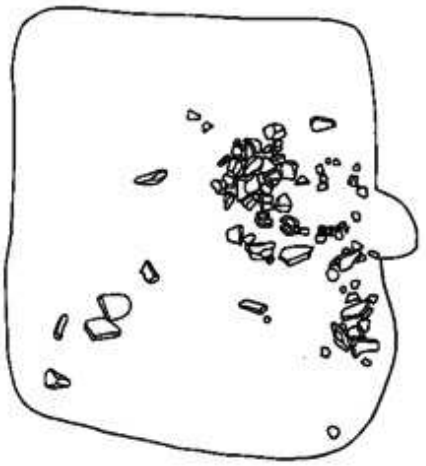
第29号住居址

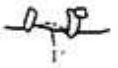




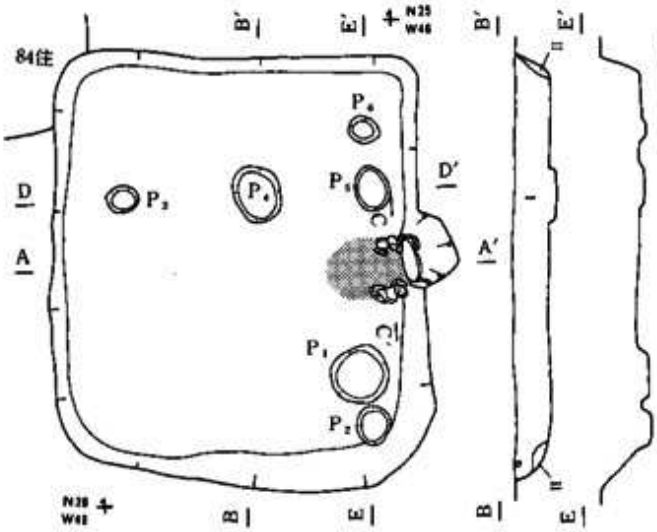
I：小・中礫多量混入灰褐色土
II：炭化物粒混入砂質暗褐色土
III：粘質褐色土塊多量混入砂質褐色土

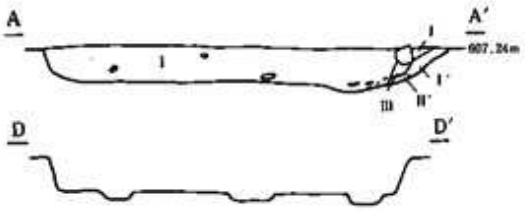
30住遺物出土状況



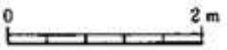


第30号住居址



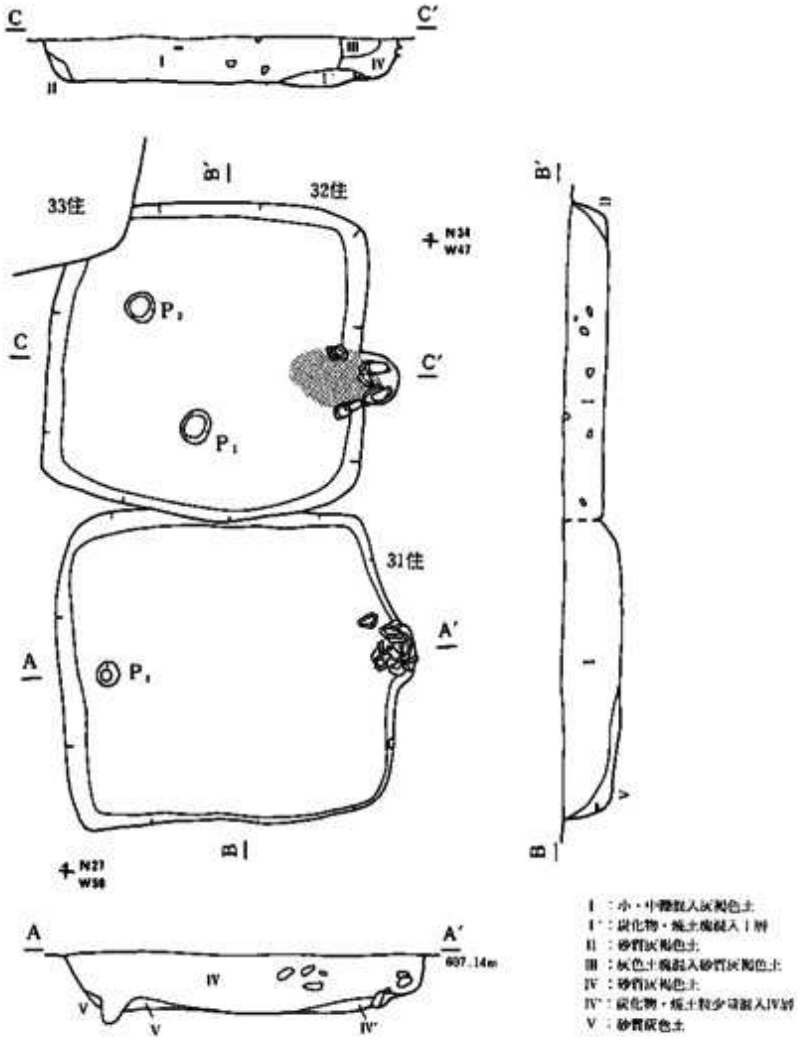


I：小・中礫多量混入灰褐色土
I'：焼土塊混入灰褐色土
I''：炭化物混入灰褐色土
II：砂質灰色土
III：やや粘質灰色土

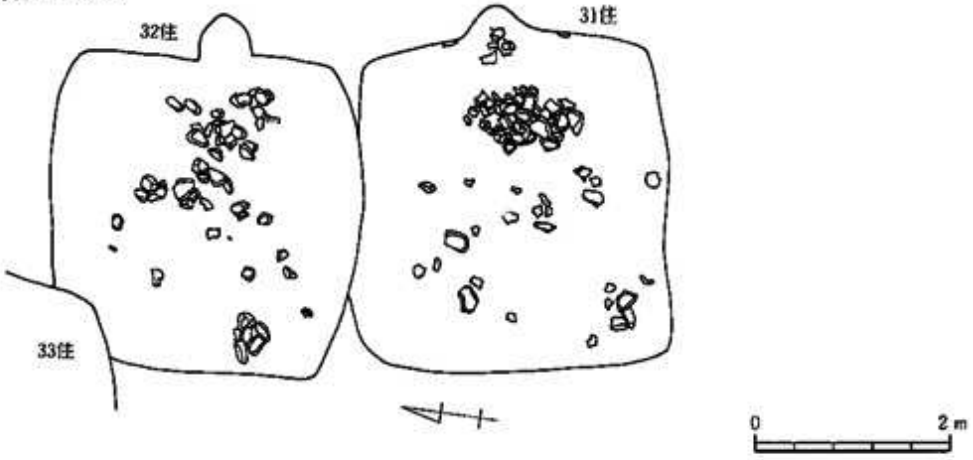


第17図　住居址 (14)

第31・32号住居址

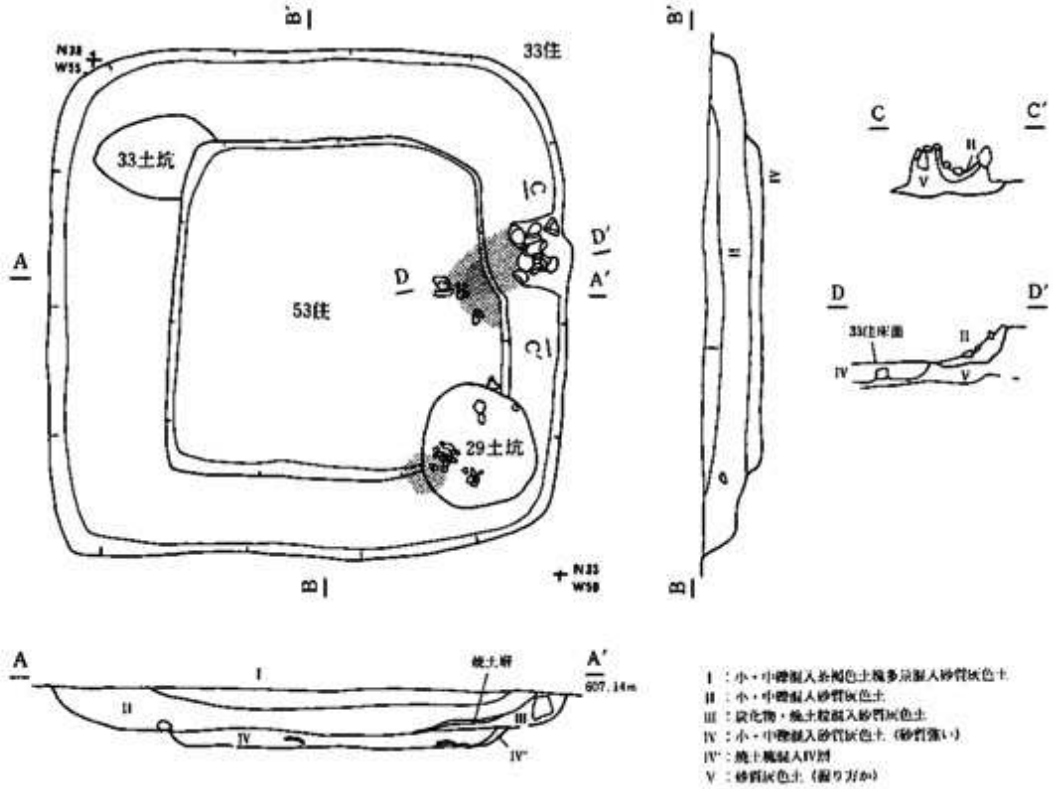


同遺物出土状況

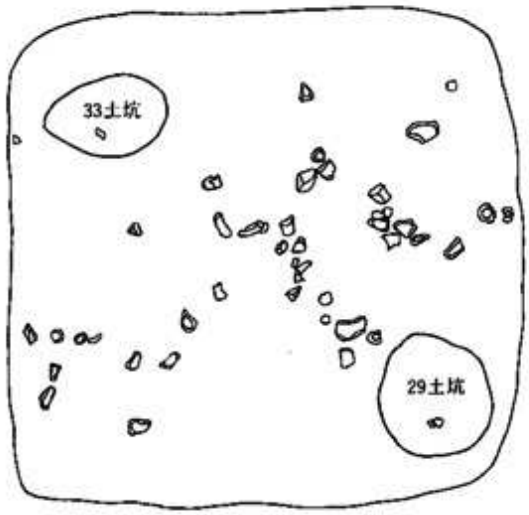


第18図　住居址 (15)

第33・53号住居址



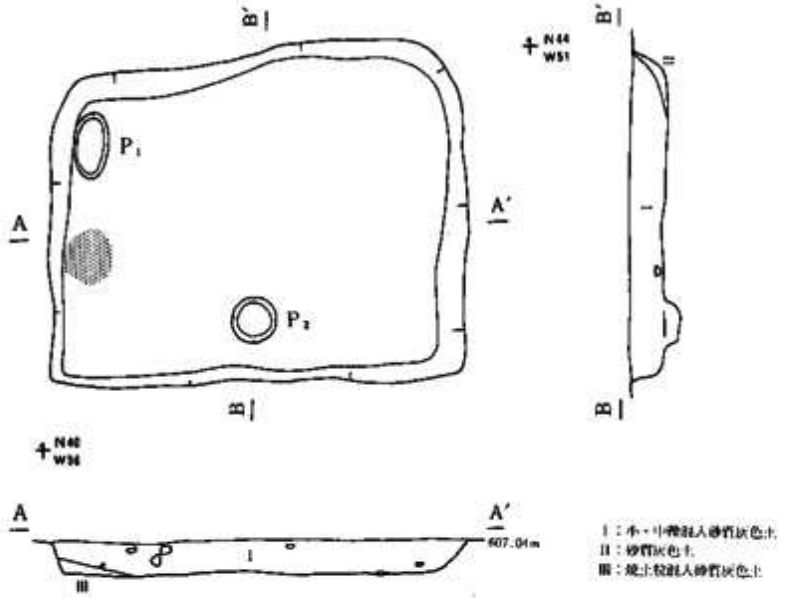
33住遺物出土状況



0　2 m

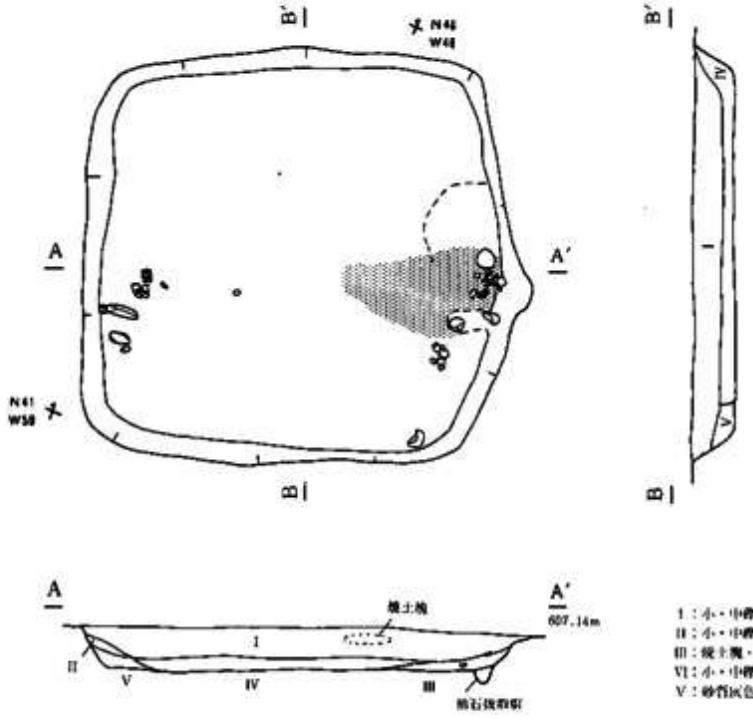
第19図　住居址 (16)

第34号住居址



I：小・中礫混入砂質灰色土
II：砂質灰色土
III：焼土粒混入砂質灰色土

第35号住居址

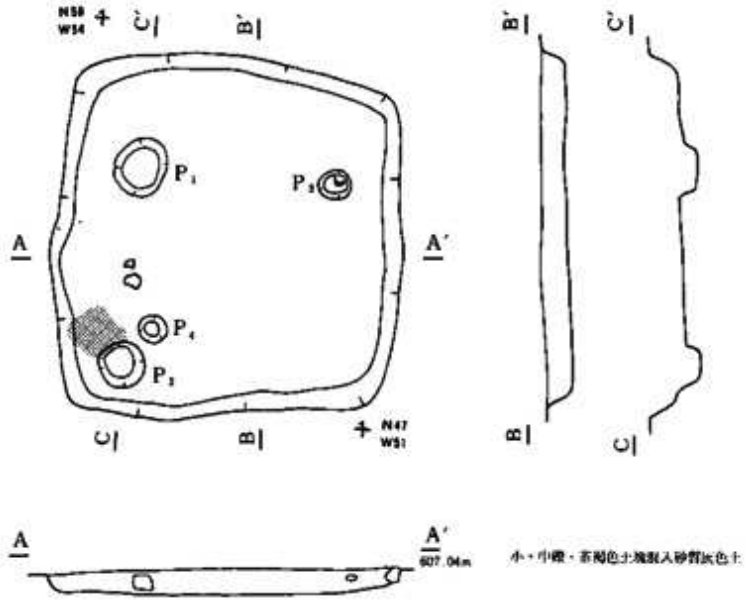


I：小・中礫混入灰褐色土
II：小・中礫多量混入灰褐色土
III：焼土塊・炭化物混入灰褐色土
VI：小・中礫多量混入灰褐色土
V：砂質灰色土

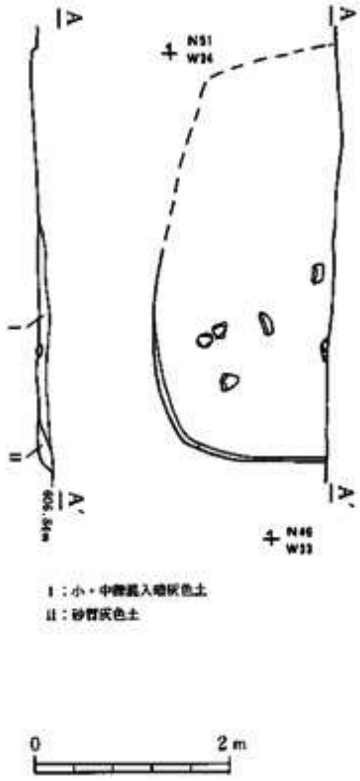
0　2 m

第20図　住居址 (17)

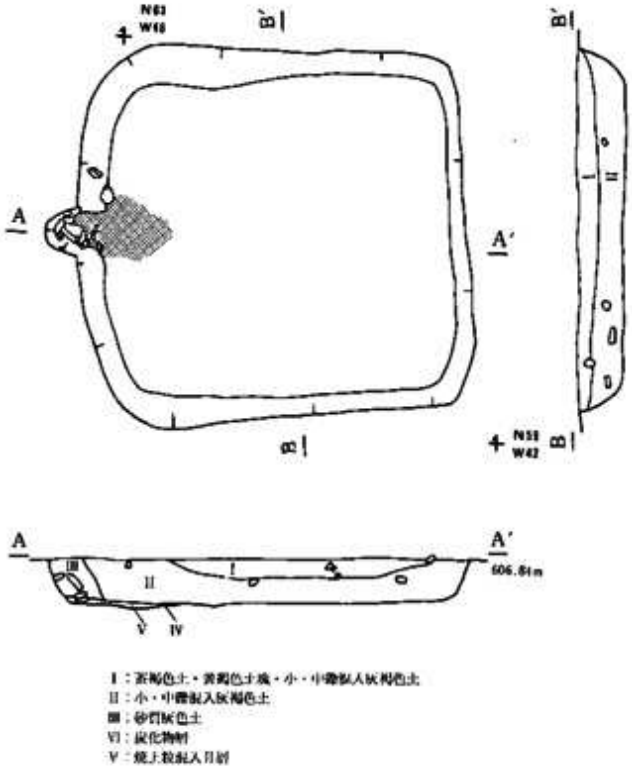
第36号住居址



第37号住居址



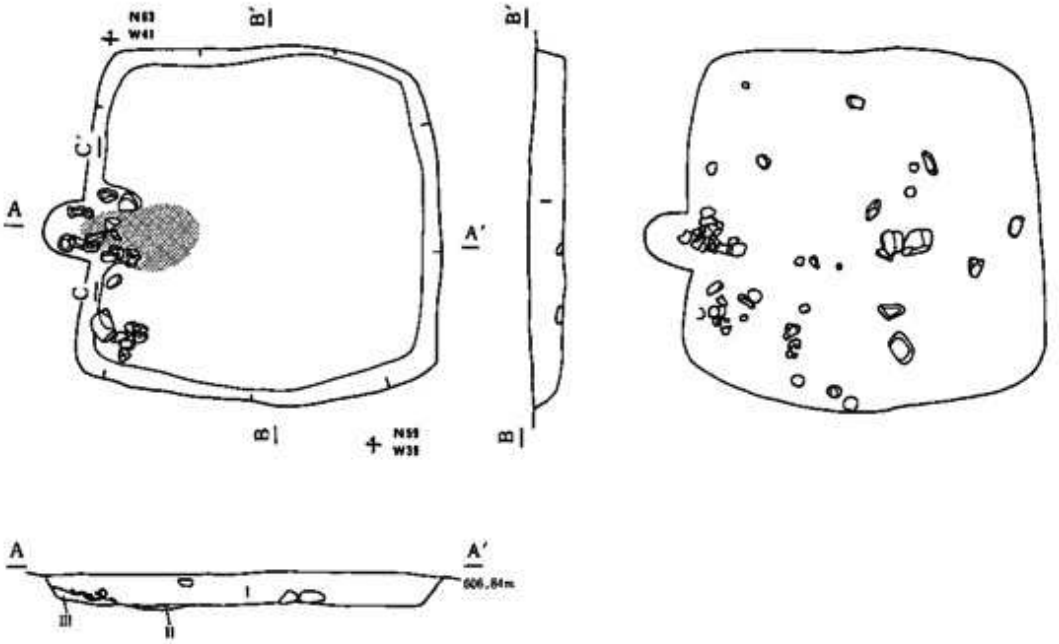
第38号住居址



第21図　住居址 (18)

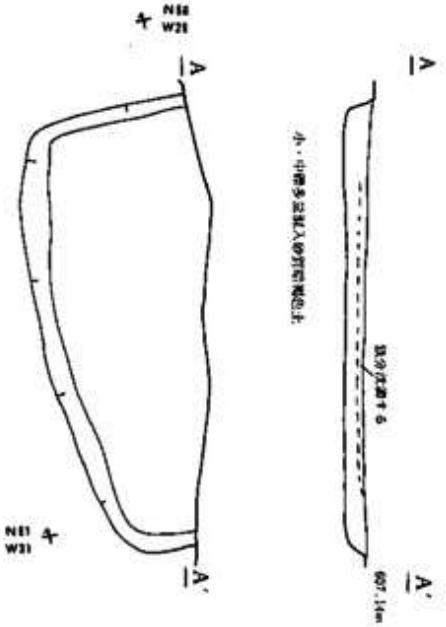
第39号住居址

同遺物出土状況



I：砂質灰褐色土
II：炭化物混入灰褐色土
III：焼土塊少量混入砂質灰色土
IV：粘質灰褐色土

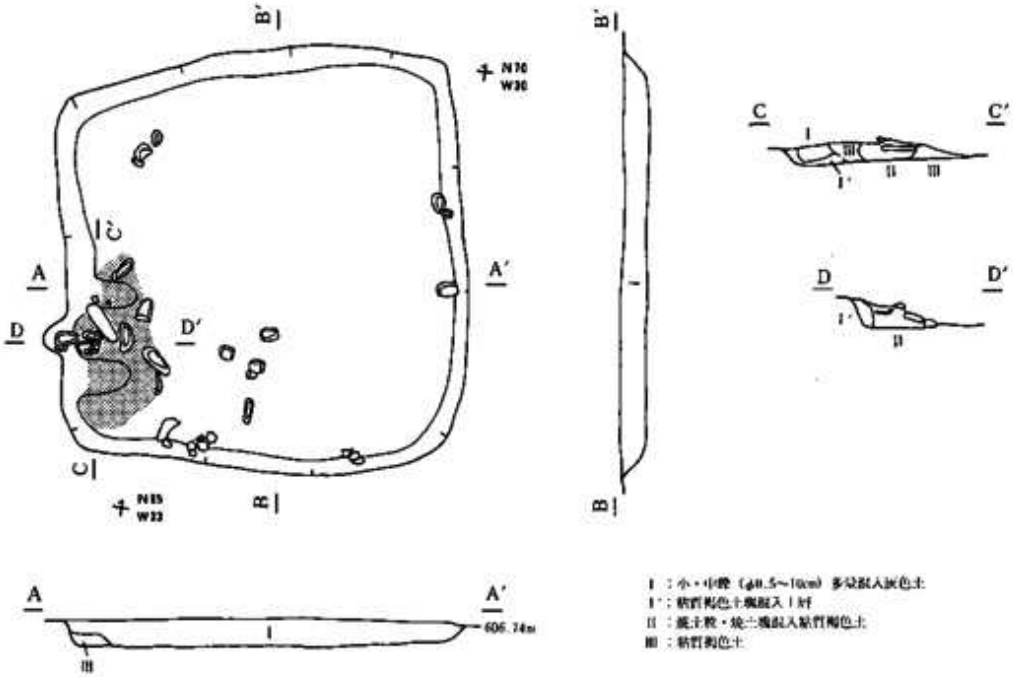
第40号住居址



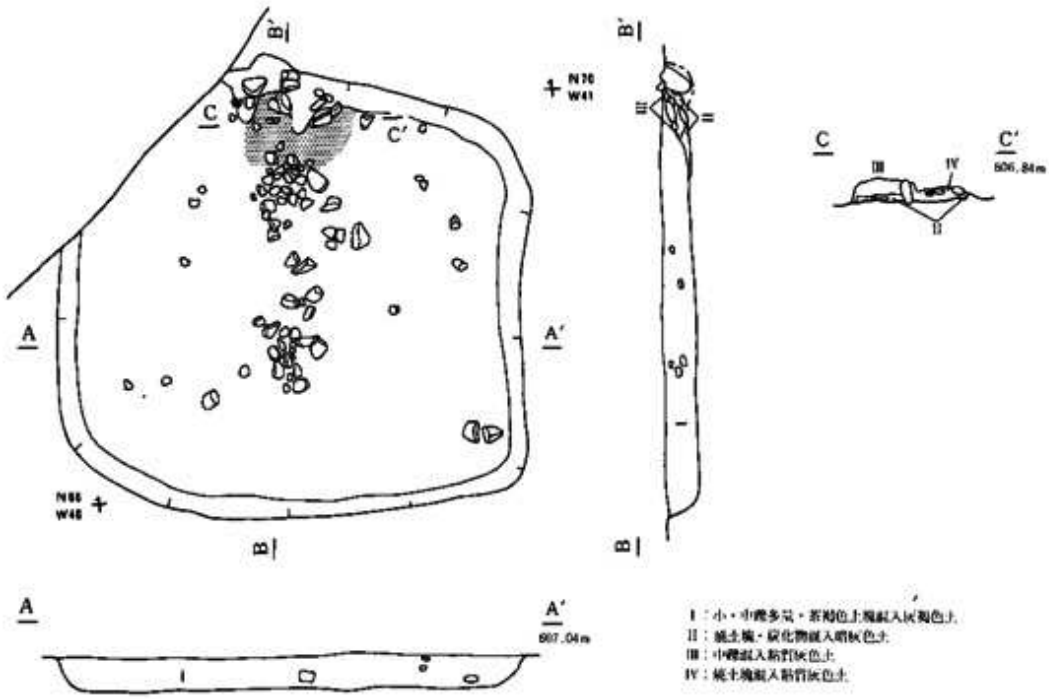
0　2 m

第22図　住居址 (19)

第41号住居址

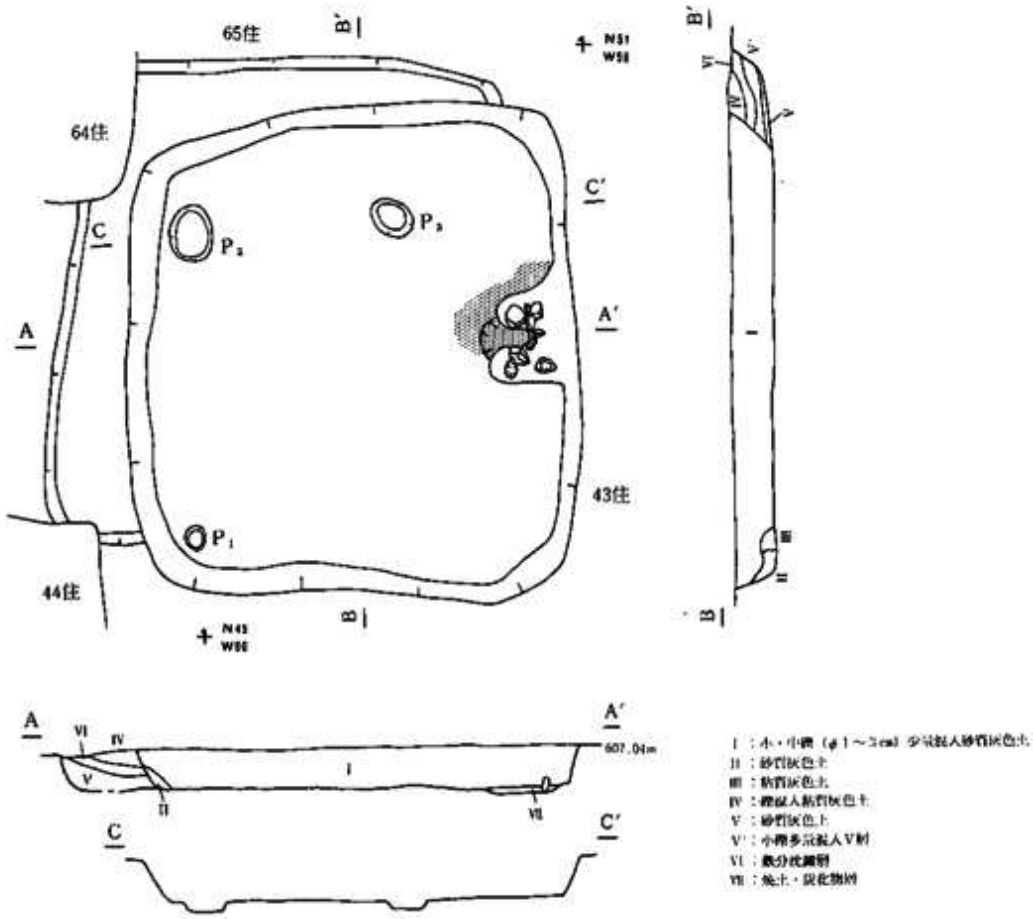


第42号住居址（遺物出土状況）

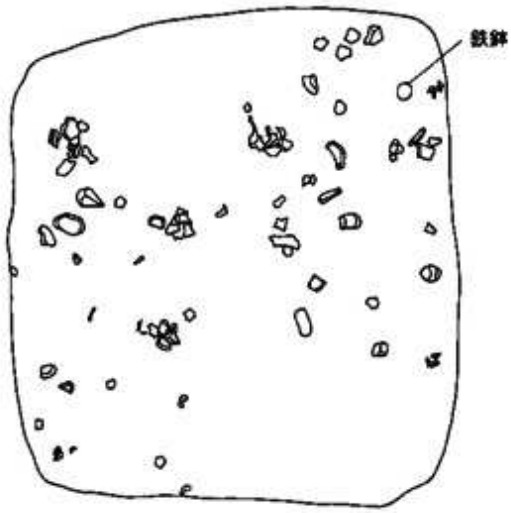


第23図　住居址 ⑳

第43・65号住居址

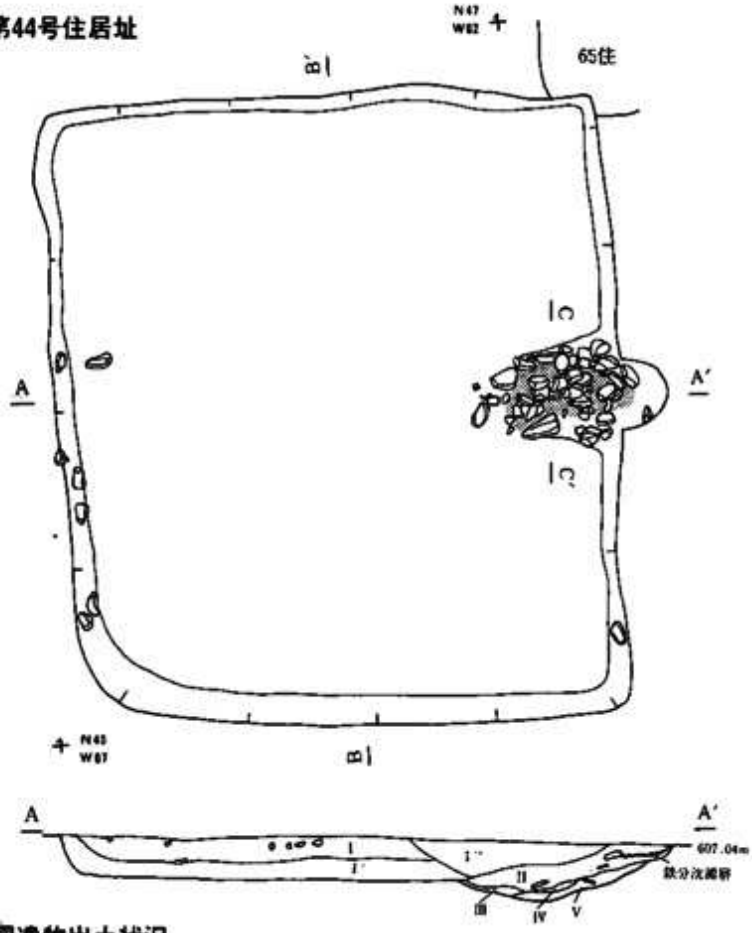


43住遺物出土状況

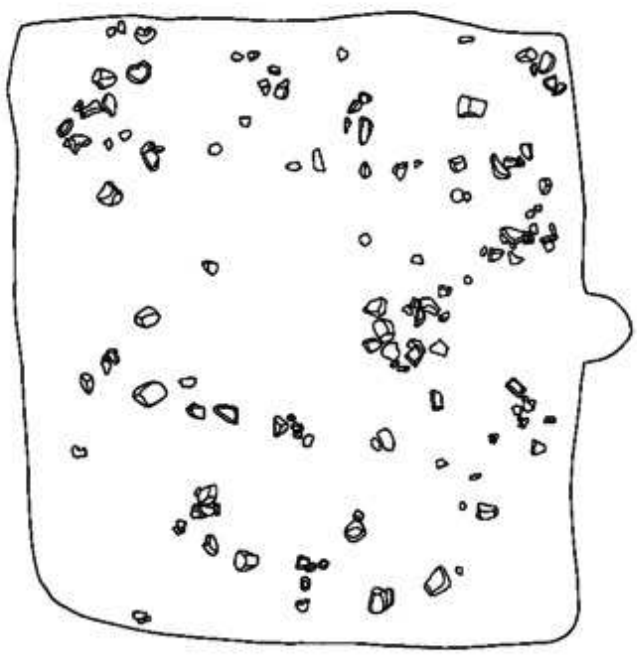


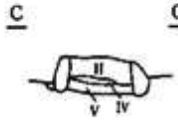
第24図　住居址 (21)

第44号住居址

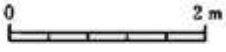


周遺物出土状況



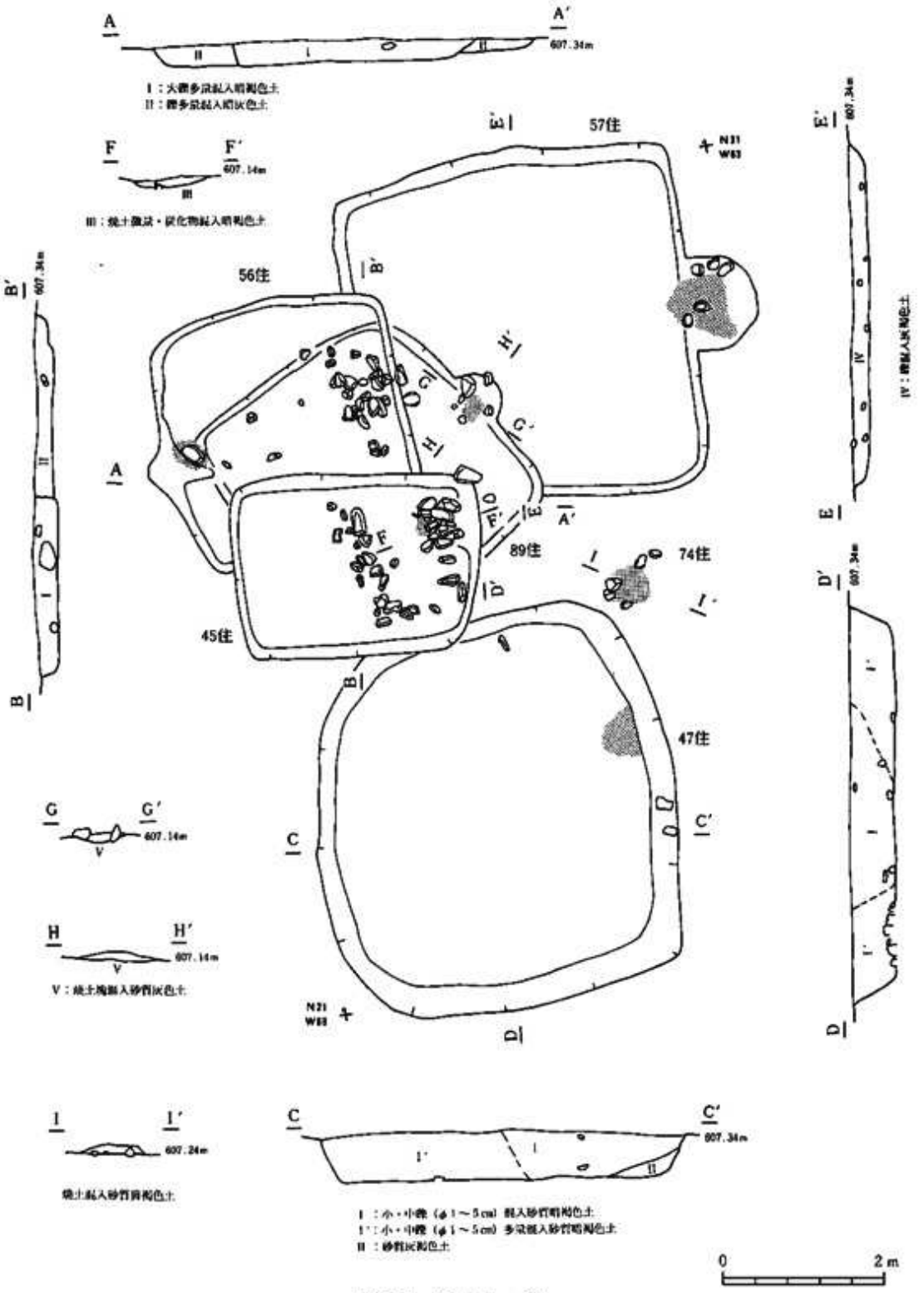


I ：暗褐色土粒多量・小・中礫（φ1～5cm）混入灰褐色土
I'：小・中礫（φ1～5cm）混入灰褐色土
I''：灰褐色土
II ：灰色土塊混入粘質灰色土
III ：灰色砂層
IV ：焼土・炭化物混入灰褐色土
V ：焼土微少混入粘質灰色土



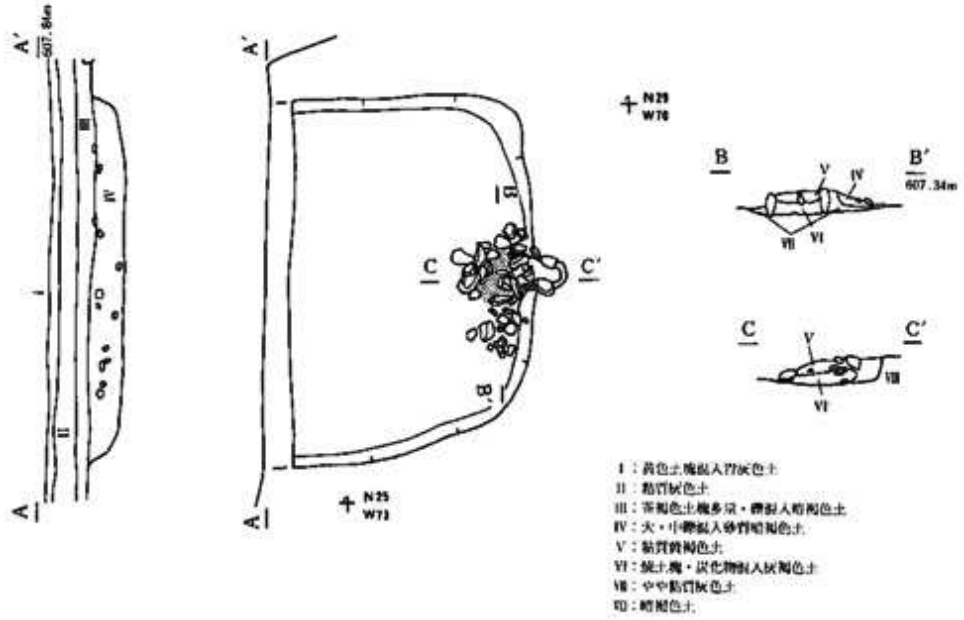
第25図　住居址 (22)

第45・47・56・57・74・89号住居址



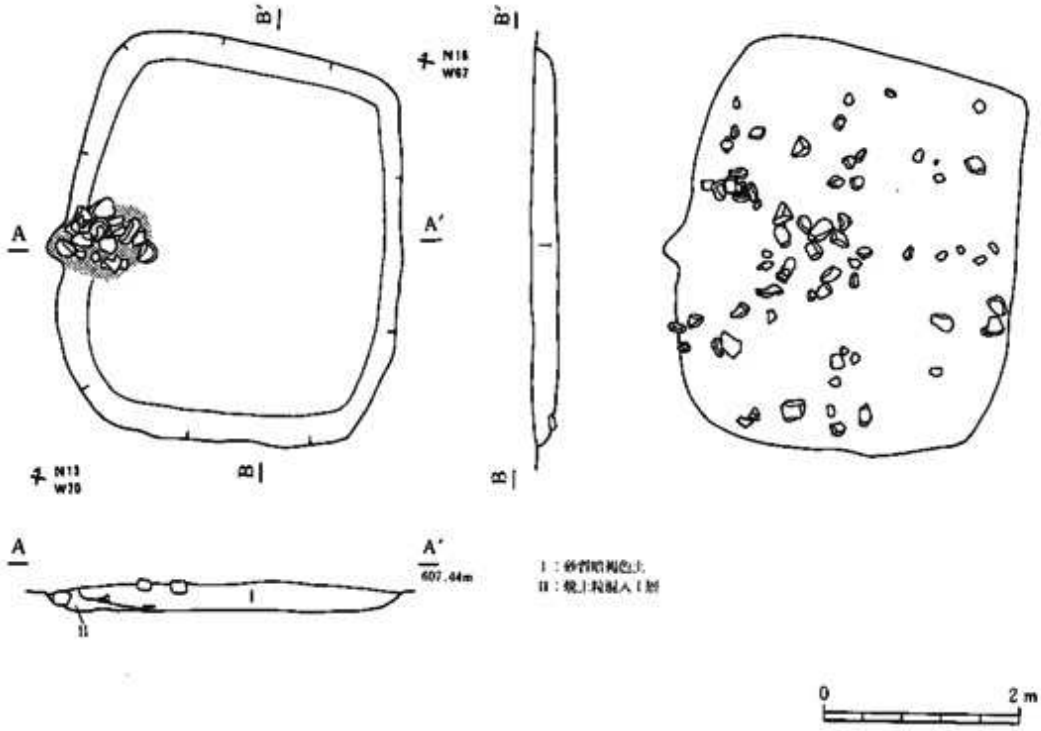
第26図　住居址 (23)

第46号住居址



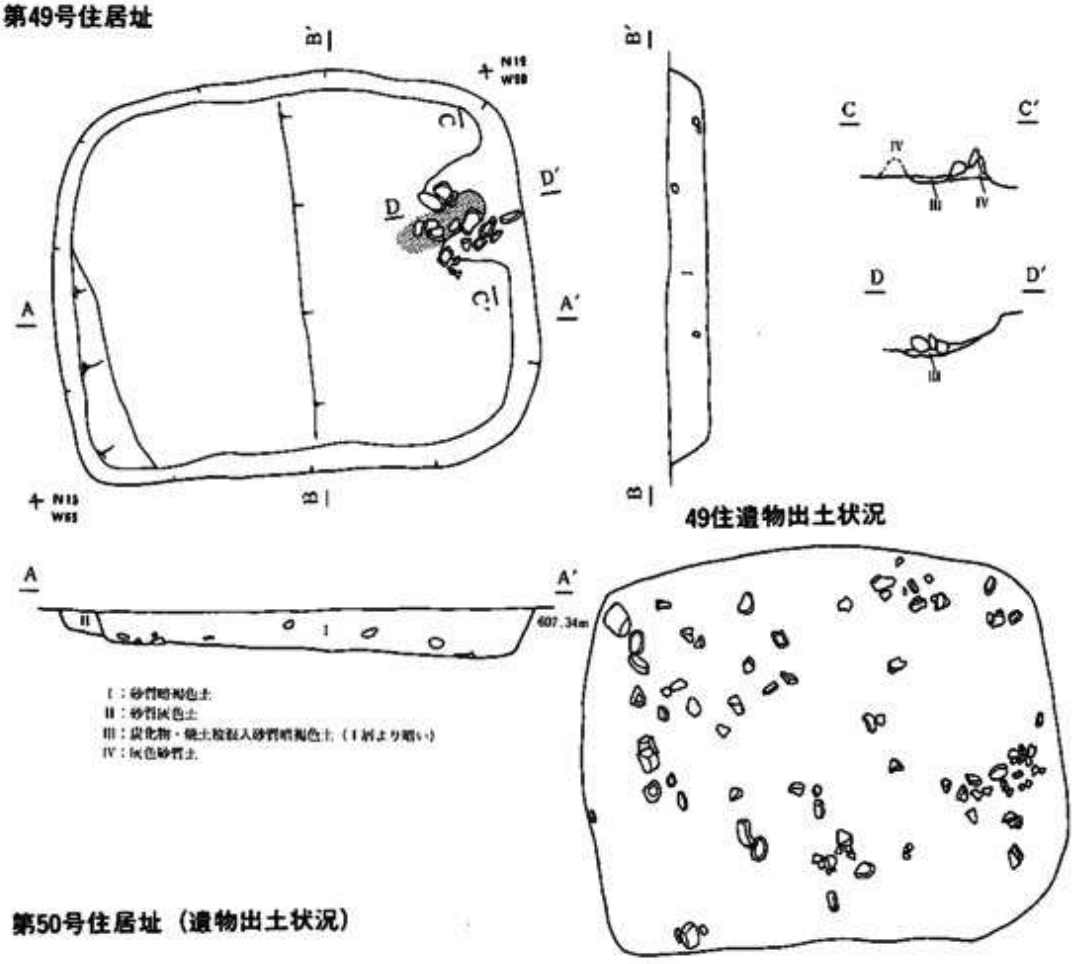
第48号住居址

同遺物出土状況

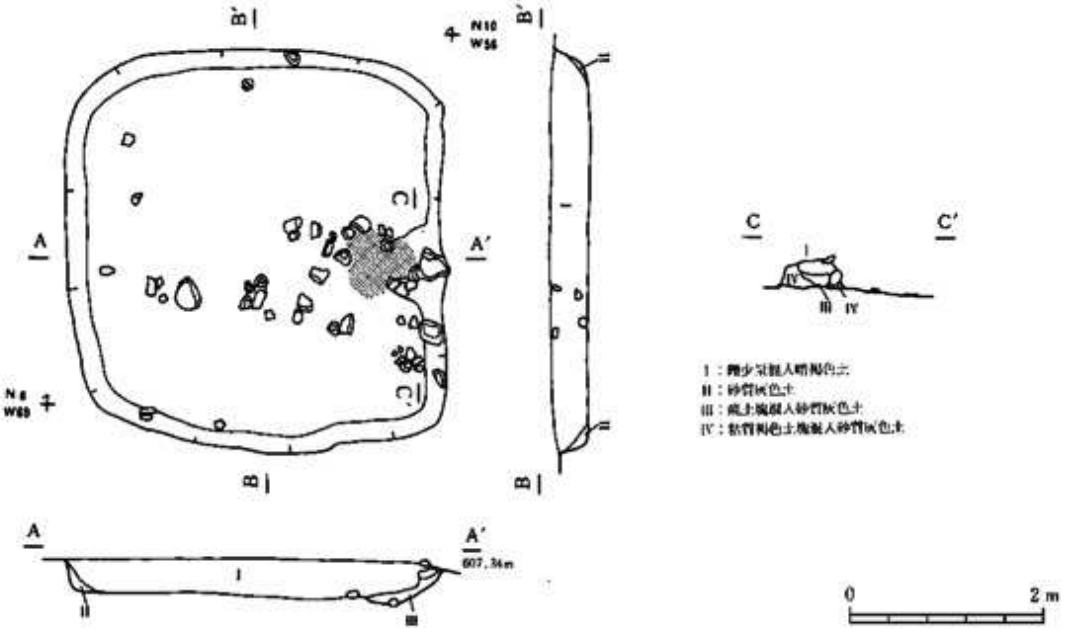


第27図　住居址 (24)

第49号住居址

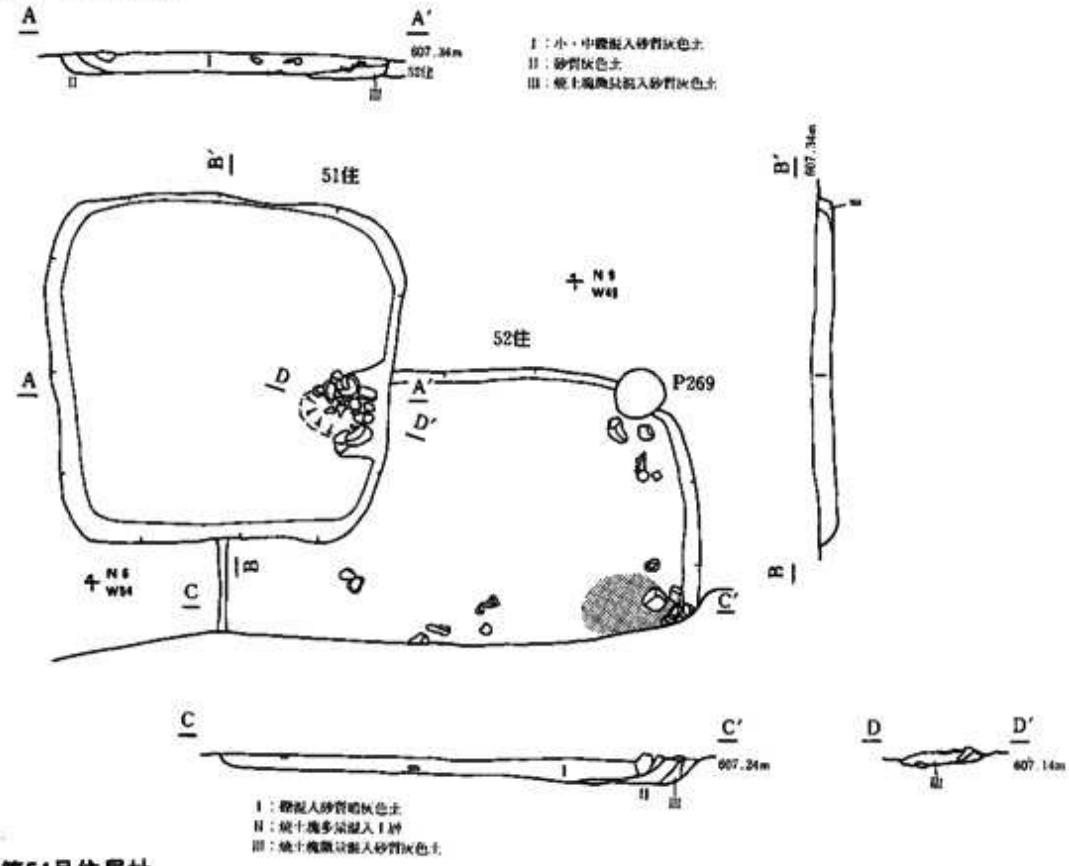


第50号住居址（遺物出土状況）

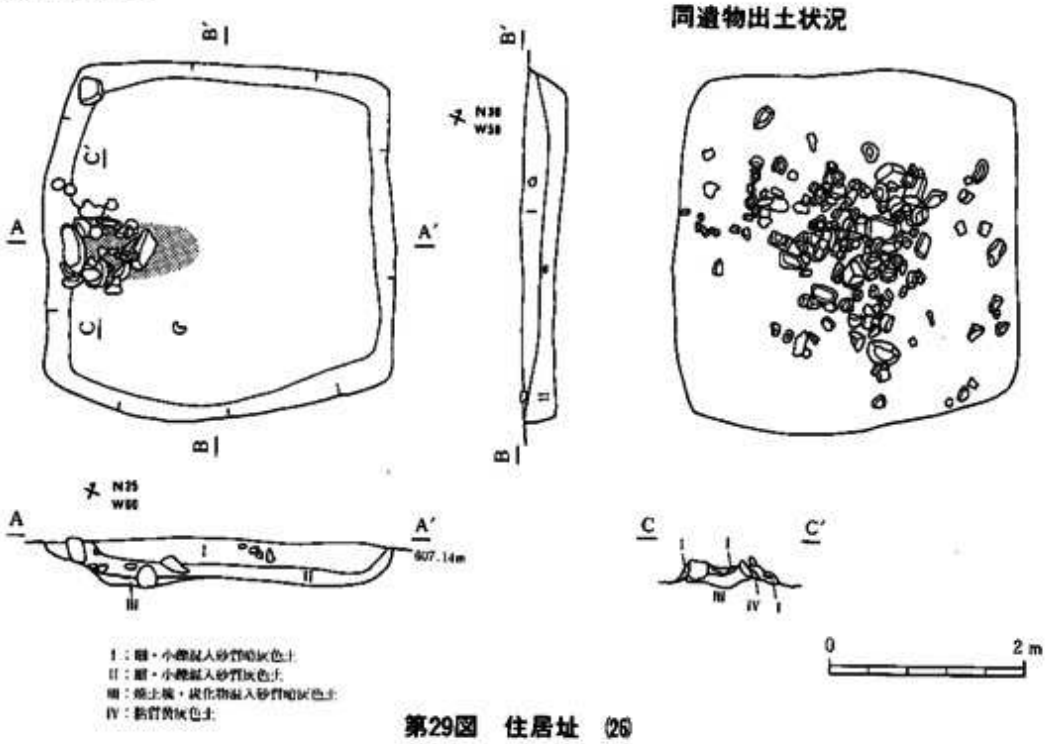


第28図　住居址 (25)

第51・52号住居址

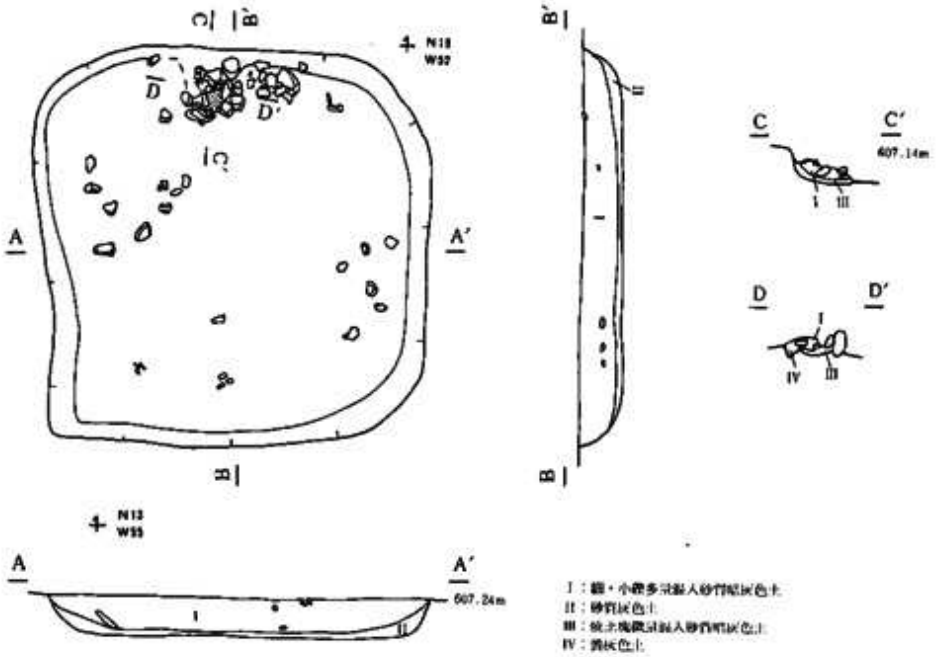


第54号住居址

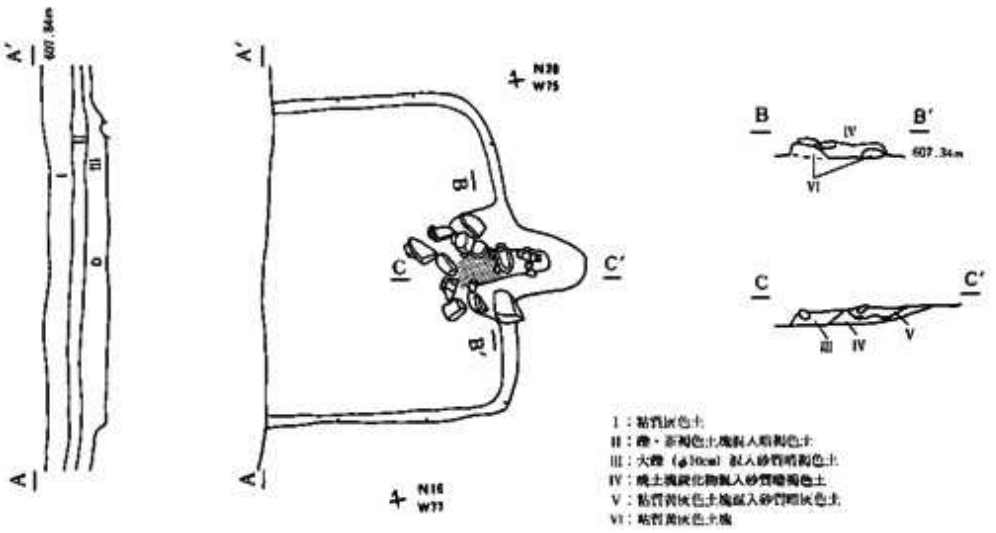


第29図　住居址 (26)

第55号住居址（遺物出土状況）



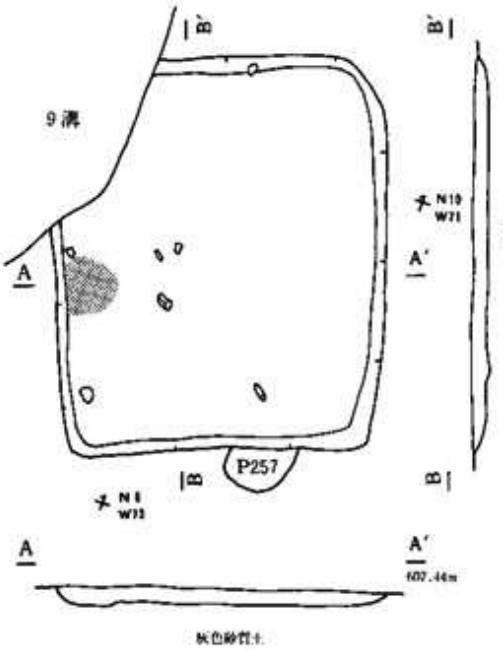
第58号住居址



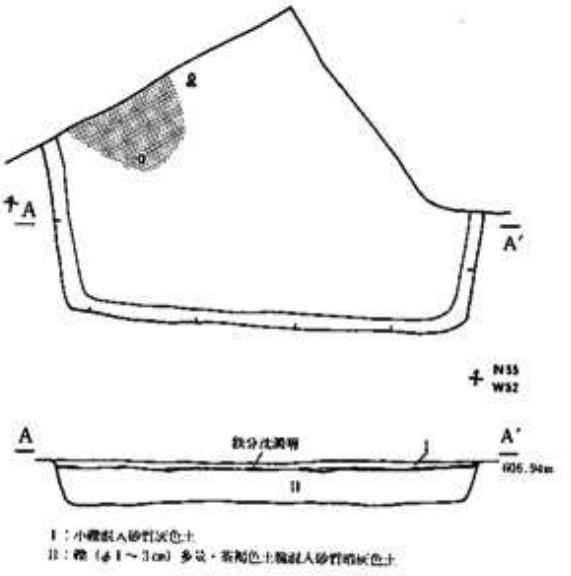
0 2 m

第30図　住居址 (27)

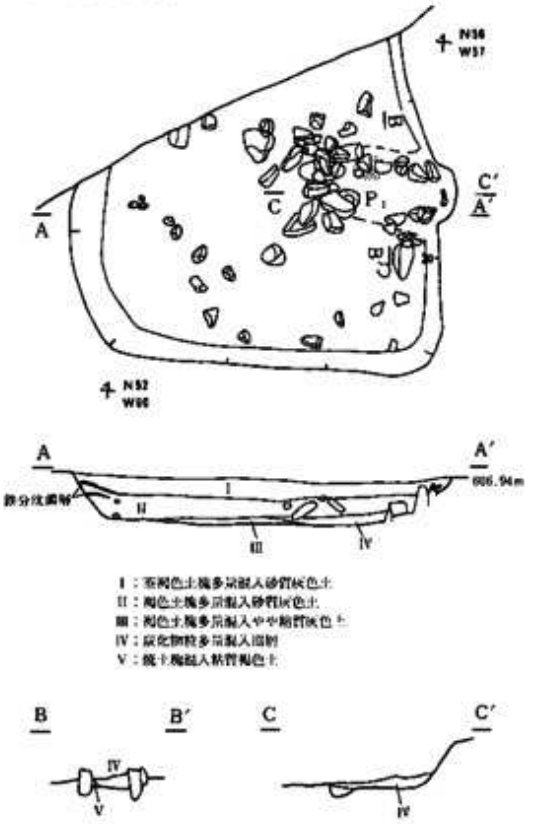
第59号住居址



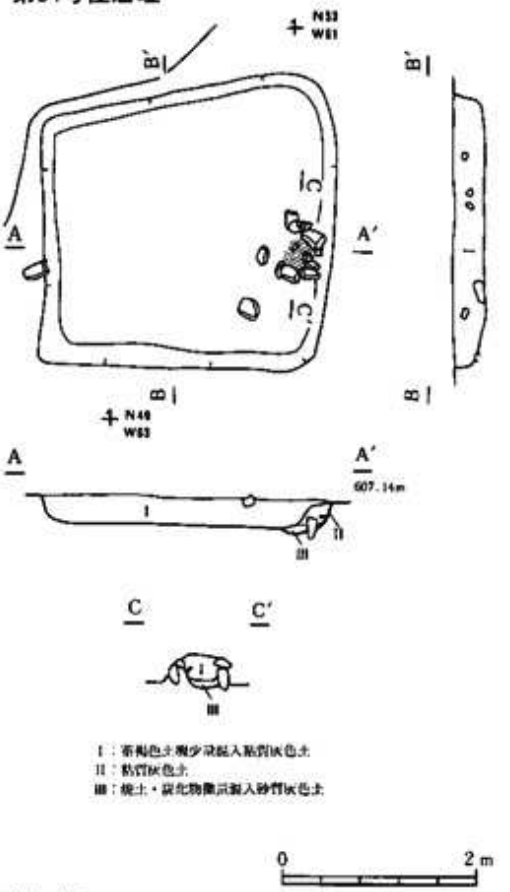
第62号住居址



第63号住居址

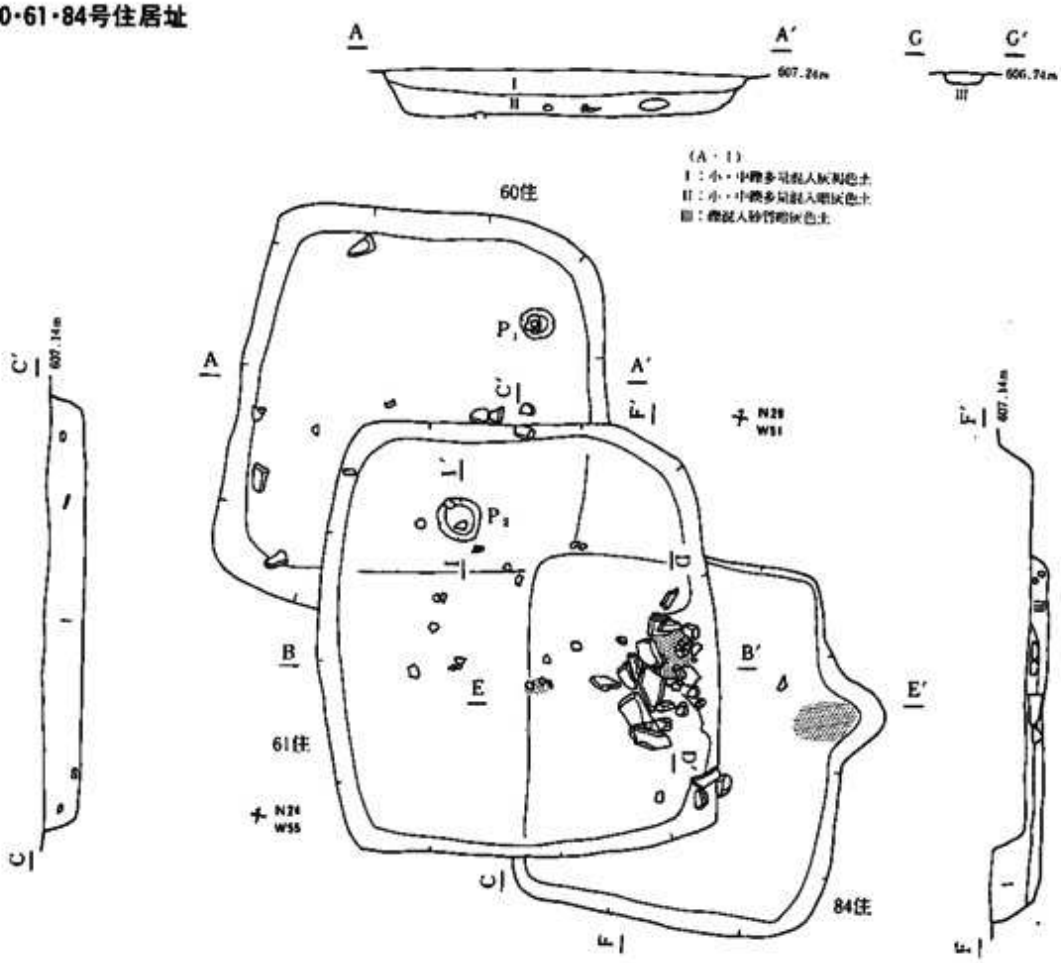


第64号住居址

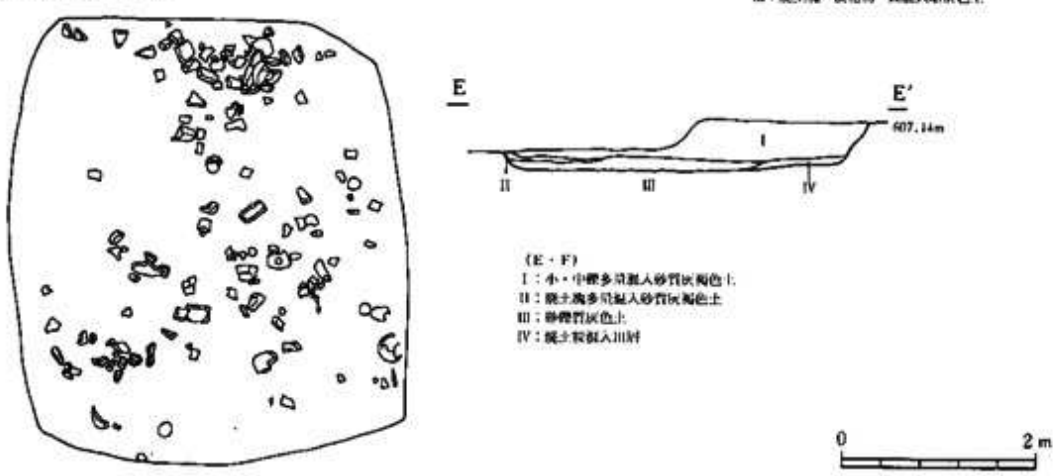


第31図　住居址 (28)

第60・61・84号住居址

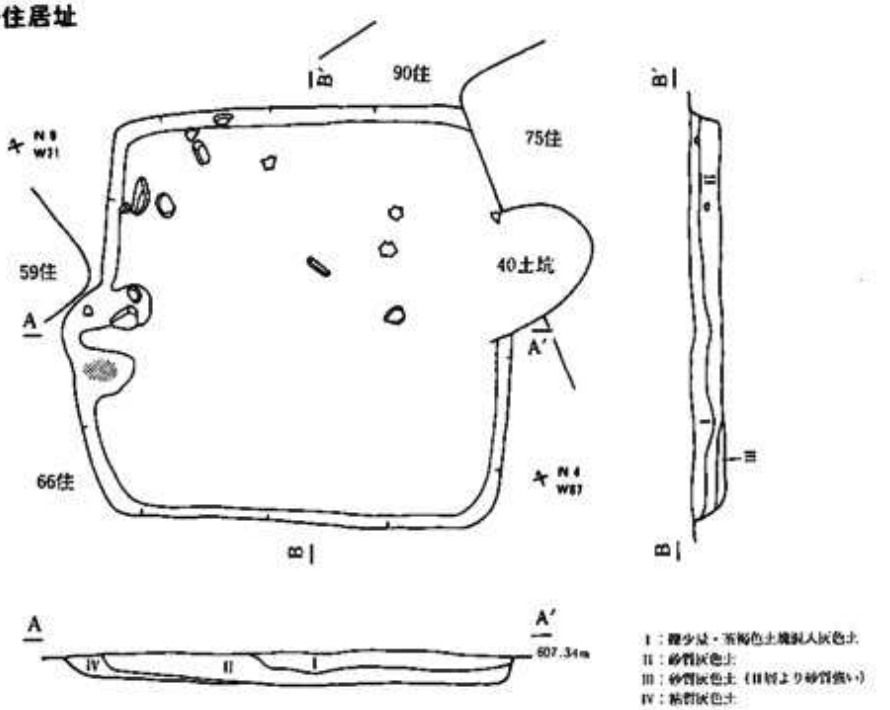


61住遺物出土状況

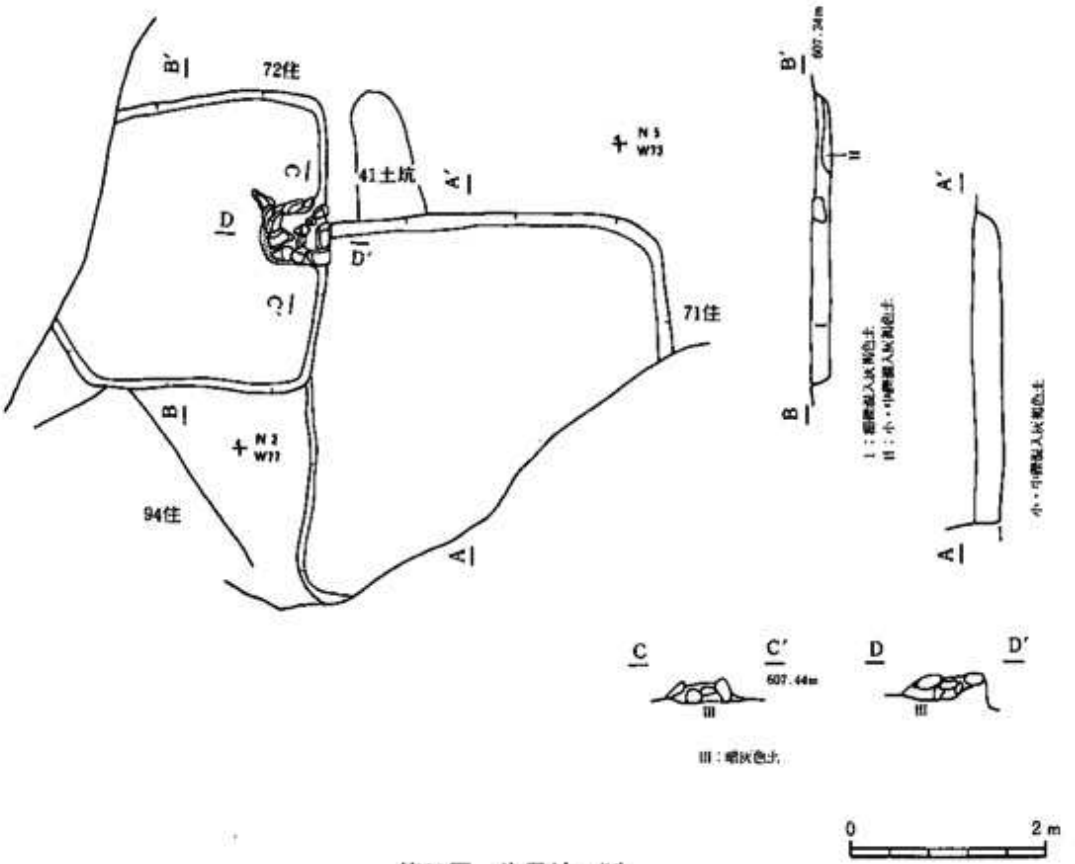


第32図　住居址 (29)

第66号住居址

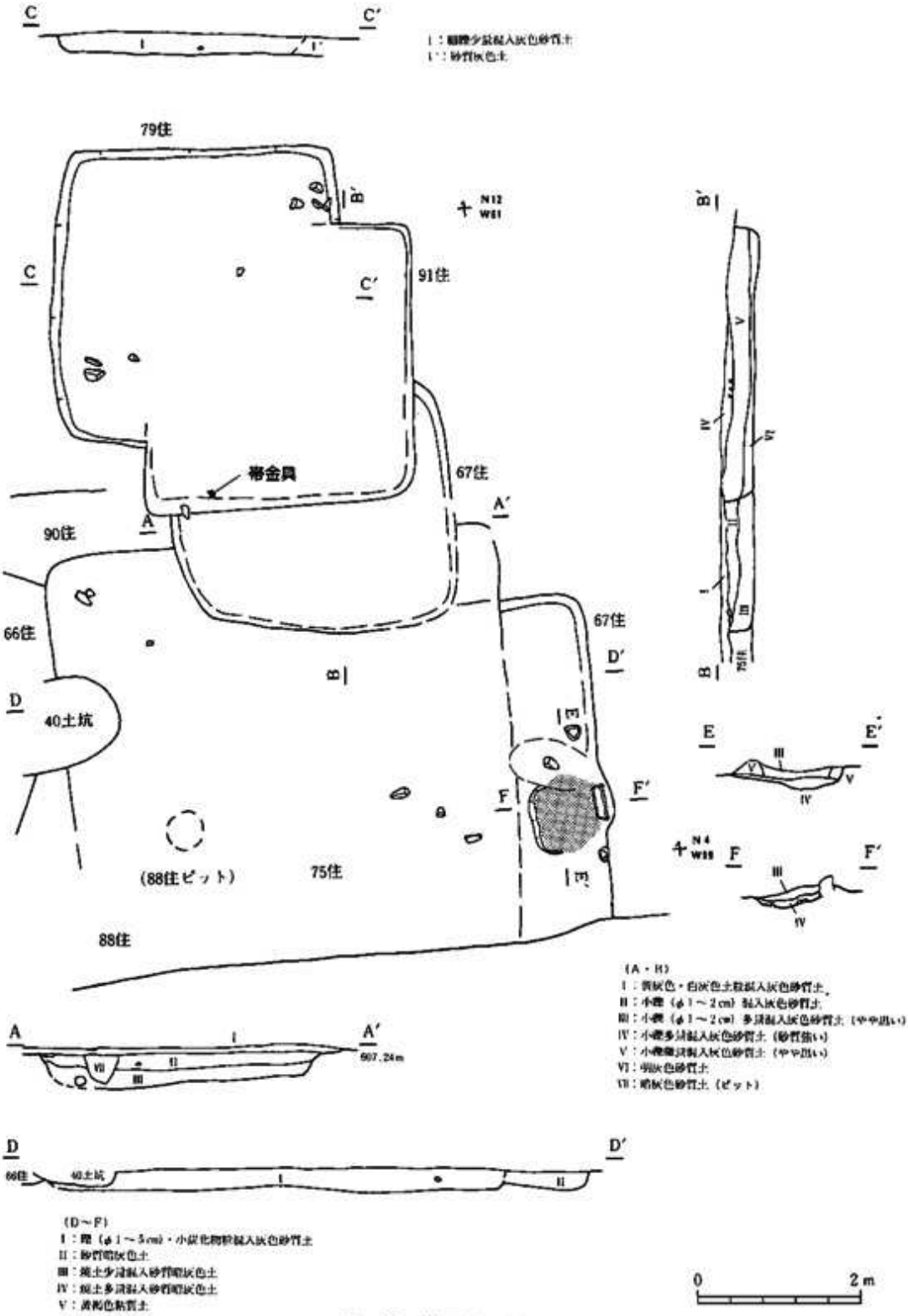


第71・72号住居址



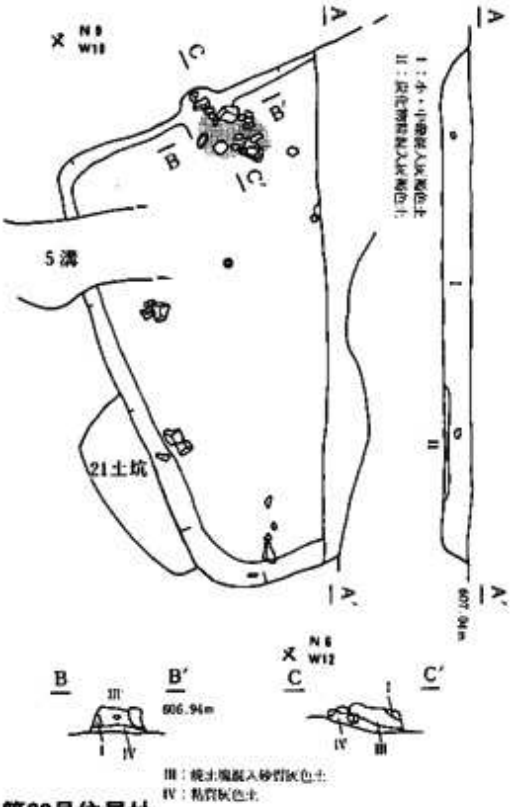
第33図　住居址 (30)

第67・75・76・79・88・90・91号住居址

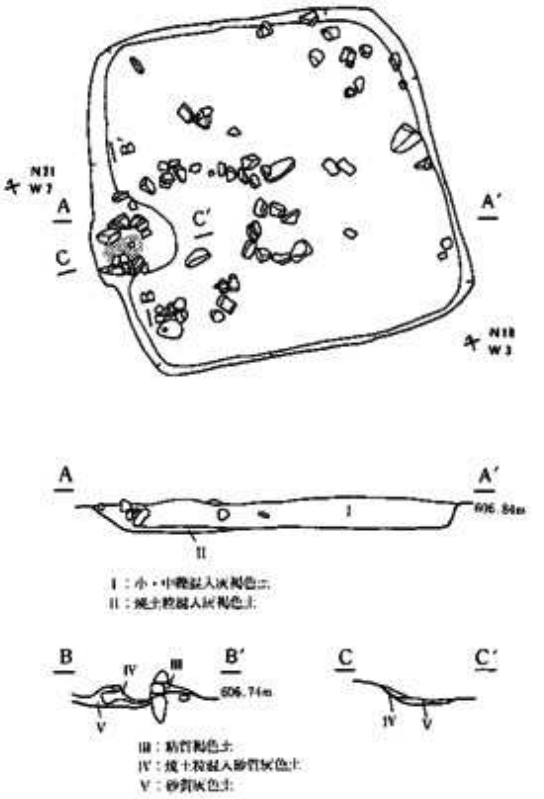


第34図　住居址 (31)

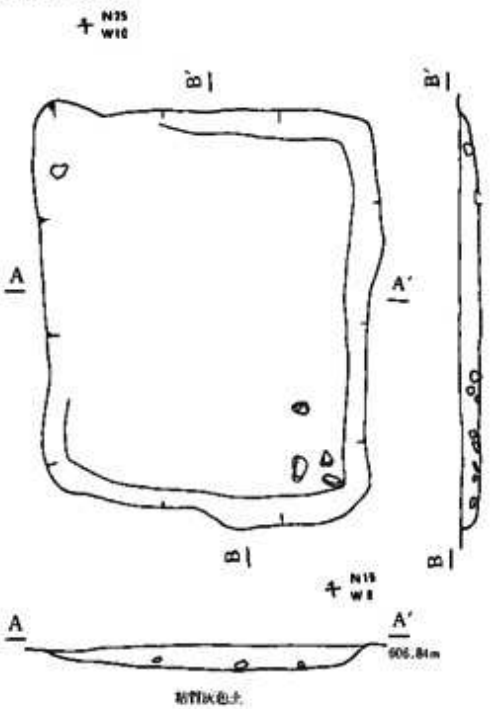
第73号住居址



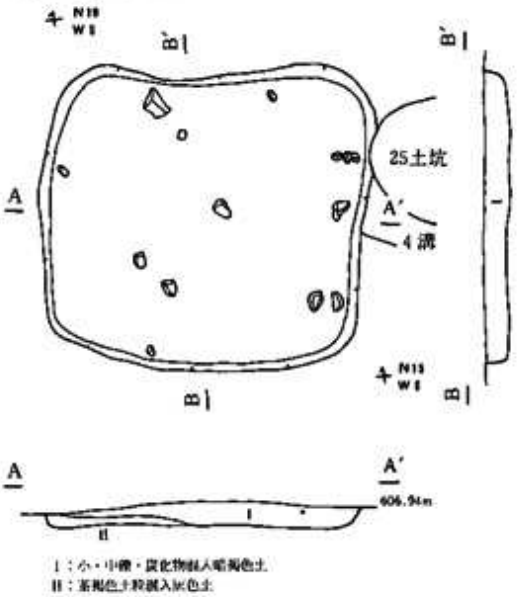
第81号住居址（遺物出土状況）



第82号住居址



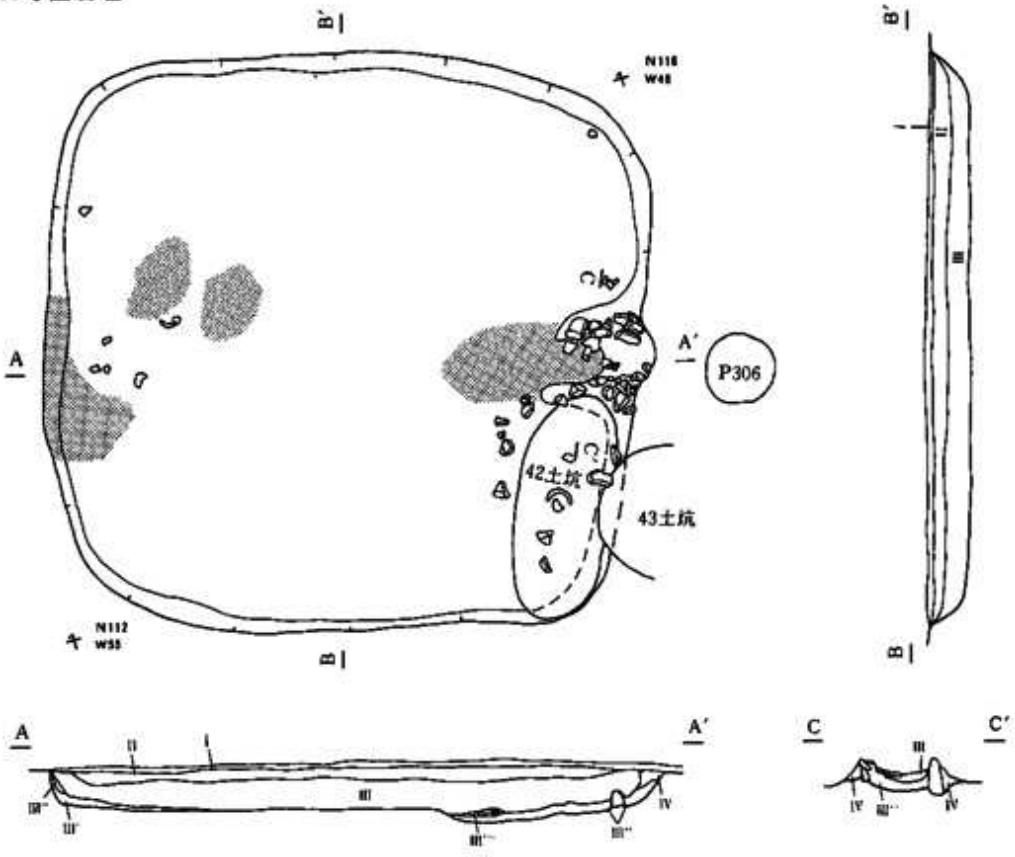
第83号住居址



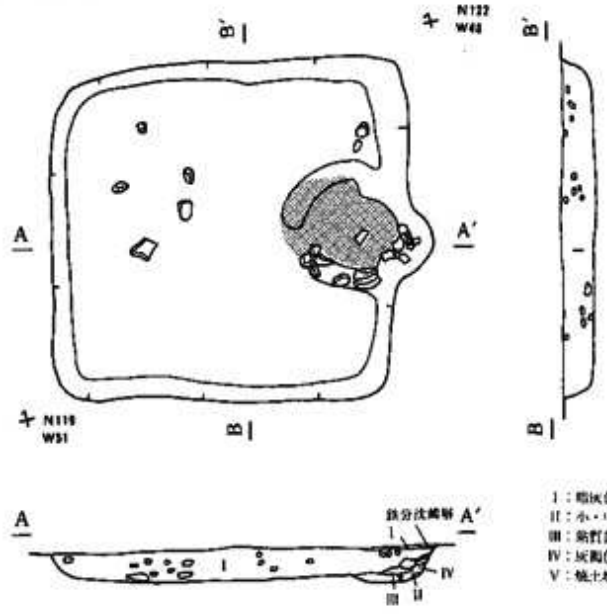
第35図　住居址 (32)

0　2m

第85号住居址



第86号住居址



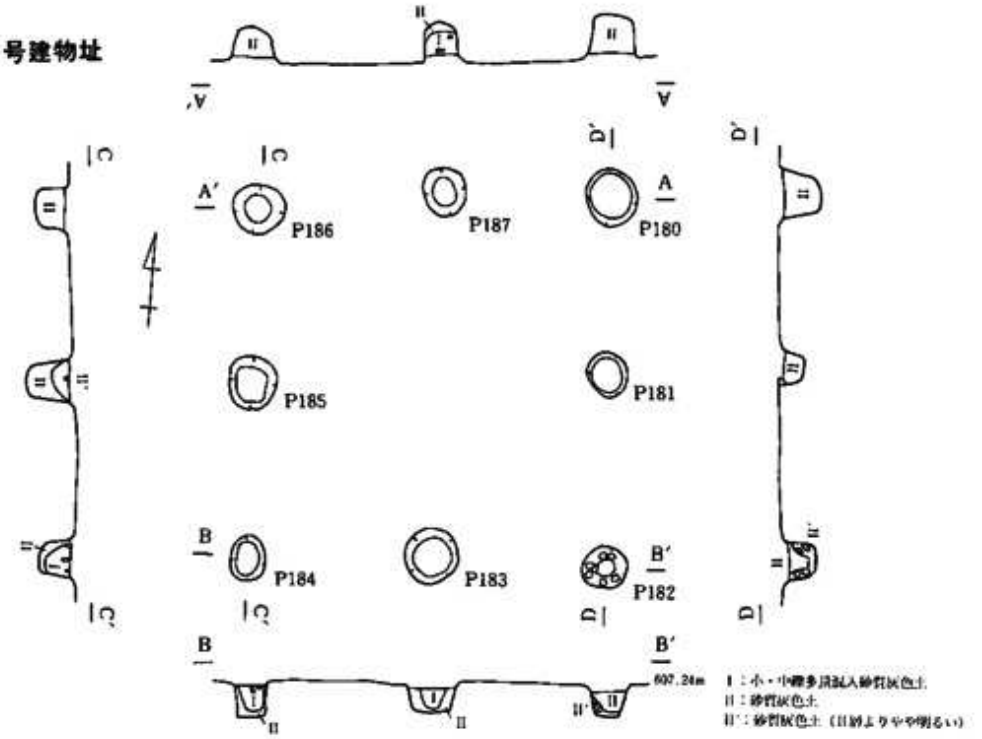
I：やや砂礫質暗褐色土
II：礫（φ1～10cm）・微砂・マンガン多量混入砂質暗灰色土
III：やや粘質灰色土
IIIa：粘質黄灰色土塊混入粗層
IIIb：焼土塊混入粗層
IIIc：礫混入粗層
IV：粘質黄褐色土塊

I：暗灰色土
II：小・中礫多量混入暗褐色土
III：粘質黄灰色土
IV：灰褐色土
V：焼土塊多量混入灰層

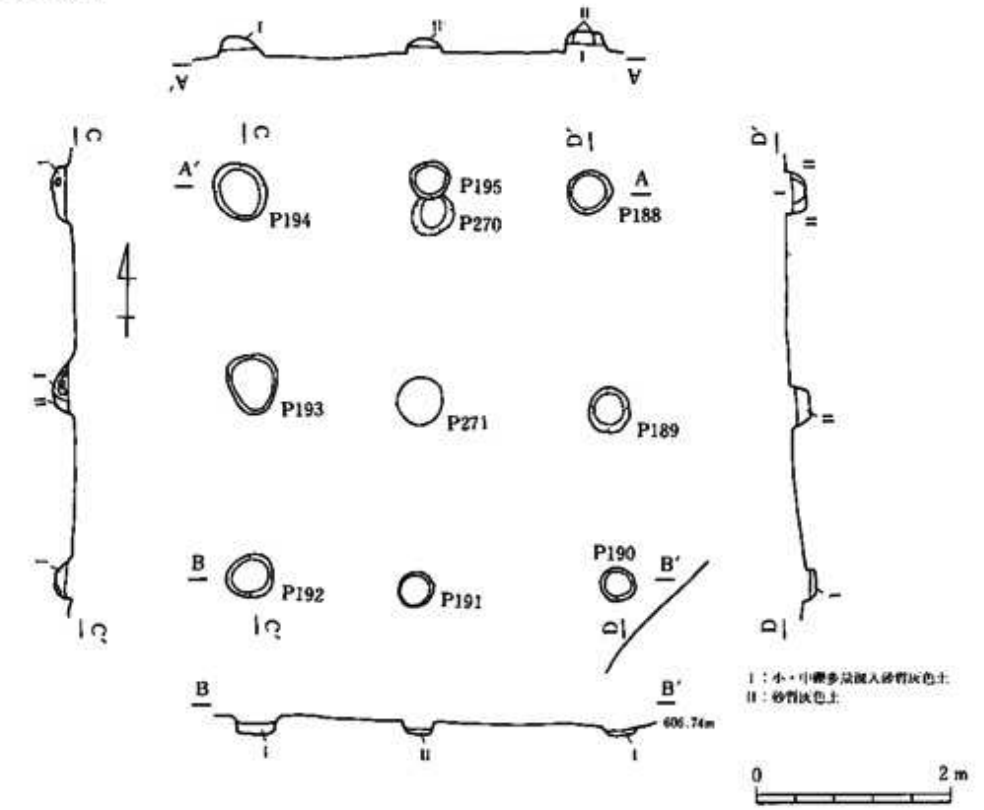
0　2 m

第36図　住居址 (33)

第１号建物址

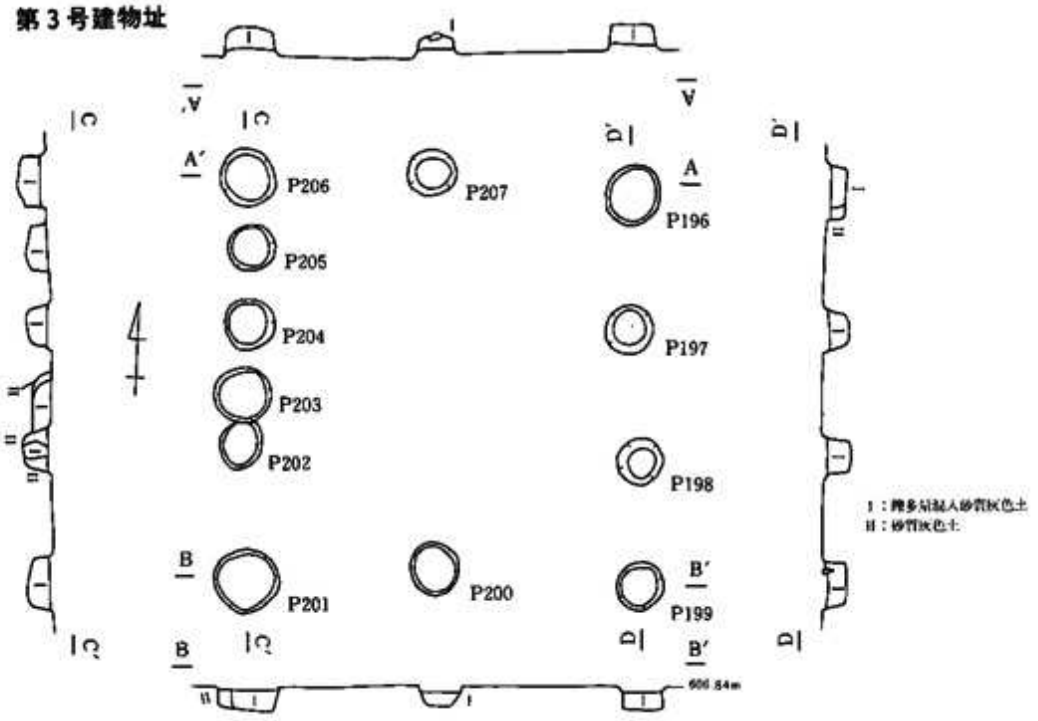


第２号建物址

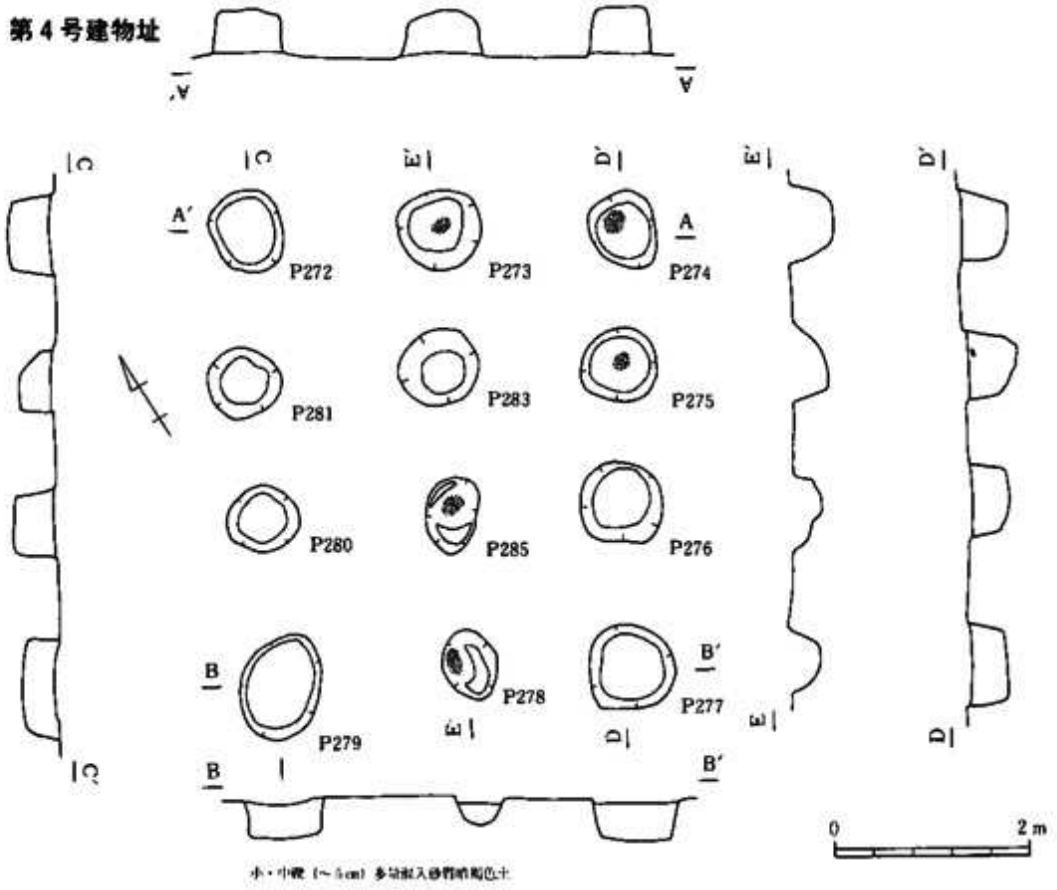


第37図　掘立柱建物址（1）

第３号建物址

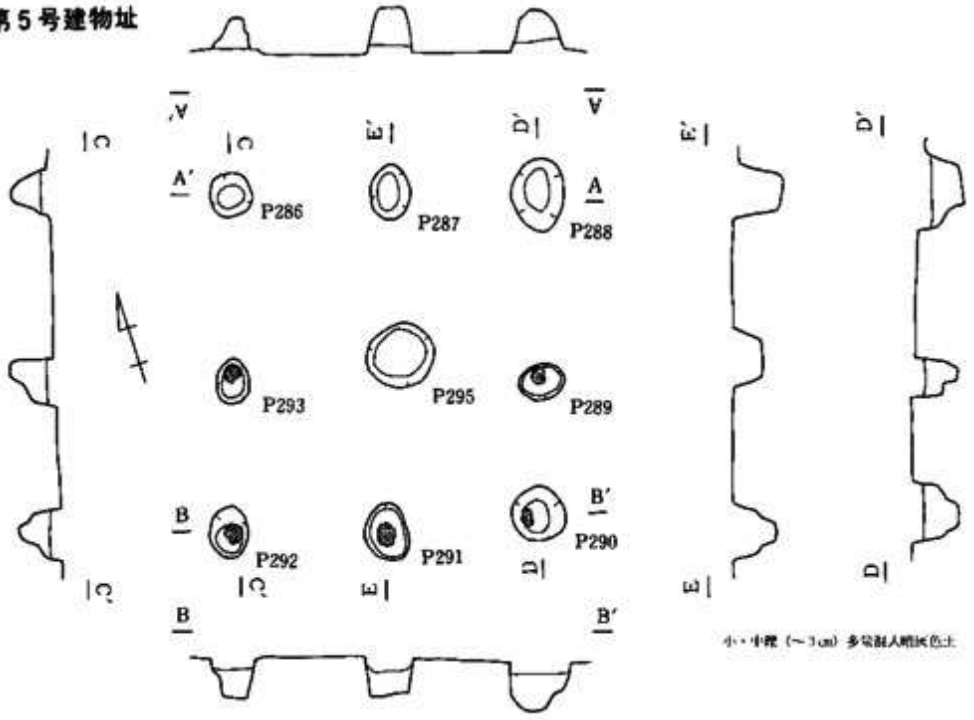


第４号建物址

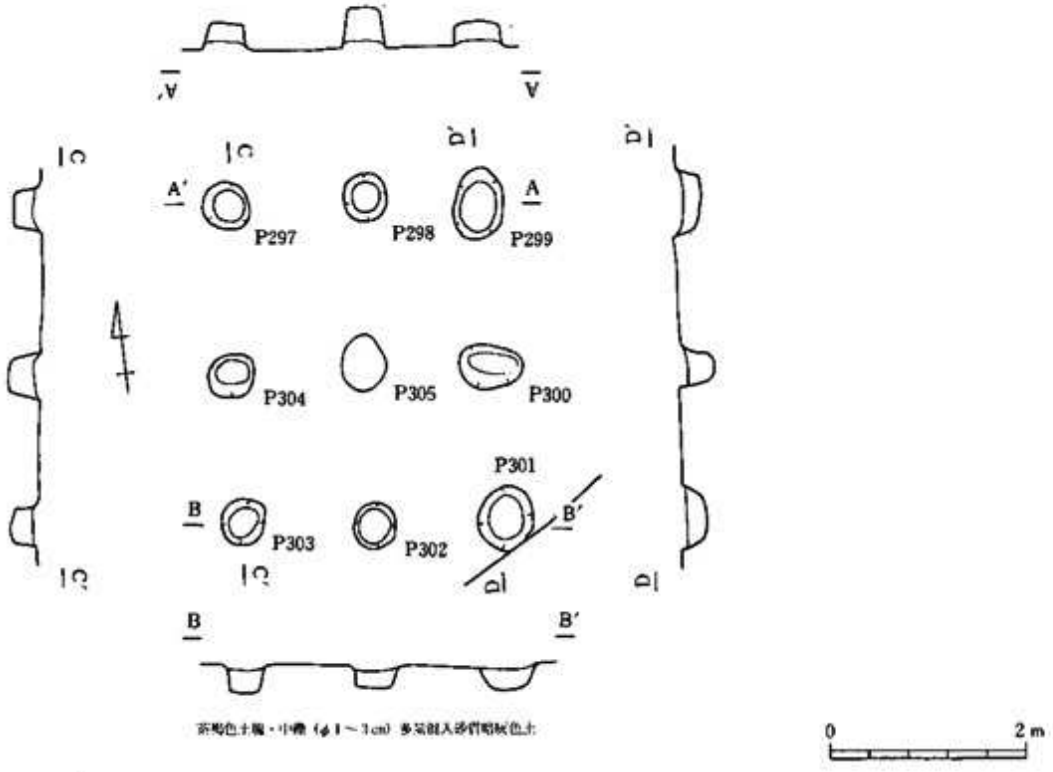


第38図　掘立柱建物址（2）

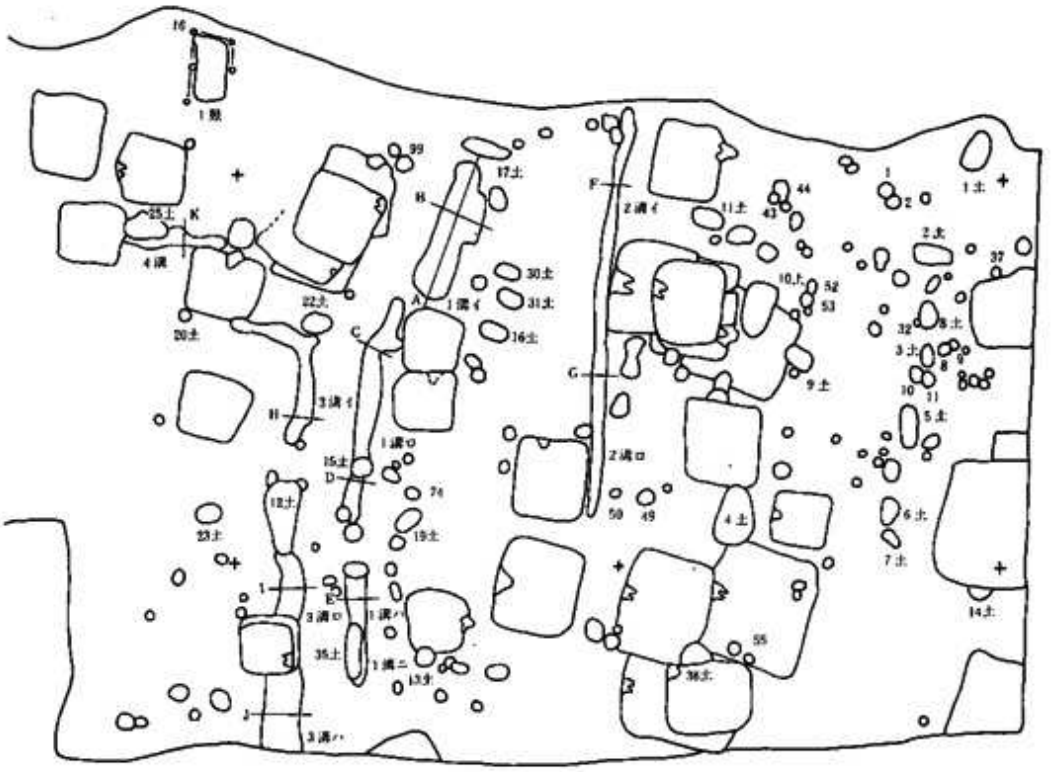
第５号建物址



第６号建物址

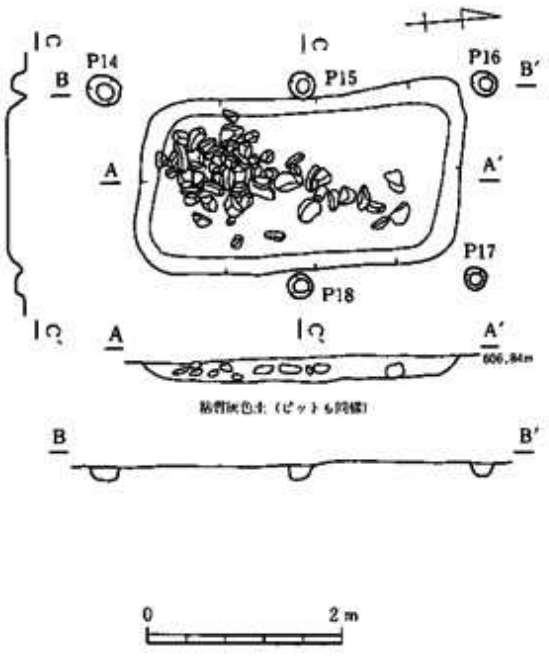


第39図　掘立柱建物址　(3)

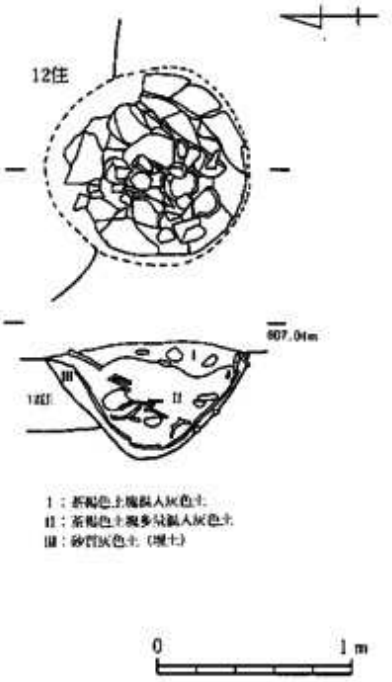


A区主要土坑・ピット・溝配置図

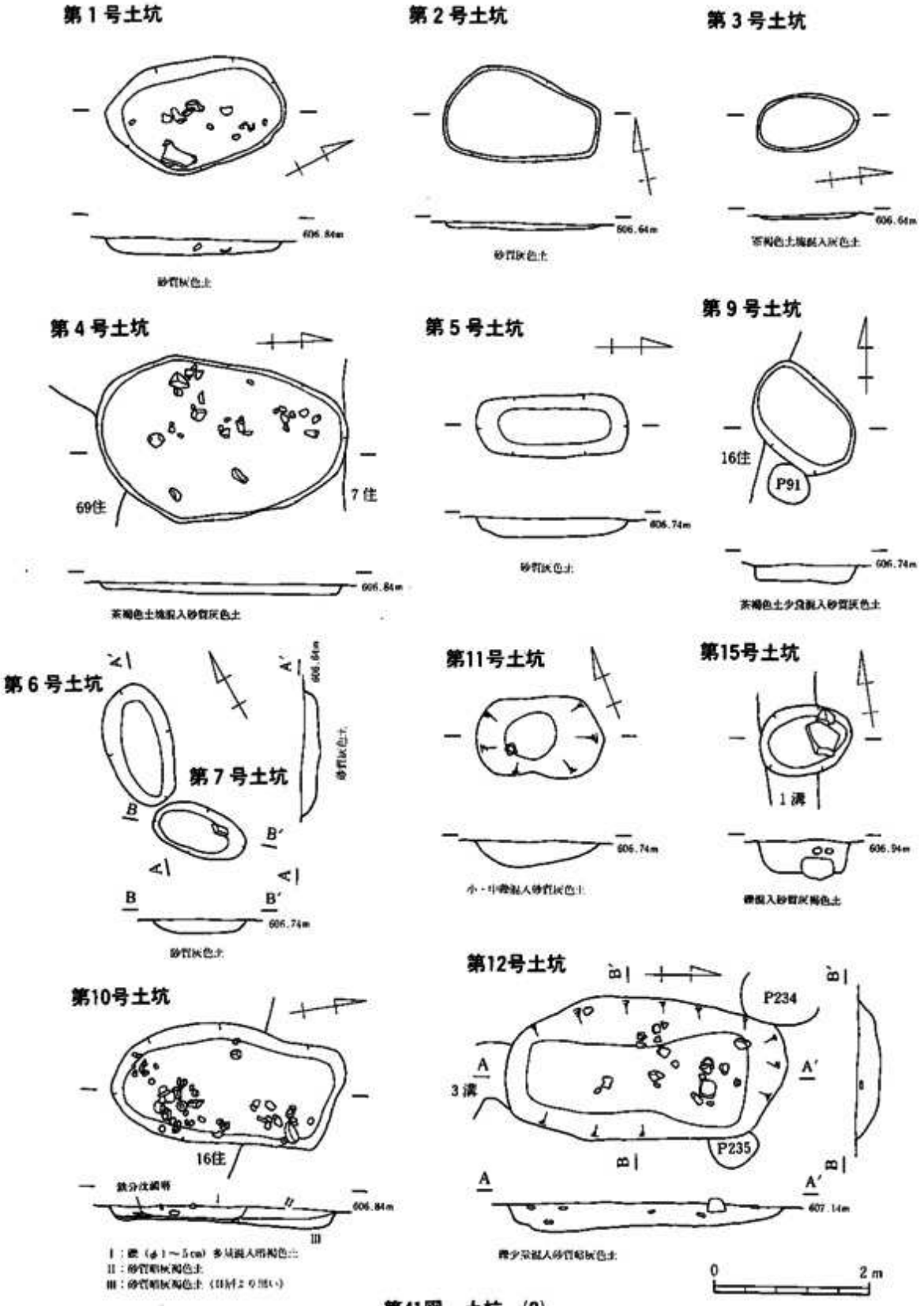
第１号竪穴状遺構



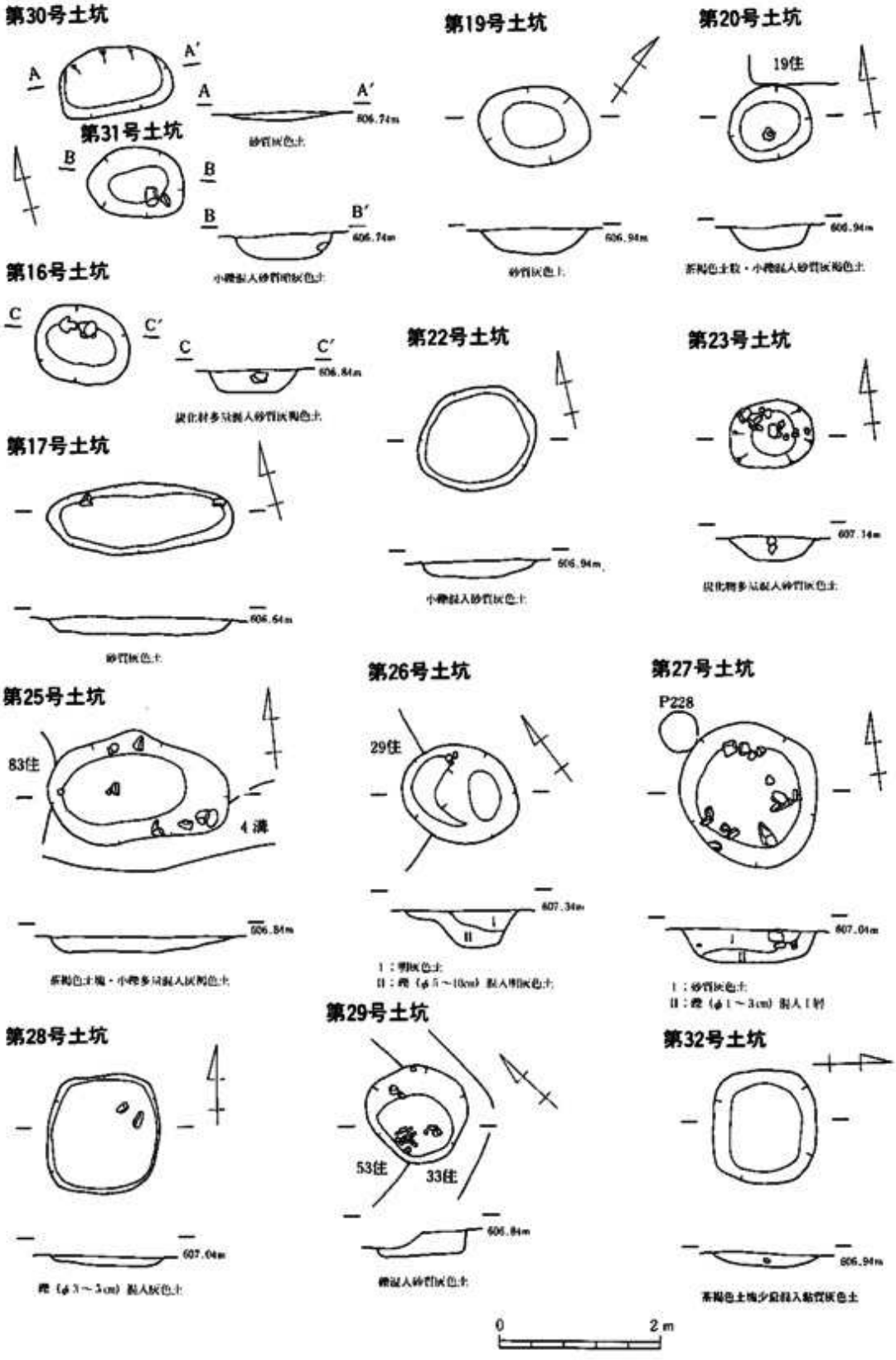
第13号土坑



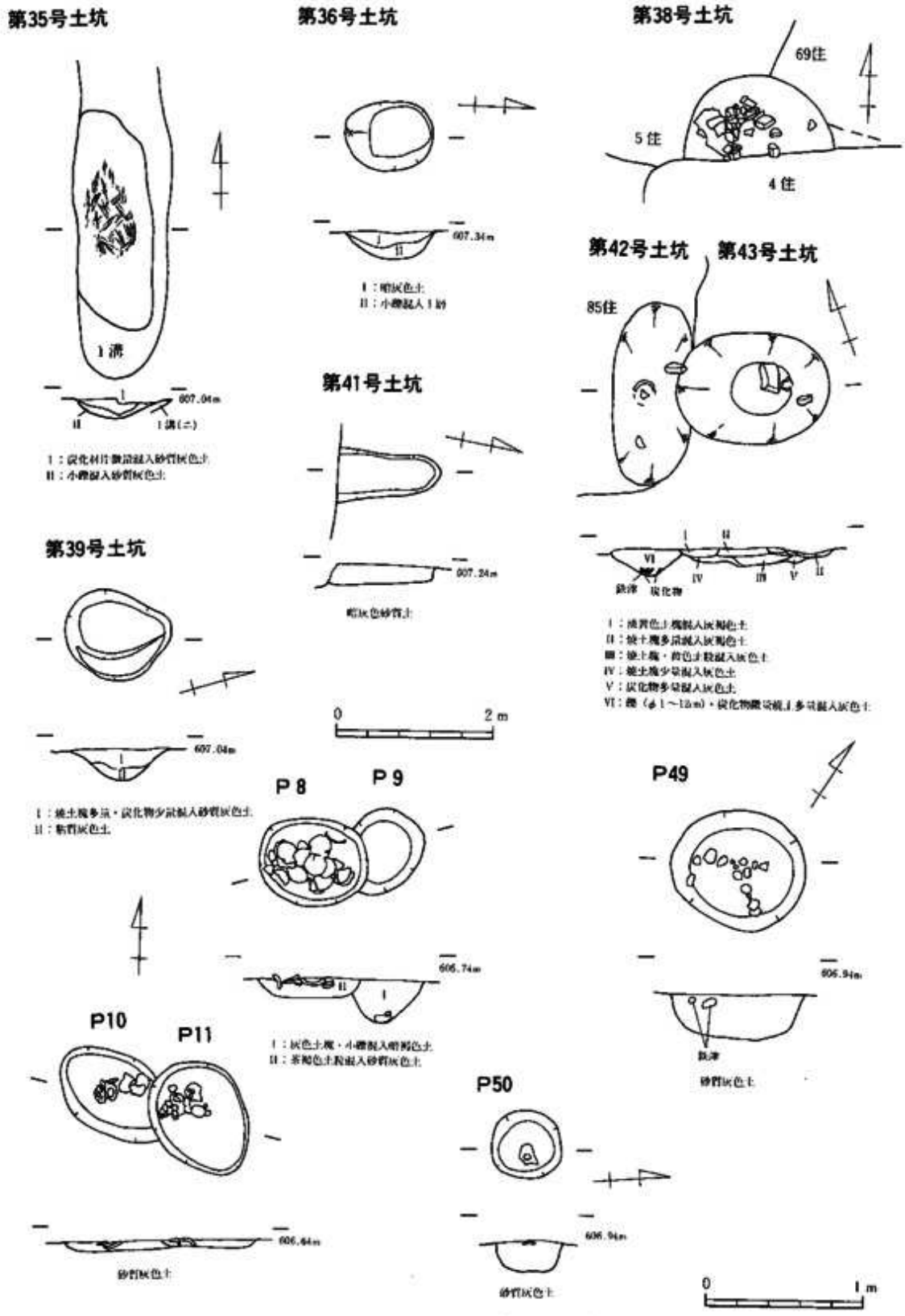
第40図　竪穴状遺構・土坑　(1)


第1号土坑
606.84m
第2号土坑
606.64m
第3号土坑
606.64m
第4号土坑
69住
7住
606.84m
第5号土坑
606.74m
第9号土坑
16住
P91
606.74m
第6号土坑
第7号土坑
A
A'
B
B'
606.84m
606.74m
第11号土坑
606.74m
第15号土坑
1溝
606.94m
第10号土坑
16住
606.84m
第12号土坑
P234
P235
3溝
A
A'
B
B'
607.14m
0
2 m

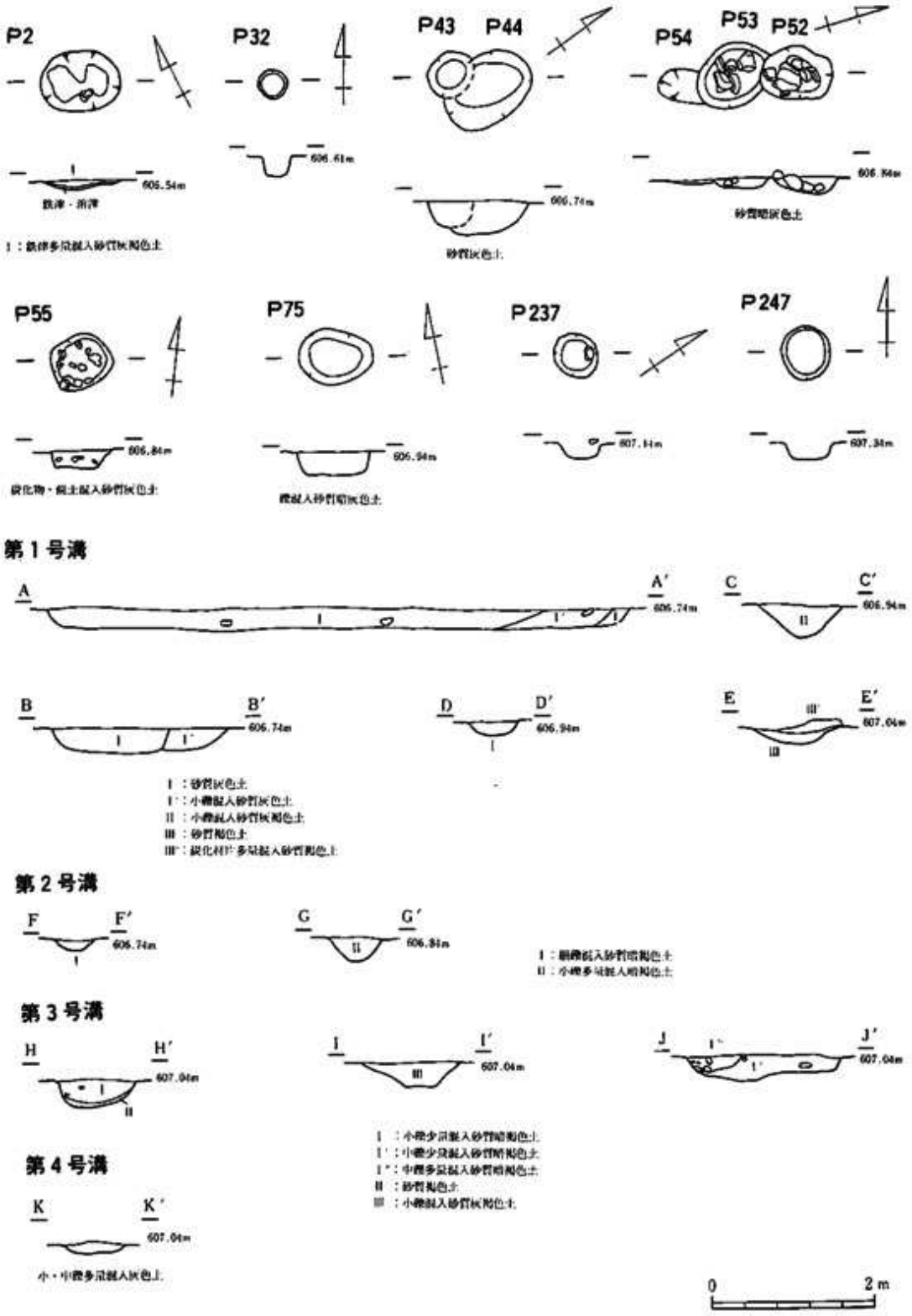
第41図　土坑　(2)


第30号土坑
A
A′
A
A′
606.74m
砂質灰色土
第31号土坑
B
B
B
B′
606.74m
小礫混入砂質灰色土
第19号土坑
606.94m
砂質灰色土
第20号土坑
19住
606.94m
茶褐色土粒・小礫混入砂質灰褐色土
第16号土坑
C
C′
C
C′
606.84m
炭化材多量混入砂質灰褐色土
第22号土坑
606.94m
小礫混入砂質灰色土
第23号土坑
607.14m
炭化物多量混入砂質灰色土
第17号土坑
606.64m
砂質灰色土
第25号土坑
83住
4溝
606.84m
茶褐色土塊・小礫多量混入灰褐色土
第26号土坑
29住
607.34m
Ⅰ：砂質灰色土
Ⅱ：礫（φ5～10cm）混入砂質灰色土
第27号土坑
P228
607.04m
Ⅰ：砂質灰色土
Ⅱ：礫（φ1～3cm）混入Ⅰ層
第28号土坑
607.04m
礫（φ3～5cm）混入灰色土
第29号土坑
53住
33住
606.84m
礫混入砂質灰色土
第32号土坑
606.94m
茶褐色土塊少量混入砂質灰色土
0
2 m

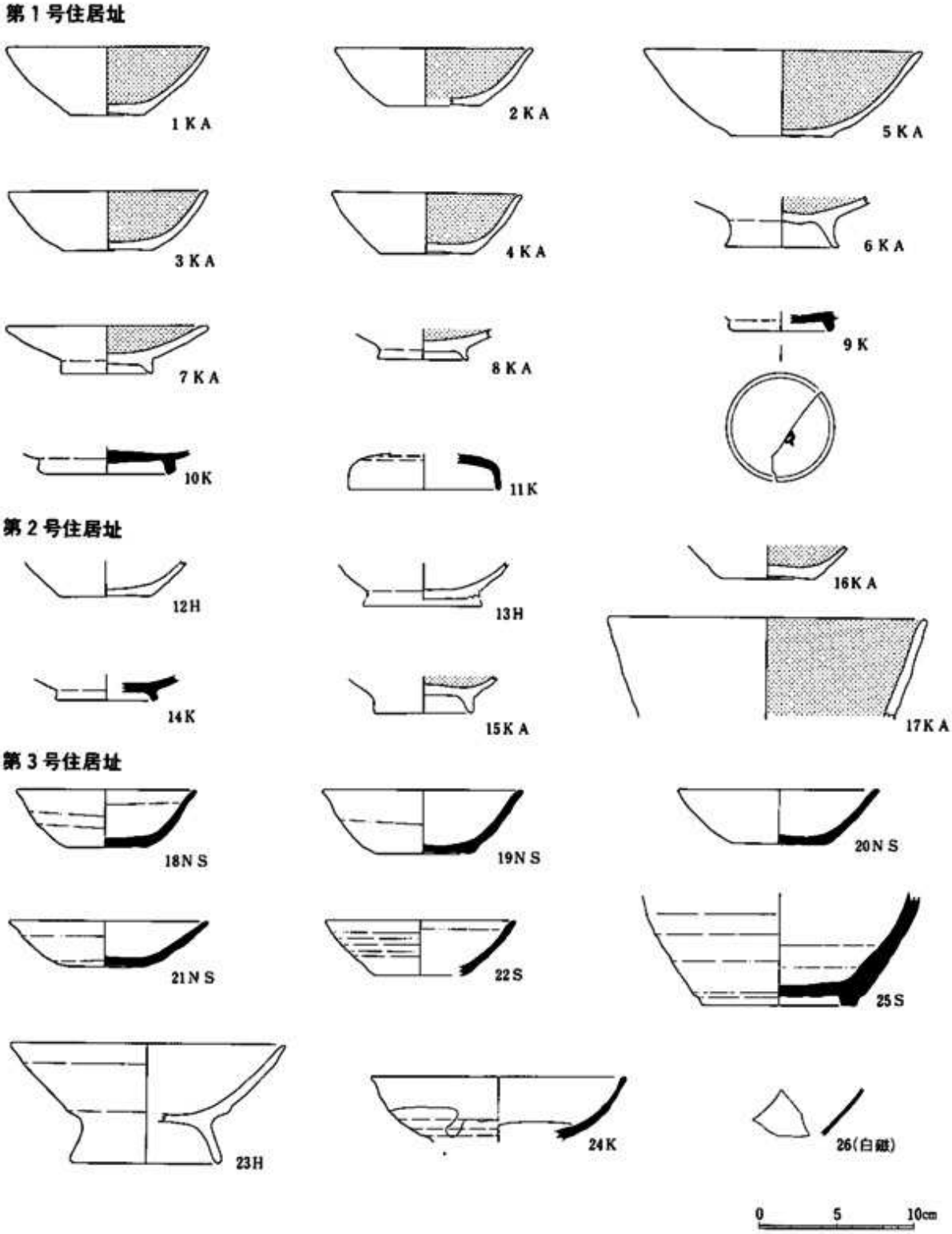
第42図　土坑（3）



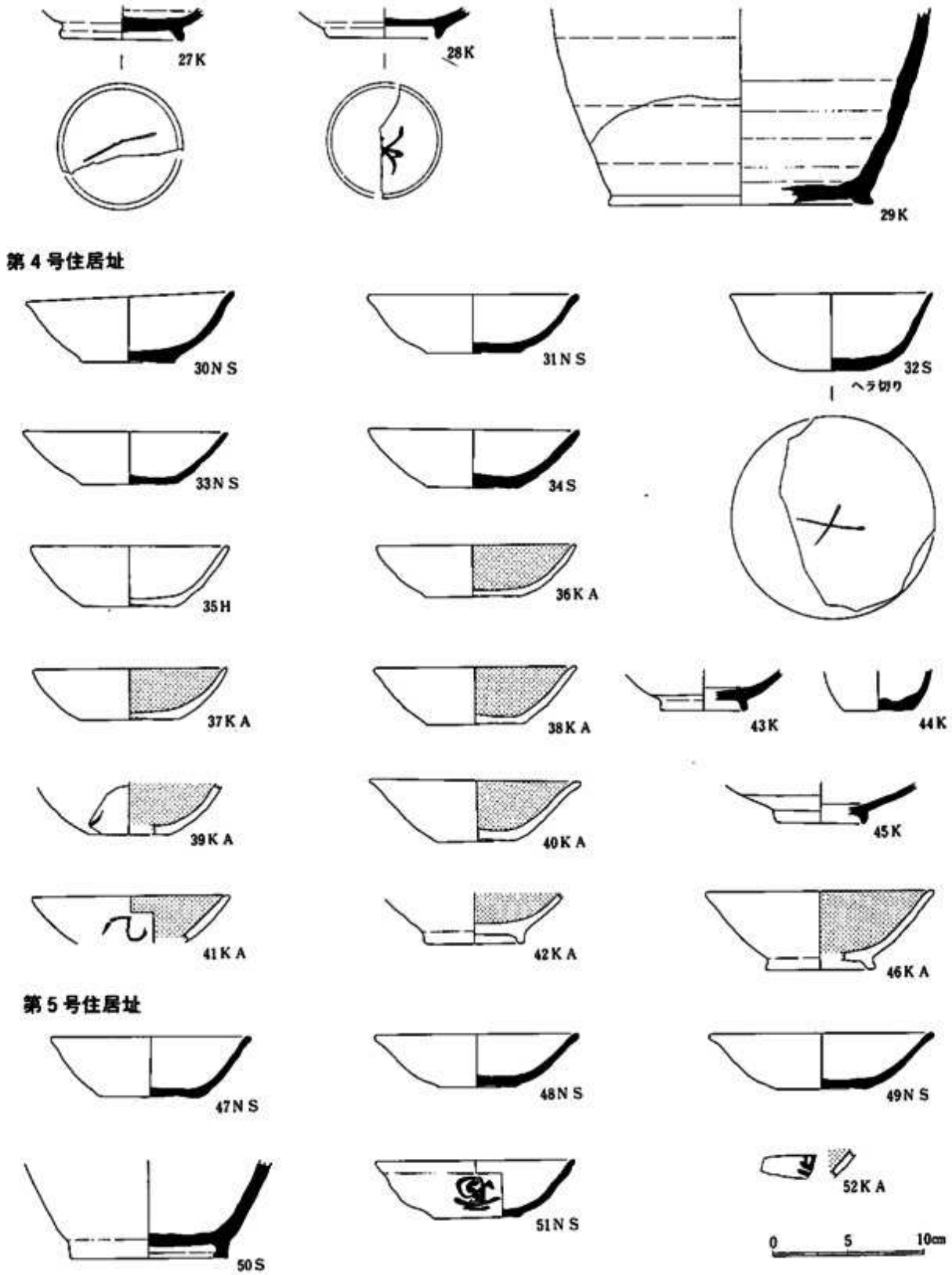
第43図　土坑（4）・ピット（1）


P2
P32
P43
P44
P53
P52
P54
P55
P75
P237
P247
606.54m
606.61m
606.74m
606.84m
606.94m
607.04m
607.34m
第1号溝
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
606.74m
606.94m
607.04m
第2号溝
F
F′
G
G′
606.74m
606.84m
第3号溝
H
H′
I
I′
J
J′
607.04m
第4号溝
K
K′
607.04m
0
2 m

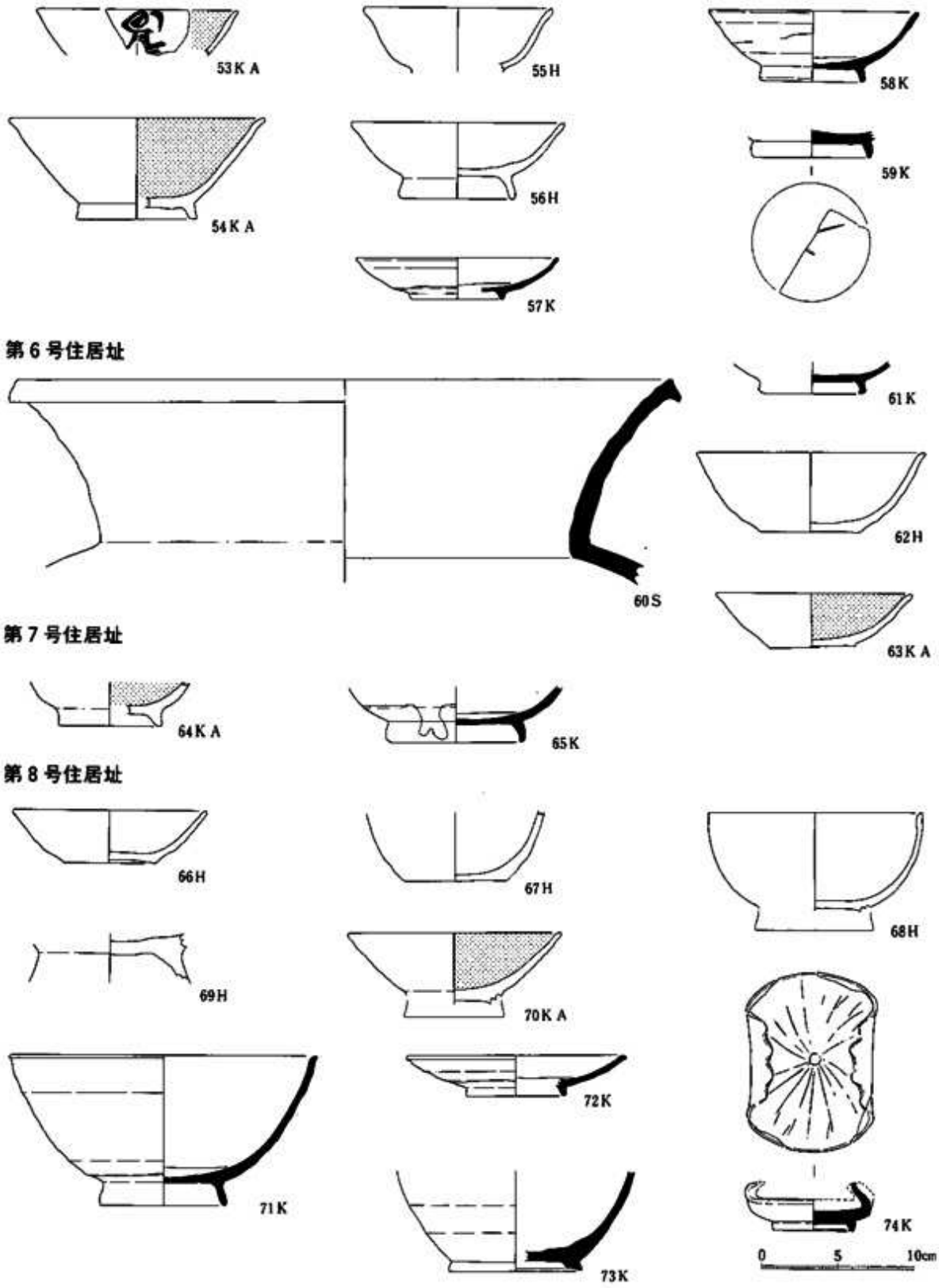
第44図　ピット　(2)・溝址


第１号住居址
1KA
2KA
5KA
3KA
4KA
6KA
7KA
8KA
9K
10K
11K
第２号住居址
12H
13H
16KA
14K
15KA
17KA
第３号住居址
18NS
19NS
20NS
21NS
22S
25S
23H
24K
26(白磁)
0
5
10cm

第45図　出土土器（1）

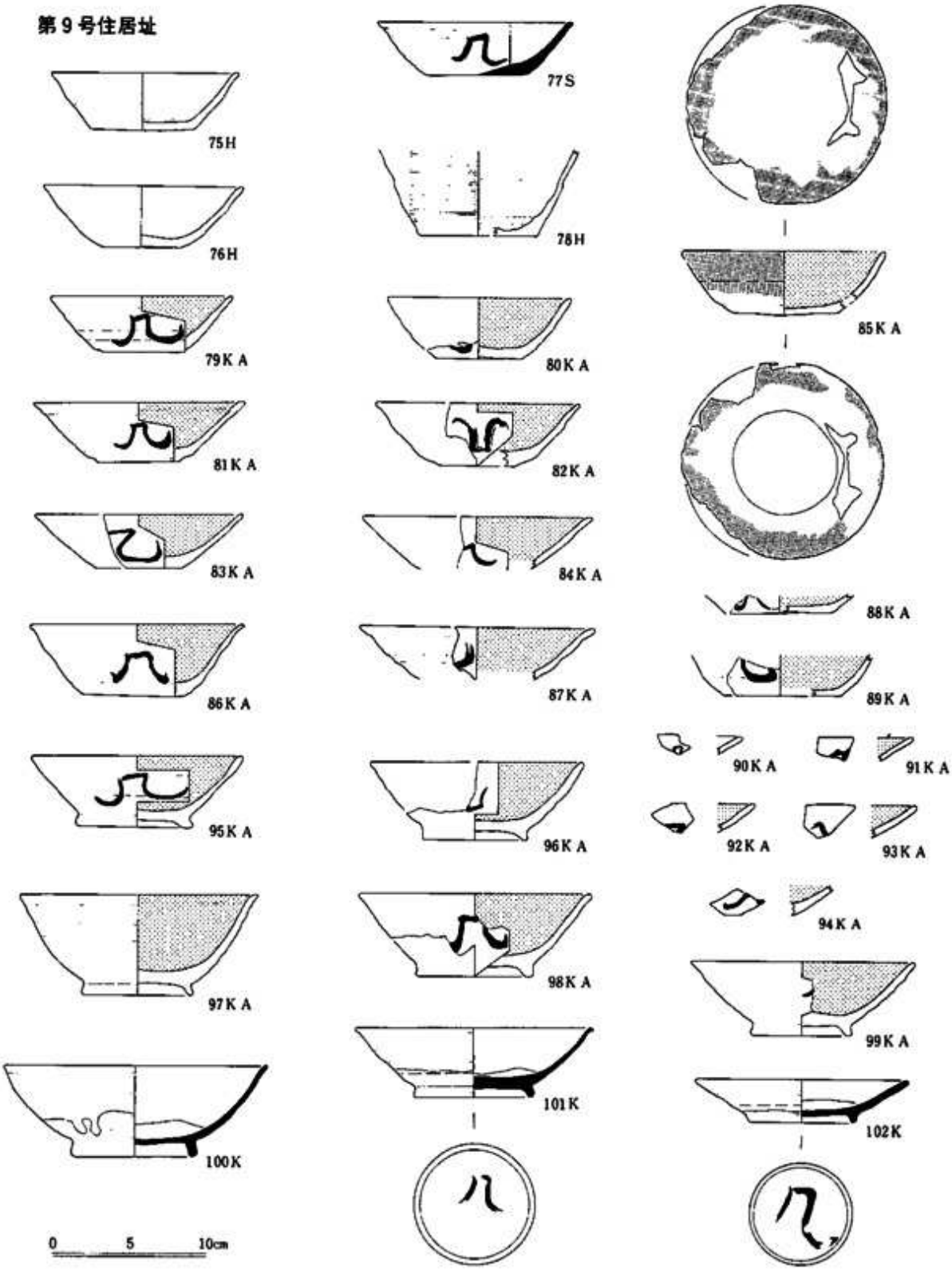

27K
28K
29K
第4号住居址
30NS
31NS
32S
ヘラ切り
33NS
34S
35H
36KA
37KA
38KA
43K
44K
39KA
40KA
45K
41KA
42KA
46KA
第5号住居址
47NS
48NS
49NS
50S
51NS
52KA
0
5
10cm

第46図　出土土器（2）

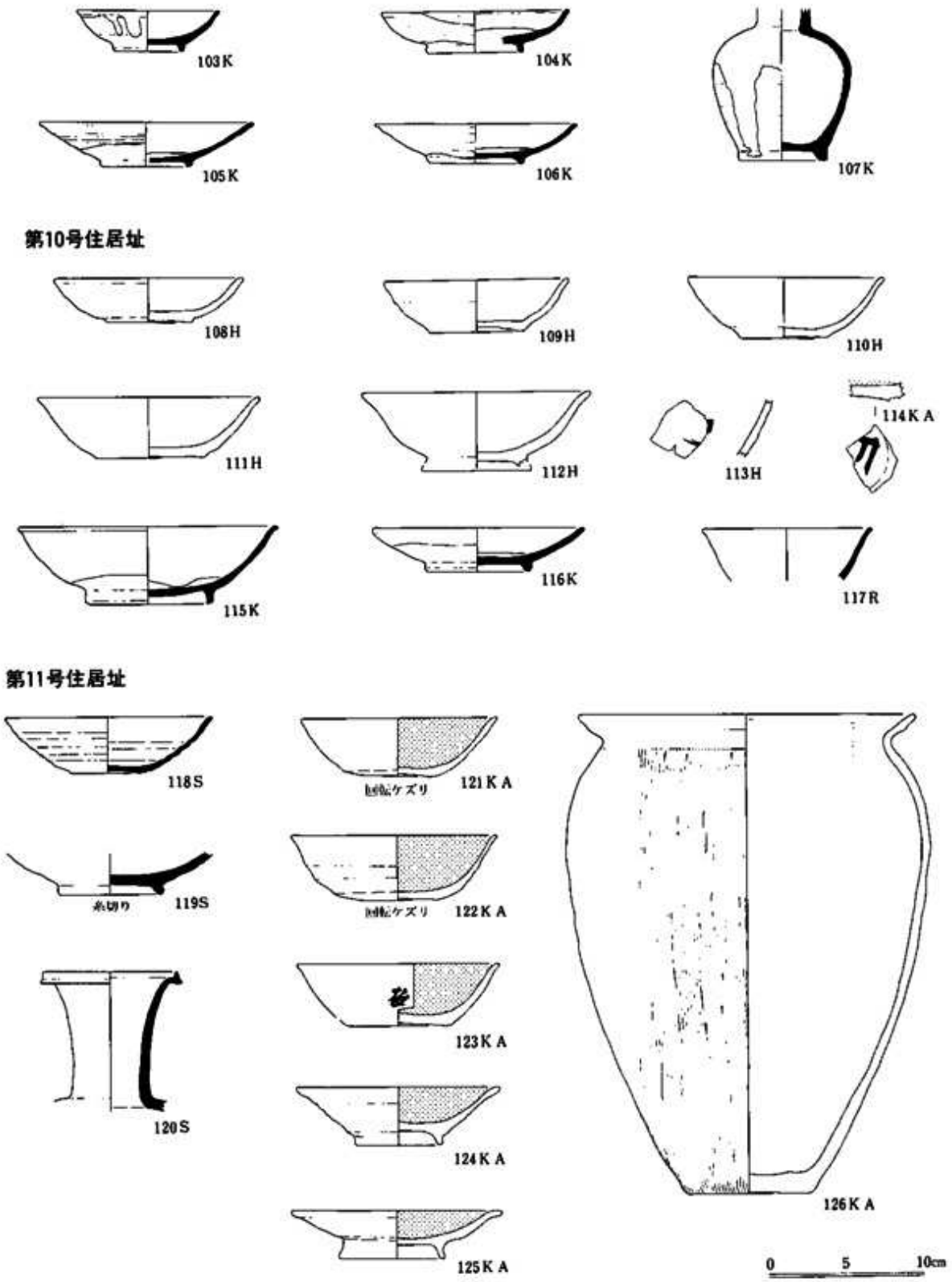

53K A
55H
58K
54K A
56H
59K
57K
第6号住居址
61K
60S
62H
63K A
第7号住居址
64K A
65K
第8号住居址
66H
67H
68H
69H
70K A
72K
71K
74K
73K
0
5
10cm

第47図　出土土器 (3)

第９号住居址

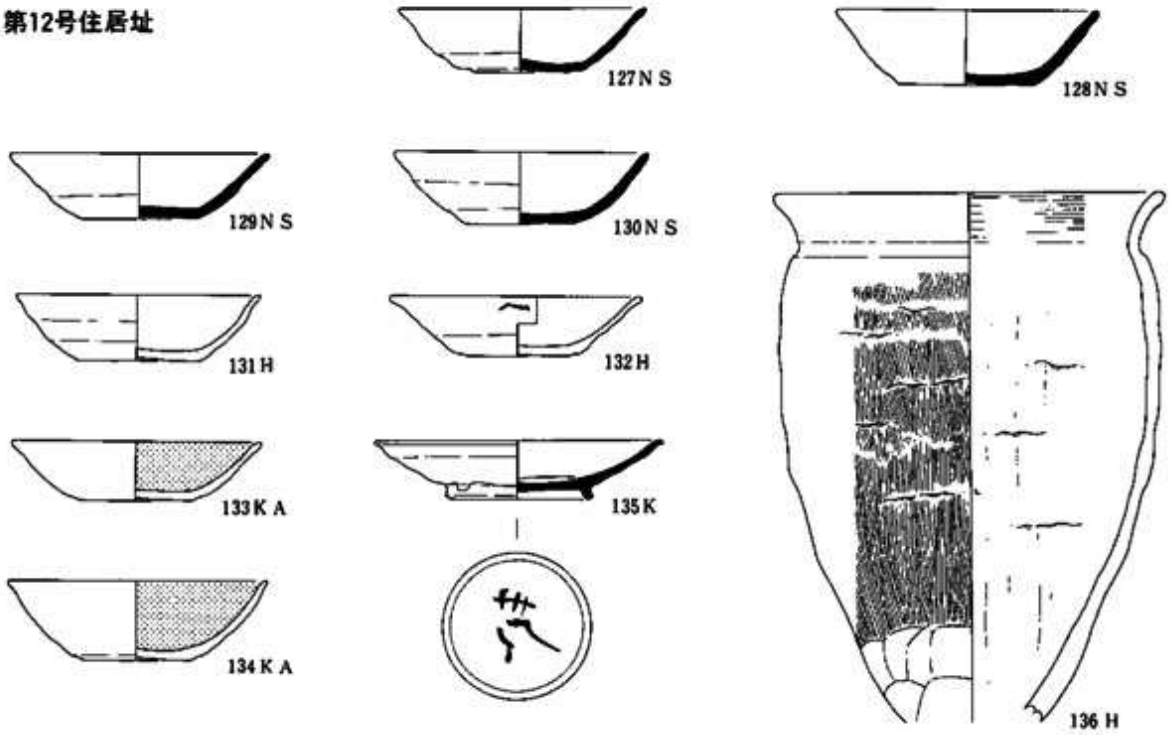


第48図　出土土器（4）

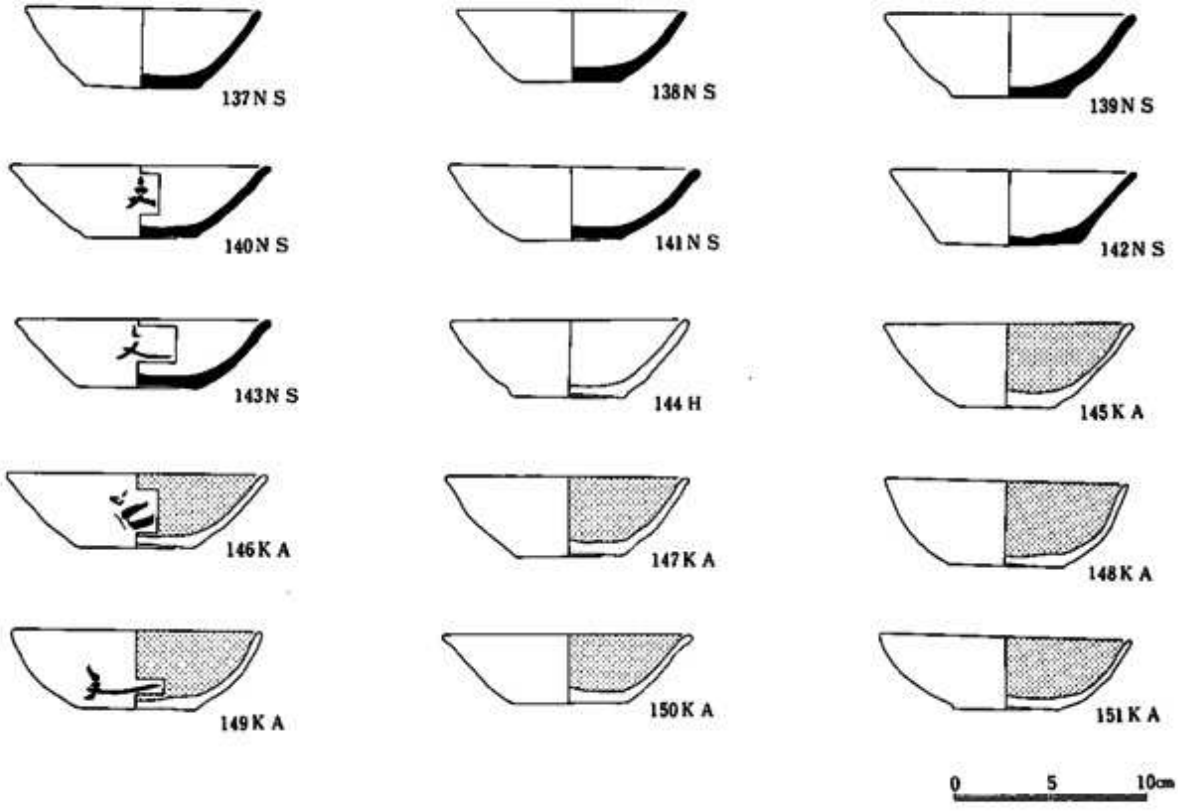

103K
104K
105K
106K
107K
第10号住居址
108H
109H
110H
111H
112H
113H
114KA
115K
116K
117R
第11号住居址
118S
119S
糸切り
120S
121KA
回転ケズリ
122KA
回転ケズリ
123KA
124KA
125KA
126KA
0
5
10cm

第49図　出土土器　(5)

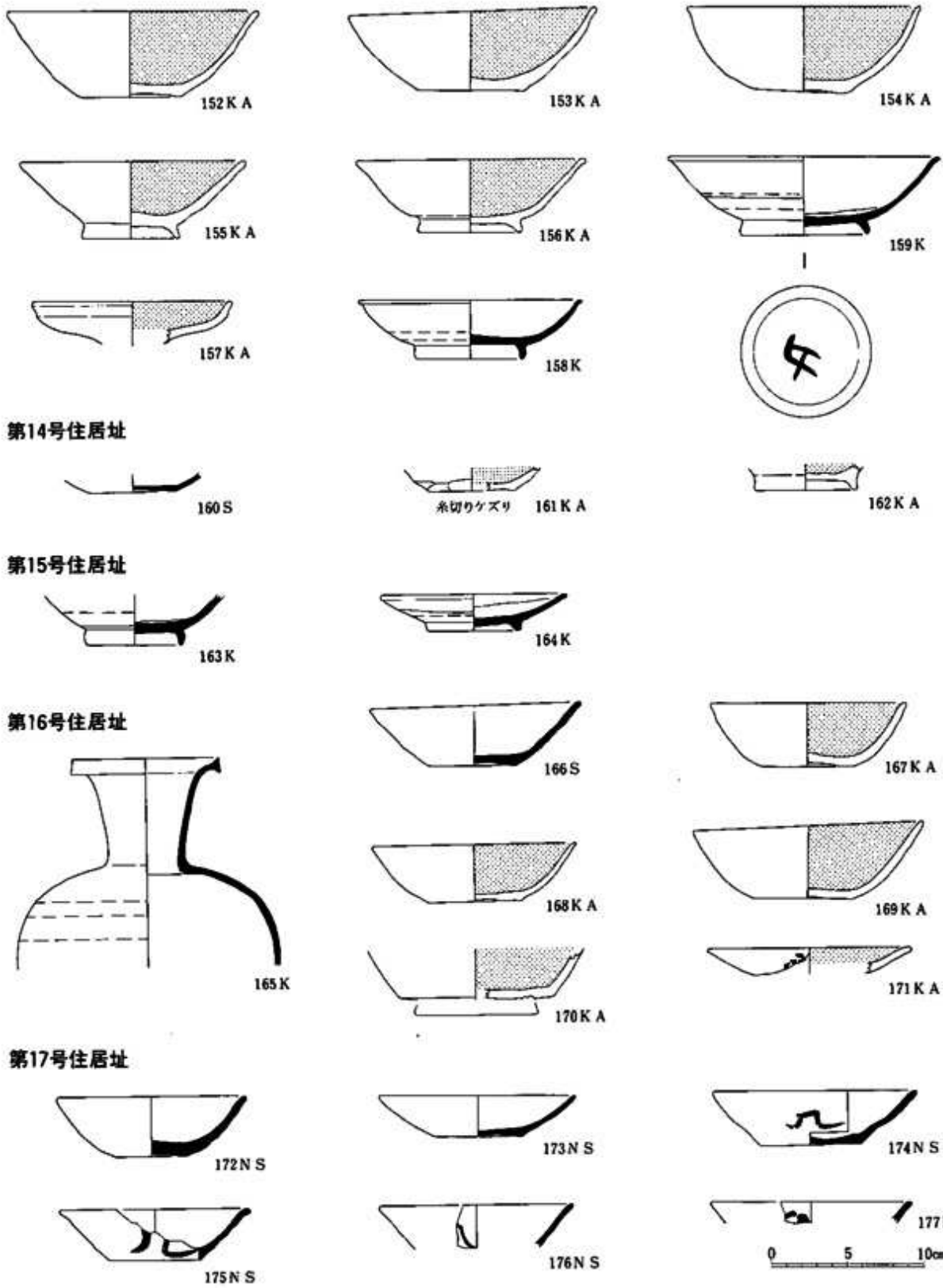
第12号住居址



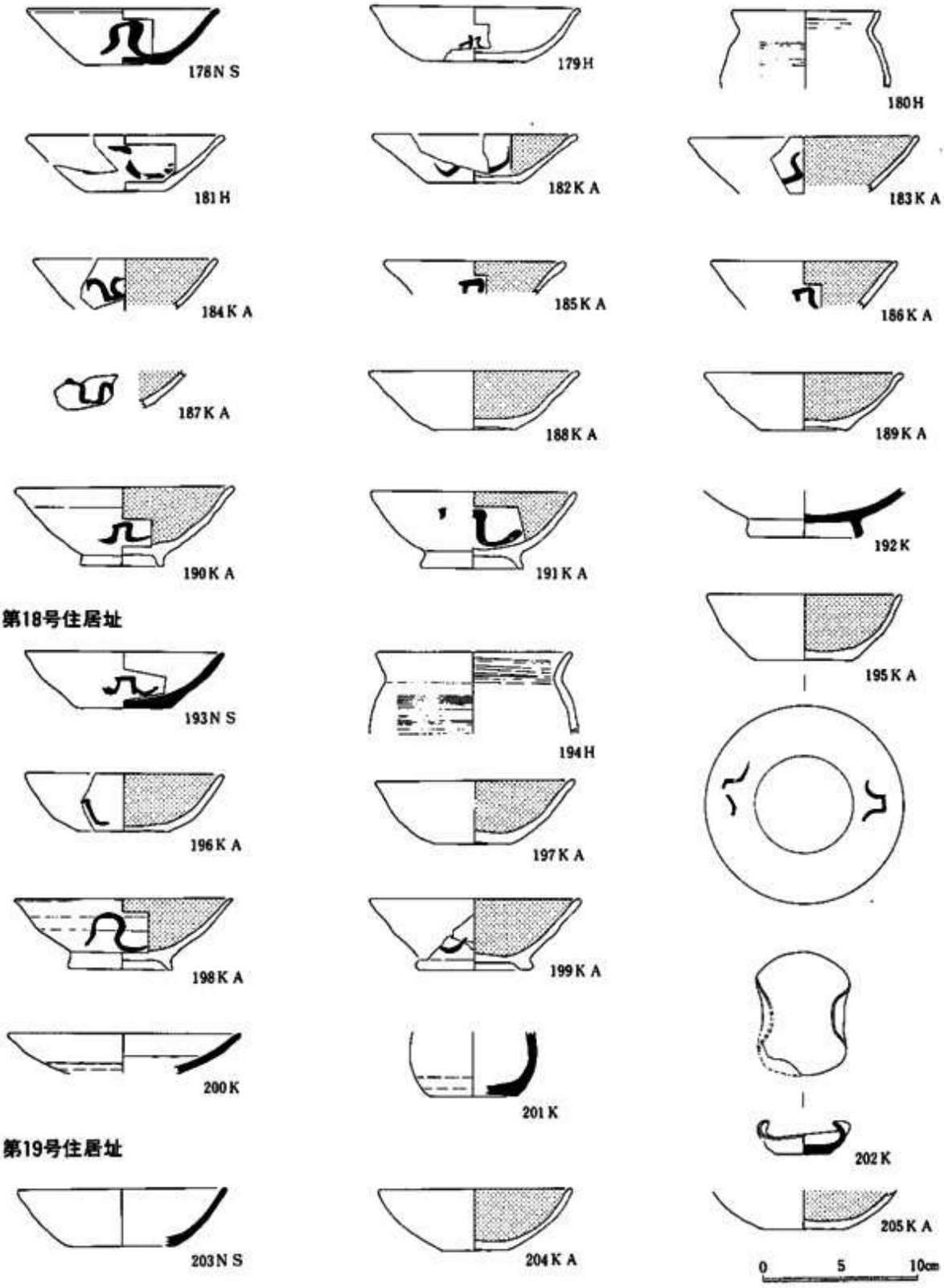
第13号住居址



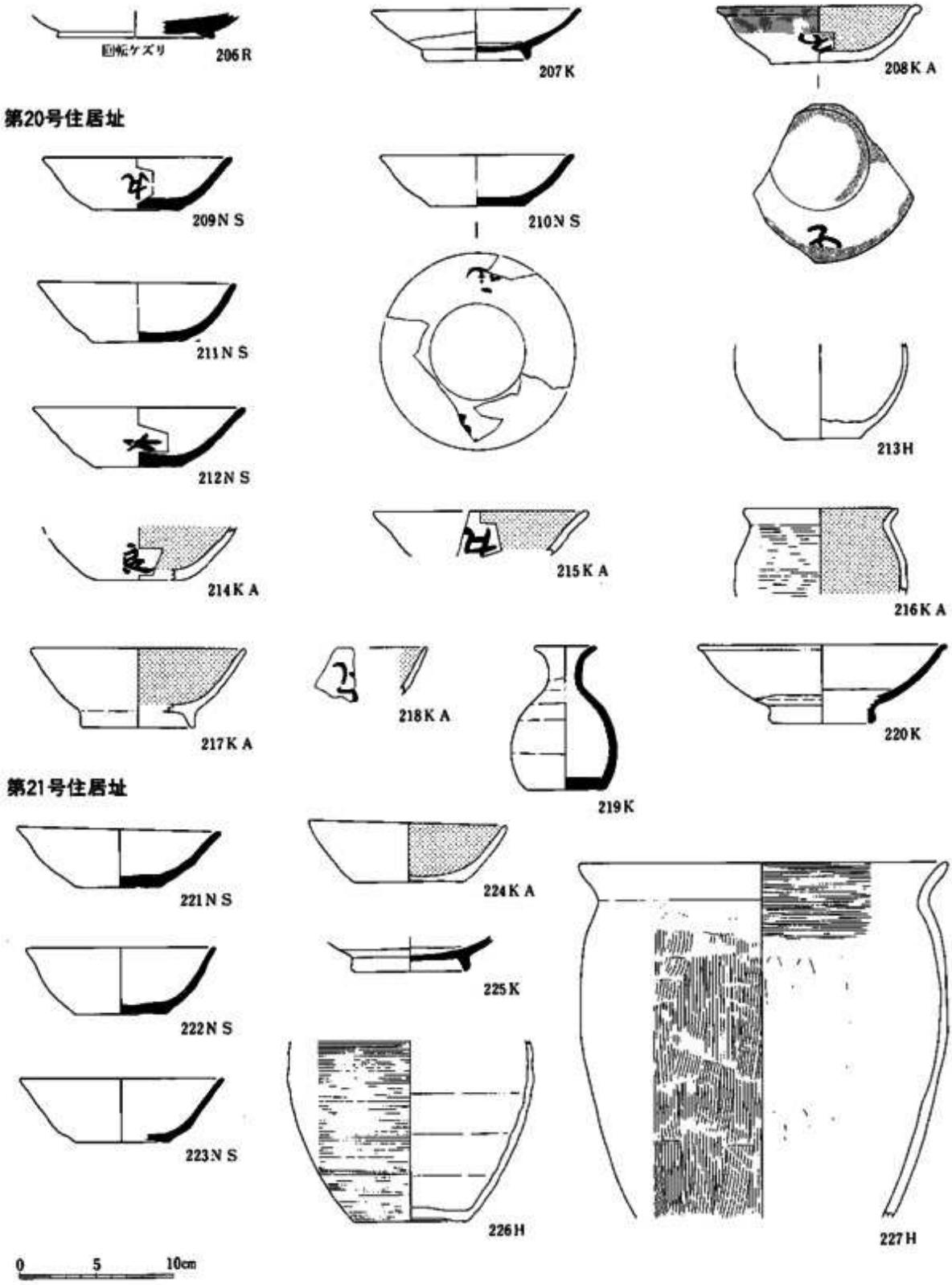
第50図　出土土器 (6)


152K A
153K A
154K A
155K A
156K A
159K
157K A
158K
第14号住居址
160S
糸切りケズリ 161K A
162K A
第15号住居址
163K
164K
第16号住居址
166S
167K A
165K
168K A
169K A
170K A
171K A
第17号住居址
172N S
173N S
174N S
175N S
176N S
177N S
0 5 10cm

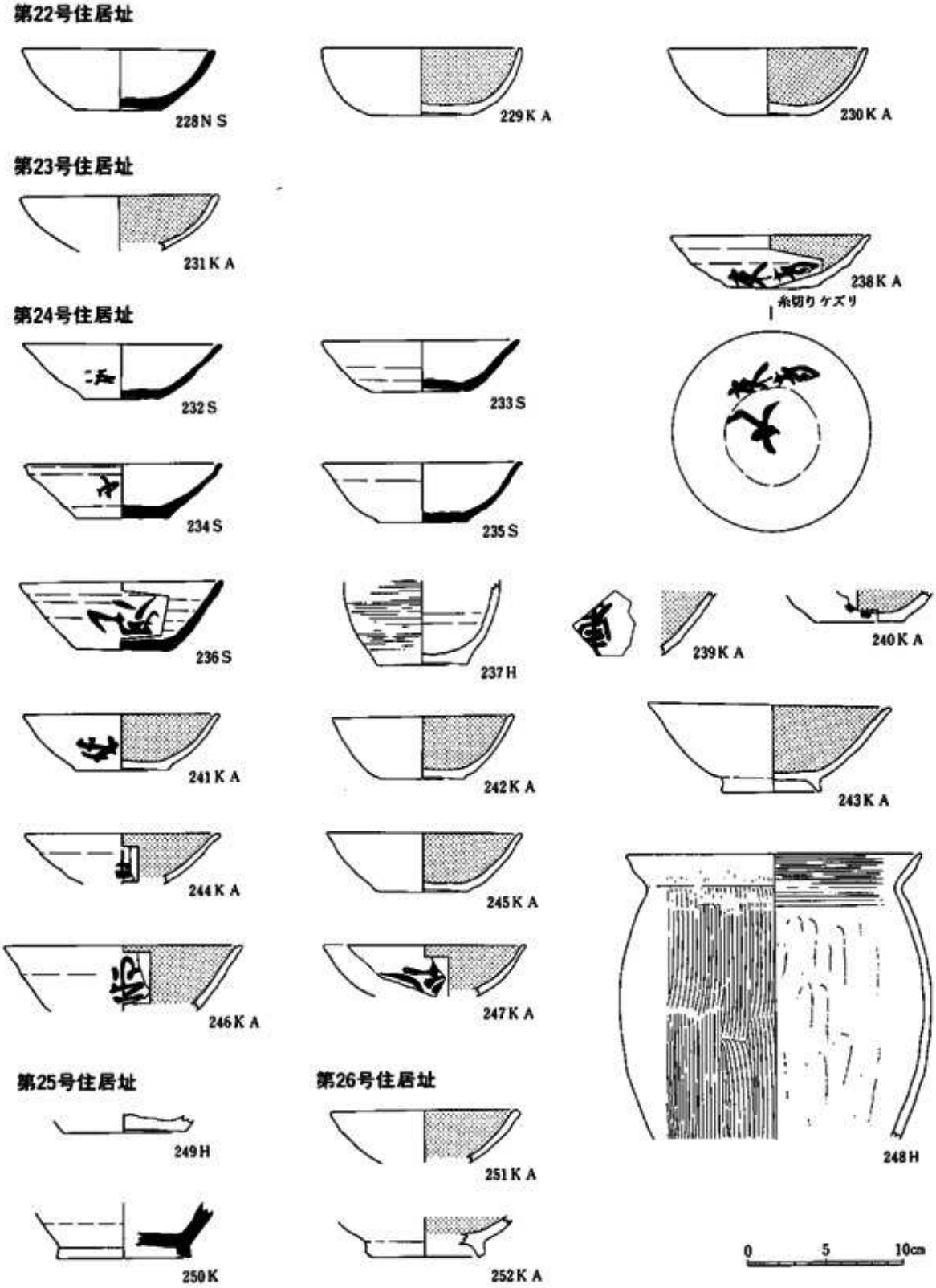
第51図　出土土器 (7)


178N S
179H
180H
181H
182K A
183K A
184K A
185K A
186K A
187K A
188K A
189K A
190K A
191K A
192K
第18号住居址
193N S
194H
195K A
196K A
197K A
198K A
199K A
200K
201K
202K
第19号住居址
203N S
204K A
205K A
0
5
10cm

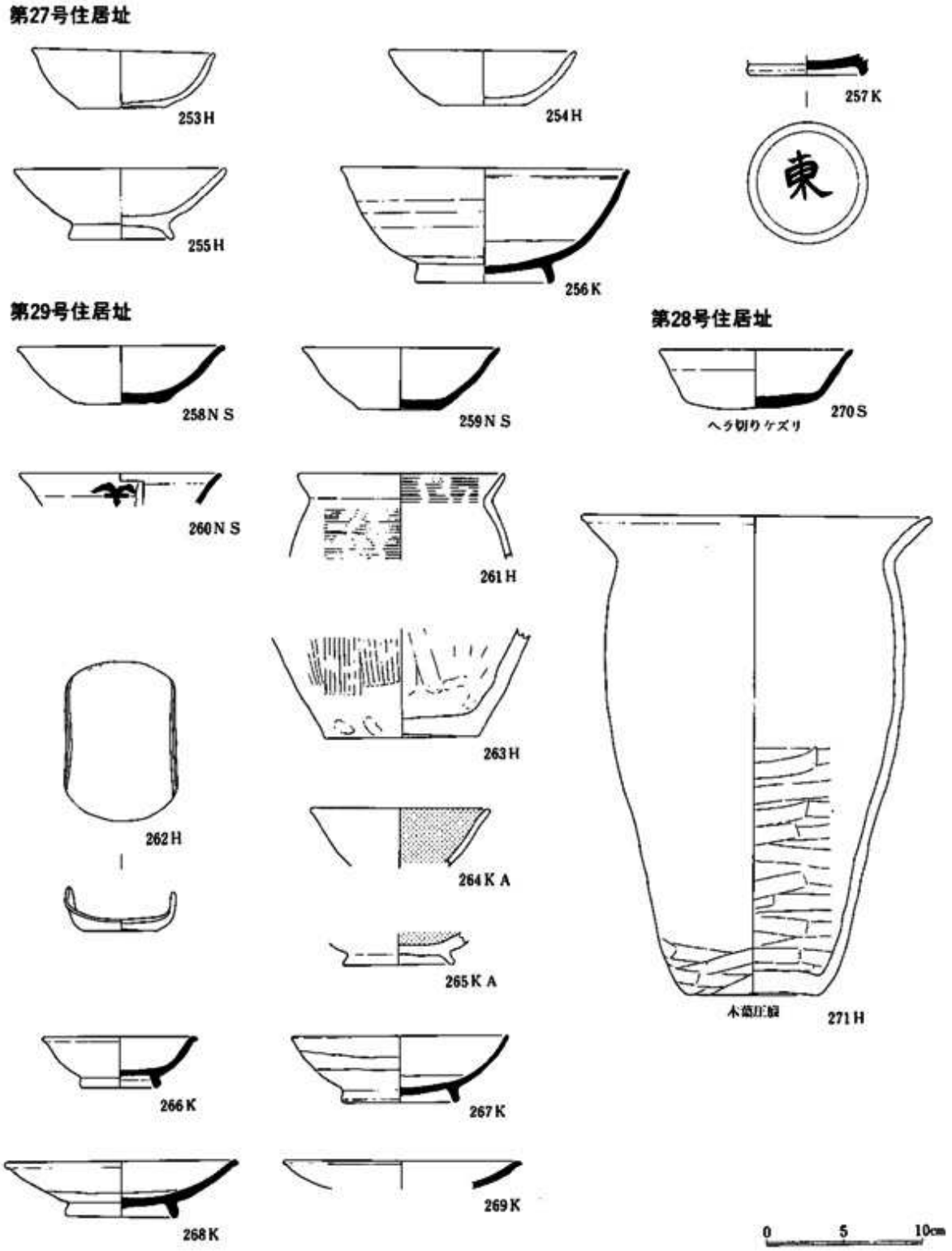
第52図　出土土器 (8)


回転ケズリ
206R
207K
208KA
第20号住居址
209NS
210NS
211NS
212NS
213H
214KA
215KA
216KA
217KA
218KA
219K
220K
第21号住居址
221NS
222NS
223NS
224KA
225K
226H
227H
0 5 10cm

第53図　出土土器 (9)

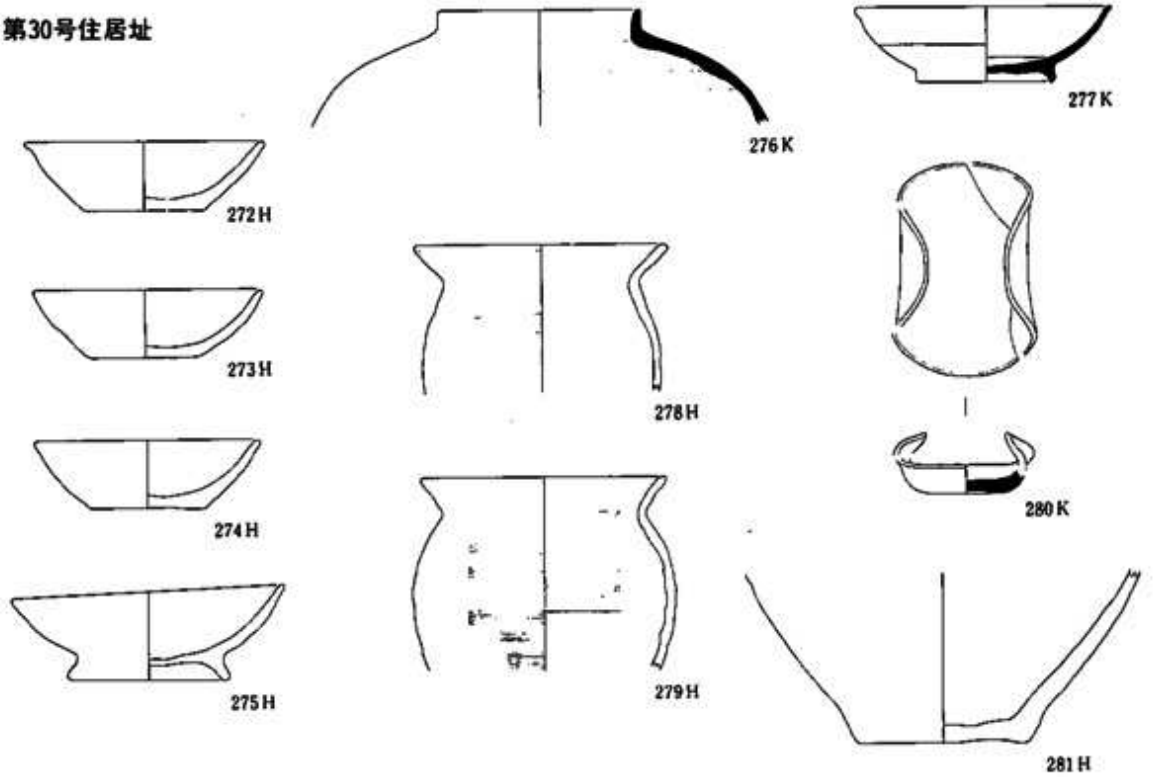

第22号住居址
228N S
229K A
230K A
第23号住居址
231K A
238K A
糸切りケズリ
第24号住居址
232S
233S
234S
235S
236S
237H
239K A
240K A
241K A
242K A
243K A
244K A
245K A
246K A
247K A
248H
第25号住居址
249H
250K
第26号住居址
251K A
252K A
0
5
10cm

第54図　出土土器 (10)

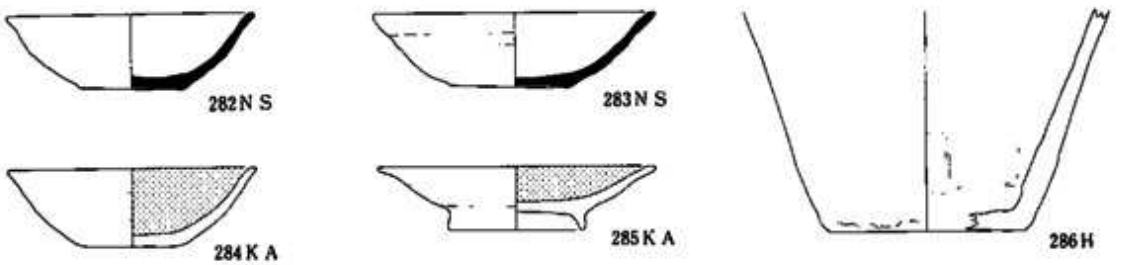

第27号住居址
253H
254H
257K
東
255H
256K
第29号住居址
第28号住居址
258NS
259NS
270S
へラ切りケズリ
260NS
261H
263H
262H
264KA
265KA
木葉圧痕
271H
266K
267K
268K
269K
0
5
10cm

第55図　出土土器 (11)

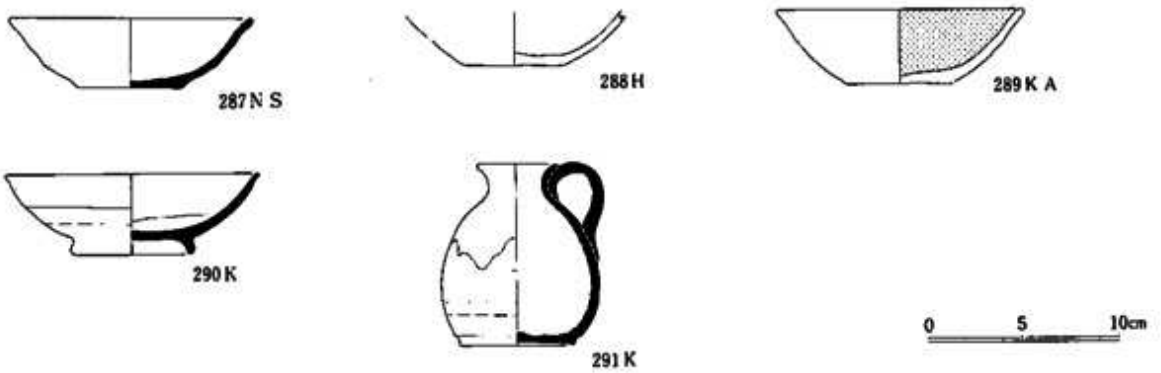
第30号住居址



第31号住居址

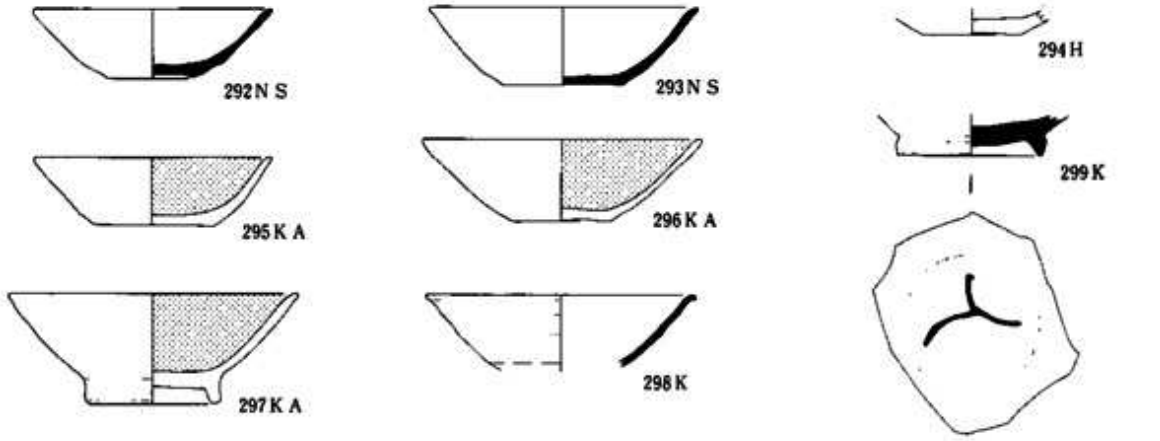


第32号住居址

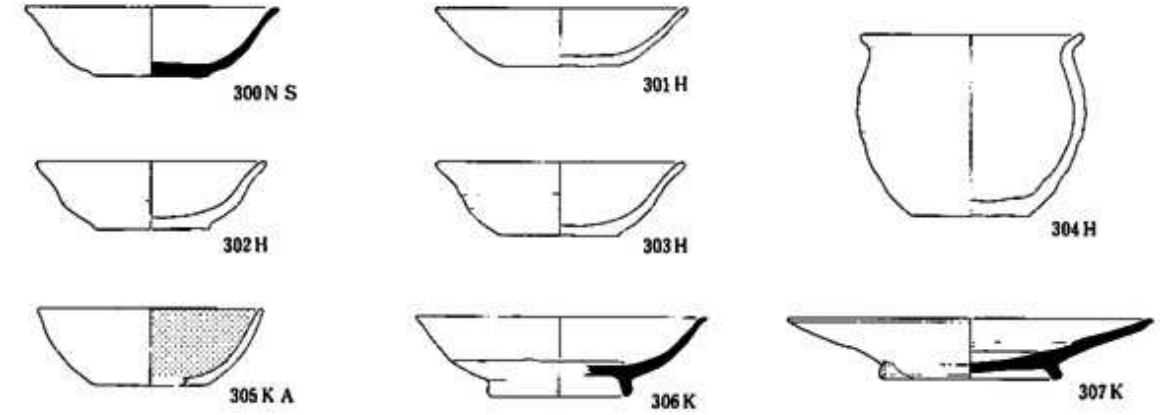


第56図　出土土器 (12)

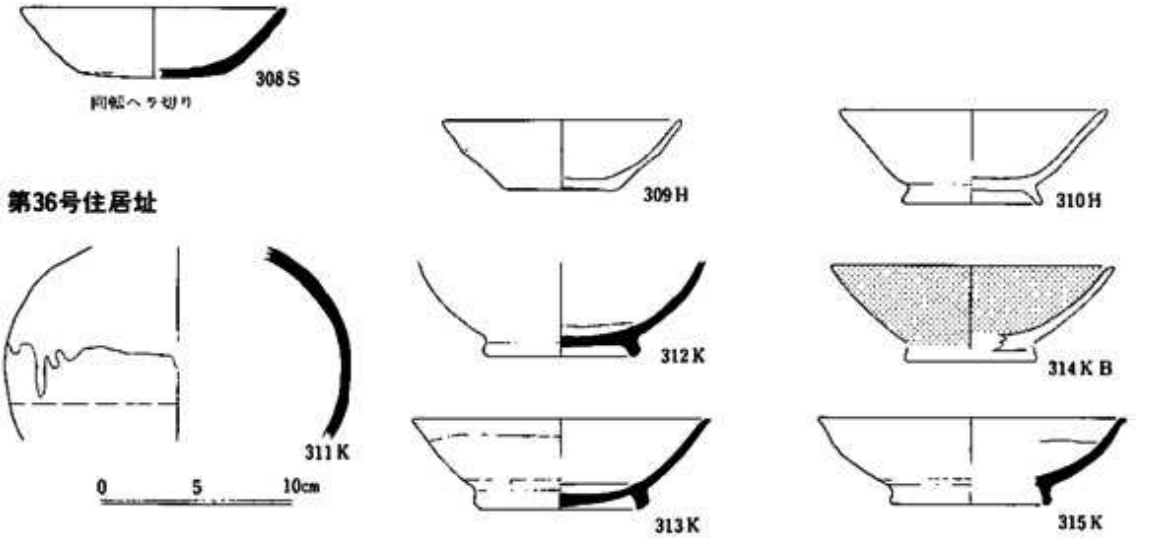
第33号住居址



第34号住居址

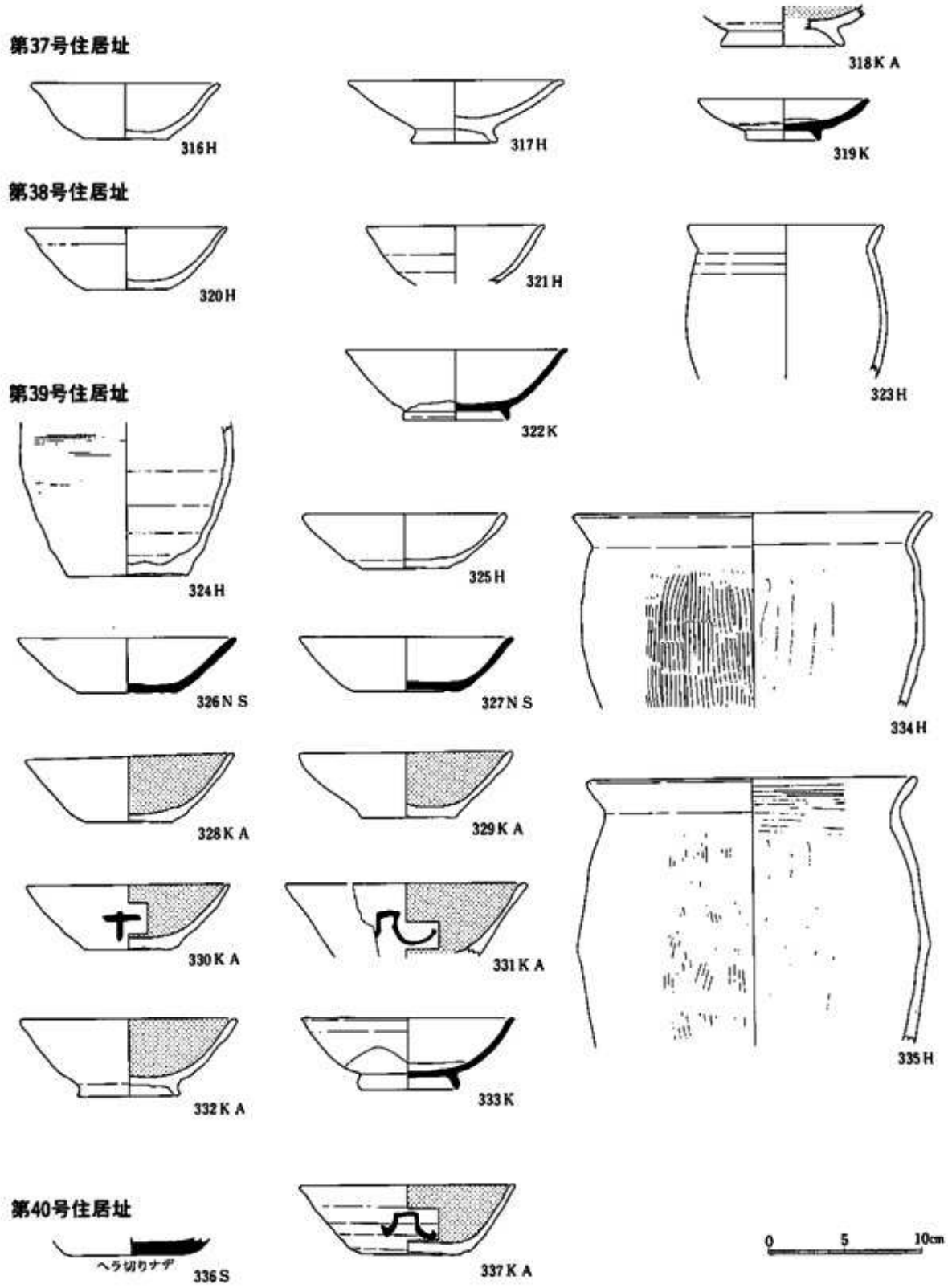


第35号住居址

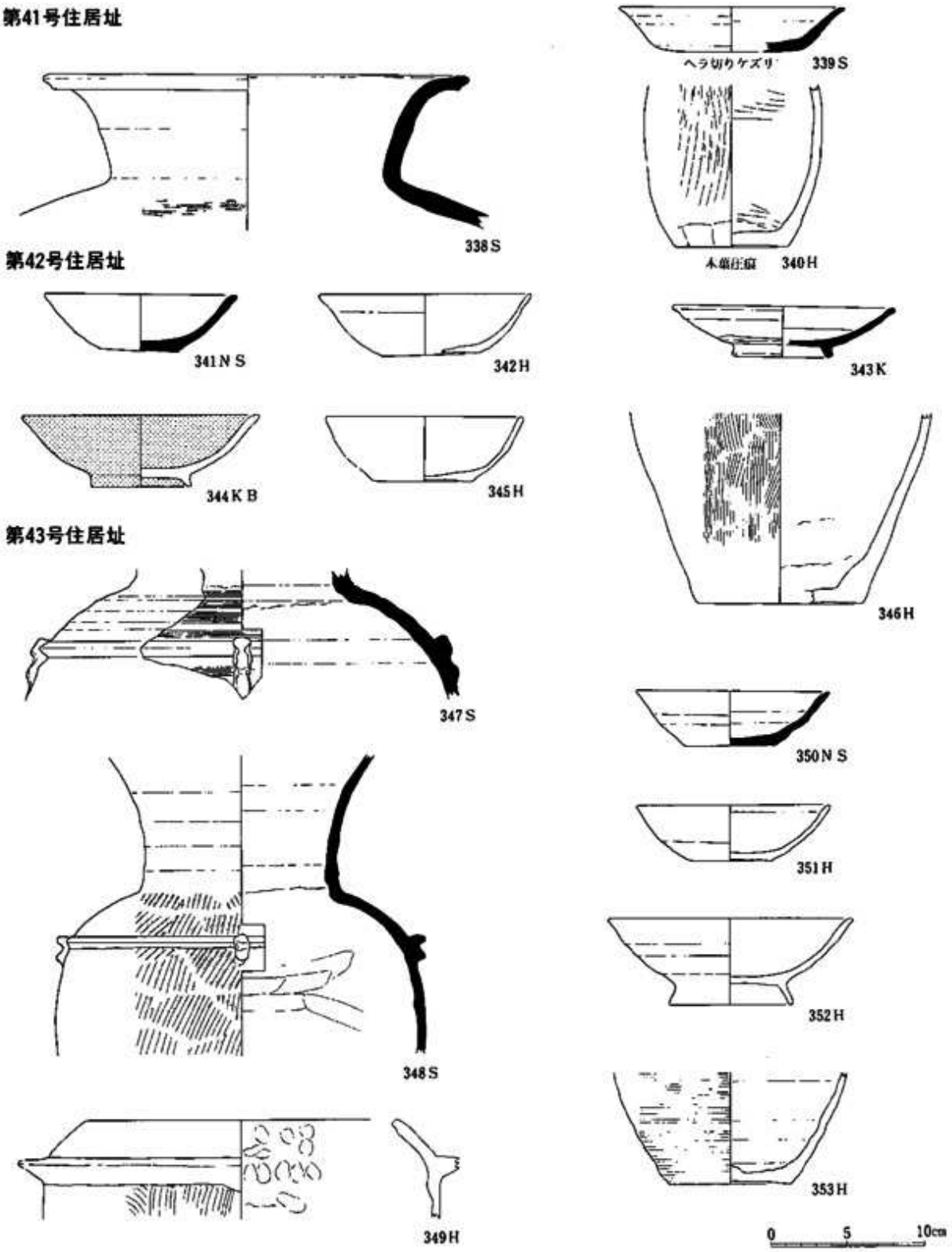


第36号住居址

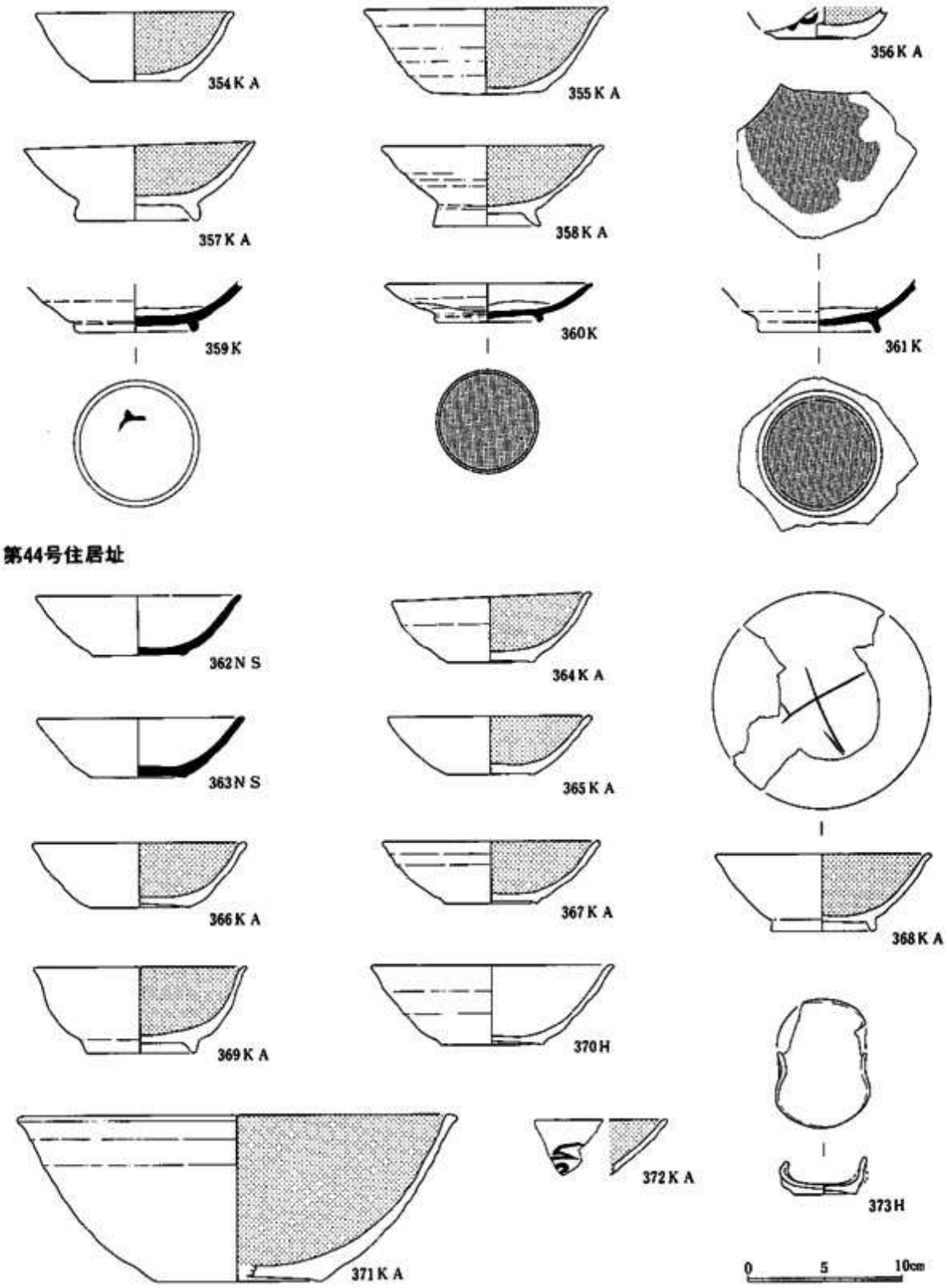
第57図　出土土器 (13)


第37号住居址
318K A
316H
317H
319K
第38号住居址
320H
321H
323H
322K
第39号住居址
324H
325H
334H
326N S
327N S
328K A
329K A
330K A
331K A
335H
332K A
333K
第40号住居址
へラ切りナデ
336S
337K A
0
5
10cm

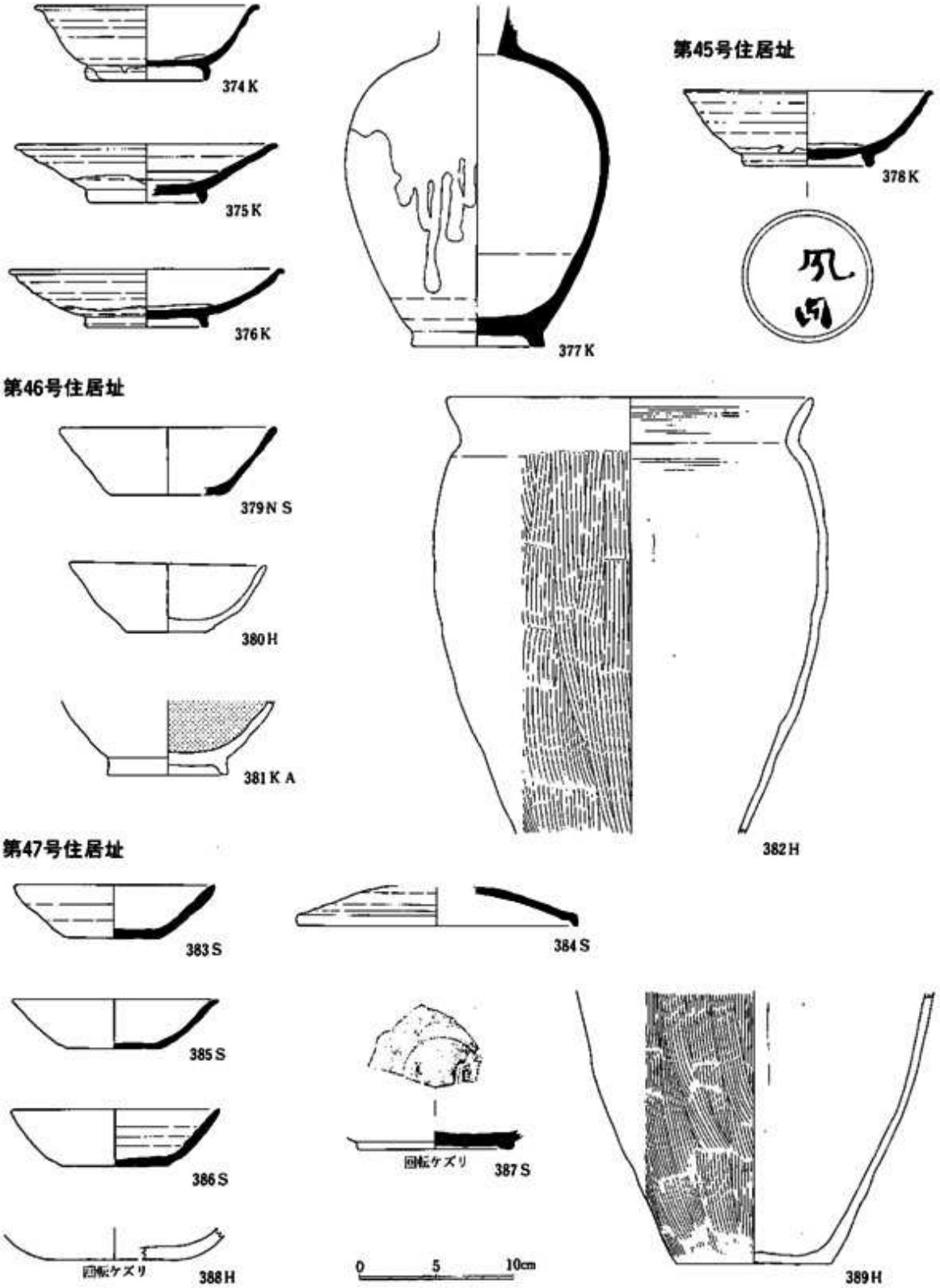
第58図　出土土器 (14)


第41号住居址
338S
339S
ヘラ切りケズリ
340H
本葉圧痕
第42号住居址
341NS
342H
343K
344KB
345H
346H
第43号住居址
347S
348S
349H
350NS
351H
352H
353H
0
5
10cm

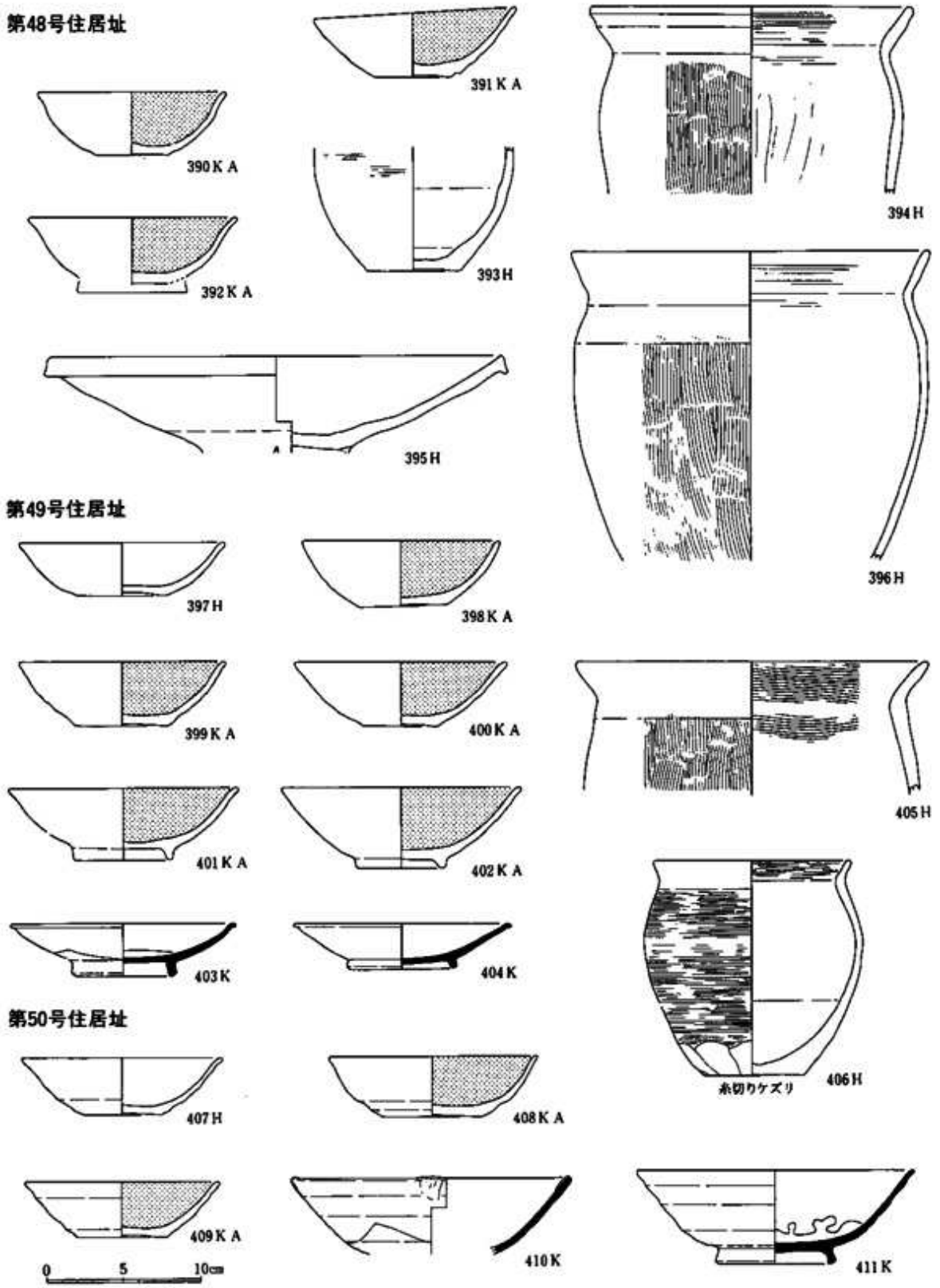
第59図　出土土器 (15)


354 K A
355 K A
356 K A
357 K A
358 K A
359 K
360 K
361 K
第44号住居址
362 N S
363 N S
364 K A
365 K A
366 K A
367 K A
368 K A
369 K A
370 H
371 K A
372 K A
373 H
0
5
10cm

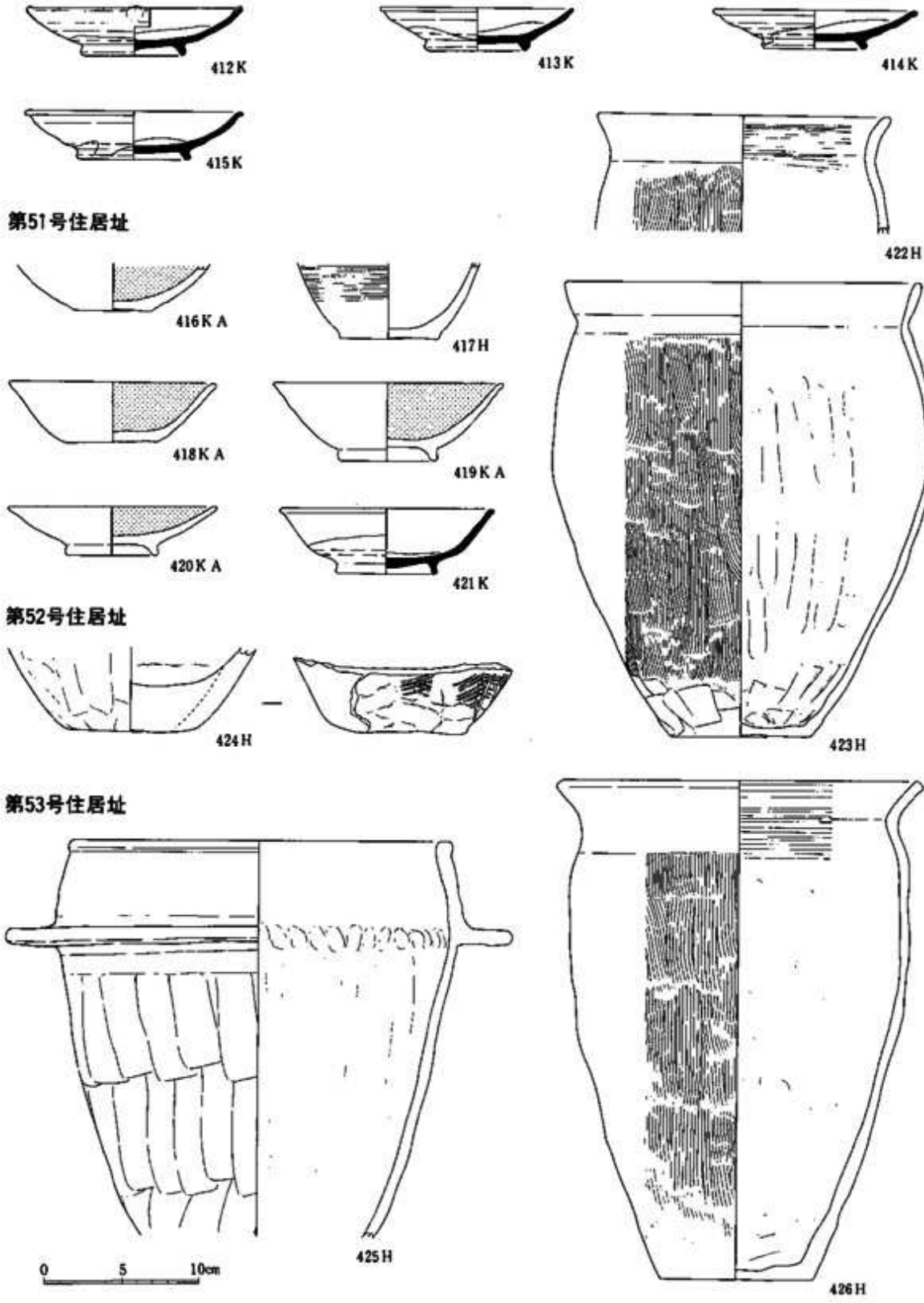
第60図　出土土器 (16)


374K
375K
376K
377K
第45号住居址
378K
第46号住居址
379NS
380H
381KA
382H
第47号住居址
383S
384S
385S
386S
回転ケズリ
388H
回転ケズリ
387S
0 5 10cm
389H

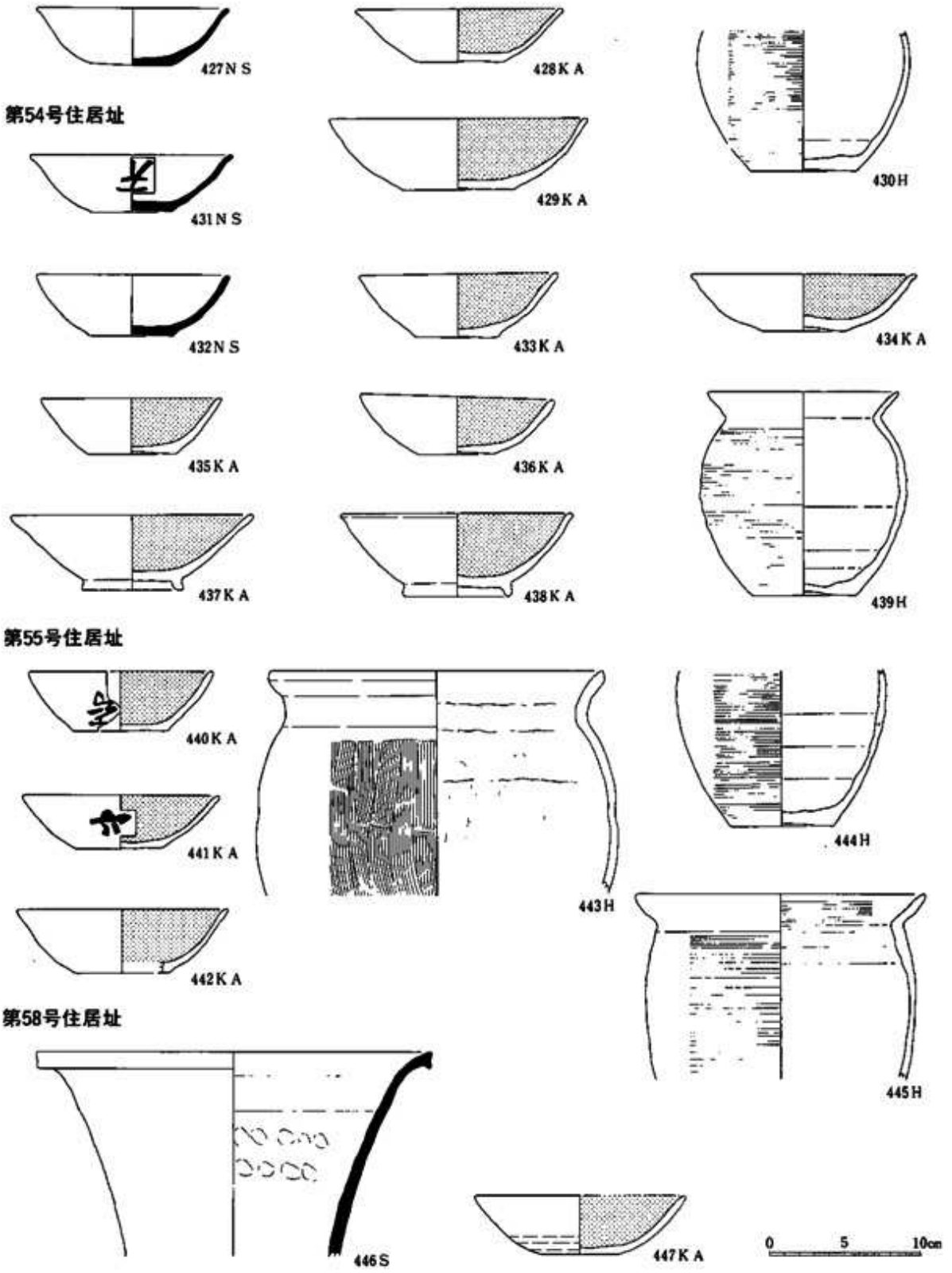
第61図　出土土器 (17)


第48号住居址
391 K A
390 K A
394 H
393 H
392 K A
396 H
395 H
第49号住居址
397 H
398 K A
399 K A
400 K A
405 H
401 K A
402 K A
403 K
404 K
第50号住居址
406 H
糸切りケズリ
407 H
408 K A
409 K A
410 K
411 K
0 5 10cm

第62図　出土土器 (18)

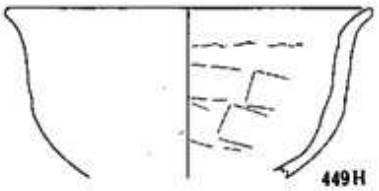

412K
413K
414K
415K
422H
第51号住居址
416KA
417H
418KA
419KA
420KA
421K
423H
第52号住居址
424H
第53号住居址
425H
426H
0 5 10cm

第63図　出土土器 (19)

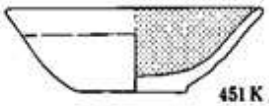

427N S
428K A
430H
第54号住居址
431N S
429K A
432N S
433K A
434K A
435K A
436K A
437K A
438K A
439H
第55号住居址
440K A
441K A
442K A
443H
444H
445H
第58号住居址
446S
447K A
0 5 10cm

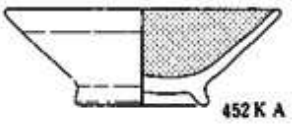
第64図　出土土器 (20)

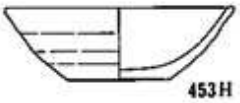
第59号住居址

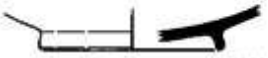


第60号住居址

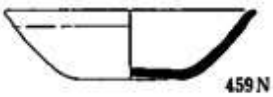


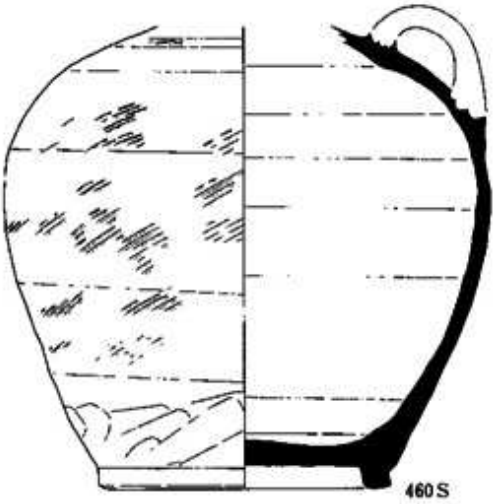


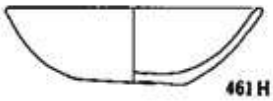


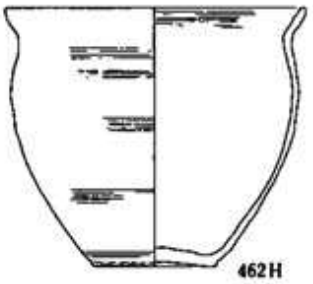


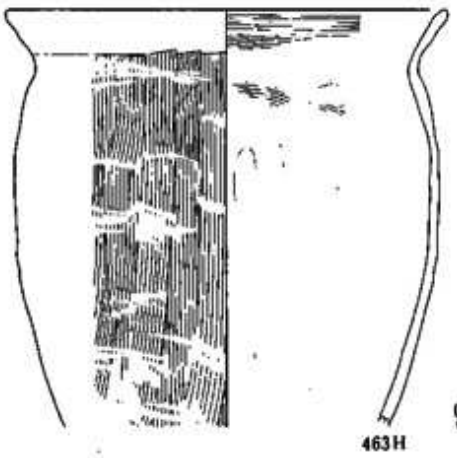
第61号住居址

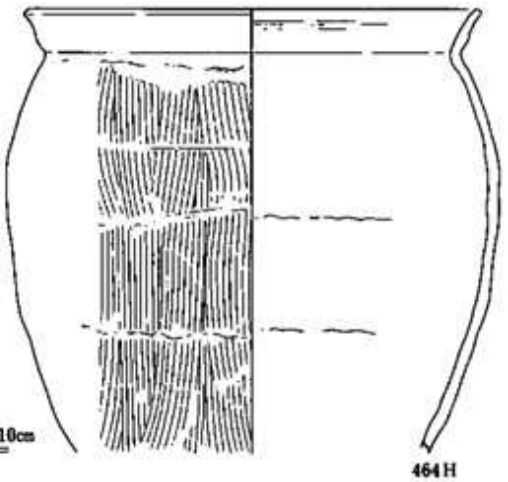




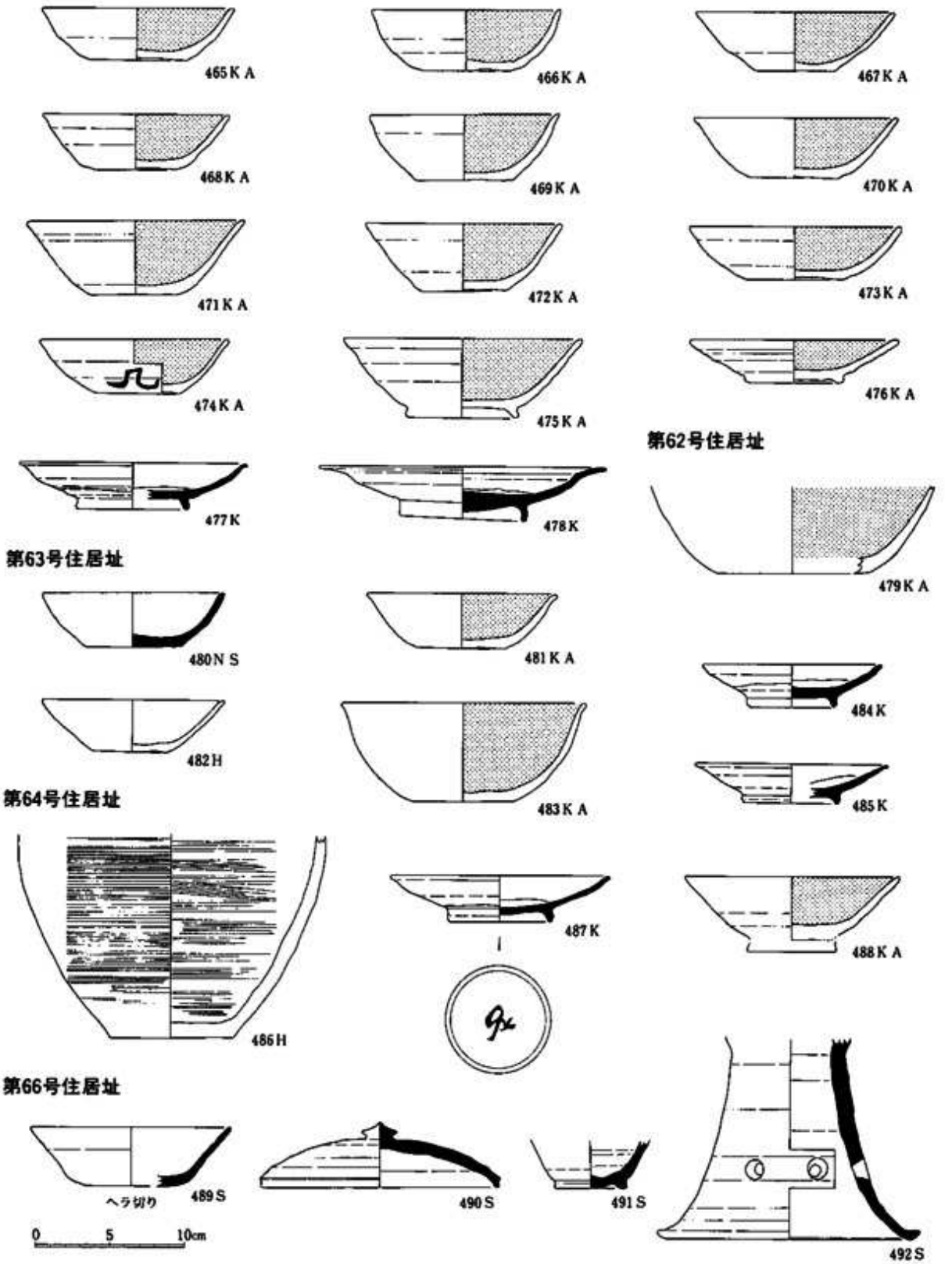






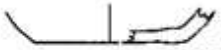


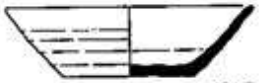
第65図　出土土器 (21)


465K A
466K A
467K A
468K A
469K A
470K A
471K A
472K A
473K A
474K A
475K A
476K A
第62号住居址
477K
478K
479K A
第63号住居址
480N S
481K A
482H
484K
483K A
485K
第64号住居址
486H
487K
488K A
第66号住居址
ヘラ切り
489S
490S
491S
492S
0 5 10cm

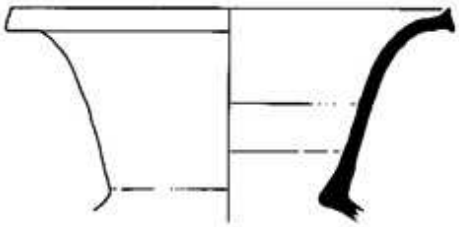
第66図　出土土器 (22)

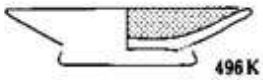
第67号住居址

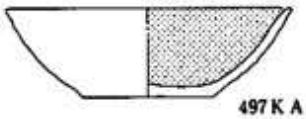

493H

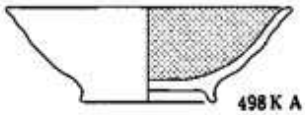

494S

第68号住居址

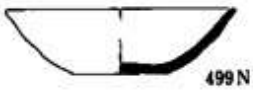

495S

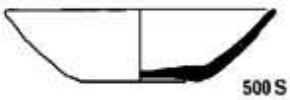

496KA

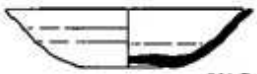

497KA

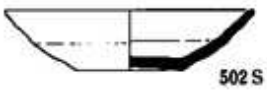

498KA

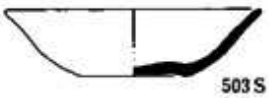
第69号住居址

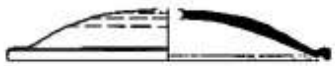

499NS


500S

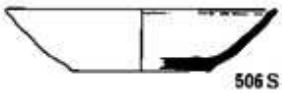

501S

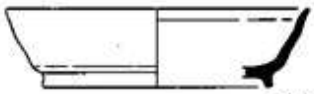

502S

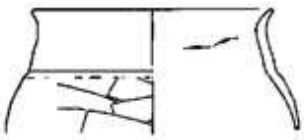

503S

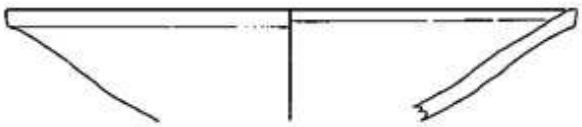

504S

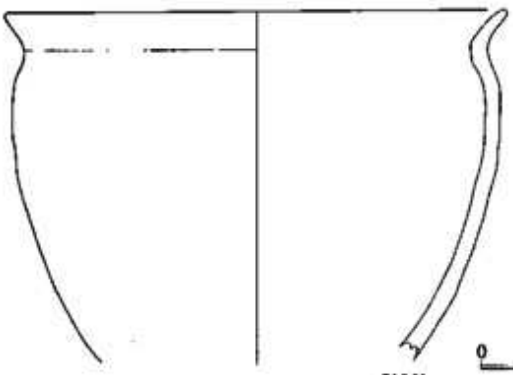
505S


506S


507S


508H


509H

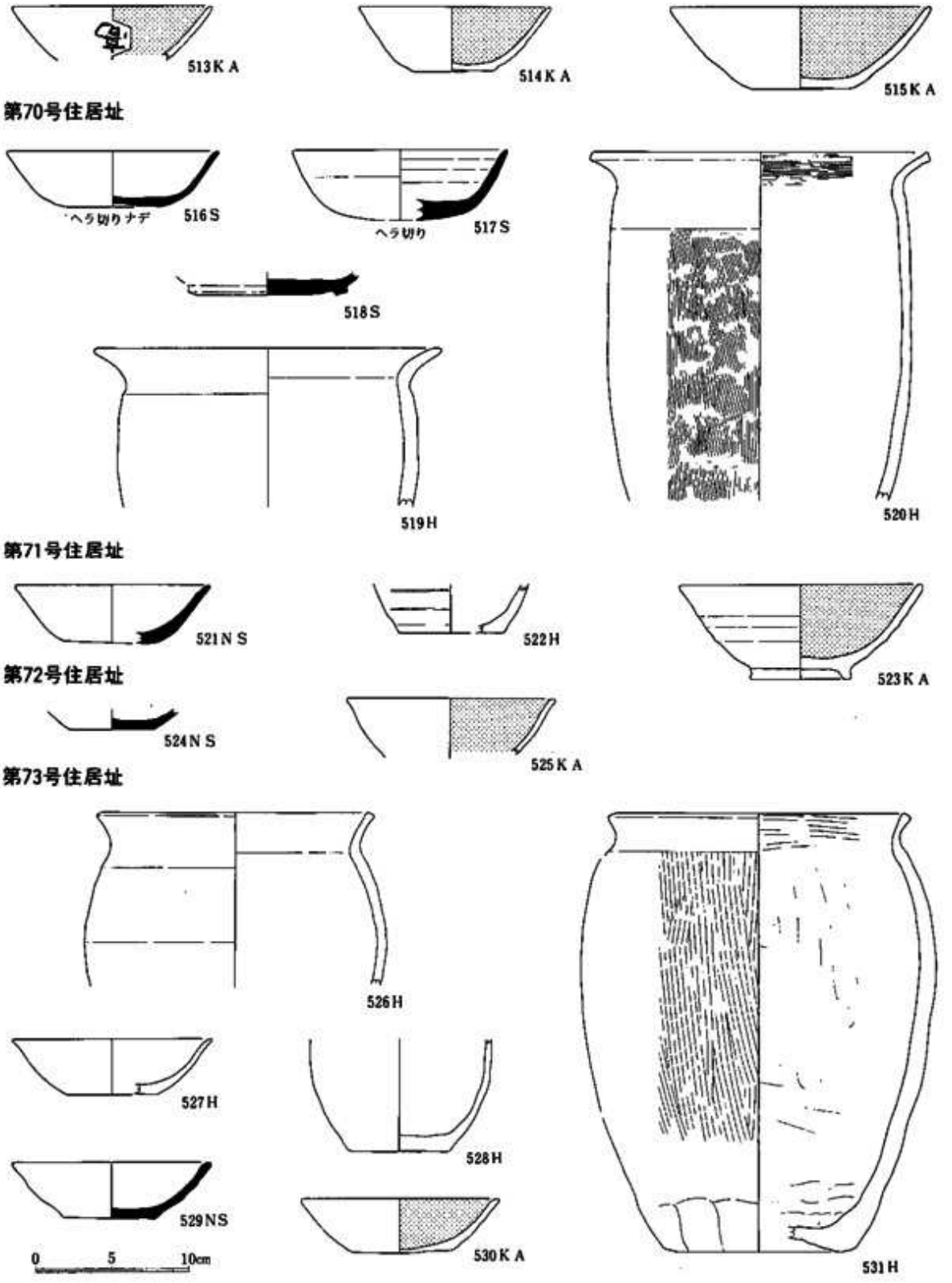

510H

511H

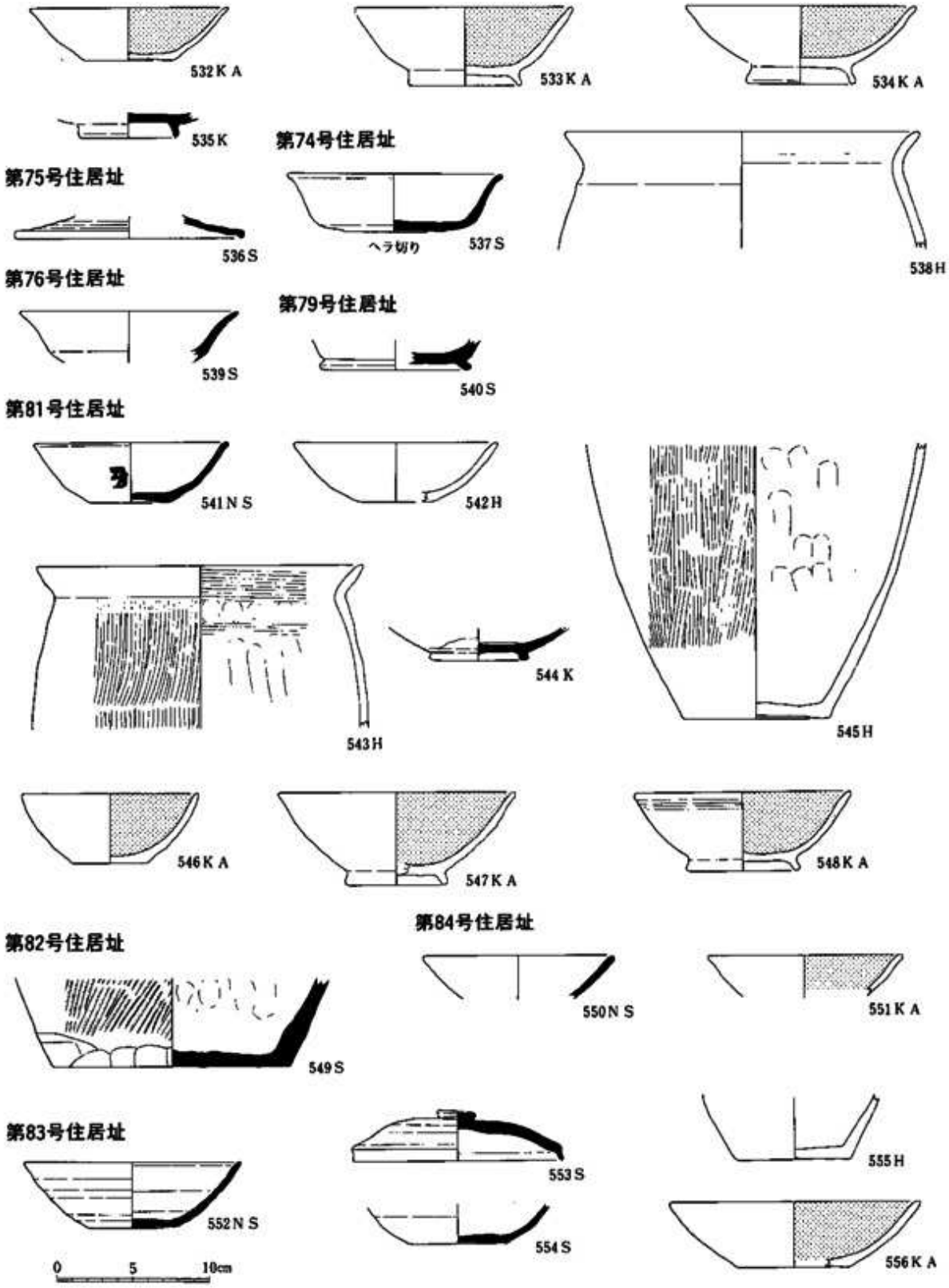
512H

0 5 10cm

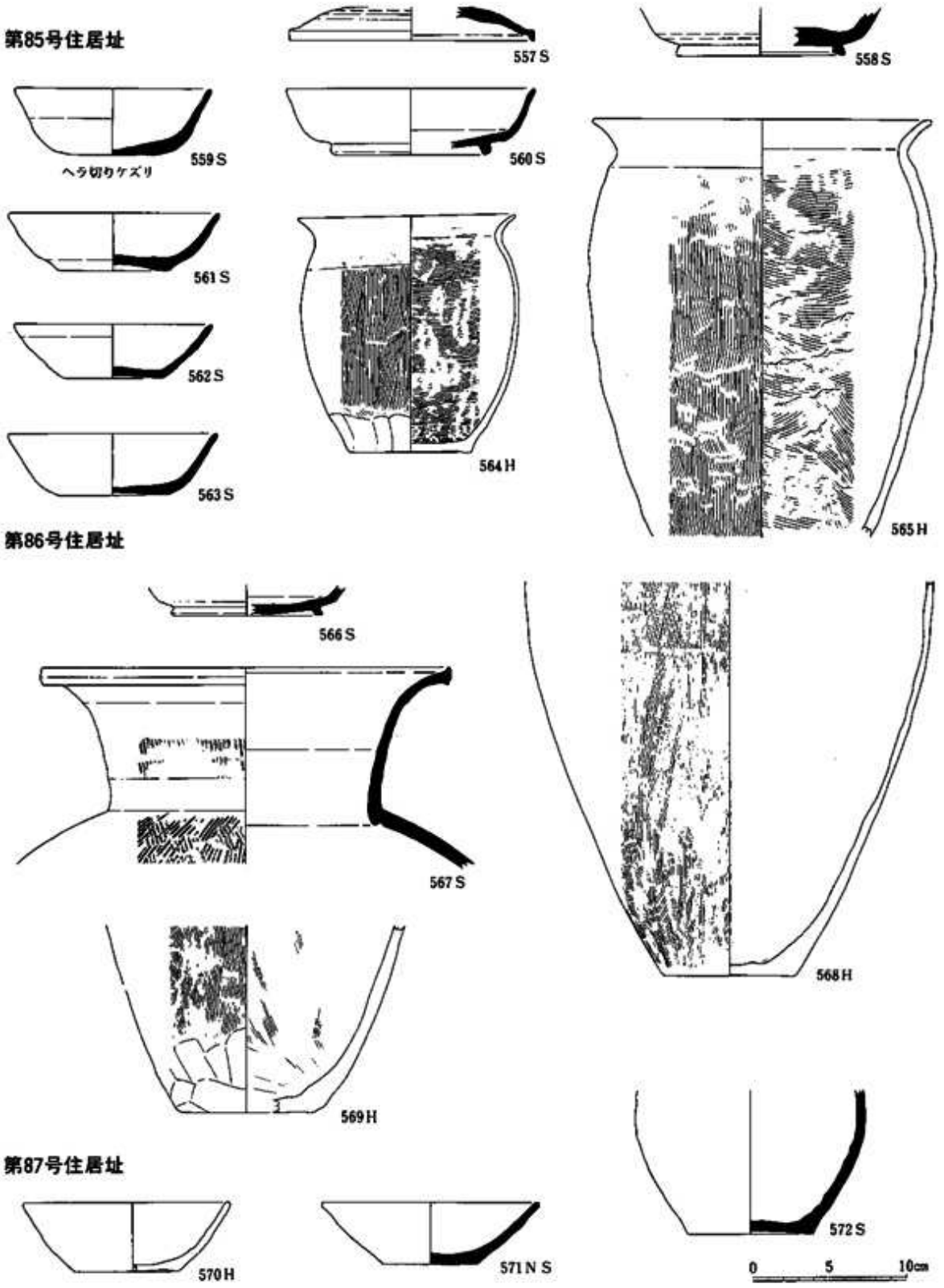
第67図　出土土器 (23)


513K A
514K A
515K A
第70号住居址
516S
へラ切りナデ
517S
へラ切り
518S
519H
520H
第71号住居址
521N S
522H
523K A
第72号住居址
524N S
525K A
第73号住居址
526H
527H
528H
529NS
530K A
531H
0 5 10cm

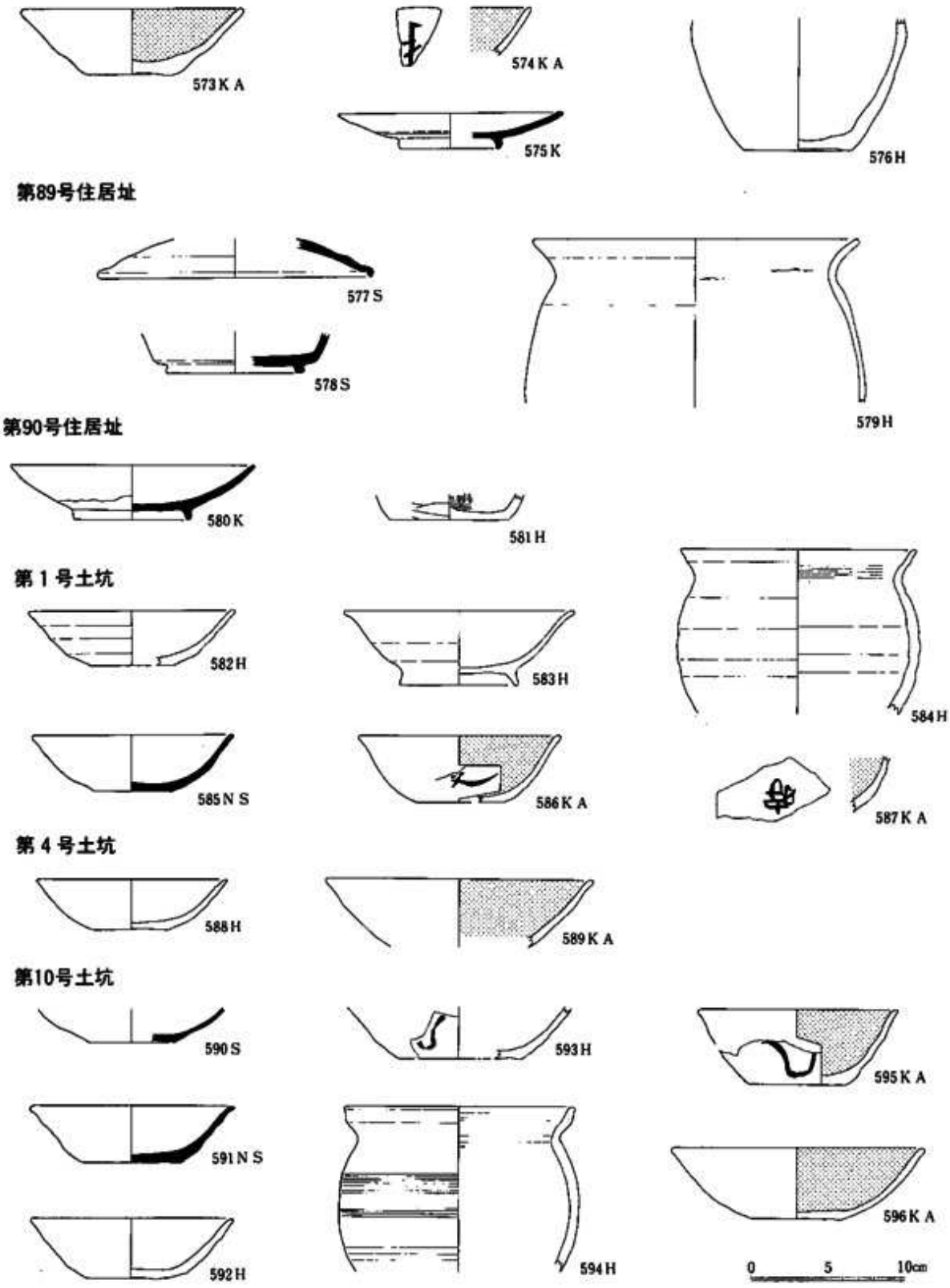
第68図　出土土器 (24)


532K A
533K A
534K A
535K
第74号住居址
第75号住居址
536S
ヘラ切り
537S
538H
第76号住居址
539S
第79号住居址
540S
第81号住居址
541N S
542H
543H
544K
545H
546K A
547K A
548K A
第84号住居址
第82号住居址
550N S
551K A
549S
第83号住居址
553S
555H
552N S
554S
556K A
0
5
10cm

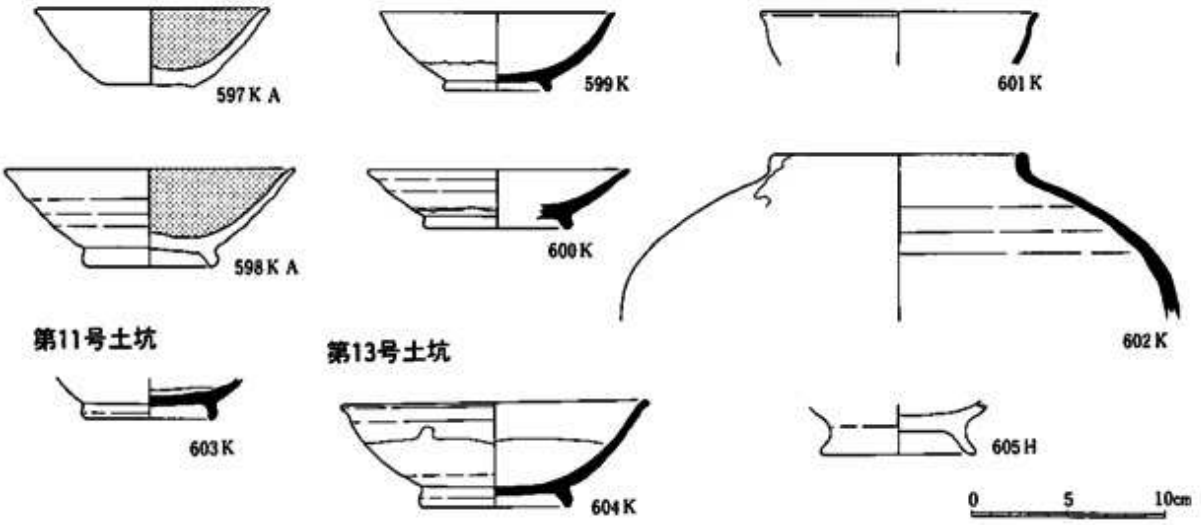
第69図　出土土器 (25)

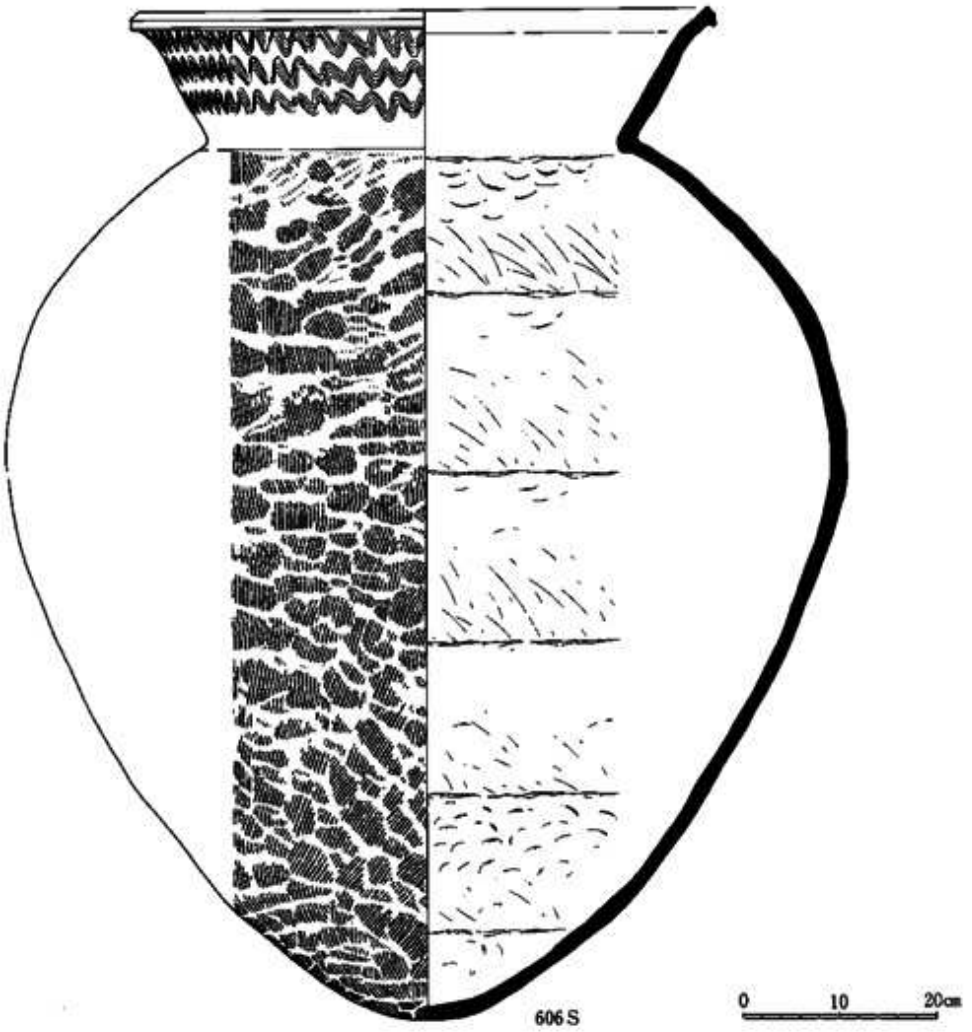

第85号住居址
557 S
558 S
559 S
ヘラ切りケズリ
560 S
561 S
562 S
563 S
564 H
565 H
第86号住居址
566 S
567 S
568 H
569 H
第87号住居址
570 H
571 N S
572 S
0 5 10cm

第70図　出土土器 (26)

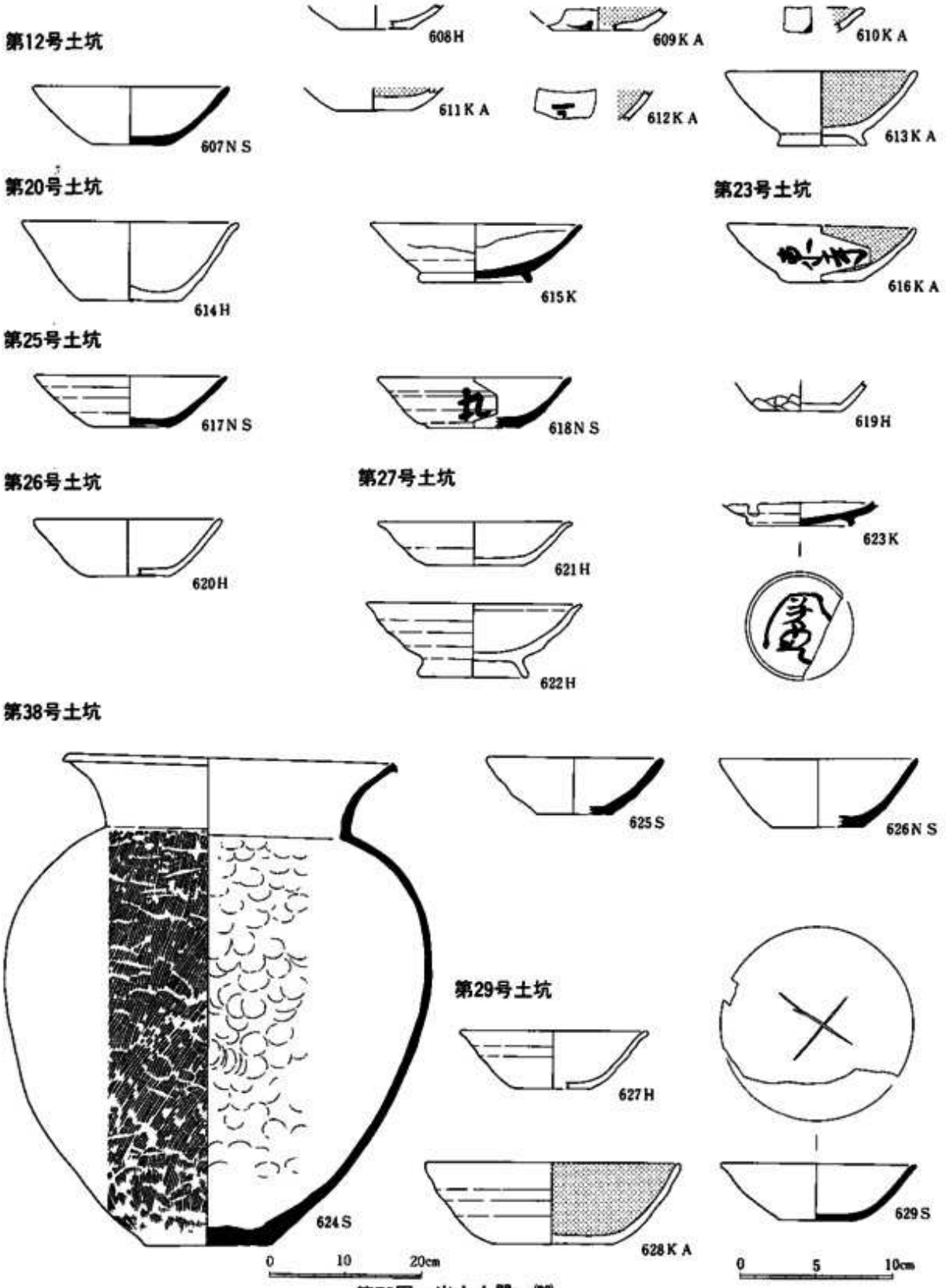

573K A
574K A
575K
576H
第89号住居址
577S
578S
579H
第90号住居址
580K
581H
第1号土坑
582H
583H
584H
585N S
586K A
587K A
第4号土坑
588H
589K A
第10号土坑
590S
593H
595K A
591N S
594H
596K A
592H
0 5 10cm

第71図　出土土器 (27)

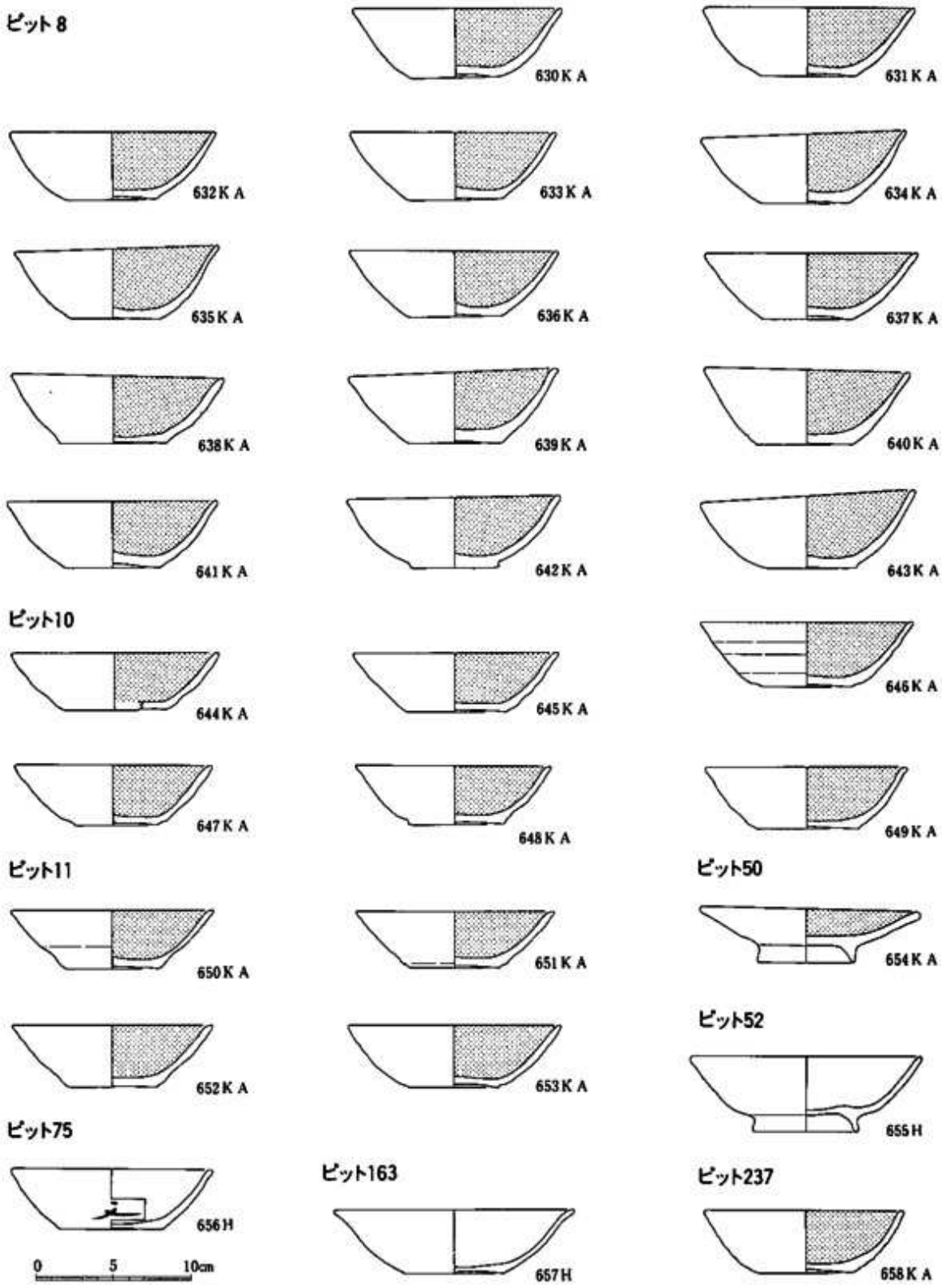

597 K A
599 K
601 K
598 K A
600 K
602 K
第11号土坑
第13号土坑
603 K
604 K
605 H
0 5 10cm


606 S
0 10 20cm

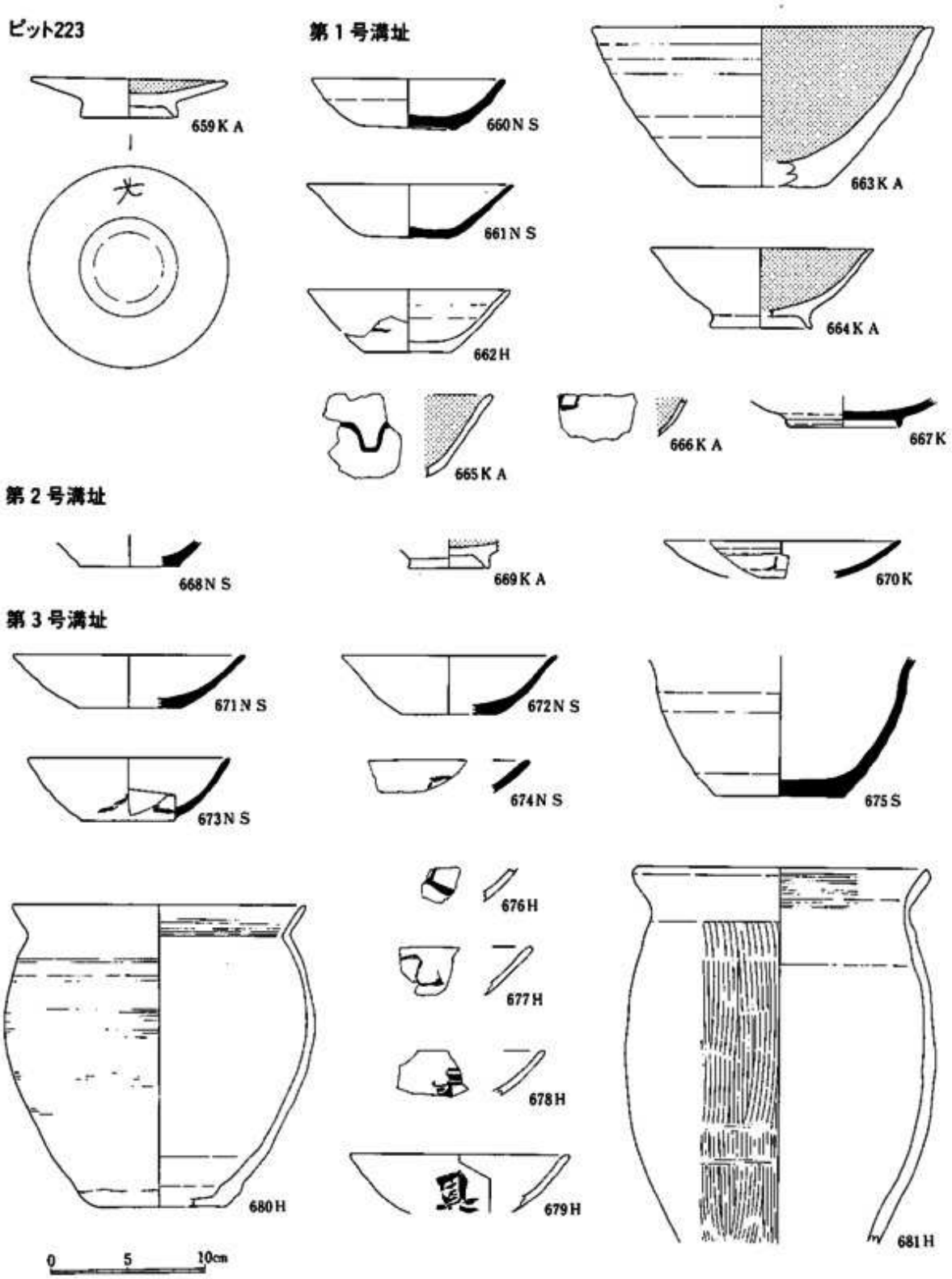
第72図　出土土器 (28)


第12号土坑
608H
609KA
610KA
607NS
611KA
612KA
613KA
第20号土坑
第23号土坑
614H
615K
616KA
第25号土坑
617NS
618NS
619H
第26号土坑
第27号土坑
620H
621H
623K
622H
第38号土坑
625S
626NS
第29号土坑
627H
624S
628KA
629S
0 10 20cm
0 5 10cm

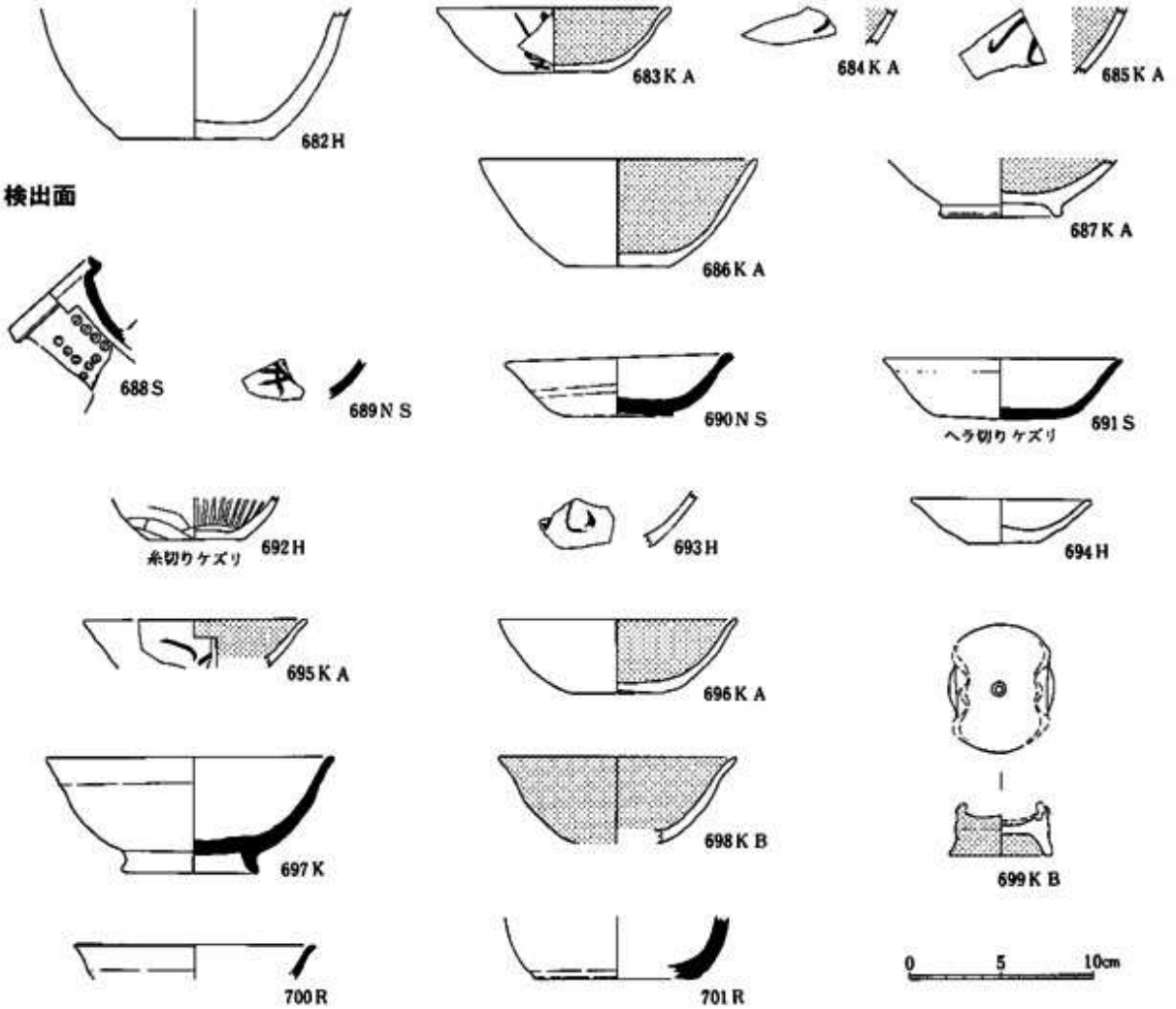
第73図　出土土器 (29)


ピット8
630K A
631K A
632K A
633K A
634K A
635K A
636K A
637K A
638K A
639K A
640K A
641K A
642K A
643K A
ピット10
644K A
645K A
646K A
647K A
648K A
649K A
ピット11
650K A
651K A
652K A
653K A
ピット50
654K A
ピット52
655H
ピット75
656H
0
5
10cm
ピット163
657H
ピット237
658K A

第74図　出土土器 (30)

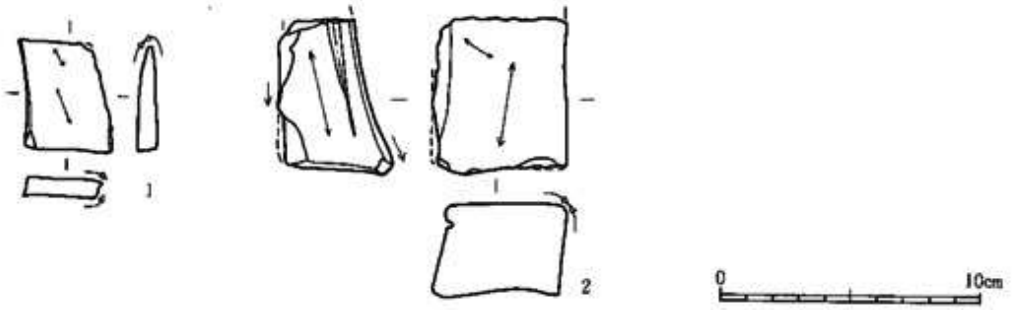

ピット223
659K A
第1号溝址
660N S
661N S
662H
663K A
664K A
665K A
666K A
667K
第2号溝址
668N S
669K A
670K
第3号溝址
671N S
672N S
673N S
674N S
675S
676H
677H
678H
679H
680H
681H
0 5 10cm

第75図　出土土器 (31)

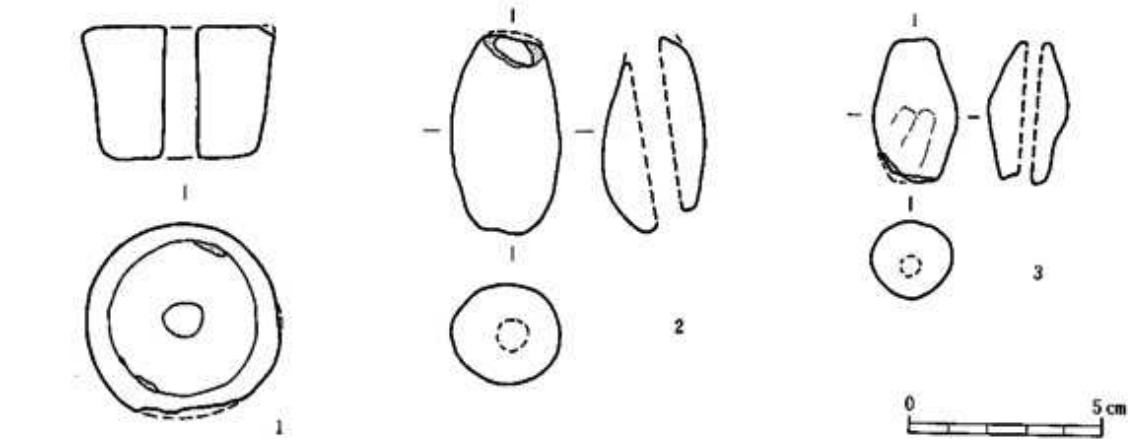

682 H
683 K A
684 K A
685 K A
検出面
686 K A
687 K A
688 S
689 N S
690 N S
691 S
ヘラ切り ケズリ
692 H
糸切りケズリ
693 H
694 H
695 K A
696 K A
697 K
698 K B
699 K B
700 R
701 R
0
5
10cm

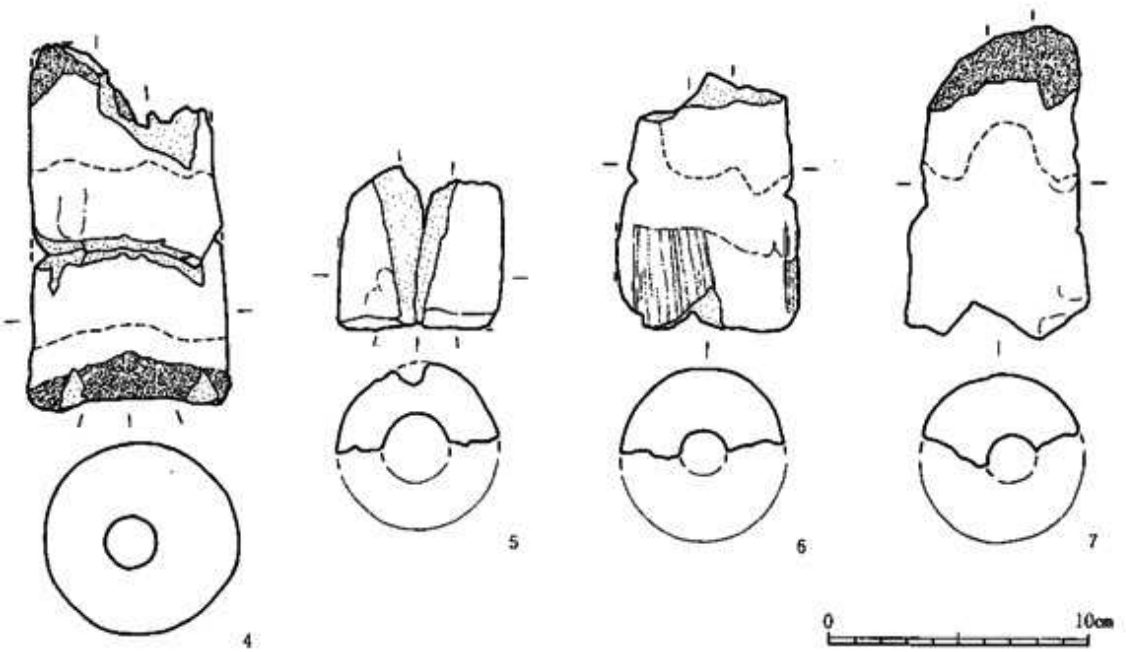
第76図　出土土器 (32)

石　器

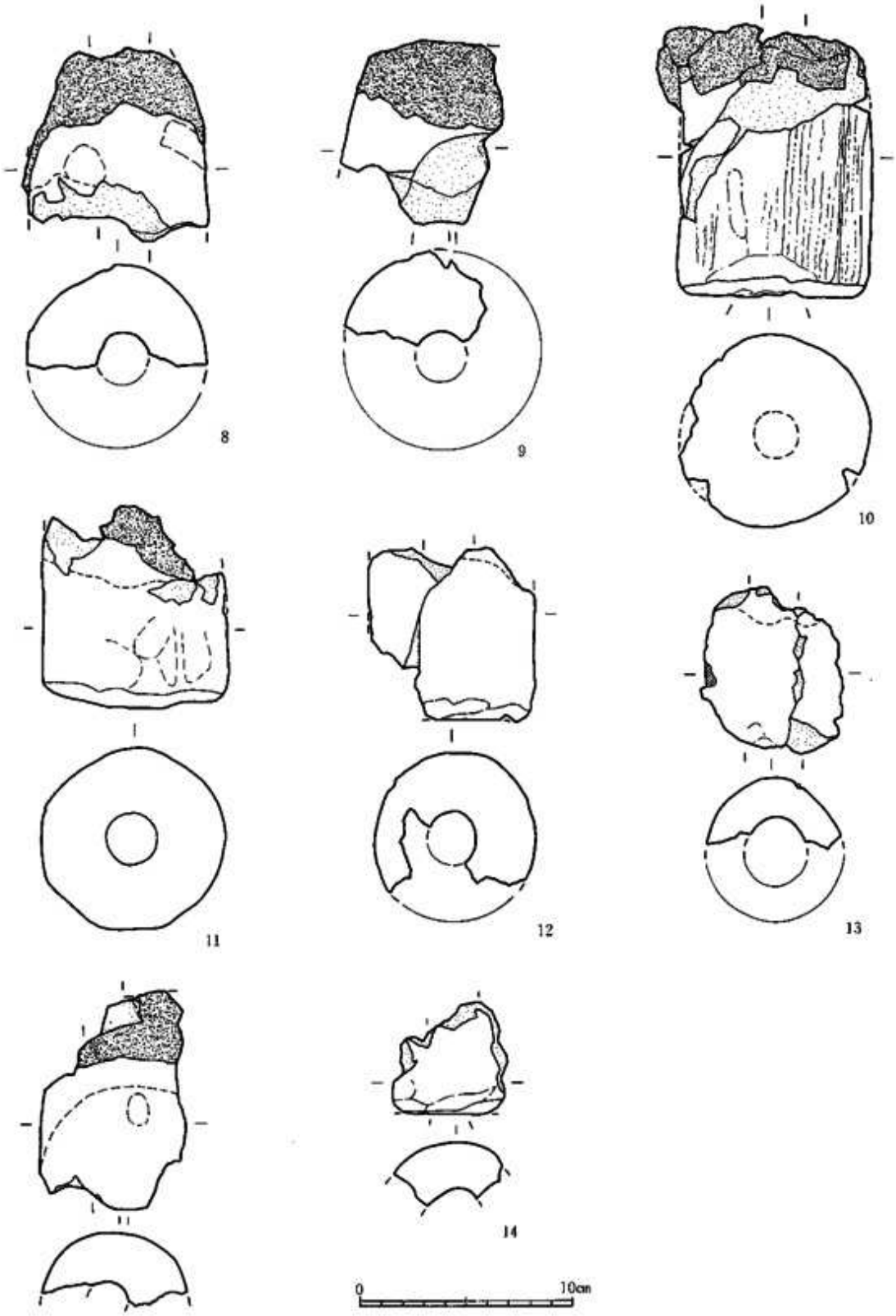


土製品

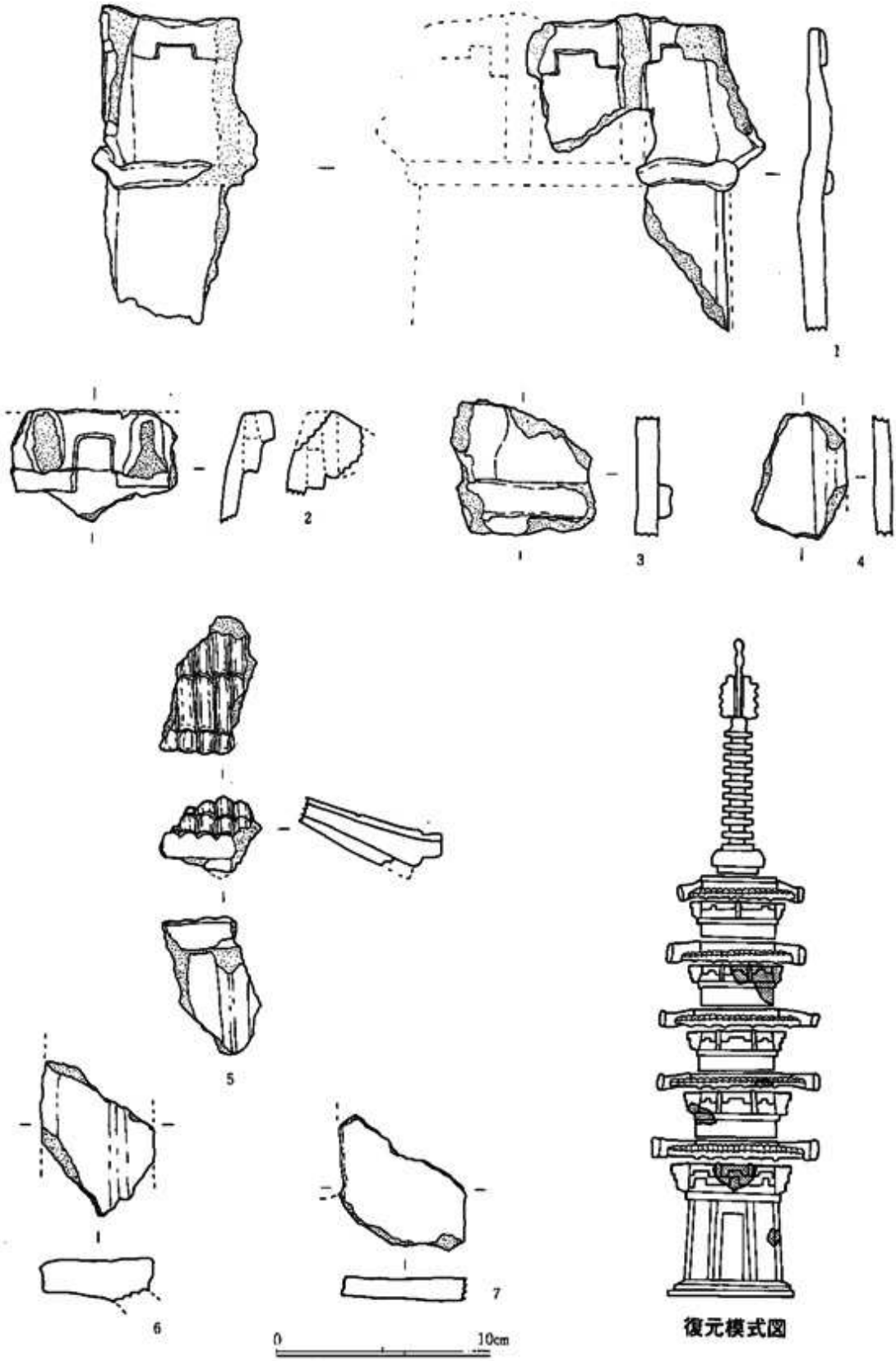




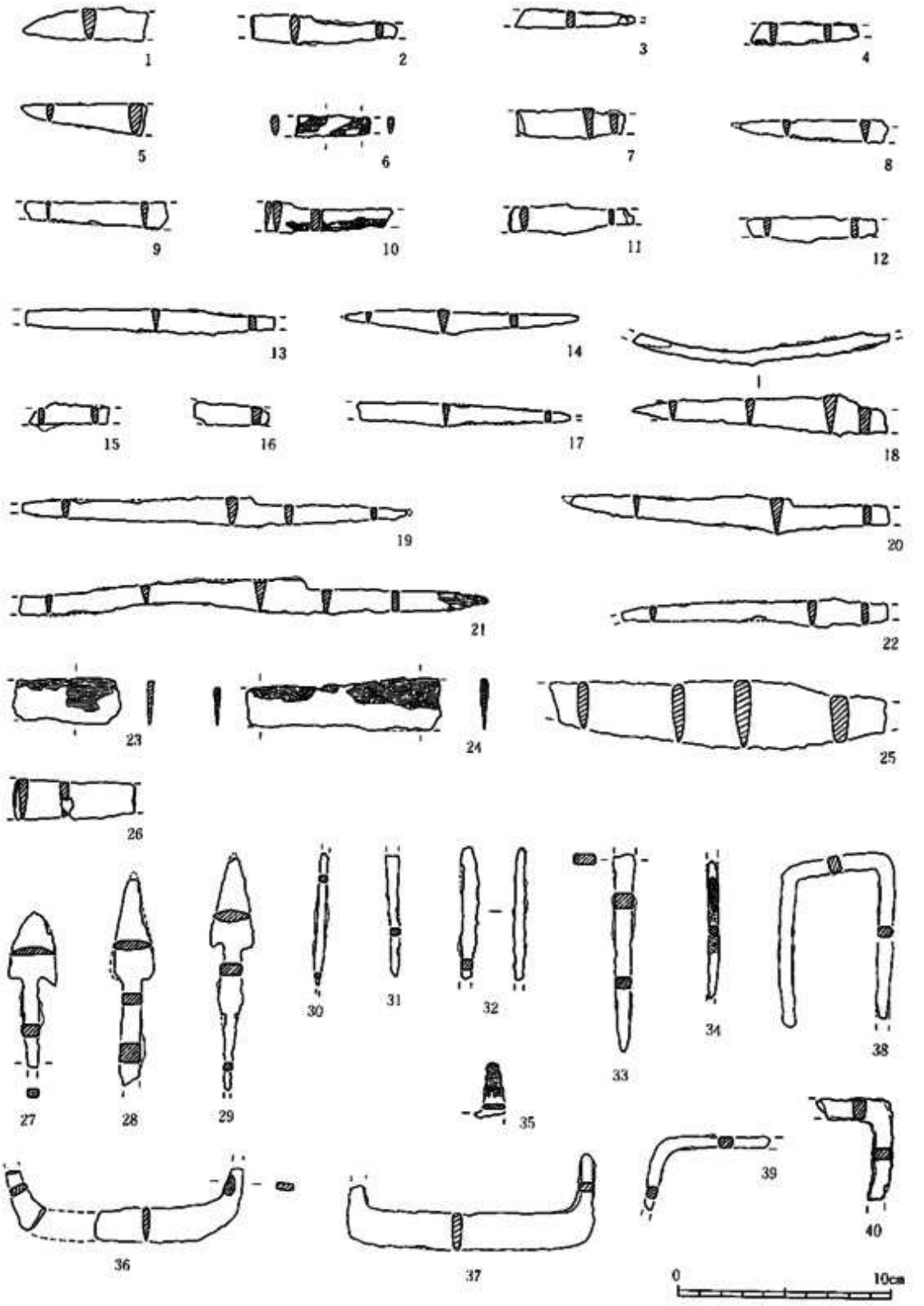
第77図　石器・土製品 (1)



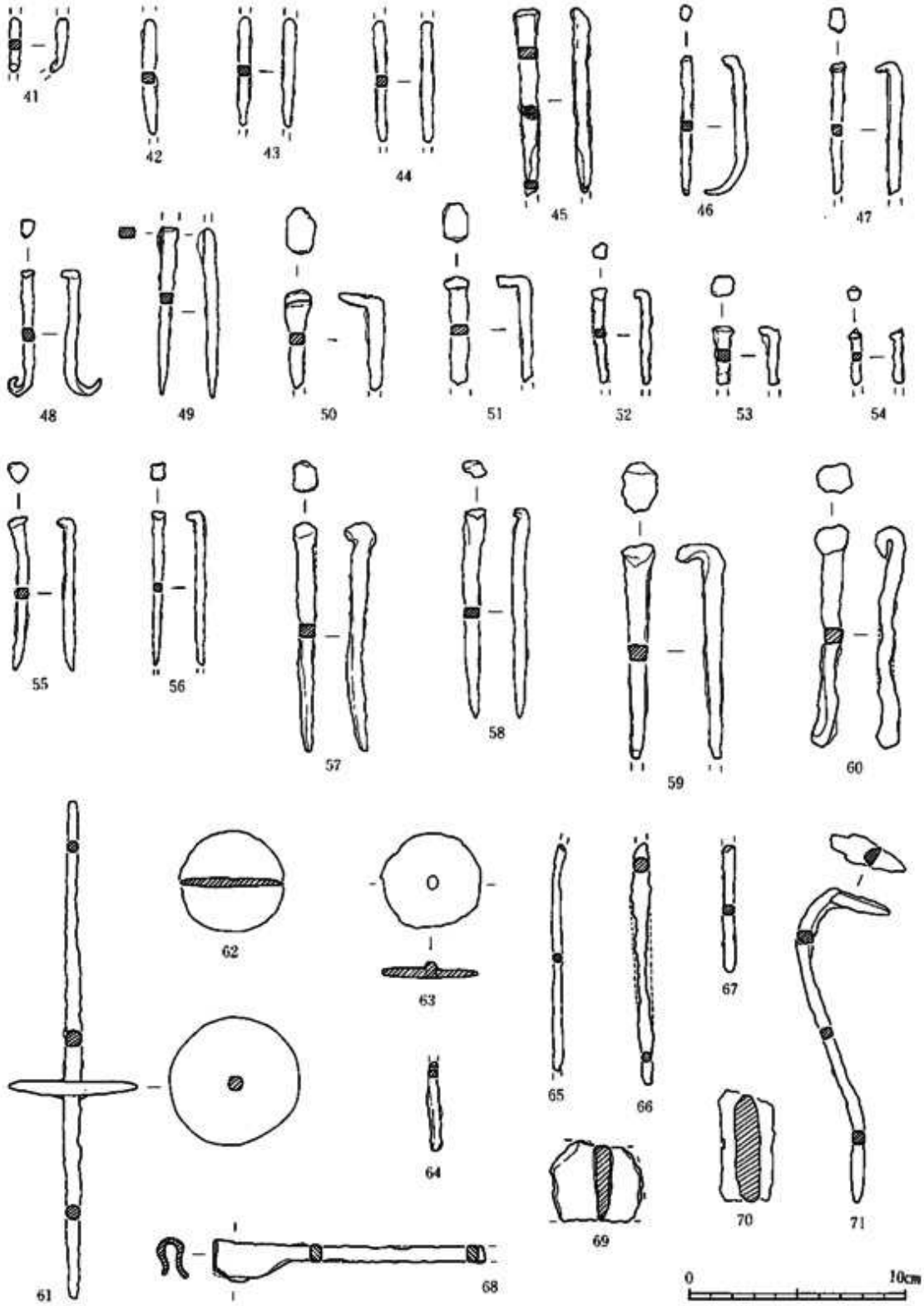
第78図　土製品 (2)



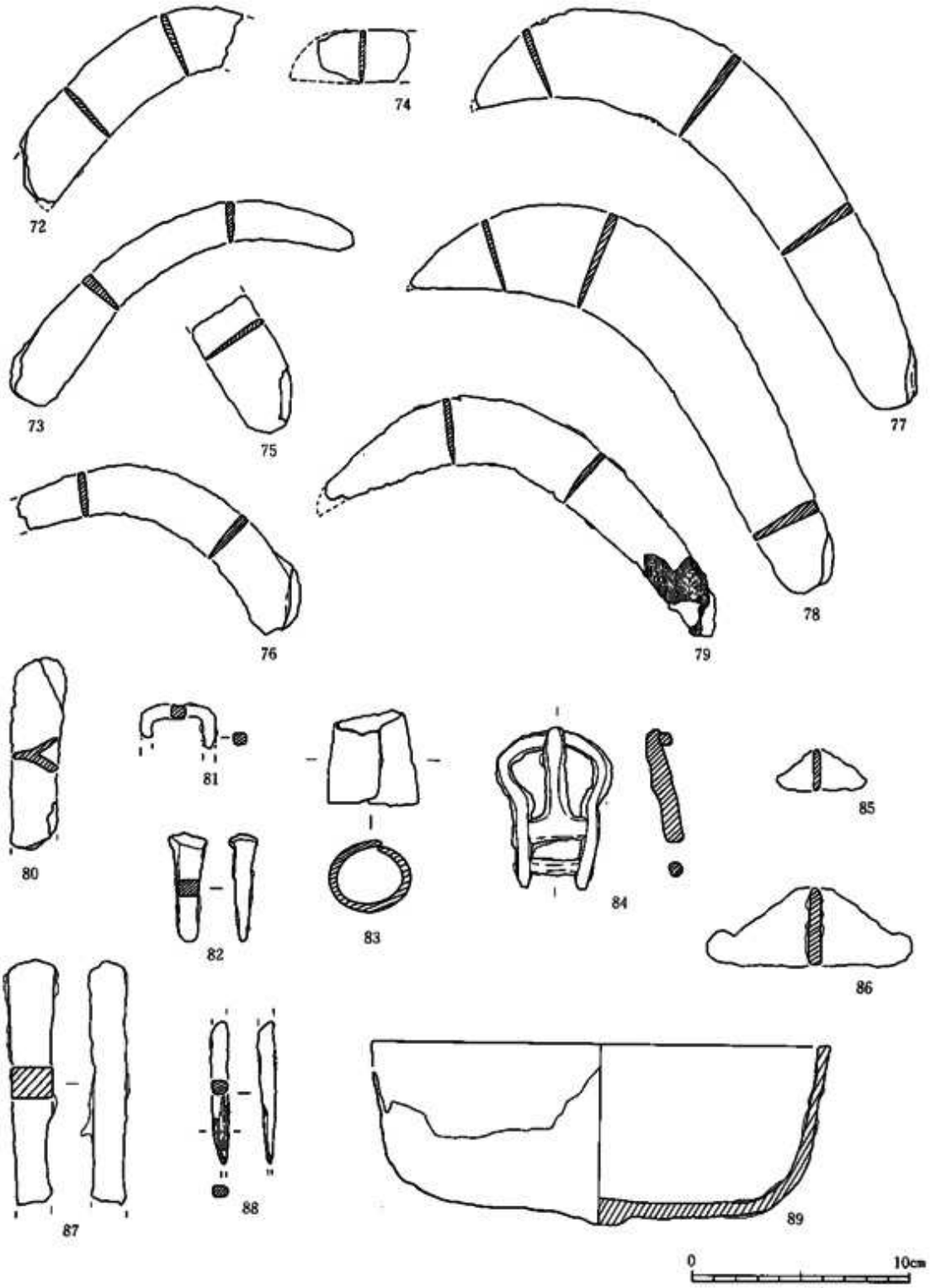
第79図　瓦塔


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
0
10cm

第80図　鉄器 (1)


41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
0
10cm

第81図　鉄器　(2)



第82図　鉄器 (3)

写　真　図　版

第 1 号住居址

第 2 号住居址

第 4 号住居址遺物出土状況

第 5 号住居址

第 6 号住居址

第 8 号住居址

第 9 号住居址遺物出土状況（手前は第 8 号住居址）

第10号住居址遺物出土状況

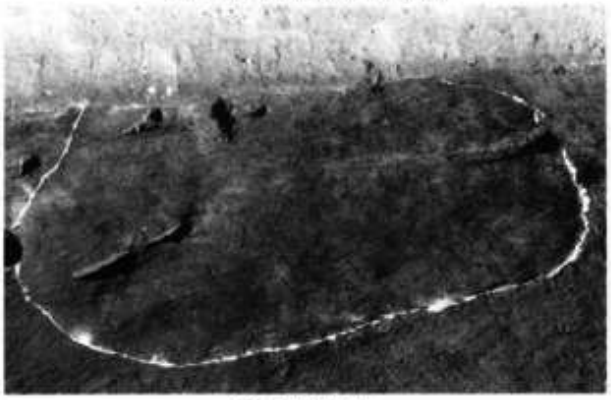
第 1 図版

第11号住居址遺物出土状況

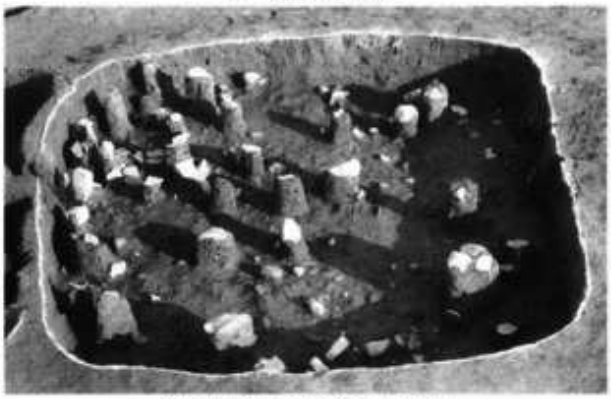
第12号住居址遺物出土状況

第13号住居址遺物出土状況

同　(北西隅部)



第15号住居址



第17号住居址遺物出土状況

第18号住居址遺物出土状況

第19号住居址

第20号住居址

第24号住居址

第25号住居址

第27号住居址

第29号住居址遺物出土状況

第30号住居址遺物出土状況

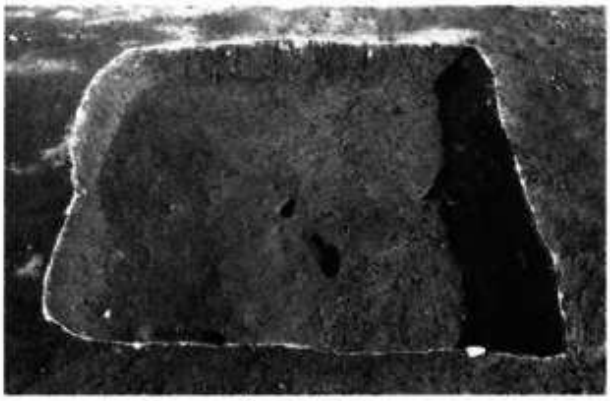
第31号住居址

第30号住居址 カマド

第 3 図版

第32号住居址遺物出土状況

第33号住居址遺物出土状況



第34号住居址

第35号住居址

第36号住居址

第37号住居址

第38号住居址

第39号住居址遺物出土状況

第 4 図版

第41号住居址

第42号住居址遺物出土状況

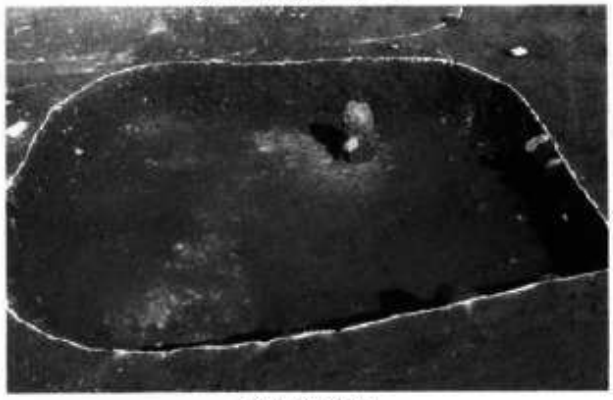
第43号住居址（中央）遺物出土状況

第44号住居址

第45号住居址

第44号住居址 カマド

第46号住居址遺物出土状況



第47号住居址

第 5 図版

第48号住居址遺物出土状況

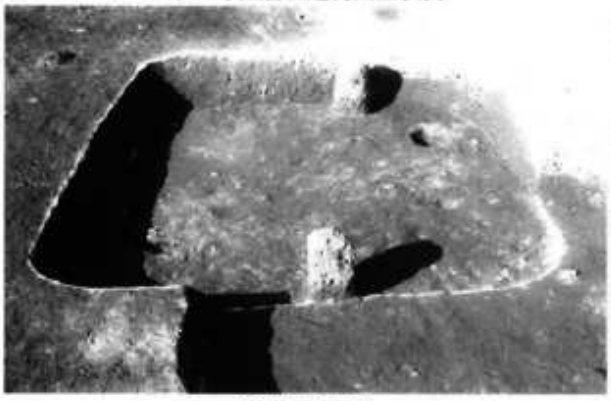
第49号住居址遺物出土状況

第50（手前）・51（中央）・52（奥）号住居址

第53号住居址（外側は第33号住居址）

第54号住居址遺物出土状況

同　カマド



第60号住居址

第61号住居址遺物出土状況

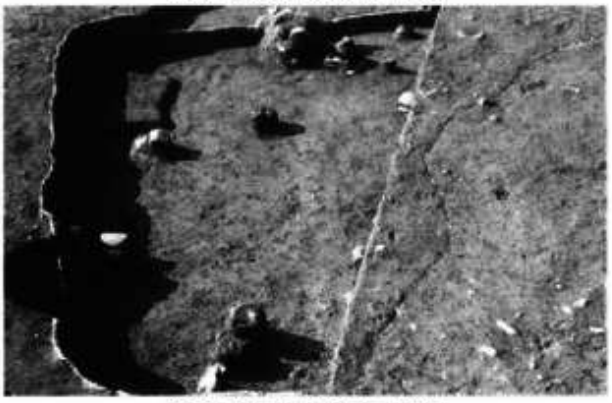
第63号住居址遺物出土状況

第64号住居址遺物出土状況

第68号住居址

第69号住居址遺物出土状況

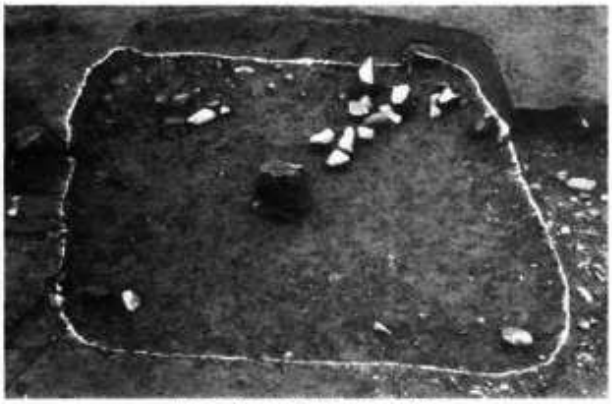
第71（手前）・72号住居址



第73号住居址遺物出土状況

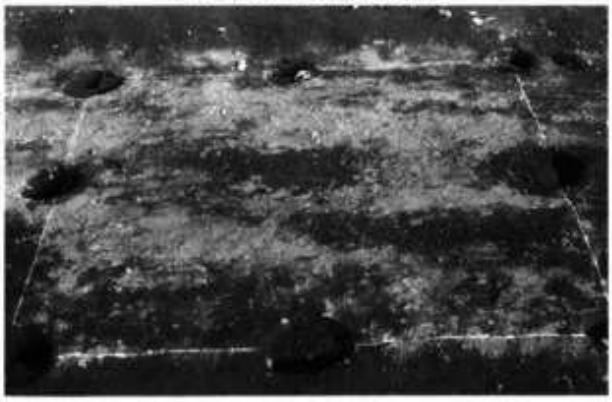
第81号住居址遺物出土状況

第82号住居址



第87号住居址遺物出土状況

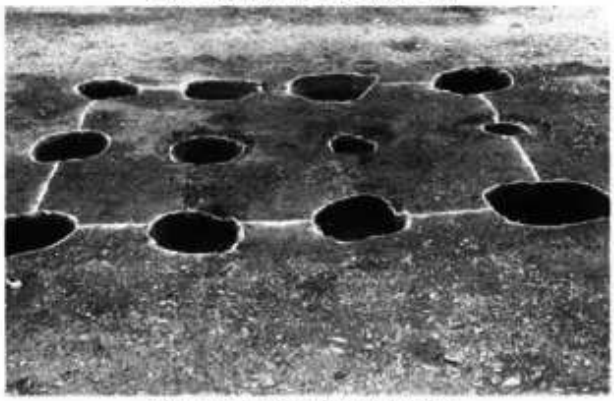
第１号竪穴状遺構・周囲のピット



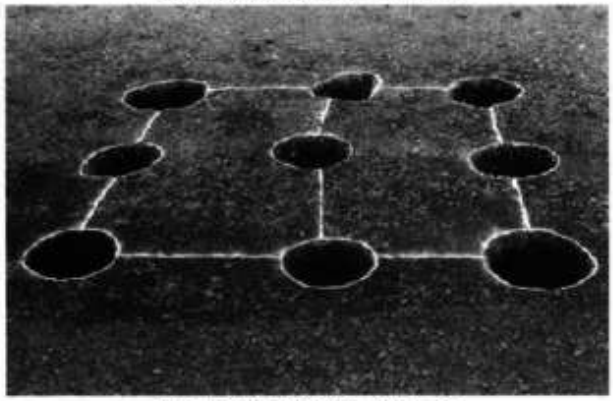
第１号掘立柱建物址（西から）

第２号掘立柱建物址（東から）

第３号掘立柱建物址（東から）

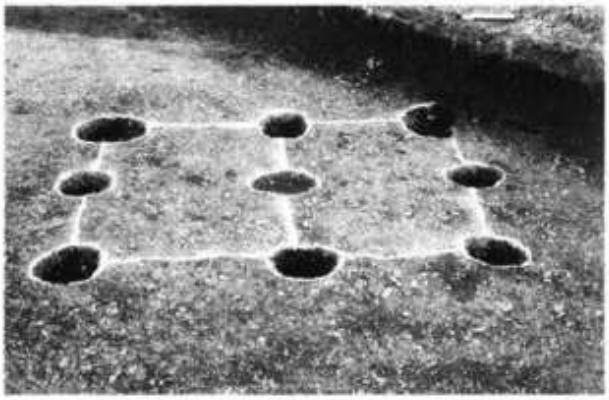


第４号掘立柱建物址（南から）



第５号掘立柱建物址（西から）

同　　P292



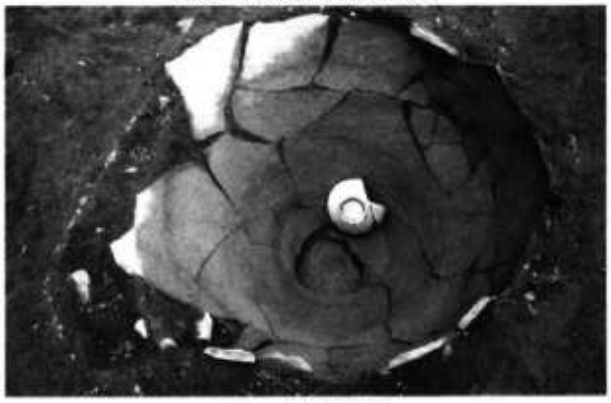
第６号掘立柱建物址（西から）

第10号土坑遺物出土状況

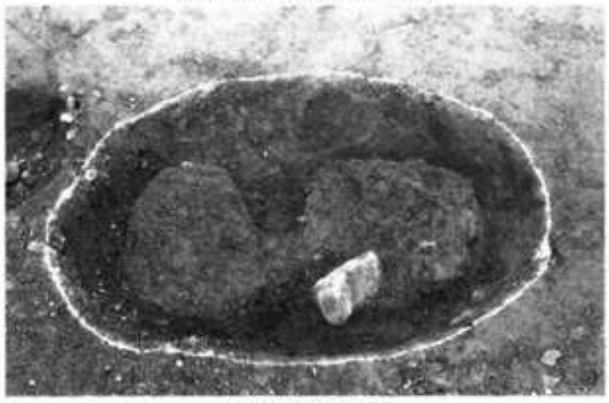
第12号土坑遺物出土状況

第23号土坑遺物出土状況

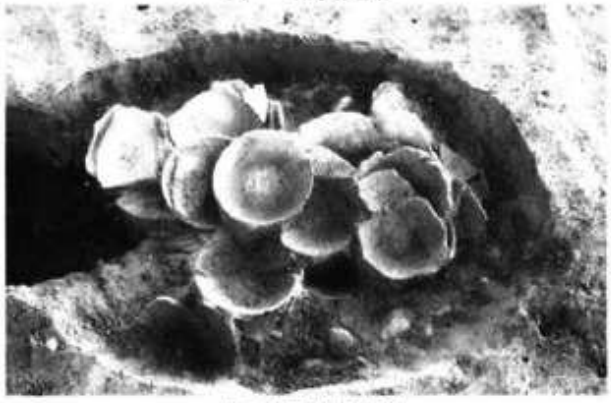
第13号土坑大甕埋設状況



同　　大甕内部



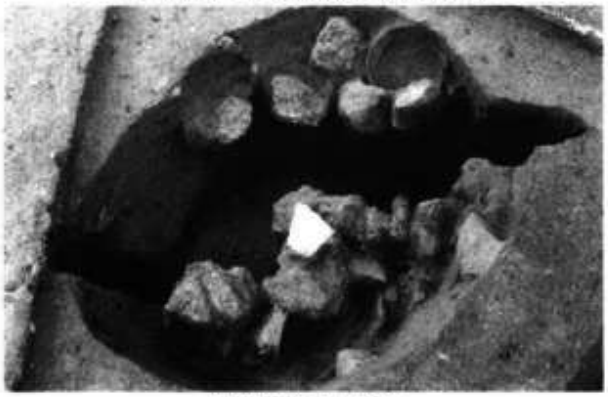
Ｐ２下部の鉄滓



Ｐ８土器出土状況

P10（右）・P11（左）土器出土状況

P55鉄滓出土状況



P231鉄滓出土状況

第1号溝址ロ・ハ・ニ（南から）

第2号溝址イ・ロ（南から）

第3号溝址イ・ロ・ハ・ニ（南から）

調査区東側遠景（北西から）

調査区西側遠景（北西から）

322

103

100

129

128

154

74

236

第11図版　土器・陶磁器(1)

238

255

262

285

406

343

347

165

第12図版　土器・陶磁器(2)

424

348

437

478

456

462

459

490

第13図版　土器・陶磁器(3)

291

688

緑釉陶器・白磁（下段右端）

492

瓦塔 5

606

瓦塔 1

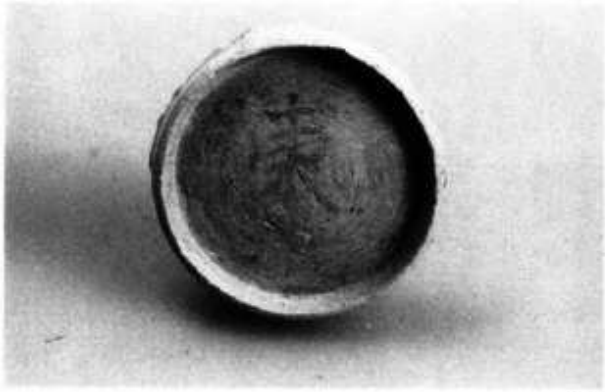
第14図版　土器・陶磁器(4)・瓦塔

86

178

616

238



257

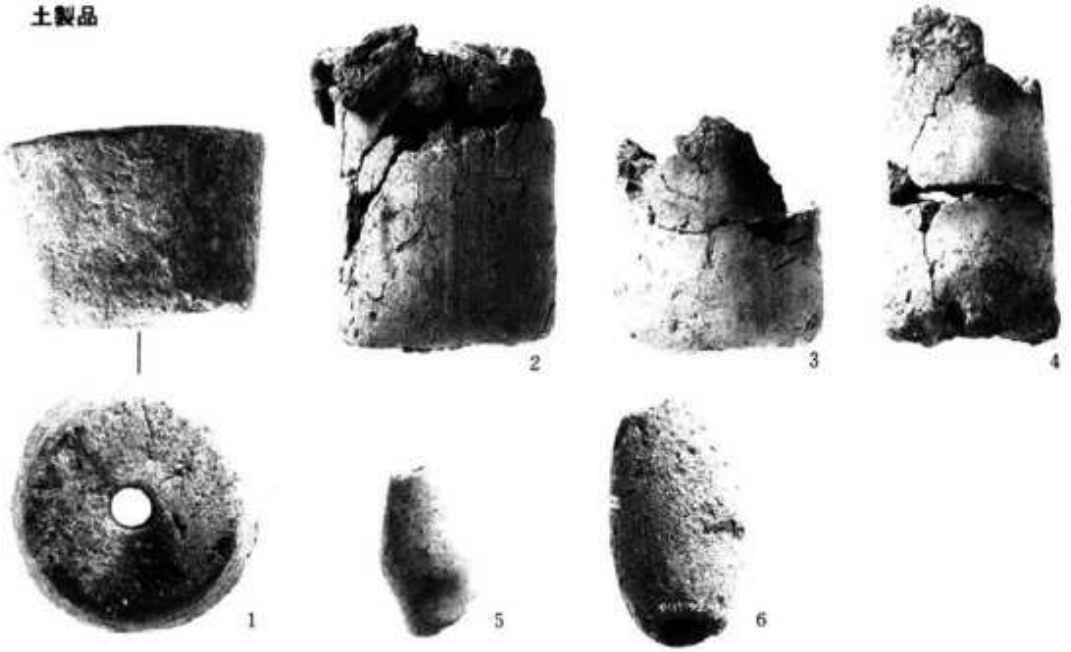
214

618

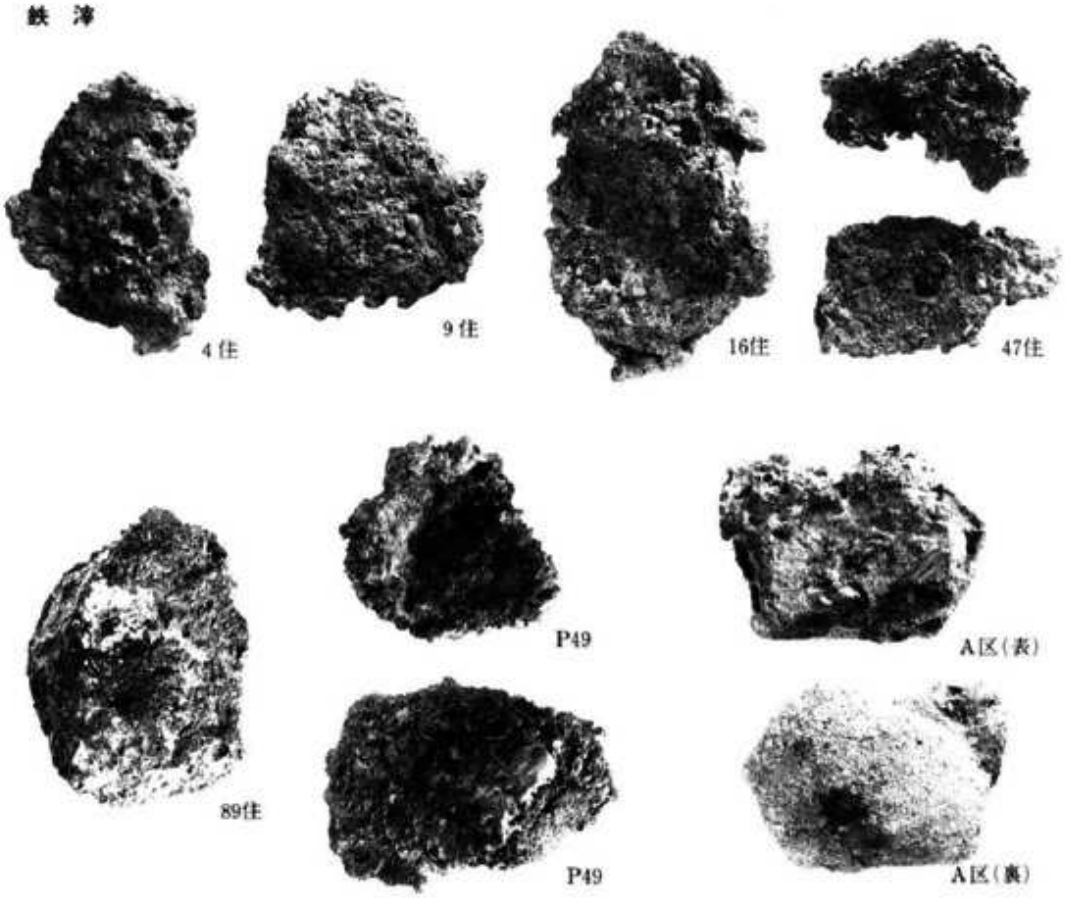
387「美濃国」刻印須恵器

第15図版　墨書・刻印土器

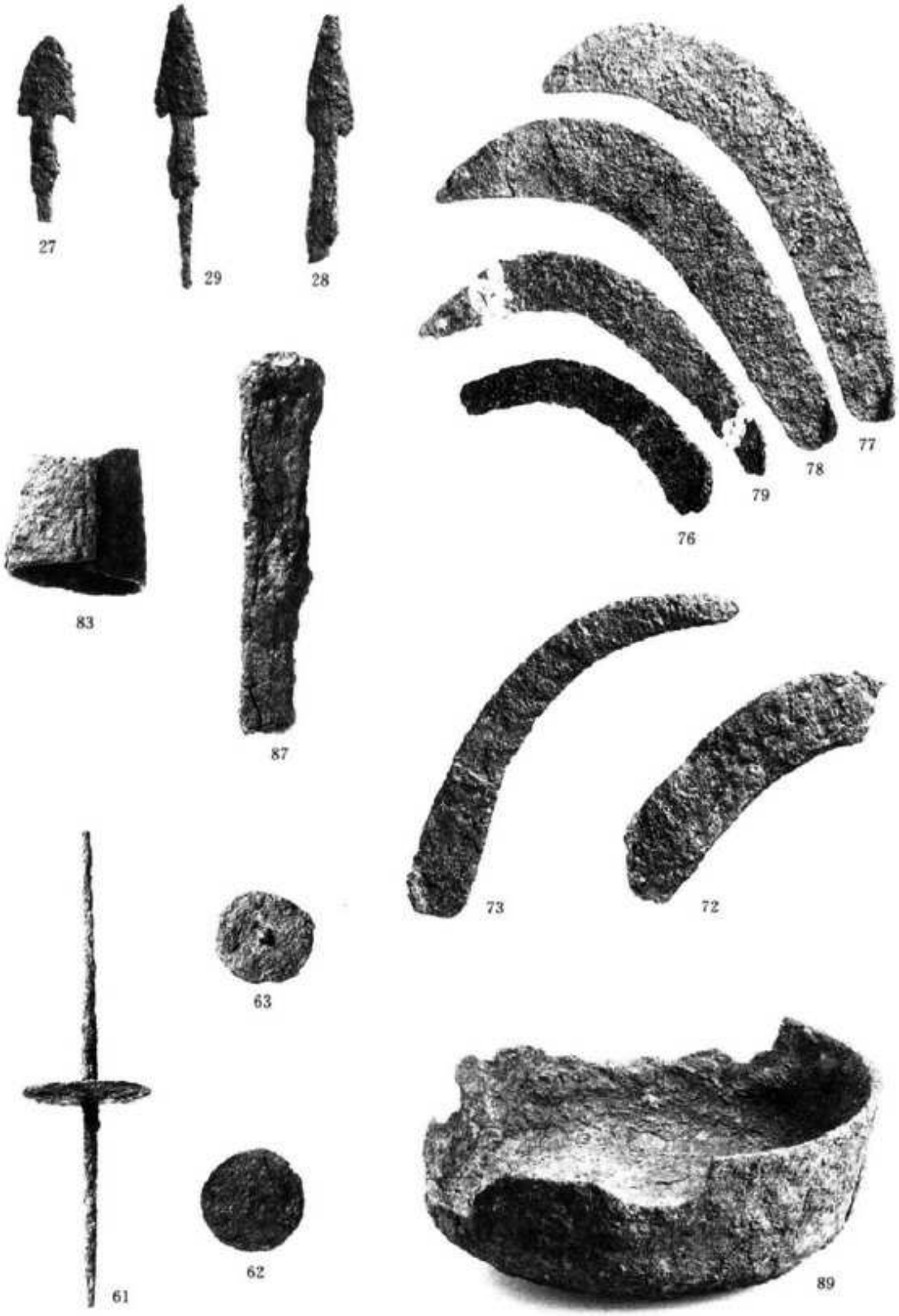
土製品



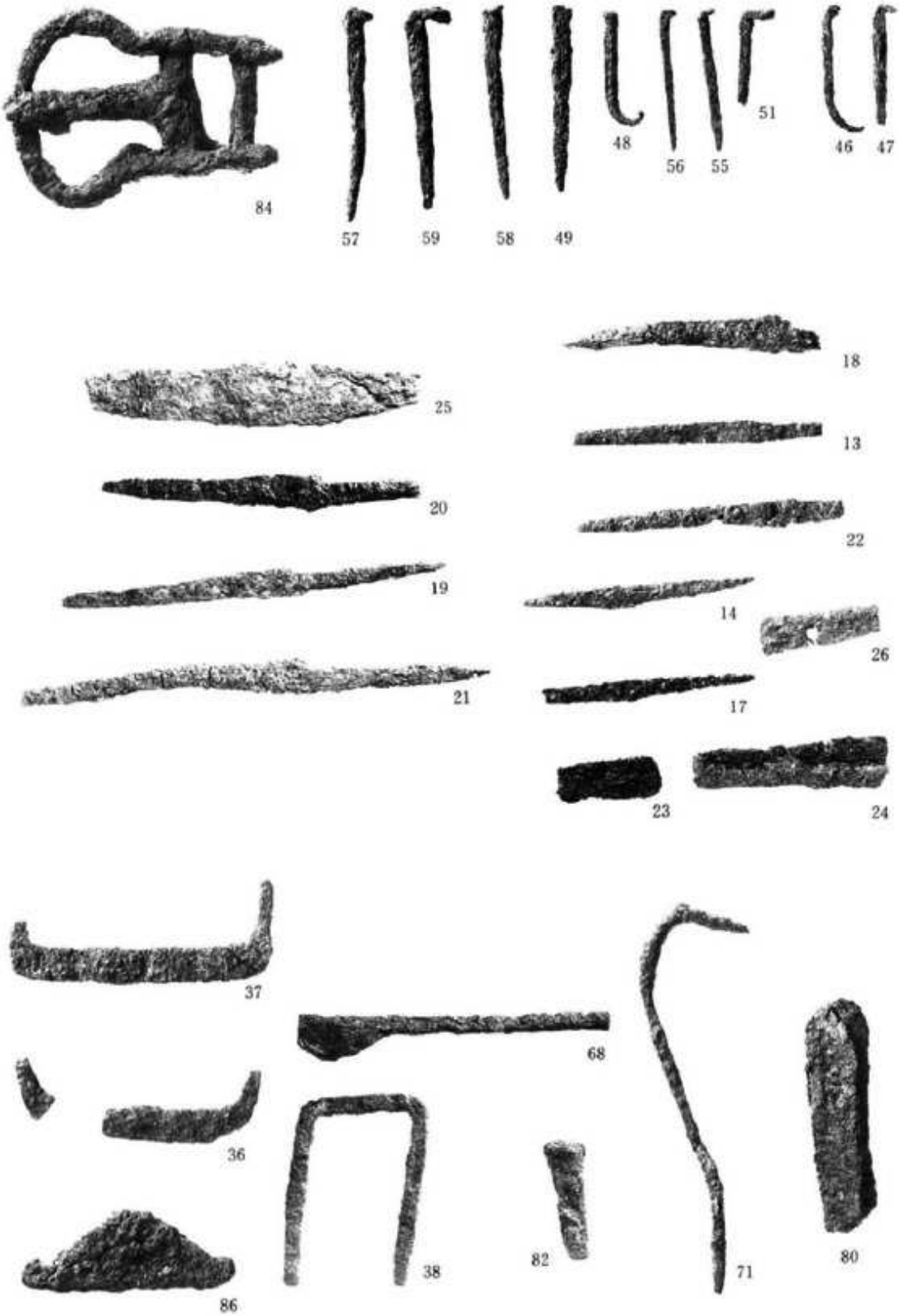
鉄 滓



第16図版　土製品・鉄滓



第17図版　鉄製品（1）


84
57
59
58
49
48
56
55
51
46
47
18
25
13
20
22
19
14
26
21
17
23
24
37
68
36
38
82
71
80
86

第18図版　鉄製品（2）

平田本郷遺跡調査概要

ふりがな	ひらたほんごういせききんきゅうはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平田本郷遺跡緊急発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	№113
編著者名	高桑俊雄、市川温、木下守、関澤聡、竹内靖長、三村竜一
編集機関	長野県松本市教育委員会
所在地	〒390　長野県松本市丸の内3番7号　Tel 0263-34-3000
発行年月日	平成6（1994）年3月22日　（平成5年度）

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ″″	東経 ″″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
平田本郷（ひらたほんごう） (YHH)	長野県松本市（ながのけんまつもとし） 芳川平田（よしかわひらた）			36度 11分 30秒	137度 57分 45秒	19921109～ 11930324	6500	県営ほ場整備事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平田本郷	集落跡	古墳 奈良・平安	―― 竪穴住居址　94軒 竪穴状遺構　1基 掘立柱建物址6棟 土坑　43基 ピット　328基 溝　10条	土器 土器：土師・須恵 陶磁器：灰釉・緑釉・白磁 土製品：紡錘車・土錘・フイゴの羽口 石器：砥石 鉄器：剣・帯金具・鋤頭・字引鉄・火打金具・鉢・鎹・鎧鉋・鏃・鎌・釘・刀子・鍬	白磁・瓦塔・鉄鉢など出土

松本市文化財調査報告　No.113

松本市平田本郷遺跡

―緊急発掘調査報告書―

平成6年3月22日　印刷
平成6年3月22日　発行

編集　長野県松本市教育委員会
〒390　長野県松本市丸の内3番7号
Tel 0263-34-3000
発行　長野県松本市教育委員会
印刷　中信凸版印刷株式会社